

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

5月号



5-MAY '66

昭和四十一年四月二十日印刷

昭和四十一年五月一日発行

五月号

(第二十卷第五号) 毎月一回一日発行

昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

昭和三十一年六月十七日国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二号

奇譚クラブ

昭和四十一年五月号

限定版グラビア写真集／美しき縛しめ／第八集

大塚啓子

鈴木晃子

山原清子

女斗緊縛競艶写真特集

完成

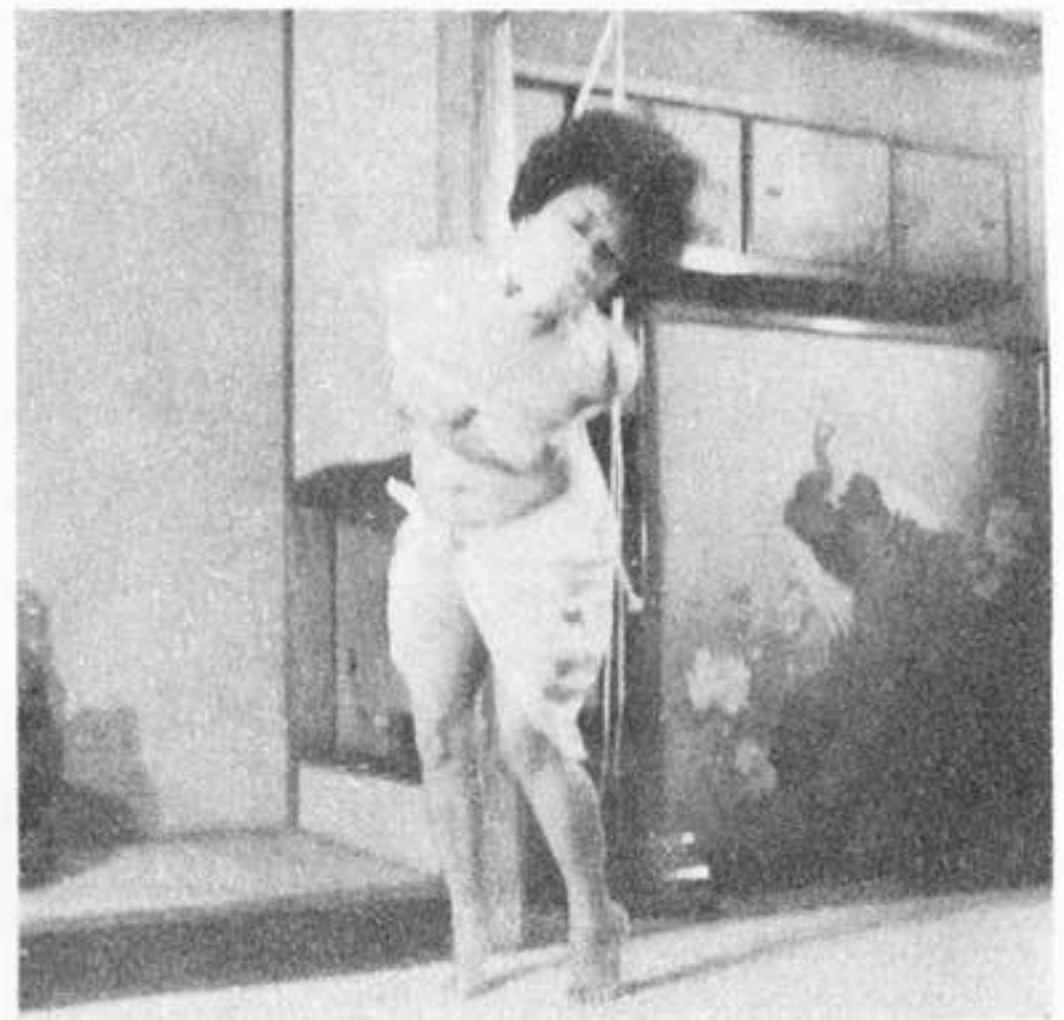
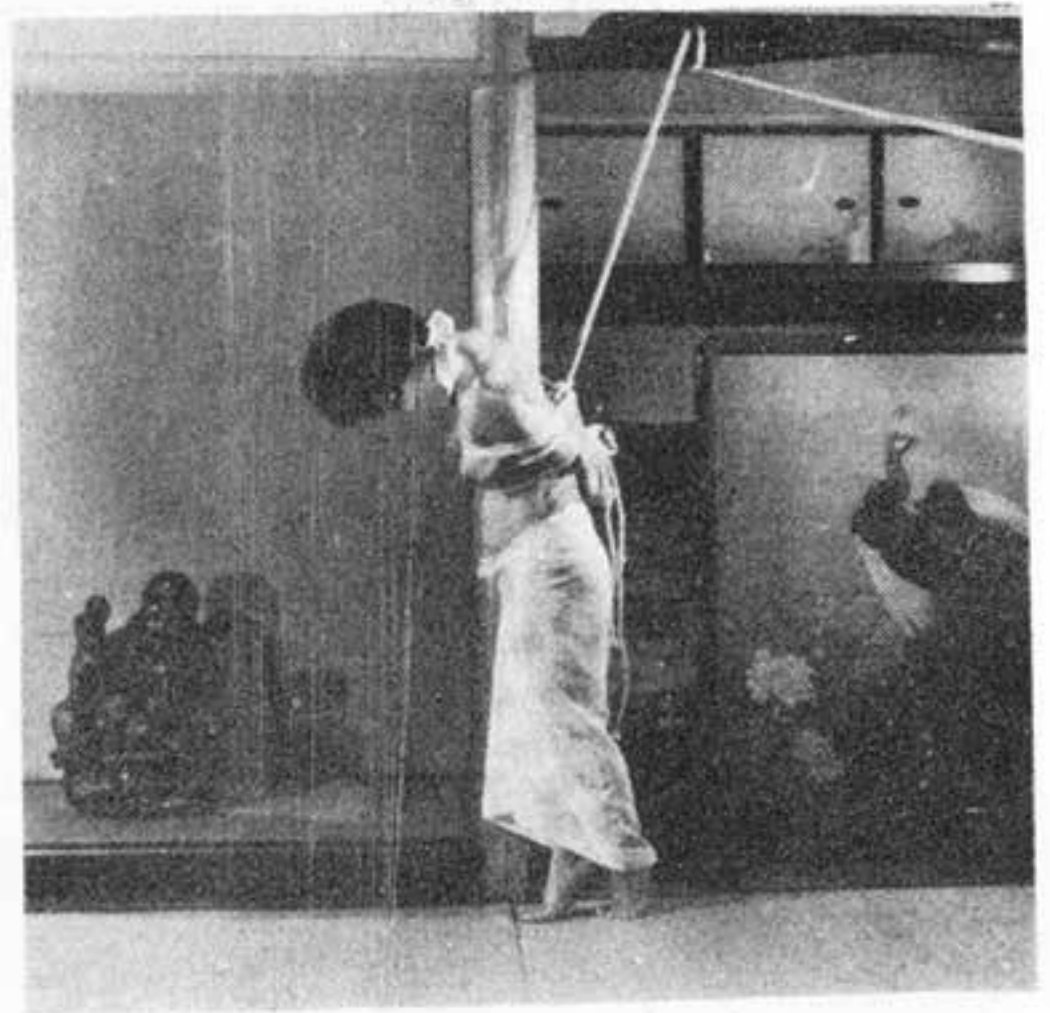
頒価一部 一〇〇〇円 (送共) 略号 (美8)

「女性対女性」の激しい女斗美、緊縛プレイの
フォト化―動きのある縛り場面の美しい展開―

女性対女性、女性同志の組打ち(六尺揮
着用或はパンティ着用)から緊縛に至るま
での動きのある縛り動作の連続を、大塚啓
子、鈴木晃子、山原清子の三女によって傍

若無人に展開させました。数十枚の素晴し
い美女争斗、相互緊縛の絢爛たる写真がこ
の一冊によって皆様のものとなるのです。
今すぐお申込み下さるようお待ちします。





限定版グラビア写真集へ美しき縛しめ▽第七集完成！

山原清子 刺青の魅力を探ぐる

頒価一部一〇〇〇円（送共）

略号へ美7▽

全部最近撮影の力作！未公開の秘蔵写真集！

刺青の女王——山原清子の魅力を最高度に発揮した強烈な緊縛フオトの結集版（思わず息をのむ凄いポーズ）

このグラビア写真集の刊行のために、近々三カ月の間、山原清子を連日のように煩して特写した、総て未公開の傑作写真ばかりです。山原清子の刺青の魅力を探索して、その肉体の隅から隅までを強烈な緊縛によって、マニアの皆さまの目にごらんに入れます。今

後二度と手に入らない素晴らしいとおきの写真多数をこの「限定版写真集」のために投入いたしました。一般市販は絶対にいたしませんから、直接発行所へ「略号へ美7▽」と御記入の上、お申込み下さい。本欄に掲載の写真は、写真集には入っておりません。



THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



奇譚クラブ 昭和四十二年四月二十日印刷 昭和四十二年五月一日発行 五月号（第二十卷第五号）毎月一回発行
昭和二十二年四月二十日第一種郵便物認可 昭和二十五年六月十七日国鉄大船特別貨車積載品第一二二号

定価 三〇〇円

5月号 ￥ 300

☆最新撮影△総天然色▽写真分譲品☆

両手吊りに悶える

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△てき▽

両手首を揃えて鴨居に吊られ、豊かな裸身をくねらせて爪先立つ若々しい見事な肢体が、美しい嗜虐絵模様をカラープリントにて原色そのまま迫真的に写されている。

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てか▽

後手高手小手の厳しい縄目が柔肌の二の腕、胸、腹、太股、膝とくびるように柱に縛りつけられている。裸身を正面に向けて羞かしげに身もだえしている可憐な表情が華麗な色彩によって美しい。

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てく▽

ピンク色に染まった柔肌に紺と白のまだらの縄が、くびるように全身を締めつけ背中で高々と背負ったように後手首が固定され、僅かに自由な脚をばたつかせる。

豊麗裸身の縄目

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てこ▽

均整のとれた豊かな裸身に情容赦のない縄目が高手小手にきびしくまつわりついている柔肌のくびれ具合が天然色によって、まるで錦絵のように美しい。

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△てま▽

典型的な後手高手小手縛りの裸身をマニアの眼に触れることの羞らいで顔をのけぞらし、全身をくねらし悶えるさまを実物を眺めるのと変らぬ着色フोटでどうぞ。

長襦袢緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てみ▽

華やかな色彩の長襦袢をまとって腕も折れよとばかり、ぎゅうぎゅう縛しめ上げられた女体が白い脚から赤いお腰を蹴出してもがく様をカラーにてお目にかけます。

緋腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てむ▽

白い肌に真紅の腰巻。この白と

赤のコントラストはカラーでなければ見られません。女体は勿論緊縛されて苦しきにもがき悶える姿態を十分にごらんいただけます。

猿ぐつわに呻く

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てめ▽

ムムムム、と鼻も口も蔽われて呻めきもならぬ猿ぐつわで、縄目の痛さは只、眼の表情のみが訴えている息づまるような真迫場面が美しい色彩でごらんになれます。

柱宙吊り縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△ても▽

肥り肉の女体が正面向いて両手を浮かして柱に宙吊り縛りになっている。全身に喰い込む縄、支えない両足先は空を掴んで真直ぐにピンと伸びてもがいている。

ポリウムを縛る

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てん▽

肉づきの見事な裸身の一つ一つ刻み込むように縄目がポリウムを縛ってゆく。縄目と縄目の間にふくれあがる肉。肌と縄の抑揚が光と影の色彩で華やかにいろどる。

縄の苦悶を狙う

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てる▽

マゾヒスチンと自称する流石の東浦ひかるもぐるぐると裸身を力いっぱい締めあげられて長時間放置されたので苦痛の悲鳴を挙げたところをすかさずキャッチした。

真紅の腰巻着用

大手札二枚組 八〇〇円
大塚啓子 略号△おう▽

真紅な腰巻を全裸の腰にまとうところ、従来の黒白写真ではあらわせない色彩を腰巻フアンの方々の要望によって特にカラー写真にて分譲品に加えました。

悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 八〇〇円
東浦ひかる 大塚啓子 略号△うて▽

真紅の腰巻をまとった大塚啓子を高手小手に縛り上げた珍らしくも東浦ひかるが責め手に回って啓子の縄尻をとるという今までに嘗てなかった横図が、カラーにてお目みえいたします。

真紅の腰巻緊縛

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△うこ▽

真紅な腰巻の乱れた裾から、真紅な太股が、脛が、素足がこぼれるエロチックな緊縛シーンが、力強い美しい責めフोटです。

昭和四十一年五月号

＜第20巻第5号・通刊第214号＞

奇譚クラブ 5月号 目次

◇奇クサロン……………編集部選

○踊子開陳と春婦検診……………編集子(9) ○『夫婦SMプレイ雑感』……………小竹一浩
○10 ○サロン楽我記……………辻村隆(12) ○私のカメラ・ハント……………加茂南北(13)
○14 ○時評日本の良心に期待と不安……………黒井珍平(14) ○編集部だより……………編集
部(14) ○マニアの手帖「愛犬飼育の記」……………花田沙登子(15) ○映画「花と
蛇」鑑賞記……………橘雅美(16) ○ボクの責め方……………宝塚二三夫(16) ○短信往来……………津治
良一(19) ○「連作Mフォト」……………美柳輪生(19) ○ある断片……………代理部
○20 ○先生とよばれはくは照れます……………夜乃探郎(21) ○「僕」のイメージ画集
○「切腹」……………室井亜沙路(21) ○「時」に想う……………保藤久人(22)
○「僕」のイメージ画集「磔の使徒」室井亜沙路(22) ○「女志士孤剣乱刃に死す」
……………六角京之介(24)

△本文▽

扉……………「本誌の信条」……………編集部……………(25)

「黒ミサ」に関する一考察……………久我 庄一……………(26)

「痴人の糧」△拷問(二)▽……………山本 一章……………(30)

心傷たむ遍歴 織りなす糸(一)……………西条 操……………(40)

悦子恋縄譚……………麒麟児 久……………(52)

耕土散筆『落穂拾い』……………保藤 久人……………(71)

ポケットブックに発見した

M的小説のクライマックス紹介……………河津 安春……………(76)

“シテユエーション・ウオントッド” 三原 寛……………(84)



アリアドネ (希臘神話の再編成)	黒淵 嬰一	(88)
のおと・あと・らんだむ	千草 忠夫	(102)
連載小説 花と蛇 (連載第十七回)	団 鬼六	(108)
フェチ小説 カード・プレイ	富樫 丸三	(122)
自称雑学アブ博士の書拔帖	江川 詩二	(126)
死刑台に載せるまで	牧野 正	(134)
KK時評 本文充実ワンダフル	橘行 司子	(140)
SMカメラ・ハント		
「恍惚抄」	辻村 隆	(146)
濡れにぞ濡れし子供の世界	芳野 眉美	(159)
続・蚯蚓のたわごと	田代 俊夫	(166)
「告白」ふんどしを締めましょう	出雲 肌香	(185)
「心理小説」 「変身」	保藤 久人	(188)
「可愛い小悪魔」		
小原真澄嬢に魅せられて	大島 幸	(205)
「浣腸体験報告」セロポン使用の記	栗 瀬 長	(208)
「書籍紹介」『カシモド』の恋	間宮清満彦	(210)
読者通信	編集部選	(224)

◎新趣向△責と悦虐▽フォト分譲品◎

強烈あぐら縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(えめ)

柱を背負って両膝を左右に思いきって開いてアグラをかけた両足首を揃えて縛り、背後の柱と連結して締めあげると、二の腕豊胸を括られた女体は二つ折りになる。

白刃血まみれ屍体

大手札十枚一組 一二〇〇円
山原清子 略号(えし)

白禪一本の刺青女性が脇差短刀を用いて下腹から鳩尾にかけて、したたかに切り更に止めの刃を咽喉へ。豊富な血紅を使つて切腹と屍体有様を微細に描写した。

驚づかみの乳房

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えう)

後手に縛りあげられて身動きの出来ないひかるは、その膨大な乳房を縄のため更に大きくして仰臥する。啓子はその乳房を驚づかみにして弄ぶ。悶えるひかる。

縛りあげられる女

大手札十二枚一組 一二〇〇円
大塚、東浦 略号(えの)
大塚啓子の手によって高手小手

に縛りあげられてゆく東浦ひかるの姿態を、十二枚のフォトに連続的に一枚一枚順序を追って刻明に演じてもらいました。

縛り虐める悦楽境

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号(えわ)

二の腕から双胸、胴、後手と厳しく縛りあげられた東浦ひかるは、大塚啓子から息もつけぬ猿ぐつわを噛まされ呻めき悶えながら、弄ばれいじめられる数々の場面。

屍体からミイラへ

大手札三枚一組 四〇〇円
山原清子 略号(えく)

寝棺の中に収容された白布ぐるみの屍体が、ミイラ製造のために運びだされるといふ場面の写真。若い女性の犠牲の姿態に興味と関心を抱かれる方のため。

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えな)

股間縛で両手吊りにあつて東浦ひかるの伸びきった腋の下を大塚啓子が両手の指先をつかてくすぐる。身をくねらして懸命に耐えている東浦ひかる。

強烈くすぐり責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚、東浦 略号(えぬ)

両手を鴨居から吊られて一本の棒のようにならびきつた大塚啓子の脇腹から下腹、腋の下をくすぐる東浦ひかる。くすぐったさに蛇のようにくねる啓子の裸身の美。

手吊り股間縛責め

大手札五枚一組 六〇〇円
東浦、大塚 略号(えお)

両手を高々と鴨居に吊り上げられた東浦ひかるは呻めき声を出してはいけないというので猿ぐつわを噛まされ大塚啓子から毛髪を撫まれ股間縛の縄を弄ばれる。

ボリウムをくびる

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひか)

最近になって、ひとしおボリウムを増してムクムクと肉のついてきた張りきつた裸身を縄目が、まるで俵のようにくびって、縄目の間に肉がむくれあがっている。

両手吊りにあえぐ

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひお)

両手首を揃えて縛られ格天井の梁に高々に吊り上げられて、脇腹を空間に寒々とむきだしにして擦り責めの試練におびえ、全身をさらし悶える豊満な裸身。

後手垂直しぼり

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひけ)

背後で後で後手を垂直に揃えた両の腕を、そのツケ根から手首に至るまで、グルグルと縄でひきしぼり更に胴体と密着させて一本の棒のように縛りあげられた女体。

一糸まとわぬ緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひく)

最近になって一層の美しさと色気の増してきた啓子の全裸の女体に思うさまに縄を掛け、身動きできぬまま翻弄される柔肌に光と影の屈折が麗美な画面となす。

豊胸をくびる縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひき)

ぷっくりとふくらんだ恰好のよい乳房を暴虐の縄が切りきざんて斜光線が、その陰翳をくつきりと描き、可愛い臍窩の窪みが強調される女体神秘の苦悶表情。

浣腸とオシメ装着

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(ひそ)

男性の手によって浣腸を施され、た上、更にその排泄をオシメのなかにさせられるために、オシメをつけられ、オシメカバーを装着されるシーンを写真化しました。



先日所用で郊外へ出たついでにストリップ小屋へ入ってみた。表は誰一人立っていないかったのに、中は満員の盛況で、中肉中背の踊子が両足を八の字にして今やステージの端で開陳の最中だった。それからは少しの休みもなしで、八人のメンバー一人のゲストが入れ替り立ち替り、右から左へ、エプロンステージへと、まんべんなく開陳サービスを繰りかえすのだから全く見事という外なかった。

九人の踊子の中で殊に二名の若い踊子は、しつこい程の熱心なサービスぶり、その顔付きを見てみると露出癖があるのじゃないかな仕草だった。それに、彼女たちは、いずれも二十才前後の伸びた肢体も若々しい娘たちで、容貌もスタイルも十人並以上の持主なのは鑑賞的価値があった。出てくる踊子の誰もが一樣に如何にも楽し

くって仕方がないといった嬉々とした表情であるのに比して、観客連の息づまるような真剣な表情がまことに対照的だった。

九人の踊子の中で一人、上背もありボリウムも見事な素晴らしい肉体美の持主があった。化粧も眉を釣り上ったように描いて如何にもきつい感じで、丁度春川ナミオ氏描くところのサジスチンそっくりである。石臼のような逞ましいヒップを揺すって全裸で踊りまくる彼女を見ていて、M趣味氏なら、きつと彼女の臀の下に敷かれてみたいと願うだろうと考えた。

他の八人は、いずれも小柄で顔立ちも可憐な感じで、縛りモデルとしては良い演技をやってくれそうなタイプだった。表にいる男に

金を掴ませて楽屋へ案内させたのだが、この楽屋というのが、まるでウナギの寝床のような細長い部屋で、そこに十人ばかりの人間と下着や小道具、荷物などが足の踏み場所もないくらい乱雑に押し込まれているのには驚いた。

座長というのは、細面の肌理細やかな女性で、写真撮影の話をすると、この公演は今日で終りで午後九時には荷物をまとめて次の都市へ行くのだ、ということだった。先乗りの男は次の都市へ行っていて不在だが、ギャラの次第ではOKしてもよいが、公演が終わってからだと、午後十一時頃からになるといつの日に逢えるか、心もとない限りである。

話をしているうちに彼女の出番が回ってきたので、それをしおに楽屋を出たが、明日は又、入れ替りに、どのようなグループが訪れるだろうか、と興味を抱きながら小屋をあとにしたのだった。

二十何年か以前、軍政要員として南方占領地に駐在していた頃、所属している民政課に現地語を解する本官がいなかったため、慰安所検診の係官として一週間に一回三十数人の慰安婦の検診に立ち会うという経験をした。十一、二才で母親になる女も珍らしくないという赤道直下だけに、集められた慰安婦も十三、四才から十七、八才という若さであった。

阪大医学部出身の医官と二人で週一回のピー屋通いは、同僚たちから大いに羨ましがられたものだったが、これも仕事となれば、その頃二十才代であったにも拘らず、余り有難くなかったように思う。少くともストリップの開陳を見ているような、楽しさはなかった。殊に現地の警察官がキャッチしてきた街の女の強制検診の際は女体の珍らしさ以上に、汚らしさが先にたって、今思い出しても飯がまずくなる思いである。

占領軍の強権で占領地の女性を掴まえさせてきては、無理矢理強制検診をするということは、S的場面には違いないが、やはり踊子が楽しげに開陳サービスしているのを眺めている方が、心楽しい思いがするのである。

踊子開陳と春婦検診

編集子

『夫婦SMプレイ雑感』

小竹一浩



写真(B)

今回は同好者の方々への呼びかけと私達夫婦のSM日記を書いてみようと思う。

今まで投稿された人が異口同音に申されているように、もっともっと多くの投稿があつて然るべきだし、できれば読者の投稿(この場合は夫婦に限らず)だけで特集号が発行されるようになればと願っている。勿論、従来発行されている奇ク特集号のような素晴らしい

ものは出来ないだろうが、別の意味の楽しい味わいを含むものができると思うがどうだろう。(編集部の方々、なんとか御尽力下さり夢にお知らせず実現して欲しい。同好者の皆様どしどし投稿してみませんか)

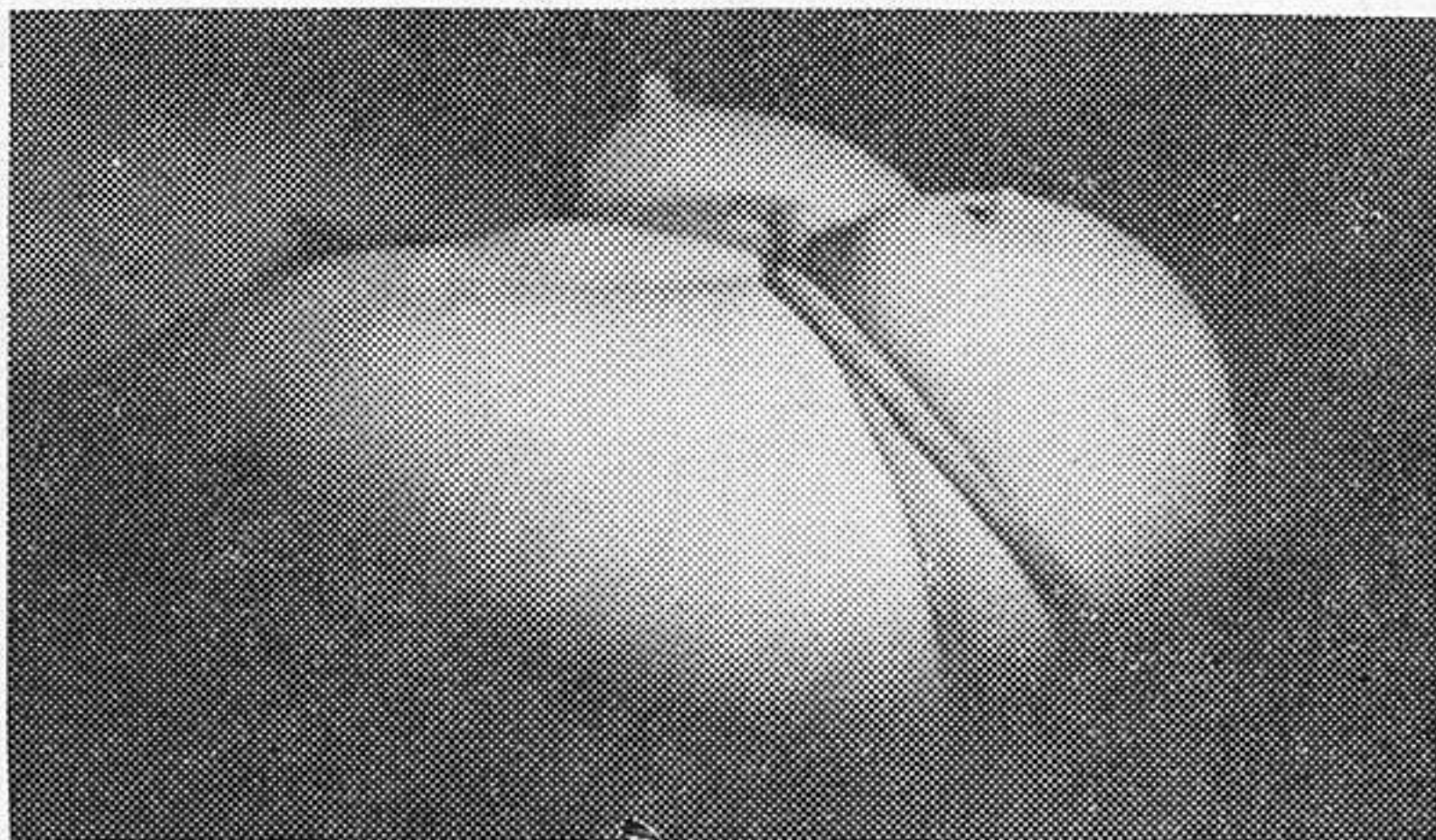
夫婦のSMプレイは夫婦であることに依る特権であり、短い人生を楽しく有意義に過す一手段であり、SMを理解できない、或いは

知らない夫婦よりずっと破綻も少なく、上手に活用すれば倦怠期知らずで健康法にもなるという妙薬でもある。だから飽くまでも夫婦らしいムードのあるプレイ(この言葉のニュアンス通りで只単に強烈に責め、責められて快感を味う病的なものとはちがう)ならば大いに自負してよいと思う。

SMプレイとは夫婦の場合サド・マゾプレイと同時にセックスムードプレイでもあるわけだから尚更のことと秘密にすべきことは云うまでもないのだが、奇クへの投稿は少しく意味がちがう。夫婦のSMフォト投稿について、とやかく云う人もあるようだが、それはプレイの相手に恵まれぬ人の嫉妬から生じるアイロニーであり、気にすることはないし、敢えて反論を叫ぶ必要もなからう。

本来なら鳥取の南恵子様の読者通信にもあったように、私的なフット交換や文通が望ましいのだがこれには奇ク投稿以上に種々の困難と不安がつきまとうてしまう。

写真(A)



兎に角、同好者の皆様、テレビの宣伝文句のようだが、左にワイフ、右に奇ク、まア楽しくやりましょうや”

今日は私達夫婦のSM日記をかいてみるが、単なるフォトの説明

文になってしまいかも知れない。最近奇クの誌上は論評の花盛りだが拙作拙文は自認している故、字句の批評は平に御容赦願いたい。

× × ×

寒さも酷しき睦月二十日の夜。「今日は写真を撮るからよく磨いておきな」

浴室の戸をあけて浴槽に浸っている妻雪枝に声をかける。

「まアひどいッ」

「もっとも、いくら磨いたってスタイルは良くならないがね」

「いじわるネ、そりゃ若い時とはちがうわ」

「そうかも知れんが、三十代になったばかりで、そんなことじゃ末が思いやられるよ」

「仕様がないでしょ、だからその分は顔で……」

「コラッ、自惚れるな」

洗い場に出た雪枝の桜色のお尻を平手打ちすると、驚く程大きな音がして、一際赤くスーッと手型が浮び出る。

「また、私の写真を送るつもりなの？」

「いいだろう？この前のように、お前だってことわかりやしないんだから、だけどそうすると自慢の顔がうつらないから、スタイルの



写真(C)

悪いのをカバーできないわけだ」「いやな人ッ、でもあの時、あんなに雁字搦目にされたかしら？」

雪枝は二月号に掲載されたフォトを思い浮べ乍ら言う。

「今夜も寒いわ、嫌だといってもどうせ、許してくれはしないでしょう？」

「当たり前さ、縛られれば、すぐ暖かくなるだろう」

「そう簡単には燃えないワ」

「ストーブがついてるから、よくあたたまって、裸の俤来るんだよいいね？」

「ええ」

部屋に戻った私が、ライトの位置やカメラのアングル等を考えな

がら、前日使った俤になっていたロープの結び目を解いていると、バタバタと廊下を馳ける音がして雪枝が飛び込んで来た。

「廊下を馳ける奴があるか」

「だって、雨戸がしまっていないですもの」

「さあ、ここへ座って」

雪枝は素直にストーブの前にすわると、習慣のように手を後にまわす。その両手首を括った縄を胸へ廻し、乳房の上下を二重に締め背に戻すと先程手首から二の腕へ伸びた縄にかけてぐっと引き絞ってとめる。そして余った縄を左肩からまわして乳房の上下の縄にまきつけて締め右肩を通して元へ戻

す。ありふれた簡単な縛りだが、殆んどの場合これを用いている。これだけなら相当強く縛っても雪枝は数時間何らの苦痛も訴えないし、この俤ねむることもある。

畳に敷いた毛布の上に転がし、お手製のスポットライトを使って女体の各部をクローズアップしてみることにした。顔、首、肩、乳房、下腹部と順に足先まで写して行ったが、乳房以外に奇クへ送るものは撮れなかった。(写真A)

一旦縄を解き、今度は長いロープを使ってゆっくり緊縛に取り掛かった。たまには縄目を揃えてみようと、雪枝に両腕を上げるよう命じて一本一本脇肉をはさまぬよう気をつけながら巻いていった。脇の下肉はよくはさんでしまふのだが、相当痛いようだ。よく悲鳴を上げることがある。あとは写真(B)の如く緊縛し、いつも猿轡に使う布で目かくしをしてからデパート等の包装でつけてくれるホルダーで口を割る。

雪枝はしきりと、はっきりしゃべれぬ口中で

「サムイワ、サムイワ」

を連発し乍ら身体をふるわせていた。いつもと違って同じようなポーズで、じっとしていなければ

ならないのだから尚更のこと寒さを感じるのでろう。

仕方なく、また全部解き放してやると、すぐストーブの前に、うずくまる。

「もういいだろう？」

ロープをかけようとした時、雪枝は

「トイレへ行かせて」

と身悶えるように言う、私はそれを聞いた時、ふとビニール・パルティを思い出した。私がビニール布で作ったショート型のものだが、責め具を入れた箱から出して

みると、寒さのためにゴワゴワとこわばっていた。

「イヤッ、イヤッ、寒いからかんにんしてエ」

私は耳を借さず上半身を縛り上げてから、わざとゆっくりビニール・パルティを穿かせた。ビニールは雪枝の体温とストーブの熱とで、ヌメヌメした柔かさを取り戻していく。立たせた妻を色々の角度から写してみたが、ビニール独特の艶が思ったようには撮れていなかった。(写真C)

「どうした？ 早くすませてしま

いなさい、フィルムもおわりだから、すんだらお風呂へ入れてあげるよ」

わざと、ストーブから離れた壁際にすわらせて、リフレクターランプを消し一服つけた。雪枝は、かすかすら鳥肌立てて、寒さと尿意に耐えている。

「こらッ、どうした？」

煙草が半分程短くなった頃、私は待ち切れずに近づく、乳首をキュッとつまんだ。と同時に「ウッ」と猿轡の下で呻き声が聞えたかと思うと、ジョウウッというよ

うな激しい音が、静まりかえった部屋中に流れ出した。

猿轡を解かれると雪枝は「フリーッ」と息を吐き私にもたれかかってくる。

「どうだ気分は、スーッとしたらう？」

「いじわるッ、早くお風呂へいきたいわ」

廊下を歩く音に混じって、チャポ、チャポと小さな音が続いていた。

(了)

サロソ楽我記

(第二十三回)

辻村 隆

カメラ・ハントの反響は、すぐ身近かな同好の士からある。小原真澄の巻で、青い麦をうまくやったなと羨望と嫉妬の入り交った電話があつて、その彼がいうのに「でも辻村さん、いくら何でも、今迄何千人となく女の人を撮ったとは、ちとオーバーでしょう」と来た。

えっ！と私が驚く番で、よくよく聞くと、SMカメラ・ハントの

『可愛い小悪魔の群れ』の一〇七頁の下段、右より七行目に、成程「私は今迄、何千人となく女の人を撮った……云々」とある。とんでもない間違いの誤植、私は何十人ともなく書いた筈なのに、この誤植は、校正係の私に対する買被りも甚だしい。とてもとてもである。きっぱりと訂正致します。果ては友と大笑いになった。

× × ×

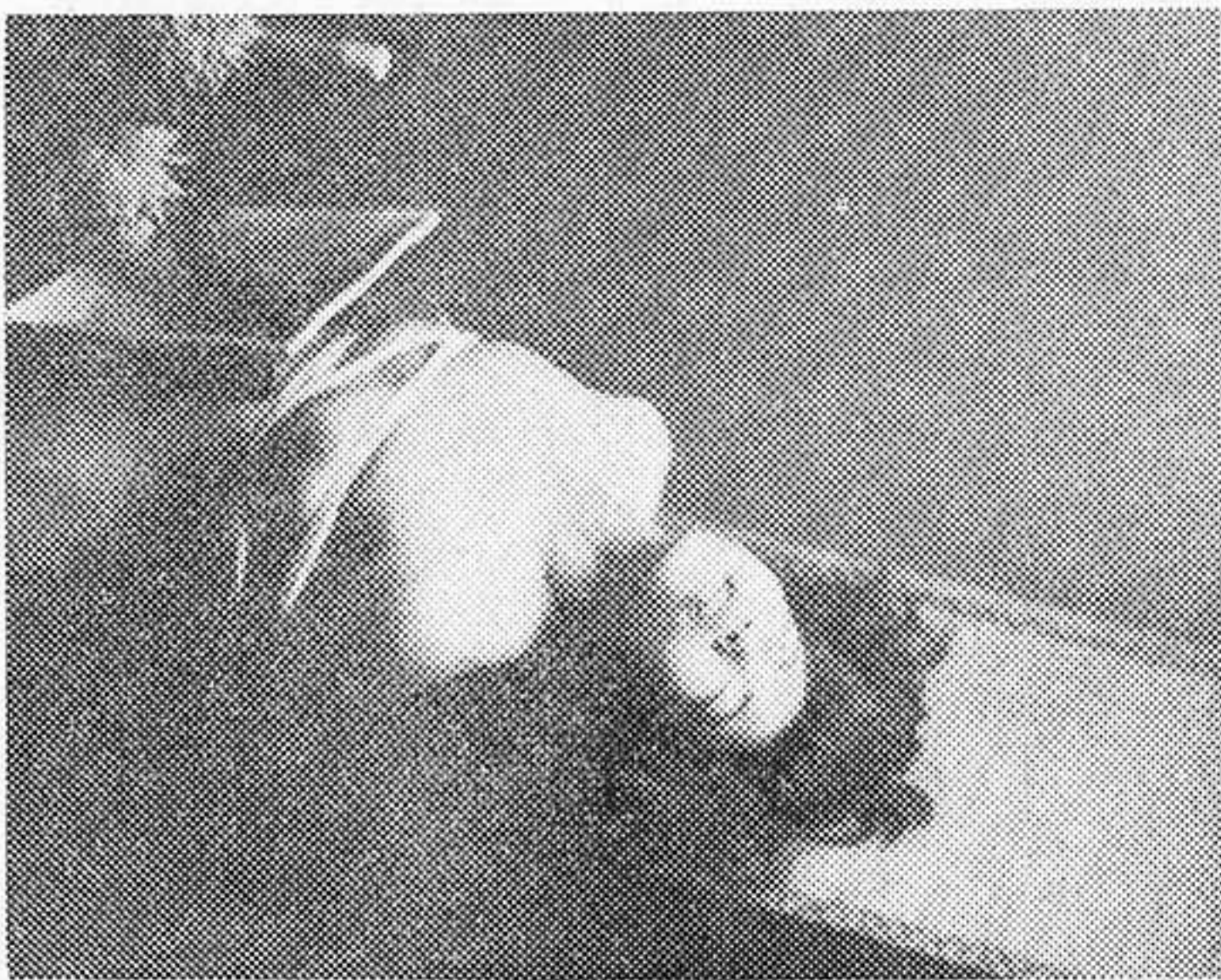
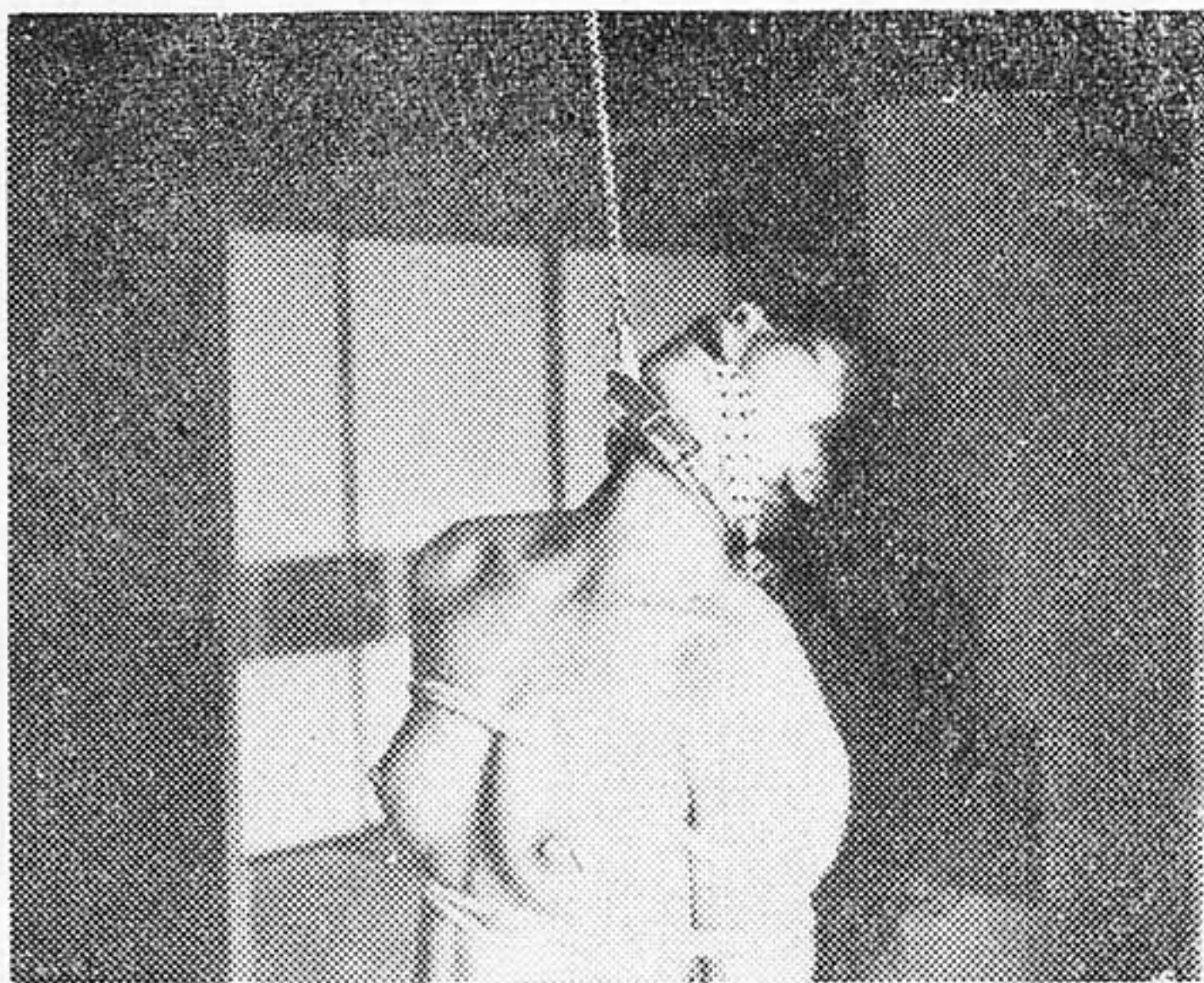
河内カルメンのマスミは判っきりしている。芳野眉美の助手をしたユリコに、私との出来事を一部仕終話したらしい。と驚いたことに、ユリコが私に一度撮ってほしいと申込んで来た。幼稚な可愛い便りを手にして、私は閉口。しかし芳野眉美の話では仲々にいい娘だったそう。いずれユリコを撮る日も近いし、うまく飼育したら、マスミとユリコのコンビで連縛も可能かも知れない。こんな愉しい約束が近い将来果されるかも知れないと思うと、益々御身大切を普段は心掛けなさいといけな

× × × 短信往来で、河津安春氏が、魔子とのMプレイのカメラ・ハントを希望しておられるが、対談にも書きましました通り、フォトを撮らせないし、又緊縛のフォトを以前とったのも、発表しない約束で撮ったので、カメラ・ハントにはならないのです。私のレポートとしてなら書けそうですが、元来がSの私、どう間違つてか、M的扱いをうけて、我が身の恥を曝す様でどうも筆が進みません。しかし、私が、緑猛比古のペンネームで『木曾のお天狗松』を書いたのを、よ

私のカメラ・ハント

加茂南北

彼女は本年二十一才のBG、私と知りあって、すでに一年。その間、もう何度となく私に縛られ写真をとられてきました。この頃では、その細面の顔の表情も、いかにも責められているという真に迫ったものを見せはじめています。肌には傷のつくことや苦痛に耐えられないようなことは、したことはありませんが、まだ暑さの残っていた頃、二の腕や手首に縄のあとを判っきりつけたままでバスに乗せたことがあります。彼女は余り気にした風でなく、釣革を握っていました。私は良い女性をハントしたことになるでしょうか。



く記憶しておられる。あの頃は、緑猛比古と辻村隆の両刀使いで、よく書けたものだが、既に奇クと歩んで二十年、もう今の私には、カメラ・ハントひとつが精一杯の状態です。河津氏の文はMとしてそれなりに、愉しく拝見しています。奇クの明日のために張切ってください。

事実は小説よりも奇なりと謂うが黒岩重吾氏が以前書かれた『脂のしたたり』と、符牒を合わせた様な、ヘンな動きが昨年来より株式界の話題になっている。黒岩氏は大阪の某芸能社株を三國人が買占め、その暗斗を恐らくフィクションとして描かれたのだろうか、現実に、某芸能株にそっくり当て

嵌る動きがあるのは、どうしたわけか。株の上下に、今はヘタにシロウトが手を出すと、非道い目に逢うことになるから要心するに越したことはない。

いか、ついぞ、その俤になっていく。氏の描く世界と私の拙作とは類似点もあり、氏もどちらかと云えばアブ好み。機会があれば膝をつき合せ、関西の裏のSMの世界を語り合いたいものである。私の名前を知っていらつしやるってことは、要するに奇クを読まれているということになるのだが……。

＜時評＞

日本の良心に期待と不安

黒井 珍平

私は後手しぼりの美女好み一点張り、血駄目、前手しぼり駄目、駄目とは無関心の事。髪も駄目、それだけで奇クを愛するのみ。その他、切腹、浣腸、チンパンカンブン、皆判らず。

三月号で編集子が硫酸魔を笑って居られますが、あにはからんや何か奇体な事件の度に、奇クなどに向けられる世間の目が、どんなに恐ろしくきびしいものか。



奇クが人生ぬるいVなどと編集子の苦心も知らず太平楽を並べている読者は、ここ毎日の政治を少し突っ込んで探ってみられたら如何？日本が今どんな所にきているか。

昨年九・三〇事件以来、インドネシアで公認八万七千が死んだという。遠い昔の話ではない、ただ赤というだけで。政治の話はやめましょう。肌に粟を生じます。この二、三年、安保以来のマスコミテレビ、新聞の変質に気づきませんか。いずれにしてもSMに関して公認的な（そんな瞬間はなかったにしても）言葉は奇クの中だけであって、再び一般にしくなってきたいます。

○青少年健全育成条例に、いちゃもんつける人がありますが、大体SMについて話の判りそうな人種の人が育成条例などつくる筈もなく、全くいくらくつくしても理解してくる相手でなく無駄な事。

○どんなに大量にマスコミでSM記事があっても、それは正しい愛情からではありません。ただもうかるネタとしてで、いつでもキバをむいてかかっています。SM者は本能的にノーマルの世界が、どんな態度をとるか知っています。この時点で二つの事件が私に与えた恐怖は二週間続きました。一月二十六日、果鴨のホステス殺しと同日、福岡家裁所内で高校教師が先妻と義姉を刺殺した事件。しかし、比較的良識ある新聞と一週間おくれで花開く週刊紙ができ上がったのは、私から見れば一寸神風的事件（鷹司様の事件、次の第二弾全日空機遭難）申しわけないようですが世間の目、マスコミの目が皆そっちに向いたのです。

第一の果鴨事件についていえば結果は犯人は女性であり、怨恨殺人であった事、睡眠薬によるサクラン（本当の事は判らない）。しかしセンセーションに突っ込めばたしかに奇クに批判の目が向いた筈（平凡パンチなど、はっきりそう書いています）又、英語教師の場合は所持品からSM的な手記がでてきた事、前妻を虐待した事などから（数社の週刊紙が書きまし

編集部だより

○四月号では初めて来阪になった芳野眉美氏を迎えて、芳野眉美・辻村隆両氏の対談が誌上を飾ったが、三月下旬には八夫婦の緊縛プレイフォトVでお馴染みの新宮明夫氏御夫妻が来阪される予定なので実現の暁は辻村隆のカメラハント或は対談という恰好で、誌上に掲載される筈である。

○昨年十一月には雪崎京人氏の指導により八塚啓子V八東浦ひかるVの女相撲の写真を撮影したが（写真は只今のところ未発表）来る四月下旬には雪崎氏が再び来阪になるので、本式の「女相撲四十 hands」の指導をして頂く予定である。そのときの都合により、野外に於けるカラー写真並に8ミリの撮影も実施したい考えである。

○久我庄一氏からの通信によると齊藤夜居著の私家版八伝奇、伊藤晴雨Vは、不出世の奇人伊藤晴雨氏の伝記としては、まことに当を得た書である由、未見ではあるがこの欄をかりて紹介しておく。因に発行所は東京都豊島区西巢鴨四ノ四〇五、豊島書房、頒価一六〇

た)雲行きが悪かったのですが、全日空でふっ飛びました。奇クの存否が云々されるとしたら、やはり、きっかけを彼ら(?)は待っているでしょうから、私には一日寿命がのびたと思いました。

英語教師の殺人の発作の推理ですが、これからの手切金の問題以上、彼の性向が家裁に持出される事を恐れたからではないか。「処女が失われる恐怖も、それは社会への恐怖に還元できるからです」しかし、これから、いつ又どん

な事件がおきて批判の目が奇クを襲い、それを利用して弾圧者がどんな手を打ってくるか、私は日本の良心に期待と不安をもちます。

○奇クの読者も、退屈さをこらえて、サドの諸作品を読めば如何でしょう。いろいろと学べると思います。家永三郎教授の「歴史家の見た日本文化」もおすすりめできます。私自身の事、妻をしる事の是非(私の生命に関する事)は奇クの方々の御研究と一年に亘る観

察の結果、妻が猛烈に(いつか載せていただいた如く)嫌悪する以上、無駄だと判りました。しかし、どうすれば好いのか、わからない。妻しか愛しないのですから。

○新潮社版、クロンハウゼン著、中田耕治訳、「性文学をどう読むか」二二四頁は参考になるのですが、条例遂行者には判らないでしょう。まあ、平和が続くかぎり奇クの御安全を心から祈ります。

マニアの手帖

愛犬飼育の記

花田沙登子

四月号で私の手記を発表しましたところ、雑誌が発売になると共に奴隷志願の男性から、次々お便りがまいておきます。早速このなかから八犬Vになりたいという男性一名を飼育しはじめました。この愛犬ボチは、いたって恥かしがり屋なので、今のところ、ま

だ写真撮影はしておりませんが、いづれ写真の撮影可能なドレイ青年を使って、私のいじめっぷりを誌上でご紹介したいと思っています。只今飼育中の愛犬ボチは、まだまだ教育が足りていませんので舌の使い方も、至って不器用ですので、志望者の中から更に二、三人の愛犬を選びだそうと考えています。これからの誌上をご期待下さい。



ネクタールのもとを飲む花田沙登子

○円送料一〇〇円とのこと。

○三月の声を聞くと共に、めっきり春めいてきて、いよいよ写真撮影のシーズンである。新人モデルの登場も期待されようという今日この頃、但し残念ながら先月号で予告の妊婦モデルの件は、目下のところ色よい返事はなくて悲観的である。妊婦といえば、本年は丙午のせい、街を歩いても大きいお腹の女性は少いようだ。

○男性モデルの志願者で用件のために大阪へ来たので、というわけで突然日時を一方的に指定してこられる方が、シケジュールがあるため殆ど不可能なので御諒承を乞う。中には折角連絡しても不参の方が、出来るだけ電話連絡で確認できる人に限っている実情である。

○編集者に面会を求められたり或は返信を求められる方々には、時間の許す限り応じているのだが、最近是非常に件数が多くなり、気になりながら不義理を重ねている向きも少くないので、誌上を拝借してお詫びをかねてお断りしておく。誌上に一括お返事できる分は、失礼ながらなるべく、そうさせて頂き、余力を本誌の内容充実

映画通信

映画

△花と蛇△鑑賞記

橘 雅美

先日、新橋の某映画館で、団生△花と蛇△を見ました。読売新聞の映画案内に出ていて知ったのですが、その日は朝から大変。友達に「今日はデートか」と冷やかされる程の張りきり様でした。

仕事が終わると胸を躍らせながら新橋へ。客の入りはマアマアのところ。映画は三本立てで、最初の一本は後の方でゆっくりといねむり。そして問題の二本目がはじまります。映画のストーリーは貴誌で二、三回見たのと大分違っていました。貴誌のシーンを見ても、貴誌のグラビアの女性が、責めに泣き体をふるわせるのですから最高です。

最初は二号の静子が川田との事を知られ折檻されるシーン。両手を吊られムチ打たれるところ。下半身は写しませんでした。打たれるたびに悲鳴を挙げ裸身をのけ

ぞらせるところは圧巻でした。汗で光る肢体。その白い肌にうす黒いムチのあとが走っています。それをアップで捉えます。

胸に縄がかかっているの、手吊り特有の腕の内側から腋の下、乳房への張りきった美しさが見られなかったのは残念でしたが、髪を掴んでひっぱられる場面がありました。次は川田から借りた金が返済できず、その代りに無理矢理責め写真のモデルにされるバーのホステスが登場する。こちらの方はなかなか荒っぽい演技です。魔の手から逃れようと小道具をひっくりかえしての必死の抵抗を試みますが、大の男三人のために机の上につぶせにされ、上半身から身につけているものを全部剥がれてゆきます。机の端を力一ぱいにぎりしめる手を、じりじりと後にねじり上げてゆく所など、なかなかリアルなシーンです。

顔を上げるたびに、むき出しになった乳房が画面に写ります。場面が変り女が後手に縛られています。カメラマンが気むずかしい顔を付きてアングルをきめます。ナワを手にかけて位置を直すときの女の顔は何ともいえないよさです。そのまま鴨居からツマ先が僅かに届

ボクの責め方

宝塚二三夫



外はオーバーに身を固めていても肌寒い気温である。薄暗い建物の中でハダシにして後手に縛ったときの、か細い乙女の素足、怪の気配はボクの心をゆすぶる。

法隆寺へ参ったとき、誰もいない庫裡の板の間で、彼女はストッキングも脱いで、真白な素足で歩いていった。闇の中にぼうと白く浮かんだ素足の白さは、忘れられない。はにかんだような足指が虫喰いのある黒ずんだ板の間に、あざやかだった。

ボクは彼女のうしろについて、踝や踵ばかり眺めていた。本堂の



く位に吊られます。ピンと張った吊り縄を中心にゆれる女を、カメラは髪の毛から足先までを、ゆっくりと写してゆきます。腰にまわっていた最後のもの（花模様の布片）をとられる時の女のうらめしそうな顔、次の一瞬、ほんの少しだけ、全裸の後手吊りが画面にとび出しました。

立ヒザの姿勢で、先ずハナ責めにあいます。うしろに回された手が痛さをこらえるようにふるえます。まるで、それだけで一つの生き物のように。今度は耳をひっぱられ、目はとざし半開きの唇からウーと呻き声が洩れます。又ハナを指で押し上げられ、そのまま床へ押し倒されてしまいます。続いてホステスと同じように、後手のまま吊られます。黒い細引きが首に胸に下腹部にと、容赦なくうたれてゆきます。

この女性、もともとマゾ気味らしく、画面に写る顔の表情も至って楽しそう。しかし縄の方は相当強く、彼女の体を横からきりきざんだように肌に喰い込んでいました。口にバナナを突っ込まれたり背後から男の手が乳房をわしづかみにして強引に茶わん酒を飲ませるシーンなどがありました。



仏像よりも、ボクにとっては、彼女の素足の方が有難かった。思いきり、彼女の初物の足をいじめてみたかった。彼女の足は、まだボクの翻弄の洗礼を受けていなかった。冬の間中、ストッキングと靴とに包まれて陽の目を見なかった真白い足が、今や剥きだしになって土間の上に置かれている。

冷たさに紅潮した足指。これから大阪へ帰ったら、ボクは無茶苦茶にこの無垢の足を愛撫してやりたいという衝動にかられた。繊細なガラス器のように、ちょっと触れてもコワレそうな足指、

ボクは、このガラス器をコワシてやりたい。それでいて、ゼイタクなボクは、一度コワシたガラス器には興味を持たない。

いつも新鮮で、やわらかくて、ふくよかで、旨い芳香を放っている真白い素足を、数百年いや千数百年前に建立した古寺の板の間に立たせてみたい。

古いものと新しいものと、固いものと柔らかいものと、白いものと黒いものと、温かいものと冷たいものと、その強烈なコントラストに、ボクの胸は痺れる。ボクは今日も女を縛る。



三原寛様へ 麻生保より

谷崎潤一郎の「饒太郎」「富美子の足」は、目下古本でないとい入手出来ません。これ等、最もM傾向の濃厚な大正初期から中期にかけての谷崎作品は、つねにわれわれの古典であります。文豪自らが後に破棄することを望み、再出版を許さなかったものです。したがって、中央公論社が昭和三十三年に出した三十巻の谷崎全集は、「全集」の名に値しないというわけです。

比較的に簡単な方法は、昭和六年に改造社が出版した十二巻の全集を入手されることです。現在、相当に高価で、しかもなかなか見つからないと思いますが、これには上記二編の他にも、当今入手困難な、多くの興味深い作品が収められていますから、買って損はないでしょう。

しかし、谷崎氏の亡くなられた

今日、或は「真の全集」の刊行が計画が進められる可能性も考えられます。

大兄の御健筆を、お祈りしています。

「夜の演技者」の作者より

耽美幻想

奇譚は書けない人間ですが、万人共通の人間ドラマは創作できよう、はじめてこのような物をペンを取り投稿してみました。うれしくも四月号に発表され感激しています。ただ、掲載された作を読み返してみても二〇七頁（三段目の左より七行目）「五十男の胸に逆流となつてうずまきはじめた」その△五十男△という所ですが、うっかりして自分の年令と比較して、そう書いてしまった始末で、これは、この小説構成上から云って四十才前後位が適当です。そのように御解釈願わしう存じます。

田沼・春川・宮野・花田様へ

田代俊夫

四月号では畏兄田沼醜男氏が久方振りに健筆を揮われ、興味深く読ませていただきました。これでもか、これでもか、とくる同一流のつつこみは正に面目躍如たるものがあり敬服の他ありません。ブリジット・バルドーの大統領やアニタ・エグバークの代議士が実現したら、さぞかし愉快なことでしょう。ただし、氏の「白人（女性）優位説」には私として同意できないのが残念です。

「有史以前から白色人種に侵略され征服され奴隷化されて来た有色人種は、生まれながら本能の中に白人に対する崇敬の感情を持っているのではあるまいか？」と書いておられますが、これは少し論理の飛躍と事実の誤認があると思います。正直なところ、私も白人（女性）の美しさと大柄な体格に常に崇拜の念を抱き、圧倒され征服されたいとは思いません。むしろ、このことと人種優位説とは無関係だと考えます。そうはいっても日本人が現在尚、白人（女性）にコンプレックスを感じていることは事実で明治の文明、開化後ずっとその趨勢を持続しているように思います。戦時中の

「鬼畜米英」は実は裏返しに劣等感の表明にすぎなかった。敗戦によってそれが本来の姿に復したのだでしょう。田沼氏の常に鋭く指摘されるいわゆる混血児の芸能部門での活躍は、その意味でM派にとっても極めて興味ある社会現象といえるでしょう。詳細は避けませんが混血児といっても男の子は普通問題ではなく女の子が主な対象になります。その場合でも父—白人で母—日本人のほうが、その反対の組合せよりも何となく上位になるらしい。

(1)白人の男(2)白人の女(3)黒人の男(4)黒人の女(5)日本人の男(6)日本人の女(7)それらの間の混血児(男及女)

この七グループ（正確にいうと(7)は十二通りもあるので全部で十八グループ）の人種的価値順位というようなことが白人優位論者の最も得意とするところで、かつて沼正三氏も大いにそのうんちくを傾けられました。私にとっても傍観者的見地からは、大変面白いのですが、ただそういったことを客観的事実として本気で信じこむのは不可能です。

白人が国際社会で優越的地位を占め威張り出したのは、せいぜい



「連作Mフォト」

美 枷 輪 生

和服姿の若々しい美女の目の前で全裸の緊縛姿態を晒らしている哀れなM青年。にこやかな若奥様



ここ三百年くらいのことで、それも人種・文化の優位性というようなことではなく、単に武器の優秀性に基くにすぎないからです。日本の場合でも明治維新に伴う西欧機械文明の流入が、その主因をなしていると考えられます。田沼氏のせっかくの力作に心ならずもケチをつけてしまい大変申し訳ないとは思いますが、白色人種優位

説だけは、どうしても納得できないので、以上の駄弁を弄した次第です。

尚、四月号では「宮野政子様を送る私の画」と題して春川氏が素晴らしいM画を発表されています。最近号での出色の出来で、特にその脚の部分は最高です。従来春川氏の画はデフォルメが少し極端すぎて幾分オッカナイ感じもしない

ではなかったのですが、この画ではその点がすっかり払拭されてサディスティンの表情なども素晴らしいと思います。宮野様はいつかその男性征服記を本誌に発表されることもあるかと思っていますので、その折には是非とも春川氏の麗筆になる挿画を添えていただけないでしょうか。その他、美貌のサディスティン花田沙登子様が初めて登

の視線の底には、この男性をさげすむような冷やかな目ざなしかもっている。

場され、飼犬募集を行っておられます。私などとてもその資格はありませんし「神酒授与」にもひっかかるので、残念ながら「空想にばかり走って」楽しむ他はなさそうですが「いずれ詳しい告白を誌上に」発表される日をお待ちしています。宮野・花田両女王の男性征服記の競演ぶりが実現すれば正に圧巻といえるでしょう。

ある断片

津 治 良 一

女ハ気ヲ失イ、目ヲトジ、唇ヲヤヤ開キ、情感ヲサソウ、黄色味をオビタ、生臭イ口臭ヲ思イ起サセル齒ヲ見セテイタ。

女ハ苦痛ト恐怖ノ表情デ、吊リ下ゲラレタ体ヲ動カシ、ドウニカ逃レヨウトシタガ、俺ハ女ノ髪ヲグイトツカンド、女の鼻腔ニ指ヲ突ッ込ンダ。

女ハ恥辱ト恐怖デ耳ヲ赤クシ、首ヲ激シク振ツタ。冷タイハサミノ感触ガ腰ニ響イタ。ウス笑イスルヨウナソノ音が、女ノ脳髓ニコダマシタ。最後ノモノガ切り取ラレタ。

禪 人 生 一 代 記

間 和 志 締 男



マワシ（禪）の醍醐味は口では言いあらわせないものである事だんだんと判ってきました。禪の良し悪しは、頭の中で想像するより、すすんで自分の肌に着けてみる事が一番であると思います。

私は最初水泳が好きで小学校の頃は全員がフンドシでしたので、ただ何となく赤黒白紫と色とりどりのフンドシを締めて過した事を思い出します。小学校を卒業する頃は野球に熱が入り水泳とフンドシのつながりも忘れてボールの虜

になりました。中学校に行く様になって、戦争も激しくなり野球も駄目になり、私が入った中学は相撲が盛んで、ついづられて相撲部へ入ったのが禪に魅せられた始めです。最初は腰が痛くて一週間位家に帰っても自分の腰とは思えずやめようと何度思ったか知れませんが、だが、さてよ、今ここでやめると、この禪の良さを再び求める事は不可能になると考え、何とか頑張りました。

そのうち、だんだんと面白くな

り、一時は勉強もそっちのけで、熱中したりで一年がすぎました。その間、相撲部の稽古のきびしさといったら大変で、足を捻挫する者が続々と出る始末でした。体中砂でこすられ、すりむけ、赤く腫れ上って生疵のたえ間がありませんでした。立派な体を作り一人前の立派な男になれ（体裁はいいが実際は兵隊として使えるため）と再三しぼられました。入部当時は軟い雲斎木綿のマワシでしたが、半年程過ぎると硬い本式のマワシが渡されました。色は白でした。この硬いマワシが最初は腰に締まらず、股にすれて肌が赤くすりむけ、風呂に入るとヒリヒリして困りました。しかし、昔の人はうまい事を言いました。

「なれるよりなれる」

硬いマワシも次第に肌になじんで、しつくりと腰に締まるようになりしました。もう、マワシを締め、いくら暴れたって肌を痛めたりする心配はなくなりました。

学業に励むと共に、毎日の相撲の稽古にも精を出しました。中学上級生の時、大東亜戦争が勃発しました。戦争は益々拡大し、やがて私は入学徒出陣で軍隊に入隊したのでした。

代理部だより

○昭和三十八年発行の臨時増刊号「写真と絵画文献特集号」定価五〇〇円略号「文献」の残部が愈々少なくなりました。お申込みは、お早く願います。

○本誌連載小説「花と蛇」についてのお問合せがあとを絶ちませんので一括してお答えします。すでに発行しました臨時増刊号「花と蛇」特集号は、その後売切れとなり補充はつきませんし、又再版の予定はありません。続篇「花と蛇」の臨時増刊、並に「花と蛇」の単行本刊行については、今後の誌上広告を御留意下さい。

○限定版グラビア写真集「美しき縛しめ」第九集「女性刑罰拷問特集」西洋篇「革具に拘束される女」は、詳細次号誌上にて広告いたします。第十集としましては女性二人乃至三人による緊縛姿態を目下アレンジしておりますので決定次第発表したいと思えます。

○先月号でMフォトの限定版写真集についての予告をしましたところ、いち早く期待しているとの便りを頂きました。只今鋭意撮影中

先生とよばれ、

ぼくは照れます

山中冬子さんへ

夜乃探郎

ぼくに対してサロン投稿（四月号）ありがたく読ませて頂きました。ぼくは、幻の夢男で「先生」などとよばれるとまったく照れま

話しかけられたんですからドキリとした。ぼくは紙上公開主義者ですから、あなたにもムズカシイことは申しません。あなたの「牝犬通信」の範囲で。まあ、そんな意味で、ぼく流に考え知った程度であの読物は仕上りました。それにあの場合「同情もされ、鞭の傷なども親切に手当てして」などの要素は、知ったとしても、ほうり込めない。つまり、S文学と自称でき

僕のイメージ画集「切腹」

室井垂沙路画



る（小説）では無かった。（SMに相対者の「愛」は、ときによって必要なモチーフとされることなど）もし、ぼくが「本気になって怒ってしまったわりました」特にくみ子さまなどにおわびするなら「ズベ公上り」うんぬんなどの表現についてでなく、あの読物を、「小説」に仕上げなかった興味本位の作品を投稿した事についてオワビしたい。才筆ある冬子さんには、判って頂けるでしょうね。もしお許しあれば、今度こそ、あなたの「通信」を素材として「小説」化したい。その道は「心」にぞ通う「保藤久人さん」が「お便り形式で発表（四月号）」したエッセイを、ぼくはSの立場から、あまりにも貴女の、小説的な事実を、文学的表現を持って追求しようとする苦悩の場ともなりかねないのですからね。正直の所、いま、おふざけヤロウなど袋叩きにあっているぼくには、もうこれ以上、難儀な知的作業でフラフラになりたくない。それにぼくは、アナタにむけると近い関心を、つい近頃まで芳野眉美さんに抱き、こちらの方はそれをサラケ出しすぎて、迷わくをかけた過ぎた。

ですので、いずれ素晴らしいMフォト集が企画されることでしょう。○先月号の「奇クサロン」で「宮野政子様に送る私の画」を発表された春川ナミオ氏が、素晴らしいM画数葉を送ってこられました。いづれも遅ましいポリウムの豊満な美女がM男性を、その見事な臀の下に敷くという構図です。御希望の方々には印画紙に焼付けて分譲したいと思います。○雑誌並に分譲品の御注文に局留を御利用下さるのは大変結構でございますが、必ずお受取りに行かれる局名をお書き願います。往復の郵便の日数を考えて発信より十日位後に局へ受取りにおいで下さい。別に局からの通知はありません。局での留意期間は十日間です。是非その間にお受取り下さい。お受取りにならない節は、差出人に返戻になります。○新しい分譲品を毎月の誌上にて次々と広告しておりますので何卒その都度御注文下さるようお願いいたします。只今、総目録は作成しておりません故、誌上の広告にてお申込み下さるよう、お願いいたします。古い分譲品は漸次分譲打ち切りの予定をしておりますからお含みおき下さい。

へサロン・散文へ

「時」に想う

保藤久人

横文字について

誌上に、横文字乃至カナ文字（外国語）が多くなり、増加傾向を辿っているようである。その必要性は万人の認めるところだと思うし、実際に、評論的に論述しようとするのに、横文字を利用するとその論旨論点が生きてくる場合が多い。

だが、正直に言って、取っつき難いということはないだろうか。何となく煩わしく、難解ということはないだろうか。

本誌の執筆者、或は読者の皆さまは、比較的、高級な知性教養を身につけておられるようにお見受けるので、別段、エリート意識（厳密に言うところの言葉も含まれるが）を持っておられる訳でなく、苦にならぬ常識的なものと判断していらっしやるのだと思うが、浅学の私など、時に馴染みの少ない

語句に直面して、途惑うことがしばしばある。

その殆どが現代人の常識範囲で判らぬのは学不足といわれればそれまで。自分の無知を恥じねばならぬのだが、しかし私は、折にふれ、ふと思うのだ。

常識的な横文字（カナ文字）の分野は広域であり、社会の変化は忙がしく、激しい流動に伴って、新語や用語はつきつきと生誕し、余程尖端的に行動していないといつて行けなく、従って、意味や内容を十分に理解するいとまもなく目を通し口に出すことが多いのではないかと。加えて、本誌は都会人に割合親しまれているようだが、愛読者という意味でなら、地方末端に及び、横文字に馴染み難い方がたも多いのではないかと。

私は年代的に、いわゆる戦中派の末尾に位置するようだが、過去の学業では、軍部の強圧で、英語は教課から省略されていた。為に外語教育は殆ど受けておらず、今もなお、横文字は苦手である。

（そのくせ、当時の軍部は陸海軍で立場を異にし、海軍では大いに使用していた。私の軍籍は海軍なのでこのムジンを奇妙に思った

僕のイメージ画集「磔の使徒」

室井亜沙路



ものだが。現在は本業が技術屋なので、苦手とはいえ、その実、常に使用している。

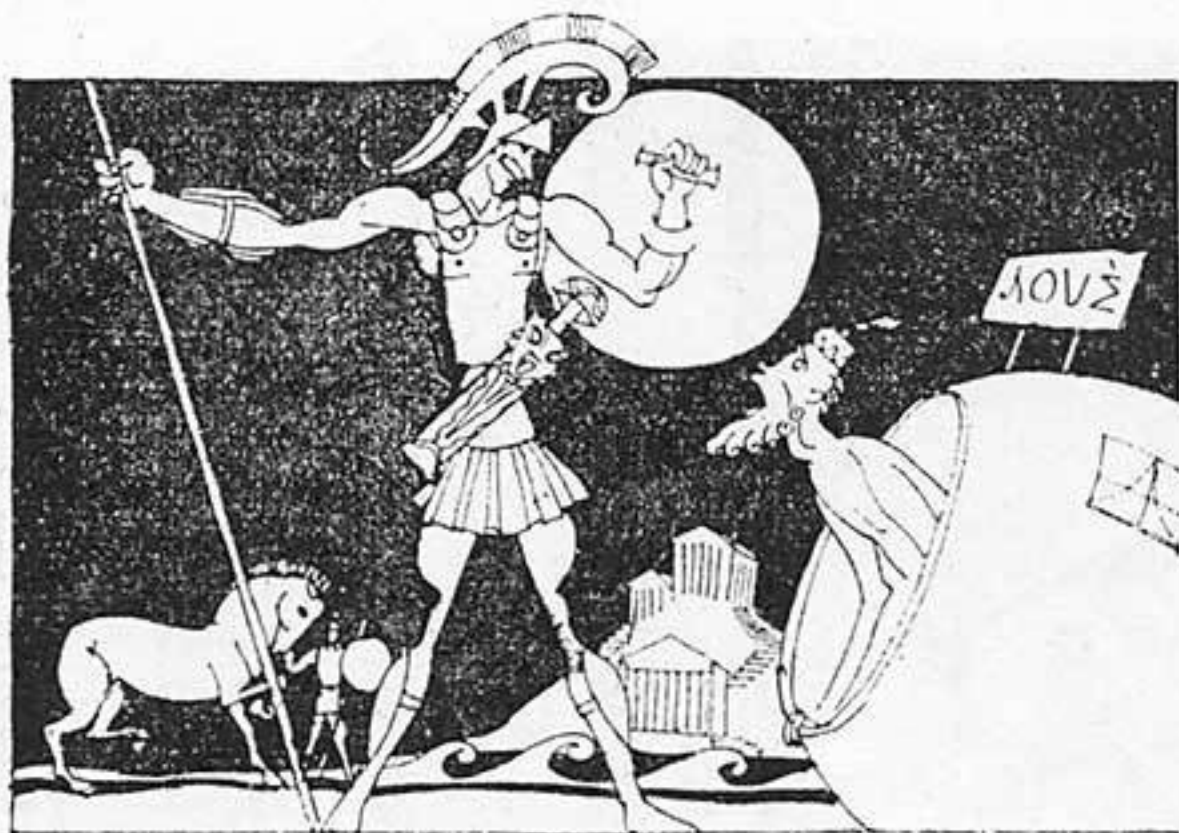
私は自分の経験から推定して、或る年代の人びとにとっては、横文字は馴染み難い存在であろうと思うのである。

本誌は新時代の雑誌であるといふ。必然的に、現代社会に即応した横文字（カナ文字）が増えるものと予想されるが、その使用云々

より以前に、誰にでも理解される方式でと望みたいのだが。

唯我独尊では困るだろう。執筆する以上、一人でも多くの人に読んで貰いたいと思われるはずで、それならばなお、馴染みの薄いと思えるものには（）内に訳語を入れて戴けるなら、喜ぶ人も多く、親しみも増すように思うのだ。

私なども時には利用する。しか



しそれは日本語で書いては語弊のある（たとえば局部名称など）場合のみにと心掛けているつもり。本誌の発展という意味で、たとえ、その内容が特異なものであるとしても、老若男女誰にでも（但し、青少年は困るが）親まれるほどの、馴染みやすい文字（文章）にすることも大切だと思ふのだが皆さまのお考えは如何なものだろうか――。

――青少年条例と非行化と――
「青少年健全育成条例」或は「青

少年保護条例」というものが、各地域毎に制定されてから今日までもう相当の歳月を経ている。

全国都道府県の半数以上が、この種の条文を明示提唱して、青少年の非行化を防止しようとしているし、条例を、持たない府県でも「協議会」のようなものを設置し青少年の保護育成に努力しているようである。

条例は果して効果があつただろうか？

また、それほど有効なものならば、何故、全国統一的に条例を制定しないのか？

確かに、半法律的なものが地域（府県）によって、有無まちまちというのは、何分、公平を欠いているような気がするのだが？

条例を持たない地域（府県）はどうして制定しないのだろうか？

このような疑問は、何かにつけて関心をもつ人すべてにあると思う。が、この程ふと、その疑点に対する解答のような一文を見出すことができた。

①条例を制定している地区（他府県）ごとに条例内容を検討してみた上で、実際面に即した場合、必ずしも効果をあげていず、逆に、青少年の非行数は、増加してい

る。

②条例ができたために、協力すべき大人の間に、条例依存（過信）の安易な気持が生じ、青少年問題から、逃避するような傾向がある。

③条文や法律的な規定は、非行化防止という問題に対してあまり意味がなく、自主規制や、実社会に即した討議的な、措置こそ望ましい。

④以上のように判断した結果、当地域では条例を制定しない。――ということである。

右に附随して、識者の声を参考にすると

◎世界中の犯罪関係の本を調べたが、本を読んだために非行に走ったという例はない。

◎最近の青少年の非行性や、対社会の反抗性といったものは、世界共通の現象である。

◎原因は社会環境によるところが多いが、精神と肉体との、成長度合のアンバランスによるといえる。

◎彼らが悪いのではなく、不安定な社会が問題の根源であろう。がしかし、非行の全責任を社会と大入がひっかぶり、彼らを甘やか

てはいけない。

◎大人は青少年の行動を規制するよりも、むしろ、よいものを積極的に与え、彼らが、あらゆるものを良き成長のための栄養とするよう、共に考えることに努力すべきだ。

◎少くとも、青少年にふさわしい社会環境を作ってやらねばならない。

◎結論的に、青少年非行問題に関しては、その解決に、特效薬はない。――以上である。

最後に、青少年に適した社会環境とは――。

現代の青少年の精神は「読む」ことによるよりも「見る」と「聞く」といった、条件反射的な、直接的なものによって形成される度合の強いことを重視し、そのためには、

『目に見えるもの、耳に聞えるもの、つまり、社会現象のすべてを美しく豊かにする』

ことが必要で、そういう社会でこそ、彼らの精神も、潤いのある健全なものになる――ということになるのだそうだが――。

「女志士孤剣乱刃に死す」

六角京之介

私は「女性切腹」「女剣劇物」「女性乱斗場面」などに興味をもっております。ここに同封しました十葉の写真は、私が一女性をモデルに使って撮影したものです。

題は「女志士孤剣乱刃に死す」というものです。適当なものがありませんれば採用の上掲載下さいましたなら幸甚です。遺憾ながら、最近では女腹切ものが奇ク誌に余り登場せず、実は内心大変に残念に思っております。全国の奇ク読者の中で小生と志を同じくする女腹切のファンは、同様の思いを齊しく胸に抱いているのではなからうかとも考えている次第です。

そういう意味合いであまり自信はありませんが、女性切腹フィクション時代物の想をこらしております。「女月形半平太」を書いてみたいというのが目下のプランです。殊にクライマックスたる大乗院の決斗、自害に及ぶカタルシスを哀艶悲壮の凄絶なものにしたいと思っております。



奇 譚 ク ラ ブ

昭和 4 1 年 5 月 号

(1966年・5月号 <第20巻第5号・通刊214号>)



本誌の信条

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。

一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。

一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。

一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビア写真と口絵は廃止いたします。

一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



「黒ミサ」に関する一考察

久我庄一

△「黒ミサ」ときいても、日本人にはピンと来ないが、それはキリスト教の「ミサ」に対して悪魔に捧げられる「ミサ」のことである。このミサによって、信者は、悪魔に魂を売る代りに地上における幸福をかなえられるという。破門された聖職者や、異端的神学者あるいはキリストに対する嫉妬の炎にもえた破戒神学生の名残りが中世紀にはこうしたミサにたずさわった。ミサのたて方は、あえて書くことのできぬほど、惨忍、淫靡、不潔なものだが、その「黒ミサ」が、このリヨンの

サンジャン・キャルチュエではひそかに行われていたのである。(僕の調べた限りでは、一九一一年にそれが確かに行われていた事実がある。今日ですらも、それがここで続けられていると、僕は信じている。〃傍点は筆者〃▽

—「神と悪魔」遠藤周作著より—

○

本誌四十年五月号のサロンに、私は「真言宗立川流」について——かいた。それについて、早速、芳野眉美さんより〃大変参考にな

りました〃◇六月号、濡れにぞ濡れしのG立川流陰陽道・とオホメの言葉を頂いたがさらに柴鍊の「人間勝負」の一節を引用しながら〃まるで黒ミサだ〃と、芳野氏は付け足していた。この「黒ミサ」という妖語を眼にしたとき、さすが芳野氏だけはあると、氏のソツのない博識振りにマイッタ。実は立川流にふれる場合、どうしても黒ミサは、対照的な意味で興味ある点があったからである。以下、両者を比較ケントウし、つづいて私なりの「黒ミサ」論を展開してみたい。

世界の三大宗教と称せられるものは、キリスト教、マホメット教、仏教であるといわれている。その内のキ・仏の二宗派を源流として二大異端教たる「真言宗立川流」と「黒ミサ」が生じたことはまことに興味のある問題ではなからうか。黒ミサは西洋に、立川流は東洋に、その温床を見つけたわけだが、ズバリ、両者はアブ的であることはたしかだが教理とオマツリごとについては、相違があるようだ。仏教は元来が人間中心の教えが根本であろうし、◇ハンニャ湯など称して酒をのむ。坊さん、娘サンにカンザシ買うなどの俗歌でも知られるように。どだい親玉のオシャカサマでさえ、われは「尊い」とは自称しても神サマだとは言っていないようだ。キリスト教は、すべては神（キリスト）が、中心である。だから当然、両宗教的秘密結社も、おおむね「立川流」は、男女相擁しての即身成仏という乱交的な性が第一であり、「黒ミサ」は、背信的行為（神ニ反抗スル、汚ス）が目であって、セックス的なものは二次的であろうと推察されるのである。それだけ濃神的な凄じい百鬼夜行図が展開されたであろうことは、うなずけるのだ。

○

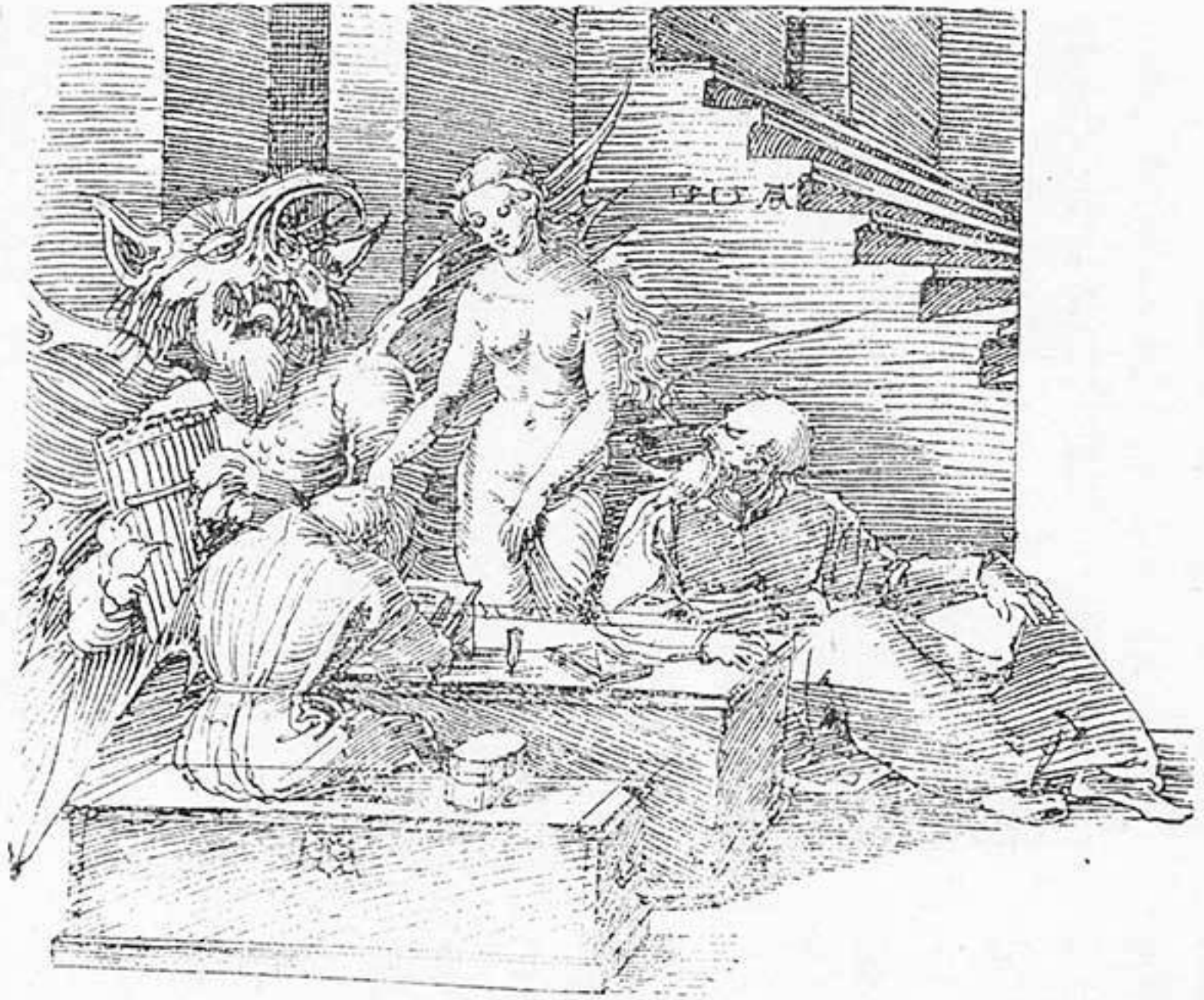
『黒ミサ』については、立川流と違って、世界の出版市場では、多数の文献資料が公刊されている。おそらくは、立川流のどう考えて見てもセックスそのものの、ナントカ四十八手裏表教とはことなる、——より思想性、神学的な玄義が高度な研究を伴って発表しやすいことにもなるのであろうか。（または、とかく口伝という日本的な旧時代オトクイの伝達方法が災いしてマジメに後世になって研究しようとする、この道の文献史家をよせつけないのか——、その点、西洋は「異端裁判」というものがあって、記録され、伝わったという利点もある。）ともかく、黒ミサに関するものとしては、世界的な書物としては、まず I. K. Huysman ^{ユイスマン} "LA-BAS," があり、◇作者註・ユイスマンについては、そのあまりにも耽美派的思想が、天下の奇書と称せられる「さかしま」という小説を生み、（これは昭和三十六年頃？ 多分桃源社より邦訳限定出版されて居り、また、新潮文庫のオスカー・ワイルドの「ドリアン・グレーの肖像」の中に、ワイルドの手によって、内容参考引用されている）悪魔主義の彼方について神の栄光をみてカトリシズムに固執した、この作者の最も恥すべき、黒ミサの白日夢的幻想が

"LA-BAS," (ラ・バ) を発表させた。カトリック作家のダニエル・ロップスの小説「模索の魂」◇作者註・遠藤周作氏の著の「神と悪魔」というエッセイによると——「一人のリヨンの大学生の精神的彷徨を語ったものであるが、そこでもやはり、この青年が、サンジヤン区のある古い家の屋根裏で黒ミサにたちあう戦慄すべき描写がある」となっている。その他、数限りないが、◇サド裁判でいちやく男前を上げた渋谷竜彦が、たしか「黒魔術の手帖」とか、桃源社から出しているのが日本としては定評があるようだ。これは、いま新刊書店で入手出来るのでは。

さて、いよいよ「黒ミサ」の実体について (SMマニヤの立場から) 探ってみよう。幸い、私の手もとに、松本淳氏が "LA-BAS," 出典、「黒ミサ異聞」としてホン訳されたものがあるので、まずこれを参考引用しながらペンを進めたい。

○

黒ミサの発生は、遠く紀元二七四年頃、ペルシャに生れたマネスの創始した宗教（すべてこの世の元は、善悪、神と悪魔の所為に帰し、前者は「光明の王」「世界の王」。後者は「物質」ととなえた。そして人間は悪魔に



世に大弾圧を加えられた。したがって

「アルビ教」ともいう。ところで、

この二つの対立しながら（神と悪魔）しかも同座してきた事実から、やがては、「黒ミサ」的な（中世紀の悪魔主義が）芽生えてきたと思われるのである。まあマネスの宗教は、聖なる神に對して、悪魔なる神を発見、發明したところに後世（十六世紀より十七世紀頃）にかけて、悪魔に祈るという「黒ミサ」がもっとも盛んな時期を迎えることになった発火点があるようだ。この式典（悪魔の神・即ち魔王礼讃の結社によるオマツリ）は、冒頭にも引用（遠藤周著作「神と悪魔」参考）したように、異端僧が式を取り行ったが、以下、設定せる頁も考え、アウトライン程度に摘出紹介したい。

すべては、ローマ法王の監視がきびしいので、人目につかぬ妙な場所、つけ物屋の倉庫の中だの、市井の隅の、廃屋の地下室など、気味のわるい雰囲気の中で演じられたが、いずれも極度のサディズム的、マゾヒズム的な傾向が横溢した筋道をふんでいることはたしかなようである。

○

柴鍊の『人間勝負』。そこから芳野氏が引用した「祭壇には——全裸にされた女が、文珠菩薩のように、唐獅子の上に据えられているのである」——は、たしかに芳野氏が言われるように立川流陰陽道というよりは、むしろ黒ミサ的な色彩が濃厚であると思われる。それは、「女の腹の上のミサ」が、十七世紀の中葉、もっとも歓迎された式典の一つでもあったと伝えられているからでもある。

セイヌ河畔の古聖所とよばれる教会では、黒ミサが、つねに女の腹の上で、おこなわれていた。

ミサがはじまると、序誦がとなえられる。すると三人の女が一糸まとわぬ姿でそれぞれ両手を修道士につかまえられ、祭壇にひかれてくる。三人の女は、そのまま、それぞれの位置で仰臥させられる。女の頭と足の下に台架がおかれ、二つの台の上に橋のように架けられる。生きているテーブルになるわけだ。その上で、司祭はパンとブドウ酒を祝別するのだが、その際に、このむせるような女テーブルの、性感帯をペッティングし、恍惚の叫びをもって、パンとブドウ酒は、キリストの肉となり血となったものとして、まず、ミサ

つくられた者であるから、これを善にみちびくにはマネスの発見した真理によらなければならぬと説いた教え）からはじまると考えられている。この宗教は九世紀頃全く絶滅したように見えたが、十二世紀のおわり頃、仏蘭西アルピ地方に再燃し、法王イノッサンス三

仕えや助祭に拝領させる。(中世紀には、裸体の女の尻が祭壇とされていた。それが、十七世紀になって腹の上のミサという新形式が創案された。)「黒ミサ」は、神にささげる聖体のパンを汚らわしい用途にむけることに目的があるので、どうしても、それらを化体させる秘法を知っている司祭でなければならなかった。(異端僧) 黒ミサの方法は、だから、手段は時に応じて異なることはあり得るし、一

定の法式はないようだ。

× × ×

遠藤周作著の「神と悪魔」によると、——
「生きた祭壇となった女は、信者一同のなすがままになっている。その皮膚は徐々にひき裂かれ、また、熱い火のしを押しあてられる。女が苦しみ叫ぶとともに、一同の奇怪な興奮は、さらに烈しくなる……」と、いう所から見て、セックス的な黒ミサの方法(腹

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

◆筆者註◆

私は柴錬の「人間勝負」はよんでいないが「女の腹の上のミサ」などの文献を念願に入れて、そこに作者独者のフィクション的な色付けをしたものが、作中に利用されているものと考えられる。

の上のミサなど) もあれば、SM的な形式ありで、「黒ミサ」とは、まさに、アブ的な、生きた大百科辞典の観を思わせるようだ。また「僕はこの「黒ミサ」を自分の時代から遠いものと隔てたくなかった。アルシュヴァイツにおけるナチの虐殺、拷問、またわれわれ日本人自身がフィリッピンや南京で犯したものの心理のうちには、黒ミサ的な肉慾がかくされているのだ。そうした一種のフェチズムは、時として現代の文字や思惟の中にもものぞかれさえするのである。デニイ・ド・ルウジユモンは、『悪魔の影響』という本の中で、現代人における、そうした黒ミサ的な逆しまの神秘主義を詳しく分析している。その頃から僕は、サド侯爵の研究を思いたったのだ。

——まさに、『黒ミサ』は、現代にも生きているのである。

「痴人の糧」

……ちじんのかて……

山本一章

△拷問

(三)

深夜の午前三時——既に雨は止んで外気は少し冷えていた。庭に出た大山は、鄭がアケミのいる建物に入っていくのを見送りながら、しばらく暗闇の中に突立っていた。

少し酔いがあったが、それよりも鄭から受取った札束が彼の心に重くのしかかっているのだった。女の苦しみを金で売る——女衞のような卑劣さを自嘲しながらも、一面征服者に徹し切れない弱さを憐んでいた。特に彼の心を疼かせたのは、セツコの貞操に対する罪の意識だった。

『レザニマル』の常連に一度は売ったそれが今日は妙に彼をこだわらせるのだった。セツコはそのことについては愚痴一つこぼさず、

恰もその屈辱を甘受しているかのように柔順だった。泣き叫び、憎悪してくれた方が、まだしも救われたのかもしれない。その底に彼女の自分への愛情らしいもののあるのを読み取ることは辛かった。

(馬鹿な女。彼女には売春婦の血が流れているんだ)

しかしその解釈が当たっていないことは、大山自身が充分知っていた。しかし彼女に愛する者のための犠牲者の諦めと勇気のあるのを認めることは耐えられないことだった。

「わたし大山さんのためなら、どんなことでもするわ。だから気にしないで。それよりも捨てちゃ嫌よ」

セツコのその言葉を思い出すことは更に彼の心を疼かせた。

(愛が人間を孤独にしている。孤独な男と孤独な女が愛情を錯覚して結びつこうとして、更に孤独になっている。)

最も人間的な性の変態は、人間の苦悩の麻薬ではないのか)

「遅いじゃないか。どうしたんだ?」

鄭がセツコを連れて建物から出て来た。

「この娘、眠いというから部屋へ連れて行くよ。直ぐに戻るから先に入っていてくれ。あの娘は君の好みで縛つといたよ」

大山は、一人アケミのいる建物の中に入った。明るい部屋の中央に、裸のアケミが入口



に背を向けて、低い化粧椅子の上で万歳していた。上に差し上げた両手首の革紐が天井の鉤に縛りつけられているのだった。脂肪ののった臀部の所々に赤茶けた鞭の跡が不規則な模様を浮び上らせて痛々しかった。そして正面に廻って見た彼女の顔は無残で少し滑稽だった。

引き出された舌の上下を、短い二本の割箸が挟んでいた。かつてセツコがヌードスタジオでリンチを受けた時の嵌口方法と同じだった。

た。そして両眼の上を通して三重の縄が彼女の顔を縛り、奇妙な色気を漂よわせている白々とした丸坊主の顔を歪めさせているのだった。

(ああ、ここにも孤独な女がいる)

無防備の裸身に近づいた大山は、その若い肌に軽く触れてみた。滑らかで温みのある量感、その中にある生命を彼の掌に弾き返えすようだった。白い腋窩が妖しい陰影を作り挑発的に見えた。彼はそっとそこに唇を当ててみた。ビ

リッと裸身に力が入った。

半吊りになった体の最も無抵抗な、そして最もセクシユアルな部分があるように思われた。乳房から腹部へ撫で降

ろした大山は、掌で臍のあたりを、押してみた。腹筋が固く緊張した。そしてやがて力が抜けると、かすかに腸の蠢きが掌に伝ってきた。そこには彼女の生活があり、神秘的な女の組織をも包んでいるのだ。大山は何故か感傷的になって、彼女の腰を両腕で抱き締め、白い肌に口づけした。

(俺は、この女を愛しているノ可哀想なアケミノ)

扉のきしむ音に大山はアケミから飛び退いた。鄭に見られたくなかった。

「セツコとかいう女、可愛い奴だな。もうベツドに潜り込んで眠っているよ。部屋には鍵を降ろしといたから大丈夫」

鄭は半吊りのままのアケミを一瞥してから大山を部屋の隅へ呼んで、小声で云った。

「君、何か理由をつけてやろうじゃないか。白状させることはないんだから、どうかな、僕の女になることを、承認させるってことは？」

「どうぞ」

「拷問って奴は、理由がある程やり甲斐があるからな。それにもし承知したら、今度は君がそれを理由に責めたらいいしね。さあ聞いてみるか」

鄭はアケミの傍に寄ると、彼女の尻をポンと叩いて言った。

「どうだ、大分こたえただろう？ もう僕の女になってくれるだろうね」

「……………」

「大山君もいって言うてるから、僕の二号にしてやる。そうだな、折角大山君もいるんだから、あんたが僕のものになるところも見えて貰っておこうね。いいだろう？」

アケミが激しく顔を横に振るのを見て、鄭はニヤリとした。

「あれあれ、厭だというんかい。駄目だね、承知しないなら、承知するまで痛い目に逢うことになるんだが、それでもいいんかい」

アケミは、じっとしていた。

「諦めるんだな。大事にしてやるからいいだろう？」

今度は彼女は顔を横に振った。

「大山君、随分と惚れられたもんだな」

鄭は三回ばかり掌で彼女の尻を打った。そして拇指と人差指で輪を作ってOKの合図をした。

「じゃ、じっくり責めてやるか。大山君、当り前のことのようにだが、人間の体程変化に富んだ縛り方のできるものはないようだね。縦

縛りがそうだろう。上には左右に張った両肩の間に首があるし、下には恰好の溝が前後にある。犬や馬じや縦縛りをしてても無意味だし猿にしたって尻尾がいらぬものだよ。その意味じゃ女の体は縦縛りされるためにあると言ってもいいね。僕は後手が好きなんだが、縦縛りの効果を上げるために、このままやってみるよ」

鄭は上気嫌で喋りながら、せっせとアケミの体に縄を掛けた。首に巻いた縄を喉の下で結んでから、二条になった縄を乳房の間から下へ降ろし、体を縦に割ってから背後に廻わし、脊椎に沿って上へ引張って首の後の輪に結んだ。そして縦縄の上から横にウエストを締めつけて強く縄を三重位巻いたので、彼女の体はいわゆる蜂の胴になり、それだけ縄が彼女の柔肌に強く食い込むことになった。彼女の自由も、羞恥心も制されてしまった。

「結び目を作るといいんだが、まあ、これで辛抱するか。後で、ゆっくり馬に乗って貰うことだしな」

両足首を交叉させて固く縛り合わすと、足下の化粧椅子を外した。ぐぐっと体が伸び、固定されている縦の縄が彼女の両肩と股間に強く埋もれることになった。爪先は床に僅か

届かなかった。苦痛のためかアケミの裸身は芋虫のように僅かに前後にしゃくり、そしてピクピクと引きつらせた。筋肉のようにぶら下った女体は全く無抵抗に揺れていた。後にのけぞった喉が時々ゴクゴクと動いた。

「どうだ、参っただろう？」

鄭は手に長い革バンドを持つと、その哀れな女体を打ち始めた。尻の肉が、打撃に躍った。パンパン、パンパン、バンドは臀部から背中へ、そしてゆっくりと廻転するままに乳房や太腿まで打ち据えた。鞭の当る度にビリビリとアケミは悶えた。しかし鄭は狂ったように打擲の手をゆるめなかった。舌を引き出されているため、彼女の唇から唾液が糸を引いてこぼれ、キラキラ光りながら胸に落ちた。

アケミの意識は朦朧としていた。体重のかかっている手首から先の感覚はなくなり、引き上げられている脇腹から腕にかけて息苦しくけだるかった。しかし鞭の強い打撃は彼女を眠らせず、ビンビンと頭の先まで苦痛を響かせるのだった。しかも、その苦痛を避けるすべは全くなかった。辛うじて体をそらせる縦縄が彼女の柔肌を強く刺戟し、腹部を突き上げるように苦痛を呼んだ。

（ああ、死んでしまふ！ 死んでしまふ！
でも、大山さんだけのわたしの体だわ。あんな
な三国人の妾になるなんて死んだ方がいい）
思考力は殆んどなかった。挟まれた舌の感
覚もなくなり、舌のつけ根がだるかった。

「大分参ったようだな。君には分るかい？」

この縄が邪魔をしているのが。女って、どんなに意志が強くても、気を失う位痛い目に逢うと洩らすもんだよ。それをこれが邪魔しているんだから辛いことだよ。尤も極端まで行けば脱糞するものだがね」

鄭は一人喋りながら、固く食い込んだ縄の下へ指を通して下へ強く引いた。

「どうだい、本当だろ。これが本当の責めっていうもんだ」

鄭の振る革バンドは、ゆっくりと間隔を置いて、ビシッ／＼ビシッ／＼と肌を打ち続けた。それが縄に当る度にアケミの体はビリビリッと疼れんした。縄に振動が伝わり、その間の柔肌を擦り、骨を響かせるからだだった。

「鄭さん、大丈夫ですか？」

大山はちよっと、その凄まじさに不安になっていた。

「大丈夫だよ。人間って、そう簡単には死なないものだよ」

タイル張りの床に降ろされ、縄を解かれて横たえられたアケミは死んだように動かなかった。そして鞭打たれた赤い痕を全身に刻んだまま、自分の排出した尿にベッタリと濡れていた。鄭は慣れた手つきで彼女の腕に注射を打ち、割箸を除かれたものの、だらしなく開いたままになっている口へウイスキーを注ぎ込んだ。アケミは逆らうこともなく、ゴクツとその液体を飲んだ。

「大丈夫、大丈夫。まあ少し、休ませてやるか。そうだな、大分汚れているから風呂へ入れてやれよ。僕が入れてやってもいいんだがまあ君に委すよ。疑われるのは厭だからな」
パンツ一枚になった大山は、ぐったりしたアケミを抱き上げて、その建物を出た。

「アケミ、大丈夫か？」

腕の中で力を抜いたままの彼女の顔が、少し肯いた。濡れているためか、彼女の肌はひんやりと冷たく、そしてこうばしいような尿の臭いが彼の体温に温められて鼻をくすぐった。彼は抱いている腕に力を入れた。

○

浴室でのアケミは目を閉じたまま赤ん坊のように大山に体を委ねていた。独りで立つこともできないらしいので、洗場に横たえて体を洗ってやった。石鹸や湯が鞭跡や縄のまだらになった跡にしみて痛いのか、彼女は時々体をこわばらせた。

抱き上げて湯に浸り温まるにつれて、彼女の全身に血の色が蘇ってきた。

「気分はどうだい？」

アケミは目を開くと微笑した。

「おなががすいたわ」

舌がまだ痺れているのか、もつれるような口調だった。

「ああそうだな。なにか食べさせてやろう」

「あのう、それにお便所へ行きたいの。ついてきてくれる？」

大山は苦笑しながら肯いた。浴槽から出たアケミは、まだふらふらして歩きにくそうだった。打たれた足の裏の痛みが残っているからだだった。大山は抱きかかえるようにして浴室の隣にある便所へ連れて行った。

少し軟かかった。その生臭い消化便の臭いも大山にはそう不快ではなかった。

「恥しいわ。お嫌いになった？」

大山は黙ったまま、後始末をしてやり、再び一緒に浴室に戻った。

「あの人の妾にされるって本当なの？」

「ああ、君が承知したらね」

「それでも構わないの？」

「……………」

「頑張るわ。死んだって、あんな男のものにはならないわ」

アケミは、ふと本当に死んでしまうのではないかと思った。昨日からの責めの激しさはさすがの彼女にとっても限界を越えていたからだった。それに多少元氣を取戻したものの彼女は心身共に疲れていた。

入浴を終えたアケミは、大山に抱かれてもとの建物に戻された。そして台の上に坐って大山が持ってきてくれた、にぎりめしを食べた。

「さあ、少しは元氣が出たかい？」

鄭が入ってきて、アケミの横に腰を降ろした。

「どうだい、もういい加減なところで決心したら。可愛がってやるよ」

「イヤ！」

棘のあるアケミの一声に、彼はニンマリと笑った。

「ほほう、威勢がいいな。餘り懲りてはないようだな。大山君、なかなか責め甲斐があるじゃないか」

アケミは鄭の手が再び体を縛り始めるのに

逆わなかった。後手に縛り合わされた手首がぐっと上へ持ち上げられ、その縄尻が首に掛けられた。ポキッと関節が鳴って彼女の手首は肩胛骨の近くまで上った。喉がしまらないように、首縄の前のところに別の縄が通され両腋に振り分けられて、背中で結び合わされた。

「穴埋めをして馬に載せてやろう」

鄭は脱脂綿を少し湿らせて丸め、彼女の両耳の孔にしっかりと押し込んだ。そしてその上から短く切った絆創膏を押しつけるように貼った。両眼の上にも大きな絆創膏が貼りつけられた。

そして口に縄を咬ますと、その縄で顔を滅茶苦茶に縛った。鼻はへしゃげ、頬は歪み、顔面が縄で埋まってしまった程だった。

「さあ、まだ埋めるところがあったな」

鄭は、横に倒したアケミの体を折り曲げ、膝が胸に密着するように縄を掛けた。

足の縄を解くと鄭は部屋隅に置いてあった刑具の木馬を引き出して来た。四つの脚の上に載った三角の胴の前後には何もなかったが、その鋭角の稜線の中央に半球の滑らかな突起がついているのが変っていた。

「これは女性用だよ」

鄭の一ことで、大山はその利用方法を覚えて、彼の執念に兜を脱いだ。木馬の両側に台が置かれ、アケミの縛られた体が馬を跨いでその台の上に立たされた。

「ゆっくり腰を降ろさしてやってくれ。そうでないと傷をするから」

大山はアケミの腰に手を掛けて、ゆっくりと下へ引いた。

アケミの両足の下から台が外された。半球の突起は完全に埋もれ、鋭角的な稜線が双丘の中に割って入った。大山は不安定な上半身を抱えていたが、体が小刻みにふるえるのを感じた。鄭は跨がった彼女の両足首を木馬の胴の方へ寄せて縛り合わせ、その縄の先にバケツをぶら下げた。

そしてその中へ別のバケツで水を注いだ。

水が八分目程入ると、その底が床にかすかに触れた。木馬を挟んだ両脚は伸び切って、彼女の下半身は無残な姿のまま自由を制されてしまった。滅茶苦茶にかけられた顔の縄の下で、彼女の口は縄を強く噛み締め、引き上げられた後手は固く握り締められていた。

鄭は木製の棒のような背当てを、アケミの背後に取りつけると、彼女の両腋を通った縄を一旦解いてそれに結びつけたので、彼女の

上体は後へ少しそり気味に、その棒に凭れなかった。

「いいオッパイだね。少し乳首が大きい感じだが」

固くなったその乳首を、鄭は軽く抓ってみた。アケミは上体をちよつと振った。汗が背中に水滴を作り、やがて筋を引いて一筋、二筋と流れた。柔らかそうな腹部の中央で、可愛らしく微笑しているような、そのくぼみに指を当てた彼は、その中をしごくように指を動かした。

「ゴマが少いね。僕はここにゴマを溜めている女を見ると、ゾーッとするんだよ。だから直ぐ取ってやるんだがね。ここを綺麗にすれば美貌になるってことを云う先生もいるが、どうかね。オキシフルで拭くといいらしいんだが」

大山には鄭のそんなお喋りが殆んど聞えていなかった。木馬に乗せられている彼女の苦痛の表情に気を奪われていたからであった。忍耐の限界は五分程でやって来た。昨日からの責めによる疲労の蓄積が、彼女の氣力を奪っていたのかもしれない。

馬の背は、骨を砕き内臓を振るような苦痛を増し、後手は腕のつけ根から痺れていた。

惨じめな騎手は、足に重いバケツをぶら下げたまま、馬上で意識を失って行った。

○

セツコが目を覚ましたのは、もう太陽が高く昇った午前十時過ぎだった。洋服のまま、毛布にくるまっている自分に、ほっとしていた。怖ろしい夢を見たのだった。しかし、その夢がどんなものだったか詳しいことは憶えてはいなかった。

（素裸のまま大きな木の枝に首を吊られていた。後手の手首と揃えた両足首だけに固く縄が食い込んでいた。体を動かしてみたが、その振動で首の縄が締るだけだった。下を見ると大山とアケミが遥か下の方で何か話していた。彼女はなぜか死んだことになっているのだった。体が死んでいるのに意識は残っているのだった）

そこから記憶が消えていた。そして次の場面が記憶に生々しかった。

（手足をそのつけ根から切り取られ、人形のようにになった胴と頭だけの体が、小さなテーブルの上に立てられていた。痛みはなかったが、苦しくて羞しかった。その体を大山が片手で抱いて、もう一方の手に持った刺身包丁で彼女の胴を首から下へシュッと切り裂いて

いった……）

そこで目が覚めたのだった。苦いような、それでいて何か甘酸っぱい慾望を刺戟するような後味だった。

ドアの鍵の音がして、鄭と百合子が入って来た。

「よく眠ってたわね。一時間程前に着いたんだけど、よく眠っていたから、そつといてあげたのよ。今日はいいお天気だわ」

「大山さんは？」

「彼は外にいるわ。アケミちゃんの傍にね。」

彼女随分疲れた顔をしてたわ。あなた交代してあげたら？」

「……………」

百合子はちらつと鄭の方を見て微笑した。

「大山君はよくもてるんだな。三対一とは羨しい限りだな」

「そんなこと言って、御主人だっていい人あるんでしょ？」

「うん、だが、皆、僕の趣味とは合わないんだ。だからここへは来てくれないからな」

「御主人のやり方、少し極端だからよ」

二人はしばらく話していたが、セツコが起き上るのを見て百合子が云った。

「お風呂が沸いているそうだから、一緒に入

らない？」

「……………」

「寝起きが悪そうね。いいわ、わたしが洗ってあげる」

百合子はセツコの手を握ると引張った。

「僕も一緒にどうかい？」

「いやよ。あなたは大山さんと一緒に入るといいわ」

鄭は大きく伸びをしながら笑った。そしてセツコが、この屋敷にしばらく残されることを考えると楽しくなった。

百合子は浴室に入ると、セツコの体を抱いて、耳もとで囁いた。

「わたしアケミちゃんも好きだけど、あんたも大好き。だから、わたしに、体を洗わせてね。それに、あんたはここに残されるのよ」
百合子の言葉にセツコは、ちよっと不安になった。

「ずーっといるの？」

「そうじゃないでしょう。大山さんって人、あれでいて、なかなかフェミニストなのよ。あんたたちのことも随分気にしてるわ。だからあんたを手放すことはないと思うわ」
「……………」

二人は一緒に浴槽に漬った。百合子は向き

合っているセツコと唇を合わせた。四つの乳房がぶつかり押し合った。セツコは両腕を百合子の首に廻わしていた。長くて激しい口づけだった。引き抜かれる程強く舌を吸われながらセツコは百合子のなま温い口腔内の粘膜に触れ、体の底から熱い血が上ってくるのを感じていた。男に対しては感じなかった強い刺激だった。熱気が二人の顔を湿らせ、合わせたままの唇に滴となって流れ落ちた。息のつまりそうな強い接吻だった。

「わたし好き？」

「ええ」

「セツちゃん、大好き！」

百合子の手が、湯の中でセツコの胸に触れた。百合子の大きな乳房は激しく息づき、セツコの掌をはじき返すようにうちふるえた。

「さあ、洗ったげる」

百合子は洗場にセツコを立たせると、念入りに洗った。タオルを使わず、指と掌で彼女の体の隅々までこするようにして洗った。セツコはされるがままに裸身を委ねていた。

「あんたは体を綺麗にしとかなんといけないのよ。でも可哀そうね。帰って来たら、うんと慰めてあげるわ。だから頑張るのよ」

「お姉さん、大好き！」

セツコが急に百合子に抱きついたので、二人は重心を失ってタイルの上に転った。

「姉さん、駄目！許して——」

セツコの声が低くなり、肌の触れ合う湿った音と、二人の切なそうな息づかいだけが残った。

○

その頃、大山は庭の十字架の下に立っていた。十字架にはアケミの体が磔つけられていた。左右上方に上げた手首が横木に結ばれ、揃えた両足首とくびれたウエスト、そして胸に掛けられた縄が、彼女の体重を十字架の上に保持していた。そして揃えて縛られた足のため見えなかったが、柱に打ち込まれて布を巻かれた太い釘が、前の時と同じように、尾てい骨に触れながら彼女の体がずり下るのを支えていた。口には縄が咬まされ、黒い布の目かくしが彼女の白い顔を横切っていた。爪先が地上から一メートル程の所にあった。空間に揺げられた、その女体は、キリストの受難にも似て凄惨であり、そして孤独であった。白い肌は鞭跡と縄の跡に汚れ、喘ぐように上下する胸の動きは嗚咽しているかのようであった。

大山は、アケミの足の甲を撫でながら、感

傷的になっていた。

(可哀想なアケミ。離しはしないよ。そしてきつと花を開かせてあげる)

木馬の上で気を失ったアケミは、直ぐ降ろされて鄭の手当を受け、そのまま眠りを許された。そして目が覚めると直ぐ十字架の上の人になったのだった。丁度十時だった。鄭は太陽の当たった、その女体を写真に撮ると、磔つけを手伝った百合子と一緒にセツコの様子を見に行ったのである。

女性切腹 (時代篇) 絵巻

四馬孝画

略号 (えま2)

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

若き女性の切腹のイメージを時代風俗に求め、その構想を縦横に發揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なリアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の姿を追求して貰いました。

- 一、落城の姫君、火中の自刃
- 二、武家の娘、覚悟の切腹
- 三、恋人に抱かれて切腹
- 四、介錯に落ちる女的首
- 五、死を賜った腰元の切腹
- 六、操を守る若妻の切腹

ここに掲載しました「えま2」「えま1」二組の切腹画は以前感光紙焼付にて分譲したものです。今回御希望の方にのみ特に印画紙に焼付けて頒布いたします。

大山は手に力を入れて彼女の足を握ると、

そこに口づけをした。そして目を上げた。柔らかい、そして赤子のような陰影が目の前にあった。彼はそこにも唇を当てた。彼女の体臭が、彼の鼻を快く刺戟した。

「好きかい？」

アケミの顔が少し頷いた。耳の綿は取り去られていたのだ。

「苦しいか？」

「……………」

女性切腹 (現代篇) 絵巻

四馬孝画

略号 (えま1)

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの口絵を発表して、斯界に独特の新風を吹き込んだ四馬孝氏が、女性切腹をテーマに制作の意欲を燃やして、うら若き現代的な女性に絶対命の境地に追い込まれて、自らの手で自らの命を断たなければならぬ場面を設定して、その哀婉に満ちた現代女性切腹の姿を彩管に托して、ここに華麗な絵巻が完成しました。

- 一、将校と女学生の切腹情死
- 二、女間諜ゆうべに切腹す
- 三、大和撫子、乙女の自刃
- 四、美女、雨中の腹立プレイ
- 五、夜会服貴婦人の切腹
- 六、女子大生の切腹自殺

「僕の嫁さんになるかい？」

彼女は大きく頷いた。いじらしかった。大山は伸びた脇腹に唇を寄せた。陽に照らされた肌は、彼の唇に暖かかった。母屋の戸が開く音がした時、彼は十字架から少し離れた。

鄭と百合子とセツコの三人が十字架の下に歩み寄った。

「この二人、仲が良過ぎるようだな」

鄭はジロツと上気した百合子とセツコの顔を見た。セツコは浴場での二人を彼に見られていたのではないかと恥しかった。

「そうですかねえ。この三人共仲が良いことは良いんですが……………」

「まあいい。それより少し痛めようかねえ」

鄭はそう云いながら十字架に近づき、アケミの脇腹を軽く叩いた。

「うんと云わしたら、本当に実行してもいいかねえ？」

「それは……………」

「三人もいるんだから、そんなに勿体ぶらなくていいだろう？ どうだい、思い切ったら——ちよっと自信はなくなったがね。いい娘だよ、君には」

大山は心の中で彼の申出を拒否していながら、返事に困っていた。

鄭はポケットから、鉛筆を取り出すと、それをアケミの片足の指の股に挟み、左右から指を握った。かつて憲兵や特高の拷問に使われた残忍な方法だった。十字架上のアケミの体がこわばり胸を少しそらして頭を振った。

「アウウウウ、アウウウウ、——」

咬んだ縄の下で洩れるうめきは、切ない苦痛を告げていた。鄭は次々と指の股を変えては指を手で握った。伸ばした腕がビリビリとふるえ、頭が烈しく動いた。

「どうだい、もう決心するか？」

「ウウウウ……」

鄭の言葉にアケミは首を横に振った。そして彼女の揃えた爪先から柱に沿って液体が流れ落ちるのを皆が見た。しかしそれは滑稽な感じを少しも与えず、凄絶な感動を呼んだためか、しばらく言葉を出す者はいなかった。

「洩らしたな。いい加減に参ったをしたらしいのに。うんと可愛がってやるんだが」

鄭は手を休めて振り返った。セツコが蒼い顔をして俯向いているのが目に入った。

「これ位にしとくか。また気を失わせると厄介だからな」

「この恰好はしんどいでしょうね。どれ位保つものかしら。」

百合子が横から声を出した。

「そうだな、三十分位なら大丈夫だろう。しかし一番こたえるのは腕だよ。暫らくは痺れて降ろせなくなるんだから」

「可哀想にね。そうだわ、少し面白い細工をしてもいいでしょう？」

百合子はそう云うと表の方に姿を消した。

彼女が戻ってくるのに二、三分もかからなかったが、その手には大きな蟊蛙が逆さにぶら下っていた。

「これ百円って高いわね。子供でもちゃっかりしてるわ」

百合子はこの家に来る時、子供がその蛙を瓶に入れて遊んでいるのを見ていて、それを出して買って来たのだった。彼女は細いナイロンの釣糸のようなものをポケットから出すと、大山にそれを四つに切らせてから、蛙の四肢に別々に巻いて縛った。そして踏み台を十字架に寄せてその上に上り、蛙の後肢の糸をアケミの首の左右から廻わして後ろで結び合わせた。蛙の肢は股裂きのように開き腹を正面向けてアケミの首に逆さにぶら下った。大きなネクタイかなにかのようだった。前肢の糸は左右の乳首の根元にきっちり巻きつけられた。気味悪い灰色の腹をむき出し

て、蛙はアケミの首の下で大の字に逆礫になった。蛙は思い出したように体をよじらせ腕き、その度にアケミの乳首が引張られて乳房を歪めた。

「なかなか粋なことをするじゃないか。蛭に臍を吸わしても面白いんだがな」

「でも、もう蛭はいないでしょう」

アケミは自分の首の下にぶら下げられたものがなにか最初判らなかった。肌に当る冷い感じで金属製のものだと思っていたが、それが動くのを体で感じて全身に鳥肌が立った。

そして、(ヒル)という言葉聞いて、胸にあるものが大きな蛙だということを咄嗟に覚り一瞬気が遠くなりそうだった。ピクピクと乳首が不規則に引張られた。しかしどうしようもなかった。拡げて半ば吊り上げられている腕のつけ根がだるくて痺れ始めていた。そして下から突き上げるようにして体重を支えている釘が、尾てい骨に強く押しつけられて頭の先までジーンとこたえる痛さだった。痛められた足の指がまだズキズキしていた。アケミは自分の体が、疲れ果てているのを苦痛の中で感じていた。(可哀想なわたし。どうして、こんな女になってしまったのかしら。そしてわたしの体は

どうなるのかしら」

自分の意志では、もうどうにもならなかった現在の境遇を、彼女は泣いてよいのか諦めるべきなのかわからなかった。許して欲しい、もう苦痛はこりごりだと云って見たところで、大山も鄭も信じてはくれないだろう。

しかも今の彼女には、それを口にする自由さえないのだった。体だけが彼等の完全な支配の下で苦悶するしかなかった。人形のように畜生のように、いや、それ以下の生きた道具としてしか彼女の存在は許されてはいない。これが愛の変形なのだろうか？ その中でさ

え、彼女は大山を愛することができののだろうか？

疲労は彼女の思考力を奪っていた。しかも彼女の痛め続けられた体は、彼女の心に不満を告げようとはしないのだった。

○

「はりつけて、わたし好きだわ。完全な束縛だし、形もいいしね」

百合子はアケミの悲惨な姿を見ながら、つぶやいた。

「じゃ君もやってやろうか？」

鄭の言葉に彼女は大きく顔を振った。

「いやよ、わたしがされるのはごめんだわ」「二人一緒というのは面白いな。裏表にしてはりつけるのさ」

鄭はセツコの顔を見た。彼女は下を向いたまま小さく顔を横に振ってイヤイヤをした。一人残されることになっているセツコが、

どんな目に会うのか。

鄭のことだから、彼の想像できないような残酷な方法で責め立てることだろう。大山は無性にセツコがいじらしかった。

「さあ、今度はあんたの番だよ！」

(つづく)

玉取姫のモデル山原清子嬢の仕置図

入墨女賊拷問刑罰集

キヤピネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円

八組全部にて 三五〇〇円

仰向け木馬責

略号(よひ)

木馬の四つの脚に両手両足を四方に縛りつけられて仰向けに固定された無防備の女賊に対して加えられる羞恥責の数々。

海老責の拷問

略号(よす)

全身が二つ折りになるまで両手首と両足首とが連結されると、流石強情我慢の女賊も骨身にしみて苦痛の呻きを洩すのだ。

全裸入墨女折檻

略号(よせ)

厳しい高手小手の上に更に股間縛りにされた女囚は竹棒で追いまくられ足蹴にされ白洲の上を転りまくるのだった。

全裸四這木馬責

略号(よも)

見事な入墨をさらけだして木馬に四這いに括りつけられた女賊の豊満な臀部に竹のささらが炸烈する凄惨なシーン。

笞打ち白洲糾問

略号(よゆ)

白洲へ荒むしろを敷いた上へ引き据えられた女賊はむきだしの入墨の背中を、竹の棒にて打ちまくられ悶え苦しむのだった。

逆さ吊りの仕置

略号(よき)

荒縄で両足首を括られて逆さに吊り上げられた女賊、首がかろうじて床についているが非情な竹が容赦なくムチを加える。

ハリツケの拷問

略号(よめ)

僅かに白布を前に当てた裸の女賊は磔架にかけられ美しい白肌をさらけだして身動きも出来ない裸身をいとおしむのだった。

大の字磔処刑

略号(よさ)

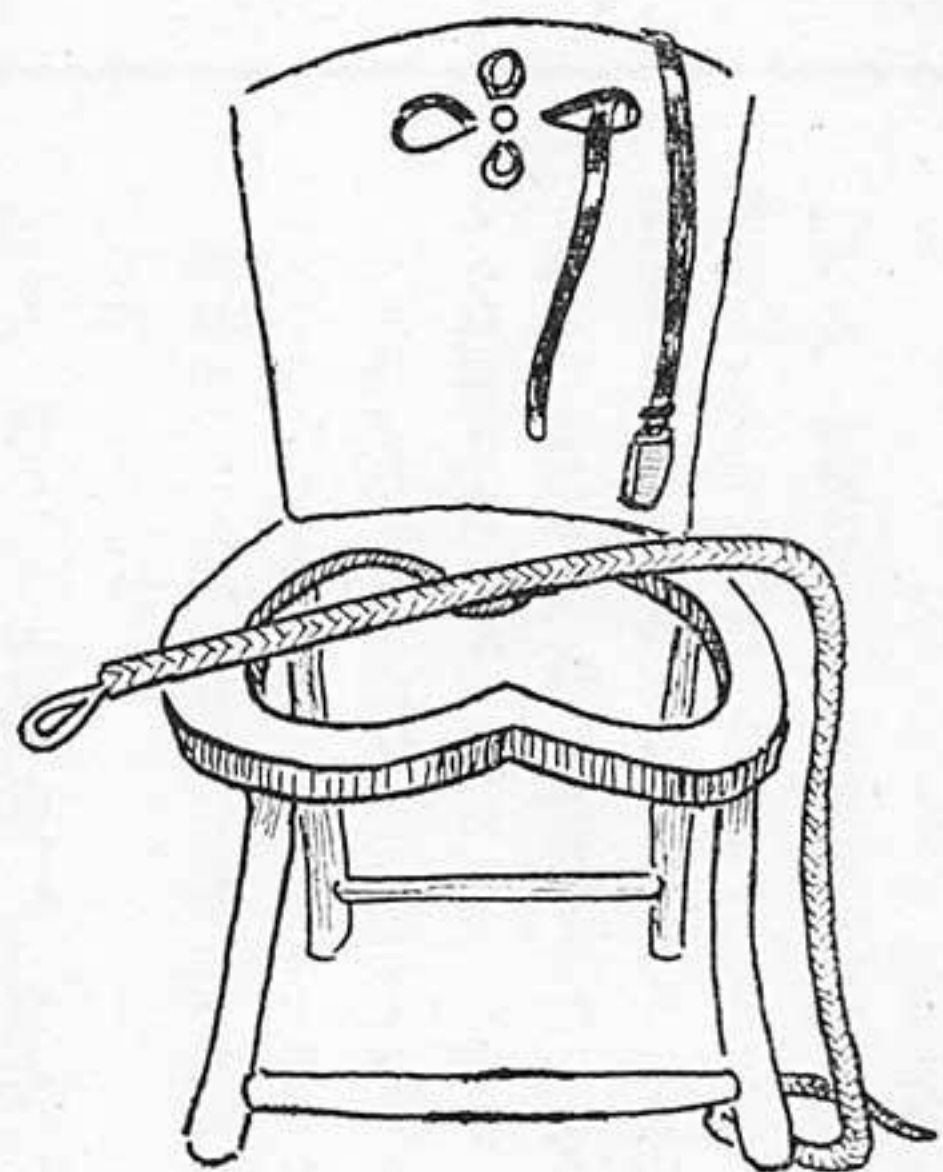
磔台に四肢を思いきりひろげた大の字に固定され、いよいよ胴斬り、足斬り、両腕斬りと一寸刻み五分試しに寸断される。

連載サディズム小説

心 傷 た む 遍 歴

△第二十章 織りなす糸 (二) V

西 条 操



イヴェット・ヴラディはローヒールの踵を静かに鳴らし監舎内労役場を巡視していた。三一〇号のルーシーが封筒張りの手を休めて額を押し拭い、切なげに喘いで溜息をつく。僅かの間なら見逃してもやるが、三十秒も油を売れば叱ってやらねばならない。靴音を聞いて再び手を動かすルーシーが、ちらと見上げていった。

「すみません。暑いものですから、つい…」詫びながら、ルーシーの視線はイヴェットの全身を素早く撫でる。胸許に覗く純白のワイシャツ、きちっと着た制服の上衣とスカ―

ト、いずれも汚れ一つなくプレスされているし、薄いナイロン靴下にはしわ一つなく、靴は磨かれて光っているのだ。うら若い女囚の眸が、堪え難い劣等感と哀しみをこめて伏せられ、厚い木綿の色褪せた不恰好な獄衣が肩のあたりで打ち震えた。

「上衣なんか着てて、暑くありません？」と、ルーシーが呟くようにいう。

「余計な心配しなくていいの。そんなことより、割当てをちゃんとやらなきゃ駄目よ。成績に響いてもいいの？」

イヴェットは女囚の横顔を見下ろしてビシ

ツといった。少し離れたあたりでキャスリヌがモニカを叱りつけている。

「何故手を休めるのッ。お前、これでも何度目？」

こんな仕事が生に合う筈もないモニカは口惜しげに唸り、両腕を空に振り下ろして顔を歪めた。

「何よ。ちょっとばかり息抜きしたからって何なのさ。そんなにガミガミいわないでよ」

キャスリヌの化粧は、いつもそうだが今日は特に派手だ。その紅い唇を見て、モニカは頭に來たのだろう、獄衣の裾をつまみ上げ

て風を入れながら口答えした。

「あら、何だって！」

荒々しく引き出されたモニカの利き腕が忽ちねじ上げられ、そしてそのしなやかな体が床に折られて押しつけられた。

「い、いたい、放してよ。痛いったら」

「生意気なこというからよ。お立ちッ」

床に折った膝腰を延ばしたモニカは、ふてくされて立ち上がった。

「撲るんだろ？ そのシャッポを留め直しといた方がいいわ」

モニカは憎まれ口を叩きながら、それでも両腕を背に回して握った。キャスリーヌの往復ビンタが激しく鳴り、女囚はよろけながら低く唸る。他の女囚達は素知らぬ顔で手を休めない。うっかり眺めたりすれば、わが身もあぁなってしまうのだ。

「分った？ 今度怠けると承知しないよッ」

「……はい。でもさ、割当てさえちゃんとやればいいんじゃないかって？」

「何だって！」

眉吊り上げたキャスリーヌの一撃を頬に喰って、モニカはよろめいた。眼から火が出たことだろう。若い癖にすれっからしのモニカは能率を上げれば上げる程割当てがふえるの

が労役の常だということを知っているのだ。

「いくら数だけこなしたって駄目よ。お前はオシヤカが多いんだから。数は足りないし不良品ばかりと来ちゃ、二週間ばかり減食ね」

キャスリーヌはモニカの泣き所を突いた。

大体の相場として、モニカの言動は、立派な『抗弁反則』だ。大抵なら有無をいわず正規の懲罰にかけるところだが、この最年少の札つき娘に仏心を出したジョアンヌ女史の意向によって、当分は大目に見ることになっているのだ。

『減食』で脅かされたモニカは、忽ち哀願の色を浮べた。

「飢い思いするのが嫌なら、一生懸命にやったらどう？ さ、仕事を続けてッ」

頬を撫でながら席に戻ったモニカの背に革ロープの一撃がバシッと鳴り、不意をつかれた女囚は悲鳴と共に飛び上がった。汗を滲ませた背に吸い着いた革ロープは一しお痛かったろう。革ロープを本来の目的以外に使用したことの無いイヴェットは、思わず眉をひそめたが、同僚のすることを女囚達の前でかれこれいうことは出来ない。

（可哀想ねえ。暑いし、見てるだけでもしんき臭くて堪らない仕事だもの）

単調な労役の手を切々と休めない女囚達の姿を眺めつつ、イヴェットは窓辺に寄った。

ルーシーにいわれるまでもなく、キッチリ着込んだ制服は暑い。憫れみをこめて見やる視線を女囚達から離れた彼女は、切ない思いで隣の四監舎を眺めるのだった。八月初めの陽を浴びたその灰色の建物、二階の労役場で苦役に服する女囚の群が窓越しに見える。四監の労役は荷札造りらしい。荷札の一枚一枚に細い針金を通してつけるその仕事も、朝から晩までみっちりやらされれば堪まらないだろう。果てしなく続く単調な、まるで拷問のような労役。うつ向いた顔を挙げることもなく物憂げに手を動かし続ける女囚の群の中に、イヴェットは求める人の姿を探った。

（あの中にいらっしやるのね。何とおいたわしい……）

遠くから眺める女囚達の顔は、いずれも寒れて同じように見えた。

「暑いわね、イヴェット。何を一生懸命見てるの？」

近寄ったマジョーリが小声で話しかけ、ネクタイをゆるめて髪を掻き上げた。

「向うの窓の方が少しは風が入るわ」

「ええ」

イヴェットはなおも瞳をこらす。

「えらく四監が気になるのね」

マジヨリーはそういつて片眼をつぶった。

あわてたイヴェットは窓から離れかけ、それをマジヨリーが押し止める。

「しばらく外の景色でも眺めた方がいいわ。

見なけりゃいいんだもの、ホホホ。暑いものね」

少しは女囚達に息抜きさせてやろうというのだ。イヴェットは監視席のジャンヌを気にしながら、再び窓に向いてネクタイをゆるめた。

「ねえ、イヴェット。仮釈放の基準がきびしくなりそうよ」

マジヨリーが溜息まじりに呟く。

「それに、仮釈放中は下着にマークをつけさせることになりそう。残酷なことをするもんだわ。まだ決まった訳じゃないけど」

「まあ！」

イヴェットは諦めて四監から眼を離した。

「あら、珍しい物をお持ちなのね」

イヴェットはマジヨリーの手の扇を見ていた。先刻から、微風と共に芳香を漂わせていた小さな扇子だ。

「これ？これね、面白いのよ、見る？」

イヴェットにも風を送っていた手を止めて

マジヨリーは開いた扇を示した。一目見るなり、イヴェットは頬を染める。表にはみみずのような異国の文字が書いてあるが、裏には男女のあられもない絵が極彩色で露骨に描かれてあった。

「フフフ、どうお？ これね、踊り子だった娘がくれたの。名の通ったバレエ団のバレリーナだったけど、男のために身を誤まってしまつて……」

マジヨリーは眼を半ば閉じ、夏空の遠くを見やった。

「私がここに勤めてすぐだったわ。四年と少し居たかしら。可哀想に、ちゃんとしたバレエ団にはもう入れないって泣いてたわ。でもやはり今でもあちこち回って踊ってるらしいの。この扇、去年東洋から遥々送って来てくれたのよ。手紙に書いて来てたわ、まだ再婚しないのかって。こんな絵を見せてその気にさせようというのかもね、ホホホ」

イヴェットは贈り主の心根を思つて扇を打ち眺めたのだった。

「こんな絵を皆に見せたら大ごとね。暴動が起っちゃうわ。黙つててね、イヴェット。こんなの持ち込んでるのが見付かったら減俸だ

わ。私には未だ小さい子供が二人いるのよ。遺族恩給だけじゃやって行けないもの」

マジヨリーは首をすくめて見せた。

「暑いわね、イヴェット。でも私、この扇子であおぐと、とても涼しいの？」

「ほんとに、そうでしょうとも！」

心からそういつたイヴェットは、ネクタイを締め直した。

「そうそう、その忌々しいネクタイだけど、来年からはお払い箱だって。知らないの？ 制服が新デザインになるのよ」

「あら、ほんと？ 助かるわ」

イヴェットが喜んだ時、キャスリーヌのどげとげしい声が響いた。労役中の交話を摘発されて嵌口具をかけられている女囚が、切なさには堪えかねて締革具のあたりをいじったのだ。

「何をしようっていうの？ 逃走予備に取るわよッ」

キャスリーヌのいうことは例によって大袈裟だ。監房の錠をいじったりしたのではないし、手錠を抜こうなどとした訳でもないのだから、少しは大目に見てやってもいいのに。キャスリーヌは革バンドに手をかけて荒々しくゆすぶり、女囚はされるままになりながら

小鼻をひろげて咽喉で喰る。

「中途半端な締め方だから、いじりたくなるのよ。さ、これで諦めがついただろう」

キャスリーヌは締革具を思い切りきつく締め直し、女囚の髪ネットを小突いた。しばたいた眼を指先で押えた女囚は、頭を振って手を動かし初める。蒸暑い労役場の固い椅子に立つことも許されず、びっしりと口を掩われてのしんきくさい仕事は、さぞ苦しいことだろう。

「可哀想。キャスリーヌって、ずい分きついのね」

イヴェットは呟いて吐息をついた。

「そうねえ」

マジョーリが答えてネクタイを直す。その女囚に嵌口具をかけたのは彼女だ。

「でも、ご本人はそんなでもないんじゃないかって。あの女囚は少し変ってるもの。ちょいちょいいるけど、ほら、マゾヒズムとかいったかしら、苛められて、嬉しがるとちらしいわ」

頬に革具をめり込ませ、時々胸のあたりを苦しげに押えるその女囚は三十才位、秘密クラブの会員相手に特殊売春をやっていた金髪女。脅喝の共犯で二年半の女囚だ。捕縄をか

けられても、窄衣で締め上げられても、初めの三十分位はうっとりとしているし、革鞭も最初の二、三発は恍惚として受けるのだから始末が悪い。もし、相手が保安課の男性職員なんかだと、涎れを垂らさんばかりだ。刑や懲罰を執行して嬉しがられた日には間尺に合わないから、この類いの女囚は、まかり間違っても男性が取り扱うことのないようにされている。

「どう？ 三二三号。もう落着いた？」

マジョーリが静かに近寄って女囚の一人に声をかけた。これも嵌口具を施されている三二三号は茶色の髪の色白な女、年の頃は四十も半ば過ぎの小柄な女囚。内縁の夫殺しの罪で十五年、ここへ来てもう八年になる。上告を取下げて服役に就いた癖に、無実を主張して再審を請願し続けているのだ。そうかといって服役態度は至って模範的で神妙、こういつたのが当局側にとっては最も扱い難くて神経を苛立たせる。なにしろ、時々ジャーナリズムの口の端にのぼるし、弁護士やなんかの面会も繁いし、平生が立派だから、頭から押えつけ痛めつける訳にもいかない。そうかといって仮釈放にすることも出来ないのだ。仮釈放の条件の第一に、受刑者が心から罪を

改悔することを挙げているのだから。

職員達の中でも、この三二三号の無実を肯定する向きが少からずある。勿論、それを口にすることは服務規程上できないのだが、マジョーリもその一人だ。

「私達を困らせないでね」

マジョーリが三二三号の肩にやさしく手をかけていう。平生は滅法模範的な三二三号なのだが、弁護士等と会うと、これまた滅法界に気を昂ぶらせてしまい、真犯人は見付かったのか、再審はどうなっているのか、わざと真犯人を隠しているのだろう、故意に再審を遅らせているのだろうと、まるで別人のように興奮して騒ぎ立てるのだ。この二、三年はそれが特にひどくなり、止むを得ず懲戒房に入れることが多い。五日前に弁護士と会ったのだが、例によって手に負えなくなったので暗房の憂き目に逢わせ、昨日から再び労役に就かせた途端、労役の手は休めずに喚き泣くので嵌口の処置を施してあるのだ。

「ここでいくら騒いでも無駄なのよ。ようく分ってるでしょう。もう、いつものお前に帰るわね？ 約束するなら、明日からかけないようにしてあげる。いい？」

三二三号はマジョーリを振り仰いでうなず

いた。裏れて色白な頬に涙が伝わっていた。

夕食の直後、三一二号がベルディヌに連行されて帰監して来た。保安課の女丈夫も一人付き添って、証言するために今朝裁判所へ連れ出された女囚だ。服役中の囚人といえども、警察や検事局や裁判所と縁切れという訳にはいかない。余罪取調べのために係官が出向いて来ることもあれば、連れ出されて調べを受けることもある。証人として喚問されることもあるし、別件で起訴されれば拘置所へ移監だ。

三一二号は二十三才のうら若い小柄なブルネット、勤めていた銀行の金を多額に横領して四年半の女囚。貢いで入れた男に別の愛人がいて、三人とも起訴されて裁判の末、男は一年、恋仇きの女は、九カ月の宣告だった。上告を却下された三一二号は去年の春から服役させられたが、他の二人は上告を受理されたのだった。何しろ男の家庭は厳格だが資産はある。

帰監して来た三一二号は素裸の手錠付き、頬は、はれ上って両手首も痛めつけられていた。裸なのは当然で、囚衣は監舎にあるし、外出に際して着せて貰った私服は本館で取り上げられてしまっているのだ。引きむしるよ

うに手錠を外したベルディヌが、三一二号の背を憎々しげに小突き、女囚達の入房を広間に立って確認していたマジョーリに押し飛ばした。

「頼んだわよ。もう少し早けりゃよかったねマジョーリ」

「ほんと。さ、おいで」

三一二号はヤケ気味の態度で囚衣を身につけ初め、そんな女囚をマジョーリがじっと見やった。

「また、こんな物を着せられるの？ どうして私だけがこんな目に逢わされるの？ あの女だって同じなのよ。それなのに、新しいドレスを着て、涼しい顔で笑ってたわ。くやしッ……」

三一二号は囚衣を掴んで揉み、無念の形相で歯がみする。入れ揚げた男を寝取った女、その恋仇きの眼前に浅間しい姿を晒した気持はよく分る。証人席で喚いた内容も想像がつくというものだ。

「罪人の癖に牢にも入れられてないで、化粧もしてるのよッ。それなのにこの私は……。どうなってもいいわ。こんな物着るのは、もう金輪際いやよッ」

三一二号はヒステリックに叫び、房内衣を

床に投げつけ、顔を掩って肩ふるわせた。頬や手首が痛められているのも法延での態度をベルディヌに責められた結果に違いない。「そんなステバチなことを、いうもんじゃないわ」

マジョーリは、女囚を見詰めて静かにいった。

「早く着なさい」

女囚は囚衣を拾い上げて吸り上げる。

「だって、不公平だわ。同じ罪人なのに」

「そう。じゃ、お前は自分が罪人だということとは分ってるのね。でも、他の二人が罪人かどうかは未だ決ってないのよ。そのために裁判してるの」

「そ、そんなこと……」

「お黙りッ。罪や刑は、公正な裁判が決めることよ。それがもう決ってるお前は、自分の罪の償いだけを考えてりゃいいの。馬鹿ね」マジョーリはビシリときめつけ、女囚は一瞬恨めしげだったが、のろのろと囚衣をかぶって鼻を吸った。

「夕食は未だなのね？」

気分を転換するためだろう、マジョーリは分り切ったことを訊ねる。

「あら、ツール・ダルジャンの鴨料理でも食

「来て来たとお思いなの？」

眉ひそめたマジョーリは、女囚の尻をパシッと平手打ちした。

「どうして、そんなフテくされたことをいうの？」

マジョーリだからその位ですむが、大抵な悲鳴がほとばしるところだ。

「だって……。考えれば考えるほど口惜しくて胸が煮えるわ。あの裁判の調子だと、二人は執行猶予になっちまう。ちくしょう」

「まだ、そんなこといつてるのっ」

眉上げたマジョーリは女囚の頬にビンタを飛ばした。この類いの女囚をマジョーリは特に憎む。三一二号は撲られてひるんだ。自分の言動が重い懲罰に値するということは知っているのだ。でも、マジョーリならそんなことにはならないだろうと甘えているのだ。腹立ちを抑えたマジョーリは、手違いで残してなかった夕食を都合してやるつもりらしく女囚を立てたまま自ら炊事場へ去った。

「ほんとに気高い天使ね、マジョーリは」

マリーが見送って肩をすくめ、イヴェットは近寄ってたしなめてやる。

「お前、何故もっと素直になれないの？ 駄目よ、そんなんじゃ」

しかし、若い女囚は黙りこくって床を見詰めていた。そして、マジョーリが自ら算段して運んで来てやった夕食を与えられても、ふくれ面でムツツリしていたが、

「さ、手をお出し」

といわれてビクリとふるえた。

「あら、お菓つけたげるのよ。手首がひどくなってるじゃないの」

すり剥けた両手首を手当てして呉れるマジョーリを仰いで三一二号は涙声を洩らした。

「すみません」

「ね、お前の気持、分らないでもないけど、そんな考え方は間違ってるわ。分ったかしら？」

「はい」

女囚はホロリと涙をこぼした。

パリ警視庁捜査課の婦人警官シュザンヌ・シャラは、かなり遅れて出勤した。途中の地下鉄のラッシュの中で痴漢を取押え、所轄署に引渡して来たのだ。

「もう一仕事しましたんだからさあ、今日は適当におやりよ。暑いものねえ」

と、レイモンド婦警が片眼をつぶり、忙しそうに出て行った。

「何、笑ってるんだい？ シュザンヌ」

と、扇風機の前で油を売るサンシール刑事が訊ねる。

「おかしくて、思い出し笑いしてるの。手錠かけてやった時のその五十男の顔ったら」

「そうかい。でも、あまりメンを売らない方がいいぜ」

「だって、ほおっとけないわ。でも、妙なもののね、若い娘の心理って。その娘さんたらねえ、キャアキャアいった癖に私が男を押えちゃうと、却って、ふくれ面して私を睨むのよ。あの、アルベールはどこ？」

「優秀な彼がもういるものか。彼は難事件と取組み、俺は年がら年中人足仕事さ。でも君も自分に正直になって来たよなあ。彼のことを大声で訊ねるようになったんだから」

サンシールは笑い、シュザンヌは横を向いた。

セシリア婦警が四十女を引張って戻って来た。セシリアはシュザンヌより一年先輩だが年は一つ下だ。

「お金は払うっていつてるだろ。安物の指環一つ位で、何もこんな大袈裟にしないでいいじゃないの。いつまで嵌めとくの？ いい加減にはずしておくれよ」

四十女は両手をガチャつかせ、デスクの前に立ってあたりを見回わした。一見、中流の主婦らしいみなりだが、口の利き方は服装に似合わない。

「ミシェル・ヴァレリーでの、本名ね？」

「アッタリマエよ。どうして？」

「女優みたいな名だからね。さ、白状おし、どこに隠したの？」

女はラファイエット百貨店の貴金属売場で指環の万引き現場を押えられ、通り合わせたセシリア婦警に取調べられたのだ。ブラジャーから発見されたのは指環一個だけだが、前後の事情から考えて、売場から消えている数点もこの女の仕業に違いない。

「セシリアったら、何でもかんでも、すぐここへ引張って来ちゃうのね。所轄署で始末つけりゃいいのにさ。あの女は一本立ちのコン泥ね、叩いたってそれきりの話だわ」

いつのまにか帰って来て一息入っていたレイモンドがそういった。

「もう一ぺんストリップやらせたら？ 先刻のラファイエットの保安係室でのヌードは生ぬるかったものね。五十フランの指環一個で起訴できる？ あたしゃ、払うといってるのよ、お金だってあるわ」

セシリア婦警は困惑し、女はガラリと態度を変えた。

「ね、お願い。お金は払うから、見逃して頂戴。ほんとに出来心なの。そうじゃなかったら、もっと高いのを盗るわ。ね、お願い」

付添って来た百貨店の保安係も

「まあ、手前の方はお代金さえ頂戴すれば、事を荒立てることはありませんよ。私の方の記録にはこのご婦人はありませんし。紛失した物は仕方ないですな、あれだけ調べたんですからね」

と、口を添える。

「あんた、マエはないの？」

「マエって何ですの？」

「前科のことよ」

「そんなものごさいませんわ」

暑いせいか、セシリア婦警もモタモタしている。先刻の態度を見ても、豚箱の二回や三回がないことがあるものか。ここへショッ引いて来た以上は、有無をいわず念入りに身体検査をし、指紋を調べ、なんなら自称住所を所轄署に当らせる位のことはやらなきゃ。

(テキパキやりゃいいのにねえ)

とシュザンヌが齒痒く思った時、レイモンドがやおら席を立ててセシリアのデスクに近

寄った。そして、いきなり女のハンドバッグをデスクから取り上げ、中の物をあけこぼし底を内外から調べ、忽ち、ニコリと齒を見せる。女の顔色が変わり、レイモンドは眼を細めながら握み出した。真珠のネックレス二条ダイヤの指環一個……。その大型ハンドバッグは巧妙な二重底になっていたのだ。

「手前の店のマークがあったもので、つい」
ラファイエットの男が感嘆して首を振りながらも負け惜しみを吹き、セシリアは眼を丸くし、女は観念してフテくされた。

「どう？ ずい分とこみ入った出来心ね」
レイモンドは煙草をくわえ、盗品を女につきつけて咽喉で笑った。セシリアが火をつけてやる。

「ありがとう、レイモンド。助かったわ」
「しっかりしてよ」

泥棒女は口惜しげにレイモンドを睨んだ。
「ほんとにしっかりおしよ、新米さん。あーあ、折角うまく行っと思ったってたのにねえ。このアナポリス娘の奴、嬉しそうにワッパかけやがって。この腕輪さえ両手にかけられてなきゃ、あんたなんか突き飛ばして逃げたのよ。ちくしょう。今度は、もっといい手を考えるわ」

サンシール刑事がメモを手にも、ニヤニヤしてやって来た。

「それがいいよ。考えるひまは、うんとこさあるからな。え、おい、デルフィーン」

女はギクリとしたが虚勢を張って

「あら、あんたハンサムね。でも、いい男。

どこでお逢いたかしら？」

「残念だがお初めてさ。しかし、こっちは犯罪者カードってものがあってね。ラヴレターを差し上げるには不自由しないのさ。えーと、このご婦人はデルフィーン・ドヌーブとおっしゃって、ブルジェ生まれ、一九〇二年。法律上では独身。詐欺で二年、窃盗で二年六ヶ月の前科二犯。逮捕歴は五回。身長一六八センチ、体重は……」

「もういいってば。あーあ、ほんとに嫌になっちゃう。また、お飾りつけて暮すのね」

女は忌々しげに手錠をいじってガチャつかせた。

「犯罪者カードなんて、犬に喰われるといいんだわ」

「お気の毒だったなあ。今度は二重パンティでも考えるんだな」

サンシールはいうことが下品だから、シュザンヌには好感を持ってない。

「ゆっくり思案できるように、いいお室を取ってあるぜ」

セシリア婦人刑事が、手荒く手錠をはずした。

「痛いっ。近頃の若い娘は乱暴で困るわ。女らしきなんてありやしないんだから。そんなにあわてて引きはがさないでもいいじゃないか。あんたの商売道具なんだから返すわよ。もっと大切にしてくれ、むやみに使うんじゃないよ。ほんと、忌々しいったら。こんな娘っ子にパクられるなんて、ツーロンの亭主に顔向け出来やしない」

留置場係りの婦警が腕を扼して引立てた。

「ほう。旦那はツーロンにいるのかい」

「そうさ。手紙があったろ？ 大切に納つていとくれ。なくしたら承知しないわよ。あんた、そんなに引張らないでよ」

「じゃ、お前もそこへ行けるぜ。いいじゃないか、夫婦そろってツーロン暮しも」

「切ないことを云っておくれでないよ。手、放しておくれ。そんな制服が触わっていると暑苦しくて堪まらないわ」

「お黙りっ。さっさと来るのよっ」

「うっ。い、いたいっ。腕が折れたらどうしてくれるの？ 警視庁の豚箱ともなれば、扇

風機ぐらいはあるんだろうねえ」

女は云いたいことを云って、曳かれて行った。

「あんな憎まれ口を叩いて！ ずい分スレかしなのねえ」

「そうよ、シュザンヌ。みなりと顔だけで判断しちゃいけないってこと。あの女だって、あんなこと云ってられるのも今のうちだけだと云うことを知ってるわ。さあて行くかな。病院で涼んで来るわ。あ、セシリア。貴金属宝石の盗難届けを、整理しといった方がいいわね」

レイモンドは、精神鑑定の要ある婦人被疑者を病院へ連行する仕事があるのだ。先刻の万引女の引き当りの仕事は、此の暑いのにセシリアが担当させられるに違いない。所轄署に引き継がせればいいものを、ここへ引張って来たりするからだ。

コンピエーヌ刑務所では今日は日曜日。

礼拝堂の床に整列した女囚群の後ろに立って、イヴェットは群の中の一人の背を見詰めて居た。両手を背に、うなだれて地下道を歩む群の中に、とうとう目指す姿を見出だした彼女だった。刑務所の礼拝堂には椅子もベン

チもない。女囚達は床に跪まずき、両手を胸に組んで祈りを捧げ、説教に聴き入るのだ。身じろぎもしないミシュリーヌの背に見入って、其のいたわしさに涙をこらえるイヴェットだった。勿論、ミシュリーヌはイヴェットに気付いて居ない。

(そのうちに、きっと何とかしてお慰さめして差し上げますわ。辛抱なすって下さいね) イヴェットは、溢れる涙をこらえるのに精一杯だった。

午後、ミシュリーヌは与えられた紙に鉛筆を握った。吹き出す汗と共に涙を手の甲で拭いつつミシュリーヌは謝罪と感謝の言葉をジャン・ラグランジュ氏に対して書き綴った。「……私のことは、お忘れになって下さいまし。そして、リュシェンヌ奥様とお睦まじくお暮らしになって。唯、年に何回か、僅かばかりのお金を送って来る女があるかも知れません。どうぞ、お受け取りになって下さいまし……」

記しつつ、ミシュリーヌは嗚咽した。やさしくいたわってくれたジャン。彼が初めての宵、薄物の上から愛撫してくれながら云った言葉を思い出す。

——おお、ミシュリーヌ。どこから来たの

? どこに居たの? もう、離さないよ——

ミシュリーヌは溢れる涙を紙片に落し、胸締めつけられる想いにむせんだ。そう、其の言葉。それと同じ囁やきをずっと以前にも聞いたことがある。

(そうだわシャルルもそう云ってくれたわ) 心から愛してくれる男とは添い遂げられないさだめなのか。胸一杯にこみ上げる悲しさ、ミシュリーヌは顔を掩うた。

「泣いてちゃ駄目よ。時間がなくなるわ」

ロゼット婦人看守が若々しい声で注意し、ミシュリーヌは氣を取直して鉛筆を握った。もう一通書かねばならないのだ。

(そんなことは先ずないとは思うけど、私がここに居る間に、ジュエールがジュヌビエールを探し出したら大変だわ)

ミシュリーヌはロゼットに哀願した。

「あの、お願いします。紙をもう一枚下さいまし」

「あら、駄目よ。一回一通が規則なのよ。次の日曜まで待ちなさい」

しかし、ミシュリーヌは必死に哀訴した。

ジュヌビエールのことを想うと、一日でも早くジュエールと縁切れにしておきたかったのだ。

「もうこれで、どこへも手紙は出しません。ですから……」

ロゼットは溜息を吐きそつと紙を与えた。二通書いた所で、どちらか一通は来週回わしの発送なのだ。しかし、そんなことを云えば此の女囚が落胆するだけだ。

(先に書いたのを今週送ってやればいいわ) そう考えて、ロゼットは黙ったままミシュリーヌの金髪を見下ろしたのだった。

監房に戻ったミシュリーヌは、胸が軽かった。最初にして最後の手紙を二通とも書き終えて、娑婆に気懸りなことは一応なくなったのだ。これからは、唯ひたすらに刑に服して罪の償いをするだけだ。

「ああ、暑い。堪まらないわ」

ミシュリーヌの前の四二〇号が喘いで、赤毛を掻きむしった。監房の窓はピッタリ閉じられ、そよとの風もない房内はうだる様だ。

「毎年、夏になると、こんなに暑い夏は初めてだと思わ。冬には冬で、こんな冬は、と思うしさ。ああ、涼しいところで昼寝したいなあ、ちくしょう」

赤毛は囚衣の裾を摘んでバタバタさせた。寒さに震え、暑さに喘ぐのも刑のうち、ミシュリーヌは獄衣の袖で顔を拭う。汗を拭く一

枚のハンカチすらない身なのだ。厚い木綿の囚衣は、先刻着替えたばかりなのに、もう汗で濡れ、咽喉が乾いて水が欲しい。しかし、ミシュリーヌの汗は未だ少い方だ。前方の四二五号の背は水を浴びた様に濡れて居る。囚衣の洗濯の時、危険を冒して盗み飲みした水のせいだ。

「ああ、もう、こんな服なんか、脱いじゃいたいわ。裸かになったら、どんなにいい気持ちかしら」

と、ミシュリーヌの後ろのブルネットが喘ぐ。裸かになるなどはおろか、袖をまくって、も反則、裾をからげても違反、暑苦しくても忌々しい此の囚衣は常にキチンと着て居なければならぬ規則だ。脱いだりしたら、縛り上げられて袋毛布に突込まれてしまう。

「あんたは火をつけたんだろ！ 暑い目に逢って当り前さ」

ブルネットの四三八号が四二〇号の赤毛に云う。

「私なんか暑くて苦しむのはおかしいわ。ふう、気が狂いそうなこと。私が寒くて辛らうと云うんなら話しが分るけど。くそ、看守の室にはクーラーがあるのね」

齒がみする四三八号はキャバレーの女給、

男を張り合った挙句、競争相手の女を冬の海に突き落とし、殺人未遂で七年の刊。殺し損ったことを今でも残念がって、出獄したら改めて殺してやると云って居る女だ。

「お前達、何故黙って、反省してられないのっ。暑いのは皆だよ」

突然現われて呶鳴ったのはイザベル婦人看守。今の今まで冷房の中に居たのだから、其の顔は涼しげに汗一つなく、化粧崩れもない爽やかさだ。女囚達は鉄格子の中から無念げに仰ぐ。イザベル看守は、意地悪さでは四監でも指折りの女性、一旦詰所へ引返して、すぐ又やって来た。

「先刻、礼拝堂で交話したろ？ 神様の前でのことだから赦してやるつもりだったけど、性懲りもなく、繰返すなんて、もう赦さないよっ」

六名の女囚はシュンとして首を垂れた。礼拝堂で私語したのは四四五号と四二三号、そして四三八号の三名。帰監するやビンタの雨を喰って、ヒィヒィ云わされて居たのはつい先刻のことだ。

「嵌口具をかけるのは一応赦してやるわ」女囚達はホッとす。

「そんなものを用いないで、出来るだけお前

達が自ら規則を守るという気持ちにさせてやりたいのよ。ひまだからおしゃべりしたくなるんだわ。だから、お仕事させます。」

イザベルは紐の束を取り出した。五十センチほどの細い麻紐、一本に数個の結び目がついてある。

「今日は労役なしの日だし、懲役人のお前達に難かしい仕事はさせやしないから、安心おし」

イザベルはニヤリと笑い、紐の束を最前席の四四五号の膝に投げた。

「六十本あるわ。一時間経ったら貰いに來るからねっ」

固い結び目を一つ一つ解け、と云うのだ。吐息を洩らす女囚達に、イザベルが更に呶鳴る。

「一人宛ここへおいでっ」

と、ポケットをカチャカチャ云わせた。ポケットが大きくふくらんで居たのも道理で、手錠が六個入って居るのだ。女囚達は鼻吸り上げ、一人宛立って鉄格子に寄り、両手に手錠を受けた。鎖の極く短かい、環が矩形になった手錠だ。一言の口も利かなかったミシュリーヌも見逃しては貰えない。抗議はおろか弁解すら出来ないのだ。差し出した両手に

嵌まった手錠を見て、ミシュリーヌはそっと唇を噛んだ。

女囚達は命じられた仕事に脂汗を浮べ、もどかしさに泣き声をあげた。爪は先刻切ったばかりだし、麻紐の結び目は石の様に固い。ままならぬ両手をガチャつかせる度に、鋼鉄は無慈悲に手首を責める。無器用な四二五号のデブ女が泣き声をあげて身悶えた。ミシュリーヌも、泣きたい思いで結び目に爪を立てる。ガッチリ嵌められた手錠の内側が脂汗に濡れてヌルヌルし、手首を回わせそうだが、絶対に回わせはしない。四二〇号が呻いて紐を床に投げ、狂った様に手錠を引張った。そして、歯がみしながら再び紐を拾い上げる。ともかく、皆してかかってやり遂げねばならないのだ。解き残しがあれば皆一連托生、お次の懲罰が待ち構えて居る。

「くそっ。イザベルの奴、今頃は涼しい顔で寝そべってやがるんだよ。ああ、くやしい」
ミシュリーヌの後ろで、ブルネットが呻いた。しかし、支配する者と支配される者、刑を受ける者と執行する者との差だ。如何に歯ざしりした所で仕方がないことだ。規則に違反した受刑囚は、与えられる苦痛を甘受するしかないのだ。

「もう嫌っ。いくら懲役人だって、こんなみじめなのって、あんまりひどいわ」

前から二番目の四二三号の娘が、ステ鉢に喚いてほおり出し、裾をからげて風を入れた。今日はことのほか蒸暑い日だ。

「駄目だよっ、お前さん。おやり」

最前席の四四五号、夫殺しで二十年の金髪が、鼻の頭に汗の玉を浮べて顔しかめつつ、背後へたしなめた。

「嫌よ。もう、どうなったっていいわ。鞭で撲り殺しとくれてんだ」

「馬鹿だね、お前さんは。こう云う時に一生懸命やりや、点数が上がるんだよ。十年をまるまる勤める気かい」

入獄して未だ一年足らずの四二三号は強盗の共犯で二十四才の娘、云われて啜り上げながら再び紐を指にしごいた。当年三十三才の四四五号は入獄以来既に五年、受刑生活の裏表を知りつくして居る。個人の趣味による非公式の懲罰を神妙に受けて見せれば、支配者はことのほか満足するものと云うことを知って居るのだ。私的な罰を加える支配者は、勿論意地悪な女性、そして、そんな残酷な看守ほど実権を握っておって、詰まる所、受刑者唯一の喜びと希望の面会や文通、そうして

仮出獄をまで差配する結果になる。

ミシュリーヌの指先から血が滲み、ちょっとこすれても両手首がズキンと痛み、そして腕は硬張って痺れた様になったが、彼女は歯を喰い縛って結び目と取組んだ。ミシュリーヌは遂に責任以上の十五本を解いたが、全体としては八本が残ってしまった。

「お慈悲で二十分おそく来てやったのに、まだ済んでいないなんて、呆れた女達だね」

イザベルは昼寝の名残りの欠伸をしながら鉄格子の外で呶鳴る。

「あの、私はちゃんと十本解きましたのよ」と、四三八号のブルネットが訴えた。解いた本数を個人別に調べて貰えないのが不服らしい。

「何だって！ そんなこた、調べなくても分ってるよっ。馬鹿」

きめつけたイザベルは、女囚を一人一人鉄格子の内側へ呼んだ。両手首と指先の状態、そして顔色とを見れば、精一杯の努力を払ったかどうかは分る。四四五号がそのまま顎をしゃくられ、手錠の両手を力なく下ろして席に戻った。四二三号は片方を外され、肩を小突かれて背を向け、「かんにんして」と小声で泣きながら後手錠にされた。デブも赤毛も

恨めしげな顔を同囚達に向けつつ、背に両手を回す。手錠位で泣いて居たら、とても懲役は勤まらないが、さりとて哀れなものだ。

ミシュリーヌを調べたイザベルが頷き、片手をはずした。諦めたミシュリーヌが背を向けようとするのを押え更にもう一方をも解く。

「お前はこれで赦してやるわ。どう？ まじめに勤めればお慈悲もあるのよ。分った？」

「はい。ありがとうございます」

割り切れないものを感じながらも、ミシュリーヌは素直に頭を下げた。「私だって」と期待して居たらしい四三八号は、そのまま前手錠を解いて貰えず、不平らしく頬ふくらま

せる。

「何よ、そのツラは！ それがいけないんだよ、お前は」

「は、はい。すみません」

「ここを出てからお前が何を仕出かそうと、よしんば殺し損った女をもう一度殺しに行こうと、そりゃ構わないわ。しかしここにこうして居る間は不服ヅラは絶対許さないよっ。

いくら労役の点数だけ上げたって無駄さ。囚人には神妙さがなくっちゃ駄目。白を黒と云われても、ハイハイと云う殊勝さがね。分ったかい」

「はい」

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

増刊 臨時 写真と絵画 文献 特集号

直接発行所へお申込を！

定価 五〇〇円

(〒20円)

略号「文献」

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女相撲、女体切腹、女体浣腸とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今度二度再びこのような内容は集録出来ない特殊文献を満載いたします。今、街の古本店では一部千円以上で取引されています。こういった値段では、これからは到底入手できません。

三十八年に発売以来、相当部数直接購読者用として保有しておきましたが、愈々残部が僅少となりました。売切れますと補充はつきませんし又、二度と発刊も出来ません故、未入手の方は今のうち、お求め下さるようお待ちします。ここ二、三カ月で売切れになる予定です。

ブルネットは手錠を光らせながら席に戻った。

「四五三号ッ」

「はいッ」

ミシュリーヌは飛び上って答える。

「紐を元通りにおし。一本に五つ結び目をこさえるんだよ。固くするんだよッ」

命じられた仕事をやりながら、ミシュリーヌは口惜しさに胸熱くした。汗みずくに苦しみ、喘ぎ呻いてやらされた仕事の無意味さともじめさが胸に沁みだ。自分が今作らされて居る此の結び目を、再び誰かが泣きながら解かねばならないことだろう。或いは、又自分が解く破目になるかも知れないのだ。

「ああ、苦しい。鼻が痒いわ」

泣き声で後手錠を鳴らし悶えるデブ女は四二五号、出来心が認められないで二年半の窃盗罪、四十も半ば過ぎの貧しい主婦だ。

「ねえ、いつまでこうされてるのよ？」

「あたしに訊いたって知るもんか」

前手錠の四四五号が低く嘲ける。

「ま、明日、お仕事にかかる時には解いてくれるだろうよ。お前さん、初めてやられた訳じゃあるまい。黙って我慢してなきゃ仕方ないじゃないか」

(未完)

悦^え子^こ恋^れ繩^ん譚^{じょうものがたり}

一、Q氏と隠花植物

Q氏のマンションは静かな高台にあった。今宵はクリスマスイブの夜、薄明りの夜から小雪が舞っている。

北向きの窓からは、久し振りに眺める雪景色の詩情が味わえ、はるか彼方の雪空にはネオンにかすんだ新宿の夜景や、赤い伊勢丹デパートの広告サインが展望できるのだが、窓は暗闇に静まりかえり、厚いカーテンで密閉されている。時々窓に漏光が射して、カーテンの色が真紅であるのが判る。

Q氏は独り六畳間に坐っている。

電灯を消した闇の中に、強烈な白黄色の光線が一本、伸びている。その眩しいライトの中で、煙草の煙りが立ちこめ、小五月蠅い羽音をたてて飛び廻るのは、生き残った一匹の銀蠅だった。

Q氏は、ナイトガウン一つの薄着である。和室が二間に寝室、台所と応接間、バストイレが付いて全部で十五坪あるこのマンションは、心地よく暖房が効いているし、六畳間には石油ストーブが赤々と燃え、薬缶がコトコト湯気を上げている。その淡い灯りを浴びて、Q氏の横顔は薄赤く照り返されている。

Q氏の手許から伸びた光線の行きつく先は

麒麟^{きりん}児^じ
久^{ひさし}

一メートル半四方のスクリーンだ。それはQ氏がベニヤ板を加工して白布を貼った手製品である。その裏側は窓ぎわに置かれた椅子の背で支えられている。

隣人とは檻のように部厚いコンクリート壁で区切られたマンション。厚い窓ガラスと、いかめしい鉄のドアさえ閉めれば、ほぼ完全に近い密室となる。モンキーダンスを踊ろうが、酔っぱらって安来節を唸ろうが、少々のことでは近所迷惑にならない。このマンションは半年前に交通事故で急死した愛妻の遺産だ。何をやらかそうが気楽な独り暮らし、三十才のQ氏は、当分再婚する意志はない。



Q氏は密造したスライドを映写していたのだ。焦点レンズを操作すると、スクリーンに輪郭のハッキリした裸像が映し出される。

スクリーンの裸女は、愛川悦子嬢——一名猿轡美人とも称される彼女は、当然口許を拘束されて、一糸まとわぬ肌をキリキリ緊縛さ

れている。それだけのスライドなら、別に奇異でも物珍らしくもない。グラビヤを廃止させられるまでの奇ク誌上で、毎度お目に掛かる事ができた。

しかしQ氏のスクリーン上では——、悦子嬢は被縛の身を、豊満な乳房のあたりまで、

直径一メートル前後の特大シャンペングラスにすっぽり沈められている。しかもグラス一っぱいに溢れた内容物は、Q氏と彼の友人達——奇ク愛読者諸君の排泄物なのである。暖く曇った硝子を透して見える淡黄色の液体。底には黒褐色の固形物が溜って、悦子嬢はその不快な座布団を、臀に敷いている。ヒップの双丘は、その中に半分ほど埋まっている。

勿論これは、トリック写真である。手品の種を明かせば、何んだ馬鹿らしいとソッポを向かれるのが落ちだが、実はシャンペングラスを使った悦子嬢のフェチ責めスライドなど簡単にでき上るのである。紙面の関係上極く簡潔に説明するが、悦子嬢の人体を奇ク誌上

或いは分譲フオートから複写したスライドと別個に近接撮影したシャンペングラスのスライドとを二枚重ねて、マウントに貼り合わせればよい。Q氏はグラスの中身は薄い番茶と艾を使用して排泄物の感じを出したが、もっと本格派は読者自身の実物を使用されれば、なお一層リアルな実感が出よう。複写、近接撮影の技術や陰画からポジフィルムを使ってスライドにする行程は、カメラ雑誌にいくらでも書いてあるから本屋で立読みでもされたいが、Q氏のようなトリックは一行も書いてない。そこには、そこでQ氏独特の秘訣がある。しかしそれを詳細に紹介すれば長くなるので「読者通信」にでも御連絡していただきたい。個人的に御教授いたそう。

Q氏は独り有頂天になって、スクリーンに見惚れている。

——まるで生きているみたいだ。これがトリック写真だとは誰が気付こう——。

Q氏が感動して、何度も悩まされたため息をつくのも無理はない。硝子トイレを使ったフェチ責めの構図に——。悦子嬢のグラマーな肢体を絶妙に生かし切った緊縛ポーズと、猿轡美人の本領をぞんぶんに発揮した顔の哀切な表情が完全にマッチして、見事な嗜虐効果

を挙げているのだ。それはQ氏のトリック技術もあるが、こうも生々しい迫力が出たのはQ氏が複写して人体スライドにした被写体——奇クの写真自体のよさにある。

——そこで、その緊縛フオートについて語りたい。おそらく五百枚以上は撮影されたと推定される悦子嬢の作品中でも、Q氏がトリックに利用した写真が、モデル嬢の特徴と長所を最大限に生かした記念すべき傑作と思われるし、最近号の奇クでは、こんなしどけない全身ヌードなど許される筈がないからである。

いまでは『よき時代のよき思い出』と感慨無量の念に胸打たれるが、奇ク読者には記憶がある。何年の何月頃かQ氏はすっかり忘れてしまったが、確か一般店頭売りはしない臨時増刊号であったと思う。オールグラビヤの豪華本で、とにかく六年ほど前の古い写真だ——悦子嬢は寝室のシーツの上に坐らされた全裸で、両足は思わせぶりに、中途半端な恰好に拡げられている。

その坐像をカメラは斜め横の位置から、シャープに撮影している。

先ずこのフオートの最大傑作である所以は首をねじった顔半分を蔽う猿轡、その上にあ

る切れ長の瞳を横目使いにした哀艶な流し目にある。サルグツワ美人といわれるだけあって、悦子嬢は猿轡をかまされると途端に、瞳が濡れた愁いを帯び、妖しい生気が竦って、どんなお化粧や美顔術をされるよりずっと美人に見えるから不思議だ。写真はその濃艶な魅力を最高限度に活用して、悦子嬢の軀全体的美観を一段と悩ましくひき立てている。

御自慢の乳房は、縄目が喰い込んだ太腕と一緒に、豊かな隆起を二筋づつ緊縛されている。もともと大きくて恰好のよい乳房だが、カメラの位置が側面なので、その重いボリュームを支え切れずに幾分たれ気味である。しかし下がり気味に見えるのが反って、硬直した乳房と相いまって、濃厚なお色気を生み出し、女体の爛熟と興奮を暗示しているかのようだ。

また側面から写し出されたお腹のふくらみが、たまらないほど魅惑的だ。おヘソのちよっと上あたりの胴を、縄目が完全に肉に喰い込んで見えないほど烈しく被縛されている。一筋の縄がこれほど威力を示すものか、と驚かされる。胴体には、胴を輪切りにしたような深い肉の凹みがつくられている——その縄目が内臓を圧迫して、下腹部には妊婦に似た

ふくらみを生み出している。それがまた脇腹からの撮影なので、その膨脹感とボリュームが過酷なまでに強調されている。更に深く凹んだ脐窩が妖しく息づいて、また一つの花を添え、腹全体に刺戟的な異常美をさらけ出している。

裸像の背後には大型の鏡があって、逆光線に入って暗くなった背中と両手を映し出し、乳房縛りの縄尻が後手縛りになっているのを読者に判らせている。

その緊縛フオートは、舞台装置も効果満点だ。どこかの温泉マークらしい密室風景。未だ皺になっていない純白のシーツに、しどけなく坐らされた下半身だけが、胴縄から下は全然縛られていないのは何故か？。声を立てられないように噛まされた猿轡。短かくカットされた黒髪さえ乱れて、喉の下まで垂れ下がっている。それにしても何んと悩ましく切ない流し目であろうか。濡れた瞳は、何かをうらめしげに訴えているかのようだ。諦念しているようにも、しきりに哀願しているようにも見える——それは挑発するかのようにな男の胸をかきむしる。

これから一体どんな凌辱と地獄図が、悦子嬢の無防備な身体に展開されるか。それから

後は読者が勝手に空想して、独り愉しまれるがよからう。

例えば、現にいまのQ氏の密室では——悦子嬢はその女盛りの白い女体を、シャンペングラスを使った透明トイレに入れられて、玩弄されている。

Q氏はその外にも、色々と嗜好と毛並みの違った悦子嬢のトリックスライドを何枚も所有している。いずれも猿轡された全裸ポーズであり、責めの小道具も紙上では公表がはばかられるようなものが多い。それは複写の本体である悦子嬢自身が、分譲フォートや臨時増刊号の場合、奇クのモデル中でも比較的全身ヌードが多く、ポーズも変則的、嗜虐的な姿態が多くて、トリックの対象に最適である事にも原因がある。

しかしQ氏が悦子嬢の写真をひそかに失敬して、密室的なトリックスライドを製作するのには、何より彼女自身の発散する濃厚な体臭というか、マゾ的ムードにある。

あのナルチシズム的興奮さえ感じさせる見事な裸形だけではない。長襦袢の裾を乱した着衣姿の場合でさえ、軀全体に異様なムードがある。特に猿轡の上の濡れてうるんだ眼の表情が煽情的だ——。そんな悦子嬢に、Q氏

は何か隠花植物でも眺めているような湿潤な挑発を感じてしまうのだ。

物陰にひっそり咲き、妖しく息づいて加虐者の手を待ちのぞんでいる——譬えば梅雨に濡れた一輪の紫陽花の抒情詩。いやそういうロマンシチズムとも少し違うようだ。

拙稿「亜紀子奇譚」の場合は、モデル嬢のバージョンを連想させる生硬でうぶなムードが、サジスチックな妄想を抱かせたのだが、悦子嬢のムードは濡れた官能美であり、生娘の如き羞じらいとは少し違う。縄の芸術品といおうか、悦子嬢の縛体には、恋縄の情さえ感じられる。それは一度生理の喜びを知った女体がうずいて男を求める欲情に似ている。

それだけに縄に感応する隠花植物——その陰湿な花びらを滅茶苦茶にしてやりたい欲望は冷酷無情である。その濡れた濃厚なお色気は徹底的な羞恥責めの対象になり、とどまるところを知らない。読者諸君も手許にある悦子嬢のグラビヤなり、分譲フォートをもう一度御覧頂きたい。きつとQ氏と同じ気持に胸がさわぐことであろう。

——ここでもう一度、Q氏の六畳間を覗いてみよう。

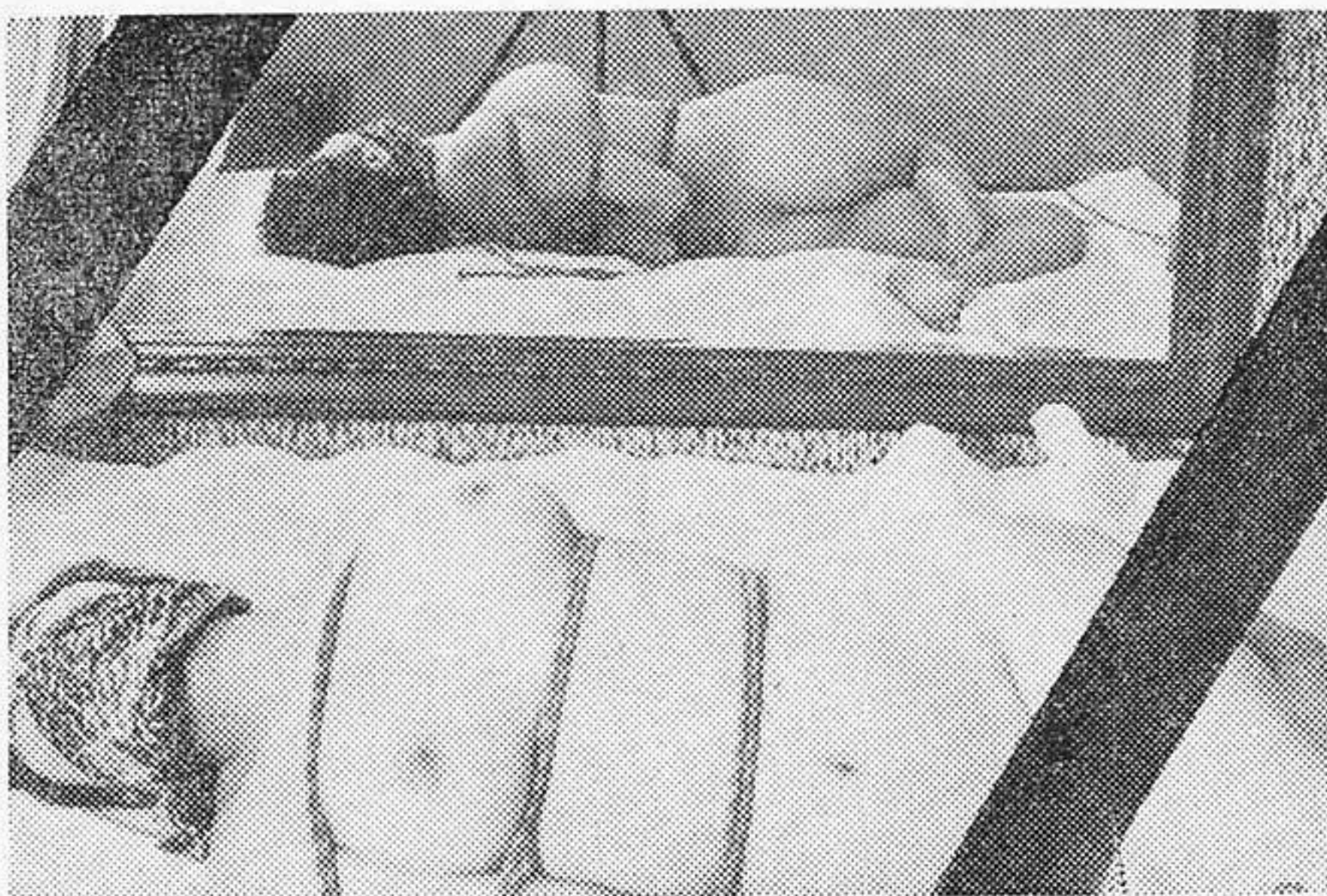
等身大に映写されたヌード像に、Q氏は忘

私の境地に陥っていく。腹部や胸のふくらみなど実物そっくりの立体感を帯び、硬直した乳首などは、いまにも画面から飛び出してきそうな艶めかしさだ。

いつの間にか、Q氏はスクリーンの悦子嬢に話し掛けている。

「やあ悦子嬢、硝子トイレを御使用になる御気分はいかがですか。それは、よくや奇ク愛読者の皆様方が、貴嬢へのクリスマスプレゼントにと、知恵を絞った心からの贈物だ。温いシャンペン風呂に入れるなんて素晴らしいじゃないか。泡立ちもいいし、香水の匂いもするだろう。どうかたっぷり漬って軀の隅々まで洗い清めてくれ給え。何んなら飲んでくださってもいいよ。だけどそんなに猿轡姿じゃお口も使えないし、御自慢のオッパイも縛られていては、洗うわけにいかないのが残念だな。——それにしても君は美人だ。特に今夜はうっとりするほど美しい。そんな悩ましげな眼付で、よくを誘惑しないでくださいよ。ここはよくと君だけの密室だぜ。若し変な気を起したら、どうするんだい。ねえ、悪戯されてもいいのかい」

「ここは温泉マークのベッドの上よ。縛られて悦子は貴方と二人だけ——何をされても、



どうしようもないじゃないの。好きなようにされてしまうわ。うしろには二人の愛の姿を映す鏡まであるじゃないの。悦子、男が女のような姿を覗いたら、どうしたがるか知ってる

つもりよ。わたしは夜のいけにえなの」
諸君は色情狂と笑うか。しかし想像の世界なればこそ、奇クの大事なモデル嬢ども、こういうきわどい会話ができるのだ。諸君も一度試して見給え。ちょっと佗しいが、空想するだけでも愉しいではないか。

とにかく、Q氏は幻夢の世界にある。スクリーンから悦子嬢の甘美な返事を聞いた錯覚を起していた。

Q氏は、カラスライドでないのが残念である。果して悦子嬢の全裸の肌色はどれほど美麗である事か。想像がつくようでもあり、想像をはるかに超えた美しさであるようにも思われるが、白黒のスライドでは判らない。それだ画面にある責め道具や寝具に一体どういう反応を示すか。羞恥にしろ嫌厭にしろ、或いは倒錯の快感か——いずれにしても縄目の肌を妖しくくねらせて身悶え、耳朶から足の爪先までバラ色に染まるのを、天然色で鑑賞できないのが、かえすがえす残念であった。

二、仙術人飛脚

芳野眉美氏曰く「SMについて一般の知識はまだまだオトギ話の世界にある。奇クの読者だってそうだ。こいつは一丁書かなくっちゃ」Q氏にはまったく耳が痛い。参った。参った。Q氏は恐縮して頭をかく。

Q氏は大学生の頃より奇クを読み始めたから、かれこれ十年近くになる。しかし毎月号を読んでいくわけではないし、未だ実際にプレーした経験は一度もない。他界した妻にもそういう要求をした事はない。それで欲求不満にならないのは、Q氏が空想派、心理派のためであろう。奇クモデル嬢のグラビヤを恍惚と眺めては、拙稿「亜紀子奇譚」の如き、本格派に言わしむれば眉唾物の想像をたくましくしたり、写真になって全国にばらまかれるモデル嬢達の心理風景に興味があるからではなからうか。

さて筆法からすれば前章だけで、俗悪趣味のトリックマニヤの手記風に要領よくまとめて完結すべききであろうが、Q氏のオトギ話はいよいよこれから始まるのである。

「トン、トン」

鉄扉をノックする音で、Q氏は夢をやぶられた。

時刻は午後十一時半。立ち上るのが面倒だ

し深夜の訪問者が不気味でもある。それに密室の秘密を探られているような、うしろめたい気持ちもしてQ氏は、居留守を使うことにした。

しかしノックの音は、いよいよ執拗に繰り返され激しさも加ってくる。それどころか酔っぱらいのようなドラ声さえ張り上げ出す。

「ドンドン、おいコラ、ドアを開けんか、早く開けよ」

何も呼びリンを押せばいいのに、Q氏は腹立たしい気持ちになるが、立ち上って応接間にある玄關に行く。

ドアの覗き窓から窺うと、戸外にサンタクロースの衣裳を着た老人が、寒そうに肩をすぼめて佇んでいる。

窓越しに眼と眼が合うと、老人は柔和に微笑う。笑うと愛嬌があつて、人も良さそうに見える。サンタクロースのガウンに着ぶくれているが、五尺足らずの小男で、痩せている。

「一体、こんな夜遅く、何事ですか」

凍りつく冷気に一瞬背筋が寒くなつて、Q氏は不気嫌になる。しかし老人は長く伸びた顎髭をしごきながら、ニヤニヤ笑うだけである。片手はポンポンと肩の雪を払い落して、

平気な顔をしている。

Q氏はサンタクロースを信じるほどロマンチストではない。

「お爺さん、きつと貴方は駆け出しのサンドイッチマンですね。サンタクロースの袋は、どこに置き忘れてきたのですか——こんなところでサボッていちゃ駄目じゃないか。ここは御覧の通りの男やもめ、新宿の街にはいっぱい酔っぱらった陽気な連中が浮かれていますよ。そこでバーかクラブか知らないが宣伝ビラを配ってくださいよ。爺さん、耄碌してどうやら場所を間違えたらしい」

老人はとんでもないというふうに手を振って皺を寄せた唇をもぐもぐさせる。

「わしはな久米の仙人……いや久米の仙人と言いたいところじゃが、それよりずっと二流品での、いやお恥しい。名のるのはやめて置こう。それならこのサンタクロースの衣裳はと言いたそうな顔をしているが、仙人の着物など寒くてかなわん。それに今宵はクリスマススイブ、この方が暖かいし、ちょっと洒落っ気を出してみたのじゃよ」

「ハッハッハ、可哀そうに、お爺さん、頭が変になったんじゃない。もう結構、冗談はその位にして、早く帰ってくださいよ」

Q氏は腕を伸して、早くお帰りとドアの握りに手を掛けようとする。その手を老人の冷たい手が押えた。

「フッフ。頭が変なのはお前さんの方じゃ。さっきから、あらわな御婦人の肌を眺めては——、ブツブツ怪しげな独り言を言っていたぞ。可哀そうに、おぬし精神分裂症か色情狂とみえるの……」

Q氏は一発強烈なアップercutをくらったような気持だった。頬が熱くなったのが自分でもよく判る。思わず手を伸ばして老人の口を蔽いたくなる。

「——お爺さん、ど、どうして、そんな事を。えっ、全部見ちゃったの、人、人のプライバシーを侵害するなんて、ひ、ひどいじゃないですか」

Q氏は赤面して、もじもじ恐縮するだけである。

「ハッハ。これで信じられたか、わしは仙人じゃ、すべては神通力でお見通し、お前さんの腹の中まで鏡に映す如く判っている」

それから筆の穂先のようにふさふさした眉毛を下げて落ち窪んだ眼が悪戯っぽく笑う。

「実はかくいうわしも、おぬしと一緒に見惚れていたのじゃ——ホレあの小五月蠅い銀蠅

が一匹飛び廻っていたろう。あれがわしの化身だったのだ。コレそんな愁傷な顔をして恥じ入る事はないぞよ。女身には先輩の久米の仙人じゃとて神通力を失う。色情は、俗人の男どもも、むしろ仙人も同じじゃ。男なら誰だってお前さんと同じ気持になるわい」

そう慰めるように言うと、意気銷沈しているQ氏の肩を、一つぽんと叩く。

「ところで物は相談だが、まったくいい女だな——あのグラマーの女性は、何という名前かの？」

「愛……愛川、悦、悦子嬢です」

「愛川悦子——いい名前だの。お前が独りで愉しむには勿体ない女だ。——わしはな拙き出しの中に、まだ何枚も彼女の写真が隠されているのを知っているぞ。確におぬしのスライドを眺めていると、生きているみたいで今にも物を言い出しそうだ——その惚々するあで姿を、この仙人にも一つ目の保養に見せてくれい。それでこうやって玄関から押し込んできたのじゃ」

それから約十五分間、悦子嬢の秘密スライドが、仙人のために映写された。

サンタクロースのコートを脱ぎ捨てると、仙人はやはり漫画の中で知っている仙人らし

い風体になる。しかし膝を乗り出して、しきりと溜息を洩して悦に入っている姿は、ストリップ小屋で見掛ける好色爺さんと変わるところがない。

霞を常食とする仙人には、人間の排泄物が珍らしいとみえ、同じスライドばかりを何度もアンコールさせる。興奮して息を弾ませ、水鼻が落ちるのも気が付かない。

「仙人、いくら、そんなに近寄って、眼を白黒させてみたって、写真はやっぱり写真ですよ。それより仙人——あの愛川悦子嬢を何んとか生きかえらす仙術はないんですか。一つ仙人の神通力で……。あの重そうでカッコいいおっぱいや、ポッチリふくらんだ下腹の悩ましき——本物の生きた悦子嬢の軀を觀賞したり、温かいねり絹のような肌を撫で廻してみたいと思いませんか。それから仙人のお気に入りの硝子トイレにでも入れて、一つ今夜は思う存分にプ、プレイをしてみたいと思いませんか」

Q氏は声を顫わせて、必死の眼差しで仙人の顔を覗き込む。手を合わせて懇願したい気持である。

「うむう。同感じゃな。生きかえらせる術はないが、呼び寄せる術なら、いささか心得て

いる。それで愛川悦子という、この妖婦は一体何処に住んでいるのか」

「はあ、それが——もっか住所不明、愛川悦子というのも本名ではありませんし、奇ク編集部なら知っているでしょうが、問い合せても教えてくれるかどうか。それに、こんな真夜中では、いま直ぐというわけには、とても駄目でしょうな」

Q氏は、ただおろおろして頭をかくだけである。しかしそんな事は、仙人は問題にしない様だった。

「仙術枯し人飛脚——この術で行こう。おぬし早く裸になって毛を一本わしによこせ。おぬしの恋しい、見たい、逢いたいという色情が——、はるか彼方の女性を呼び寄せるのだ」

そんな事で、悦子嬢を呼び寄せる事ができるなら、仙人の要求通りになる羞しさなど、Q氏には何んでもない。それより果して広言通りの効能があるかどうか仙人の神通力をQ氏の常識が疑ってしまう。

「コレ、ぐずぐずするな——実物を拝みたい触わりたいたと、わしに誘いをかけたのは、おぬしだぞ」

「ハ、ハイ。でも、仙術の方は本当に大丈夫

でしような？」

「くどい」

仙人の威厳の籠った眼光に、Q氏の軀は縮み上る。

屋外は小雪がやんで、空には星が瞬いている。四階建のマンションは、どの窓も寝静まって、黒々とした影を雪明りの地上に落している。雪が木枯しに変わって、裸木になった街路樹の雪を散らしている。

「耳に聞え、眼には見えぬ風よ。さがし当てたら雲を呼び、嵐を起して千里を一里、女を攫って運び来い——仙術木枯し人飛脚」

仙人は窓から身を乗り出して呪文をとねえると、頬をふくらませて一気に指先に息を吹きつける。続いて真紅のマントを空中に網を拡げるように投げ出した。

にわかに突風が舞い起って、Q氏は吹き倒されそうになる。石油ストーブの火が声を立てて揺らめき、真赤な炎に混じって黒い油煙が立ち昇る。

風に巻き込まれたマントは、風を孕んだ風のように空中高く舞い上る。Q氏は魔法の絨氈の童話を現実に見たような気持に襲われるのだから、不思議だった。

「どれ一眠りする裡に、わしの仙術で愛川悦

子とかいったな——肉体美人が二人の前に現われよう、それまでのわしは、一と休みしよう」

窓を閉めてから、鍵は外した俥にして置けよと付け加えると、ストーブのそばで横臥して手枕をかい、直ぐ快い軀を立て始める。

しかしQ氏は、神経がいら立って、とてもじっとはしてられない。果して仙人の予言通り悦子嬢が現われるか、どうか——片想いの恋人を待合せる時の不安と期待に、胸がぎゅっと締めつけられる。Q氏はのんびり眠りこけている仙人を揺り起して大丈夫かと再度念を押したくなる。

腕時計の針と睨めっこして六畳間を往ったり来たり、口許では絶えず忙しげに煙草ばかりふかしている。新しいピースの箱が直ぐ空になって、目眩いがしてくる。咽喉が乾いて舌がニコチンで苦い。Q氏は歩きながら、灰皿を積み上げては苦い唾を吐いた。

三、悦子嬢来迎

あれからもう一時間以上たっていた。

外界は強風が吹きちらしている。空を渡る風の唸りがすさまじい。屋外の電線がヒューヒュー鳴り、鍵を外したガラス窓が音を立て

る。台風のようにおそろしい風速である。

「おぬし、喜べ、木枯し人飛脚からの便りが来たぞ」

仙人がパッチリ大きな眼を開けて、耳に手を当てがう。しかしQ氏にはただ窓を鳴らす風音が聞えるばかりである。

「おぬしには、もしもと案内を乞う声が聞えぬか——早く窓を開けてやれ」

六畳間に寒風が吹き込みQ氏は震え上る。煽られたストーブがまた炎と油煙をあげ、薬罐がお湯を吹き出して、ジュウジュウ湯気をあげる。パタンと椅子の背に立て掛けたスクリーンが吹き倒された。

「バカ、もういい、早く窓を閉めんか」

だが、室内は何んの異常もない。

スクリーンが倒れて、点け放された俥のスクリーンが一層拡大された映像となって、真紅のカーテンに映っているだけだ。

その時、か細い女性の声を聞いたようにQ氏は思った。風が運んだ深夜ラジオの音かとQ氏は耳を疑う。眼はきよろきよろ部屋中を眺め廻す。窓を鳴らす風に邪魔されて聞き取りにくい、ものを言っているのは、カーテンの裸像からだ。

グラマーで美人歌手の朝丘雪路のようにハ



く、声も出ないの……」

「そ、それでは——貴方は愛川悦子嬢！」

「——エ、エエ——」

声がするカーテンの画像は、スクリーンに焦点を合わせたものなので、当然輪郭もぼやけているし、邪魔物の黒い椅子の影まで映っている。しかし真赤な布地をバックにして、映像は薔薇色に変わっている。それは白黒の濃淡に、カーテンの朱色が混じって、少し毒々しい感じだが、カラー写真のように生々しい実感が出ている。

「ア、アー。そんな眼で眺めちゃいやっ。早く、電、電気を……」

六畳の間は石油ストーブだけの灯りになった。薄暗くて足許も判らないほどだが、窓ぎわに何か黒くて長い荷物のような物体が転がっている様子である。

仙人が立ち上って、蛍光灯を点けた。

明るい電灯に浮び上ったのは、待望の悦子

嬢であった。

彼女は猿轡をされて呻いている。サンタクローズの真赤な衣裳を着せられた軀中を麻縄で簀巻きにされている。頭髮は睡眠用にピンカールや黒い網でセットされているが、それもなくしゃくしゃくになっているし、猿轡もピンクのスリップである。膝から下は裸で、赤いマントの下は、ネグリジェか何かの薄物一枚と思われる。いかにも熟睡中の寝室から誘拐されて来た感じが一目で判る姿だ。

仙人は、それ見ろというように得意気な顔をして、Q氏を一瞥すると、むっくり起き上って、悦子嬢の素足を掴んでズルズル六畳間の真中まで引張ってくる。

Q氏はその逆に、悦子嬢である事を確認すると、どうしても手を出す気がしない。急にそわそわして、部屋を往ったり来たりし始める。

「バカ者。何をうるたえておる。縄をほどくのを手伝え」

「ハ、ハイ。で、でも愛川悦子嬢がせっかく御訪問下さったのに、こんな寝巻姿じゃ、失礼じゃないですか。髭も剃らなくちゃ、ワイシャツも新しいのに取換えてと、背広もボウナスで新調したのに着替えなくちゃ」

Q氏はつくづく自分をフェミニストだと想う。空想やスライドでは、悦子嬢を思いの尽に凌辱する事ができても、現実には悦子嬢の生きた軀を眺め、甘美な声を聞いてみると、あれほど見たい、責めたいと夢見た欲望とは逆に逃げ腰になる。これでは、まるで恋人とデートするようではないか。

悦子嬢は、まだはつきり覚めきらぬ眼をして、二人を見上げている。

仙人は縄を解く前にかがみ込んで、悦子嬢を覗きこむ。

「貴嬢は寝室でぐっすり眠っている裡に、こんなところへ運ばれて来て、悪夢にでもうなされているような、合点がいかに心地である。だが夢ではないぞ、わしの仙術で攫われてきたのだ。だが、わしらは人さらいではない。用さえすれば直ぐ元の寢床に帰してやるし、身に危害を加えない。ただ貴嬢もさっき見たであろう——ああいう一糸まとわぬ姿になって、わしら二人のお相手をしてもらいたいのじゃ、なあ、おぬし」

「あ、あ——」

悦子嬢は猿轡の中で呻き声をあげ、恐怖に身体を縮める。

しかしQ氏は、仙人に「なあ、おぬし」と

言われても悦子嬢に共犯者と見てもらいたくない心理が働く。といって恐しさに震えている美しい娘を積極的に助けてやる気もない。ネグリジェの下の裸体を想像すると、咽喉から手が出るほど劇しい欲望にかられる。

どうしようか。Q氏は台所へ走り込んで、ウイスキーでもがぶ飲みしようと思った。

その襟首を、仙人に掴まれた。

「仙、仙人、ぼくにはどうしても、プレーする勇気がでない。酒でも飲んで元気づけなくちゃ、とても実行できそうもない」

「ハッハ。口ほどになく、情ない奴だな。よし、わしがよい強精剤をやる——口をアーンと開ける」

指先に丸められたのは、仙人の黒い鼻屎である。

効果は靦面であった。空想派のQ氏は、眼つきや声帯まで一変したように思われる。悦子嬢を調教された一匹の女奴隷として冷視する事ができた。隠花植物の隠湿な誘いに、体中の血がうずき始める。

「ここはマンションの四階、部屋には鍵も掛っているし、助けを求めたところで誰も来ない密室の中——そこに女と男が二人。今夜はゆっくりつき合い給え。貴女のように軀も器

量もいい女が、奇クという特殊な風俗誌にわずかばかりのモデル料ほしさに裸になれるわけがない。貴女は縛られるといつも、自分から隠花動物のように濡れている——そんな写真が全国にばらまかれて、男達がどんな野心を抱くか、貴女にも想像がつくでしょう。さあ自分で播いた種は、自分の軀で刈り取っていただく。貴女は顔や心では反抗しているが、悦子嬢、貴女の軀はもう燃え上ってどうする事もできない。さあ猿轡を解いて上げよう——そうして早く脱がして、縛り上げてと言ってごらん。このマントの下は、ネグリジェ一つの裸だろう……」

「や、やめて」

悦子嬢は簀巻きにされた身体を転ろがして逃げようとする。眼はケダモノでも見るように怯えている。

「いやっ見、見ないで——悦子、お化粧もしていない顔を見られるなんて、いやっ——」

シュミーズの猿轡を解かれると、悦子嬢は意外な言葉を洩した。恐怖の瞳をいっぱい見開いて震えていても、さすがは奇クのベテラン人気モデル嬢。女のたしなみというか、一体何をされるか判らない危機一髪という瞬間でも、素顔を見せたがらない映画女優のよう

な事をいう。

「心配しなくても、あとで寝化粧をこっそりさせてあげる。しかし、君の素顔だって色っぽくて綺麗だぜ」

悦子嬢は、男の影になった部分に、ナイトクリームで光る顔を隠そうともがく。

Q氏は悦子嬢の上半身に馬乗りになって、あばれ廻る顔を片手で掴み、真正面からゆっくり觀賞する。

サルグツワ美人と称され、いつも布切れで蔽われている唇や鼻端をQ氏は始めてみた。

受け口の唇は上下とも部厚く、当世風のグラマーガールらしく造りが大きい。ルージュのない唇はやや黒ずんで見える。そこにQ氏は二本の指をつき入れて、花卉を開くようにする——Q氏は人造便器にしてみたい衝動に、

指先が震える。鼻端も大きく、やや平坦な感じがして、猿轡に蔽われた加虐の跡を連想させる。通った鼻筋には、鼻脂とも汗とも見える分泌物が薄ら浮び上っている。唇、鼻ともにたくましい悦子嬢の生命力を想像させる。

「そんなに、うらめしそうな顔をするなよ。

唇と鼻を見られるのが、そんなに羞しいのかい。まるでパンティでも脱がされるみたい慌てているぜ——それともやっぱり猿轡が恋

しいのかい……」

仙人はそんな事より、人間の排泄物の方に異常な興味があるらしい。電灯を消して、再びスライドを映写するようにQ氏に命じた。

「仙術紙切り細工。ギヤマンよ飛び出せ」

仙人の指先が、画面に映ったシャンペングラスの輪郭に沿って、絵を画くように動く。スクリーンがガラスの面積だけ、透明なゴム風船でもふくらますように盛り上り、やがて本物と一寸違わぬグラスが飛び出してきた。

悦子嬢もその不可思議な魔力に、目を白黒させて驚く。同時に夢か幻か未だ半信半疑であった、仙術による誘拐が現実の出来事として起った事を悟らされたようだ。その絶望と恐怖に、口をあけて茫然としている。

ところで、グラスの液体は、普通の番茶と艾である。そのトリックに一度は腹を立てたが、直ぐ思い直して仙人はQ氏に相談する。

「それでは予定を変更しなくてはなるまいな——これには四斗樽の菰酒の一つや二つは楽々とする。これを一遍で一っぱいにするには四、五十人の男が必要だが……、この部屋では隣りの八畳間も使うとしても、二十人以上は無理だろうな——」

仙人は二十人の男を集めたいが、誰か心当

りはないかと訊ねる。

Q氏は本棚から、最近号の奇クを三、四冊持ち出して来た。

「ほらここに読者通信の欄がありますね。一応住所と名前らしいものが記載されていますが、ほとんど匿名だし、住所も疑わしい。北海道から九州まで全国各地に拡ろがっています。しかし大仙人の仙術をもってすれば、木枯し人飛脚のような調子で呼び寄せられると思います……」

仙人は悦子嬢の方をちらり一瞥してから、Q氏を眺めてニヤリ笑う。

「そんなことをしたら悦子嬢、丸坊主になってしまふぞ。それに木枯し人飛脚は御本人にその気がなければ、何んの効果もない。果して悦子に、その気があるかな——どんな男たちか知らぬが、おぬしの仲間ではそれぞれ一癖も二癖もありそう。そんな男達の前で悦子嬢が腰のもの一つない裸を、よってたかっけつて者にされたいと思うか——おぬしのように、いや女性からすれば見せたい、触ってもらいたいと思うかな」

Q氏は、悦子嬢に仙術人飛脚を具体的に説明した。

「か、かんにんして、悦子、とてもそんな……」

「いやっ、色魔、気狂い、あっ、あ——」

「それ見ろ、わざわざ慰み物にされるために責めを望む女があらうか。悦子嬢、顔を真赤にして、泣き出しそうな顔しているぞ、——あれでは木枯し人飛脚は使えない。だが未だ一つ手はある……」

仙人は『群狼にぎりめ』という新しい仙術を使おうと言った。

四、お尻責めと密製スライド

縄を解かれた真紅のコートの下は、淡いブルーのネグリジェ一つだった。曲がりくねった豊満で真白な曲線が、あらわに透けて見える。自由にはなったものの、仙人の神通力を知っているだけに、ドアまで逃げ出す気力もない。悦子嬢は六畳間の隅に蹲って、胸を抱よくうなポーズで顫えているだけである。

「悦子嬢。そんなに固くならずともよい。お医者ごっこをするだけじゃ」

仙人に気軽な調子で手招きされても、畳にへばりついて離れようとはしない。

「あっ、ああ、離、離して——」

Q氏は、背後から羽交い締めにして、悦子嬢を連れ戻すと、その俣膝の上に載せる。やんわりと重く、冷たい豊かなヒップの触感。

脇の下からすべりこまれた両手は、波打つ胸の隆起をわしづかみにする。

「キャッ、ヒーイ。さ、さわらないで——悦子モデルになっても、おさわりバーのホステスとは違うのよ、——あっ、あ、いやっ、離して——」

ネグリジェの下にブラジャーはなかった。

奇ク写真家にも触わらせた事はないという悦子嬢の言葉が、一層Q氏を煽情させる。その乳房美人の胸は——、温く丸丸と大きい。

とても掌では握み切れないほどだ。その魅力的なボリウムは、五本の指がどこまでもめり込みそうに柔かいが、奥にはゴム風船を握んだように、はち切れんばかりの弾力がある。

その掌にずっしり重い双丘は、スベスベしたナイロン製の薄物が一枚あるために、一層その心地よい感触が強調されている。それは薄布一枚下に隠された実物を見たい、あばき出したいという空想的な刺戟を、Q氏に与えるのだ——Q氏の不粋な説明より、諸君が床の中で、諸君の妻か愛人のパンティ姿のヒップかバストを撫ぜれば、その感動と興奮は一触瞭然となろう。

「おい、おぬし、そんな情けない顔をして、余録を楽しむのもよいが、しっかり押えてい

ろよ」

今度は仙人の手が下半身を襲った。狂ったようにばたつき、畳を蹴る両足を仙人が捕え力一っぱい引張ると、捻じるように拡げる。

ネグリジェのまくれ上った白い膝頭を、これまた枯木のように細くも深い両膝でがっちり押えつけ、左手まで添えて、身動きできないように、悦子嬢を固めてしまう。

Q氏の膝を重圧していたヒップが離れて、腰を空中に浮かべた恰好——悦子嬢の軀は三角形の斜辺のようになる。

思い切り引張られて、肉くびれ一つない緊張した腹部——そのふくよかな丸味を帯びた下腹に密著しているピンクのパンティ。それが淡いブルーの布地を透して覗かれる艶めかしさ。Q氏も仙人も息を詰めて見惚れる。

ネグリジェの中に伸びる、痩せて筋張った仙人の右手……。悦子嬢はパンティを脱ぎ取られるかと、黄色い悲鳴をあげる。

「お、お願い——許して」

「本当なら医者診察だ——この下着も全部脱いでもらうんだが、それは後のお楽しみとしよう。こうして掌を置くとぬめりとして吸いつくようだ。ホーウ、貴嬢大分長い間便秘しているようだ。こんなに下腹が張ってい

るぞ。こうして押えると苦しいか？」

「あっ、——う、うう」

「わしだって悪戯半分、ただ触りたい気持ちだけで、お医者ごっこをしているのではないぞ、わしはな、貴嬢のお尻が欲しいんだ。い

いか一つ、二つと——十まで勘定する裡に屁を出さないと、今度は本当に素っ裸に剥いてもっとひどい悦楽責めにしてやるぞ」

勘定しながら、仙人は悦子嬢をくすぐり責めにし始める。ネグリジェの裾は、仙人の脇で高くまくり上げられている。その

先の指頭は、五本とも毛筆の穂先の働きをしている。

悦子嬢の背越しに、仙人の指先の中指がパンティをずり下げた臍窩を襲い、残りの四本が周囲を毛虫のように這い廻っているのが判る。背後からで、悦子嬢の表情は判らないが耳朶から首筋まで真赤に染まり、荒い息を吐き続ける。桃色になった足の拇指が反り返っている。

「アッ、フ……フッ、フウ、う、うふ。ヒッヒッ、ヒイ——」

悦子嬢の唇から、呻きとも嘆きともつかぬ陰微な笑いが洩れ始める。腰をよじつてもがき続ける。首がのけぞって、やや荒い感じの短髪で、Q氏の目鼻がこすられ、眼が見えなくなる。

「ハッハ、ホッホ。イッヒッヒ。

や、止めて……く、くすぐりたい——ハッハッハ」

仙人のくすぐり責めは、いよいよ執拗になったようだ。悦子嬢は腹をよじって笑いこける。

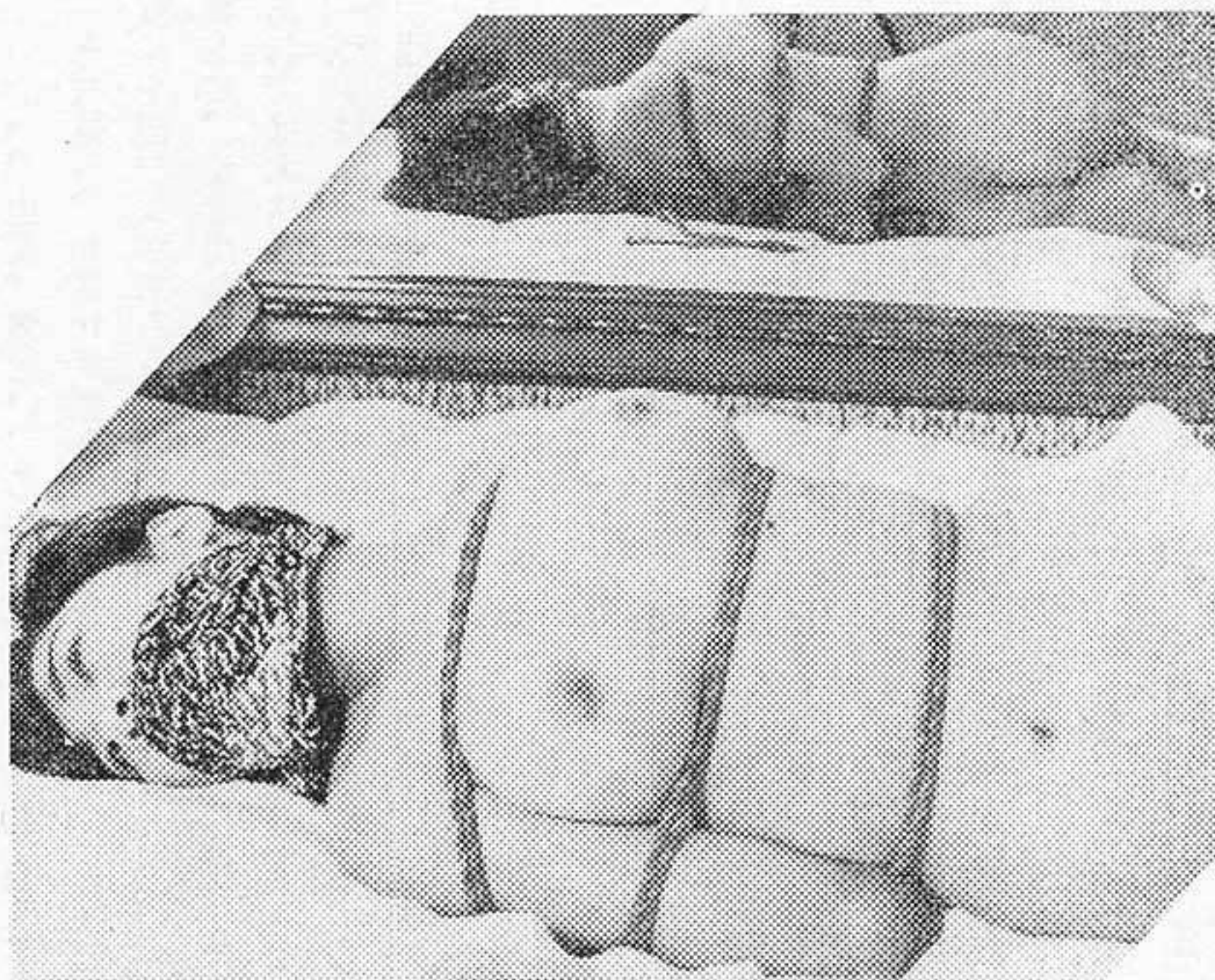
Q氏の掌の中で、火のように熱い乳房があえぎ、心臓の鼓動が伝ってくる。悦子嬢のたれ流す唾液で、Q氏の手が濡れる。掌に重い玉のような隆起が急に軽くなるのは、悦子嬢が笑い声と一緒に上体をのけぞらすためだ。グラマーの彼女を支え切れずに、Q氏は、頭から顛倒しそうになる。そのためにQ氏は、悦子嬢のもだえる乳房を一層強く握り締めなければならぬ。

「う、うう——」

笑いの間に悦子嬢が間歇的に呻くのは、仙人がくすぐり責めの合間に、下腹を強く指圧するためだ。

突然、シャンペンを抜いたような爆発音が炸裂した。それは天井にこだまする爆笑にまぎれて、聞き取りにくかったが、続いて連発した音色は、びっくりするほど高く、長く尾を引く。

悦子嬢は自分自身の発した瓦斯の音と臭気に、慙愧の首をがっくり折った。



「これで腹の中が、スウーとしただろう」

そう言つて立ち上った仙人の両手は、悦子嬢の瓦斯を握り締めていた。窓を直ぐ開けるように、Q氏に目配せを送る。

凍った夜気に向つて、仙人は立った。

「仙術群狼にぎりめ——夜の精霊よ、風よこの馥郁たる香りを運べ。まき散らせ、天狼星よ、行手を照らせ。花粉が虫を誘う如く、牝犬が雄犬を呼び寄せる如く——さかりのついた男どもを呼び寄せよ」

一面銀世界の彼方此方から、犬の遠吠えが一次に響いてくる。

仙人の拳骨は一つ、二つと物でも投げるような調子で、空中に向つて拡げられた。

——それから約一時間半後、Q氏のマンションでは、Q氏の秘密スライド観賞会が行われていた。果して『読者通信』の人達かどうか、確認はできないが、とにかく十八名の読者諸君が集つたのである。仙人の仙術がどう間違つたか、中には随分無作法な紳士も混つていたが、これはきっと奇クとは別世界の俗物どもであらうと思われる。

そのために六畳と八畳間の襖を脱して使用された。八畳間は膝と膝をくつつき合せるように坐った客人達で埋めつくされ、六畳間に

も溢れている。その人息切れと暖房とで、室内はむーと熱気を帯び、汗ばむほどだ。

闇の中を光線が走り、煙草の烟りがもうもうと立籠めている。すでに観客者はQ氏の振るまい酒にほろ酔い気分である。薄闇の中でお互いにビールを返盃し合ったり、清酒は冷のまま茶碗酒にしている。

酒の酔いと、暗闇で顔がはっきり分らない気安さから、観客達は率直な批評をし合っている。

「へたなブルーフィルムより、こっちの方がよっぽど刺戟があつて面白い」

「まったくすな、こりゃスゴイ。Q氏はグラビヤと分譲フオートから複写したといわれるが、こうやってスライドにして拡大してみると、オッパイのふくらみなどは、ドキリするほどの迫力がありますな」

「そりゃそうですよ。秘密映画の女優では、これだけのいい女は居ませんからね。顔がいいと軀が貧弱だ、グラマーだとおかめという女が多い——何しろモデルがお色気派の愛川悦子嬢ですからね」

「動かないのが、残念ですが、トリックにしては、よくできている。小道具にしてもあの手この手と工夫されて、とても奇クではこう

はできない、忽ち発禁物ですよ——」

「しかし、8ミリ映画のように、きわどいくローズアップがないのが残念ですな。わたしなどはストリップのカブリツキ組でしてね。何んといえますか、こう匂いがするほど近寄つて覗き込むのが好きなのだが、やっぱり悦子嬢の色々責められている部分の大写しがあれば、顔の表情がいいし、もっと気分が出るのだが……」

「そりゃ貴方、無理な注文というものだ。これは、もともと奇クのグラビヤ分譲フオートから複製して、手を加えられた作品ですよ——ブルーフィルムのような撮影を、奇クができるわけがない、あくま奇クは公開誌ですからな——」

画面に映っているのは、すべて悦子嬢の全裸緊縛図ばかりである。仰向した脚を上げたのや、四つんばいにされたヒップを高く掲げているもの、女奴隷のように平伏しているもの、変則的に正座させられているもの、いずれも動物的、屈辱的なポーズを強要されている。そのポーズに加えられる苛酷な縄目——その被虐美の顔の表情や眼の色、苦痛に反り返った手足の指先の動きにいたるまで、カメラは真正面から、斜め横から、背後から一つ

一つ刻明に被写体をとらえている。

それだけなら悦子嬢にも記憶のあるポーズなのだが、Q氏のトリックで色々淫虐な工夫が凝してある。浣腸を注入中の構図から、乳責めにあって異常に盛り上った胸乳に花切り鋏が迫り、硬直した乳首を切断される寸前のもの。中腰の足を跨ぐように坐らせたポーズには、その股間に一本横に鉄ロープが通されて、吊り上げられた綱渡りのような恰好にされたの。仰臥した裸像の足許には、意味ありげに皮を剥れたバナナや、半分に切られたバナナが転ろがっている。いつの間にか画面には裸体の男性タレントまで登場して、ブルーフィルムまがいのスライドもある。その外にも、ソフトこけしやキュウリなどの野菜類まあざっと、こういう調子の小道具が使用されている。それらはQ氏がカメラとポジフィルム、鋏とセメндаインを使ってトリックした苦心の作品である。

「正に凌辱寸前といった場面もあるし、性にもだえる御婦人の寝室シーンといったのもある。こりゃ生娘には眼の毒だね——悦子嬢。どうですか、御自分の芸術作品を観賞する御気分は?……」

黒い人垣の真中から、悦子嬢の悲痛な叫び

が聞えた。

「止、止めて——け、けがわらしい。悦、悦子、こんなもの知、知りません。あ、あ、結構です、止めて、止めて頂戴」

Q氏はその一瞬、スライドを切って、電灯を点けた。

酒気を帯びた好奇的な眼が一斉に、悦子嬢にそがれる。その欲情に燃え上った眼は、トリック場面のモデルが、本当に悦子嬢であったような錯覚を起している。いまにも画面の小道具を使って珍芸を見せてくれるのではないかと、期待しているかのようだ。

悦子嬢は八畳間の真中で、群衆に取囲れている。一メートル前後の坐卓を背負うようにして膝で立たされ、両手両足は背後に廻されて卓脚に拘束されている。

顔を蔽う自由も奪われて、真赤になった顔を伏せているだけである。いまは奇クベテラモデル嬢というより、羞しさに身悶えする一人の美しい娘でしかない。

その羞恥の表情は、始めてブルーフィルムを見せられた処女の狼狽に似ているようでもあるが、電灯が点けられた一瞬の悦子嬢の表情を、Q氏は見逃さなかった。彼女の濡れた眼は、屈辱と嫌厭に顔を隠しながらも、目醒

めてくる本能に、指先の隙間から盗み見しようとする好奇心——物に譬えるならそういう心理風景を覗かせていた。

酒精とスクリーンの興奮で、軀に火が付けられた観客席から声が上る。

「ただスライドを観賞し合うだけではつまらないじゃないか。せっかく悦子嬢もお見えになっっているんだ、早く長襦袢を脱いでもらって、奇クでは見られないところまで、たっぷり拝ませて頂こうじゃないですか」

五、裸体観賞

坐卓に拘束されている悦子嬢は、一同が仙術で呼び寄せられる間に、入浴させられ、入念なお化粧もされている。そのために亡妻の残した三面鏡と化粧道具が役立ったし、整理ダンスの中の和服も役立った。

いま悦子嬢はネグリジェの代りに、薄い紫地にピンクが混じった艶めかしい長襦袢に着替えられている。Q氏が悦子嬢のムードには長襦袢に腰のものという姿の方が似合うと思ったからである。

悦子嬢も酷寒の夜空を運ばれてくるファンに、より一層美人に見てもらいたい気持があったのであろう。奇ク誌上で見るより、濃い

目の化粧をしている。メーキャップされた眼もとには妖しい憂愁がただよい、鼻筋も控え目にお白粉で画き、口紅も小さく画いて、見えるほど美人に見える。

それが長襦袢の情緒によく似合い、濃厚なお色気を発散させている。長襦袢の襟元から雪白の胸が覗かれ、湯上りの肌は匂うように艶めかしい。裾も乱れて、すべっこい膝頭が頭を出し、内腿あたりの鮮かな緋色の湯文字がちらちらしている。

男たちは、悦子嬢を二重三重に取囲んで、もの欲しそうな視線と一緒に、熱っぽい溜息を吹きつける。

さすがに未だ直接手を出そうとはしないが、佇んで腕を組んだり、坐って畳をむしるようになり、中腰の首を伸したり、いずれも落着かぬ表情をしている。眼は悦子嬢に集中して、早く脱げ脱げと催促している。

観客達の一部は、悦子嬢の脱衣シーンに備えて、せかせかと寝室に消えていく。そこには尿意を満たすために、仙術で取り出された特大シャンペングラスが置いてある。

いずれ、それは重要なショーの小道具となるのだが、グラスは四斗樽の菰酒が楽々入ってしまふ大きさだ。直ぐ満水にするわけには

行かないし、その夜の出席者達はいずれも紳士ばかりで、煌々たる電灯下では、いくら酔っぱらった無礼講とはいっても、銀座裏のゴミ箱や裏町の板塀に立小便するような調子には行かない。そのために悦子嬢がお化粧をした後の移香の残った寝室が使用され、排泄台には机が一つ置れて、電気も足許が見える程度に暗くしてある。

室内は異様な熱気と興奮が充満して、息が詰まりそうだ。

人垣の前列に居た隠居風の老人が、柔和な口調でいった。

「それでは悦子嬢、そろそろ始めてくださらんか——皆様もお待ち兼ねだし、この年寄りにも一つ冥土の土産に、よい目の保養をさせて貰いたいもんだ」

「——あのう、全、全部ですか……」

今度は二十名が一斉に雁首を揃えて、坐卓を覗きこむ。

「そうだと、奇クスタジオでは、いつも全部、カメラマンに見せているんでしょう。ぼく達にもグラビヤや分嬢フォトでは写っていないところまで、見せてくれたっていいじゃないませんか」

「全、全部ですか——なんて羞しそうな声を

出さなくたって、悦子嬢、貴方、男の前で裸になる事なんて平気でしよう。奇クモデルを自分からお願した女性だ——つまり悦子嬢は露出性じゃないの。最初の裸は自分でも惚々とする乳房やお腹を眺めてナルシストの快感に酔うだけで満足していたかも知れないが——、お終いには着物の下に隠して置くのが惜しくなって、一人でも多勢の男たちに眺められたい、それにはストリップパーになるより、雑誌のモデルになった方が手取り早い。全国にばらまかれた自分の裸を男達が眺めている——その姿を想像すると貴女はたまらなくなる」

「そうだと、貴女は口では何んのかんのと云っているが、本当は脱ぎたくて、見せたくて耐らないのだ」

悦子嬢は、声のする観客席を取りすぎるような眼差しで眺めて、小さい声で言う。

「——で、でも、悦子。こんな多勢の殿方の前では未だ一度も……確、確かに悦子全裸のポーズが多ございますが、奇クの写真家の方は紳士的で……そ、それで悦子、安心してパンティを脱ぐ事ができるのです」

「それじゃ、俺達あ、皆んなケダモノだっていいてえのか」

そう伝法な口調で口をとがらせたのは、背中から手首まで真黒に入墨したフンドシ姿、一見でヤクザと判る男だった。

悦子嬢は、その恐ろしい人相に怯えて、身を縮ませる。

「い、いいえ、決してそんな……ただわたしこわいんです。知らない殿方ばかりの前で全裸ポーズを取らされるなんて……縛られた身体に、いたずらされないか、とこわいんです——悦子、誰の前でも平気で裸になるストリップーとは違います。そ、それにあのスライドのような真、真似をしたことも、された事も一度もないのよ」

しかし悦子嬢は段々妥協する前兆を示し始める。拘束された軀をもじらせて羞恥の姿体を見せてはいるが、少し顔を上げて、上眼使いに人垣を見廻すようになる。特定の男と視線が合うと、どぎまぎして眼を伏せてしまふが、悦子嬢の瞳は、いつもグラビヤ写真で見る、隠花植物のうるおいに濡れ始めている。自分の肉体の魅力が男をトリコにする。その優越感にかられ始めたのか。

仙人が一同を代表してキッパリ言った。

「悦子嬢——貴嬢の貞操は勿論保証するし、無暗矢鱈、誰もかれもという風には、貴嬢の

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

「モデル」 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

本誌のグラビヤ口絵は諸種の制約のために残念ながら思いきった編集が出来ず、折角撮影した華麗なる緊縛フォトが徒らに葬り去られて、マニアの皆さまの眼に触れないという実情であります。嘗て「美しき縛しめ」のアルバムとして限定版写真集刊行の輝やかしい歴史を持つ本誌が、ここにフアンの方々の要望と御期待に応えて、力作フォトを集成して、グラビヤ印刷によるアルバムを作成いたしました。

この「緊縛女体アルバム」は、若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさ最高度に發揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずか

ずを、画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。特に写真に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用するためにも写真面を一きわ大きくしました。

前記二嬢の豊満美と対照的に、更に清楚にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。この一冊にて四人の美女の裸身のすみずみまでが、八縛りVというアクションによって、フアンの皆様方の目の前に極めて鮮明な印刷によって展開されています。どうか一冊を机上にお飾り下さい。

軀にも触らせはしない、またムチ打ちや血を流すなど肌に危害も加えない」

「判、判りましたわ——」

悦子嬢は唇を戦慄せて、自分から悦ぐ事を約束した。

人垣がざわざわと揺れ動き、悦子嬢を取り

まく輪が縮まる。前列の観客は、背後から何本も腕が伸びて、強制的に坐らされる。知らず知らずに力が入り、肩に載せられたその他人の手を迷惑そうに払いのける者。一様に首を伸し、一センチでも近く悦子嬢のそばに近寄りたがる。

坐卓は部屋の隅に取片づけられ、悦子嬢は黒い人垣の影が尽きる真中の位置に、縄目を解かれて立たされている。

丸い肩から長襦袢が滑り落され、腰のもの一つになる。

男たちは余りの見事さに息を詰めて見惚れるばかり、しばらくは溜息も出ない。

丸々と盛り上ったボリリューム感も悩殺的だが、その惚々とする隆起の尖端にある乳頭的美観がまた耐らない魅力がある。苺のような乳頭と乳暈など直径五糎くらいはある。それが鮮かな臍脂色に色づいて、真白な雪肌だけに、眼にしみる。匂うように濃厚な官能美を発散している。

いまや興奮と官能のルツボと化した人輪の中で、悦子嬢は両手を当てがった腰をくねらせる。湯文字の上から身をよじって丁度靴下でも脱ぐ恰好で、ずり落したパンティを足の爪先から抜き取る。

「何んだ順序が逆じゃないかよ」

そのガッカリしたような声も、顫えて干枯びている。

悦子嬢はパンティより少しでも面積の広い湯文字を後にしたのか。豊満なふくらみと曲線をくっきり画き出している、燃えるような

緋色の腰のもの。それに白い艶々とした美肌が照り反えて見る眼に眩しい。

「——あ、あ」

これだけは許して、というような哀感と諦念の吐息が漏れる。やはり奇クスタジオで脱衣するようには行かないのか。訴えるような瞳で観客を見渡ししながら、悦子嬢は湯文字にかかった指先を顫らせている——それは見る者にとっては初夜の花嫁が床入りする媚態を連想させ、一層男たちの官能をくすぐる。

ついに最後の腰のものが落された。真紅の薄布が離れる一瞬、香水の匂いに混じって、湯上りのしっとりうるおった悦子嬢の体臭がほのかに漂う。

溜息とも唸り声ともつかぬ声が、熱気の塊りとなって悦子嬢の裸像に吹きつけられる。生唾を飲みこむ音。一様に眼は殺気立ったようになつて、異様な輝きを帯びている。

「ホウ、こりゃスゴイ。写真と違って、ものすごい迫力がありますね」

「まったく予想通りのグラマーですな。どこもかしこもむっちり肉が張って、下腹や内腿のあたりには真っ白な脂が浮いて——正に女盛り、百花満開という感じですな」

「こんな肉体美人を縛ったり、触ったりでき

る奇ク写真家がつくづく、あたしゃ羨しい。

あたしこんなスゴイ美人と一緒になら一晩百万円積んだって惜しくありませんよ——歌麿画くてっばう乳とは、こういうお乳の事を云うのですかね。いやまったくコリヤア、見るだけでは、おさまりませんよ」

「いいえ、御隠居さん……ぼくなんか、ブリジット・バルドーか、ソフィア・ローレンのヌードでも見ているような気がしてきますよ。どうです、あのボリリュームのある乳房の恰好ったら」

「でもさすがは、奇ク御自慢のモデル嬢ですな。ストリッパーのように手をバタフライ代りに使わないし、脱ぎっぷりにしても素人臭くて、いかにも恥しそうでしたが、こうしてじっと佇んでいる立ち振りなど中々お行儀がいい——さすが奇クで飼育されたというか、縄を受けるために教練された従順さが感じられますな」

観客達は実物を観賞する感動と興奮にかられて、思い思いに批評し合っている。男たちにすれば心から絶賛しているつもりなのだが女性にとっては眼と口による侮辱のように受け取れるのか、悦子嬢は膝頭を顫わせて、いまにも泣き出しそうな表情をしている。

Q氏はこういう場合、女性の両手は当然防衛本能の働きをするものと思っていたが、悦子嬢は叱られて廊下に立された女学生のように見える。いかにもきまりが悪そうな顔をして、直立不動の姿勢をしている。

男たちの視線は、眼には見えない縄の働きをして、身動きする事ができないのか。それとも、こんなポーズは奇ク撮影中に習慣となつてしまっているのか。

悦子嬢は単なるヌード写真を撮らせるためのモデルではない。彼女が脱衣する時は、緊縛美の対象となるためである。きっと悦子嬢は、両手の置き場所に困っているのではないか。そんな心配をしなくてもよいように、早く両手を緊縛されたいのではないか——Q氏は勝手にそう想像してしまう。

Q氏は脱衣から被縛までの間合いという呼吸という事について考える。もし仮りに辻村隆氏のような縛りの達人が、その夜出席していたら、悦子嬢との息が合い、即座に緊縛プレーに入られたであろうが、その夜の出席者達は、悦子嬢の余りに見事な肉体美に圧倒されてしまって、しばらくはただ茫然と瞪めているだけであった。

「悦子嬢はやっぱり猿轡美人ですな——サル

グツワをかました方が一段と興趣がわくのではないですか」

観客の一人が言い出して、Q氏は整理ダンスの引き出しの奥深くから、特製の絹風呂敷を持ち出してくると、

「悦子嬢——どうです、この風呂敷スバラシイでしょう」

悦子嬢の目前で、絹風呂敷を拡げて、その図柄を見せる。

悦子嬢はハッと狼狽して、羞恥に赤面した顔を逸らす。手は自然に布切を払い落す所作をする。

一同が覗き込んで、ニヤニヤ好色な笑いを浮かべる。——それは白い女体に、蛸の足のように何本かの赤黒い男の手足が搦んだ春画である。白い絹布一面に毒々しい極彩色をほどこされたグロテスクな絵だ。

「いまの悦子嬢のような姿じゃのう。よし、この猿轡はわしがしてやろう。これ悦子嬢この画のどの辺が気に入った。一番好きなのところが丁度唇に当るようにかましてやろう」

「いやっ！そ、そんなの、もっと別なのにして——」

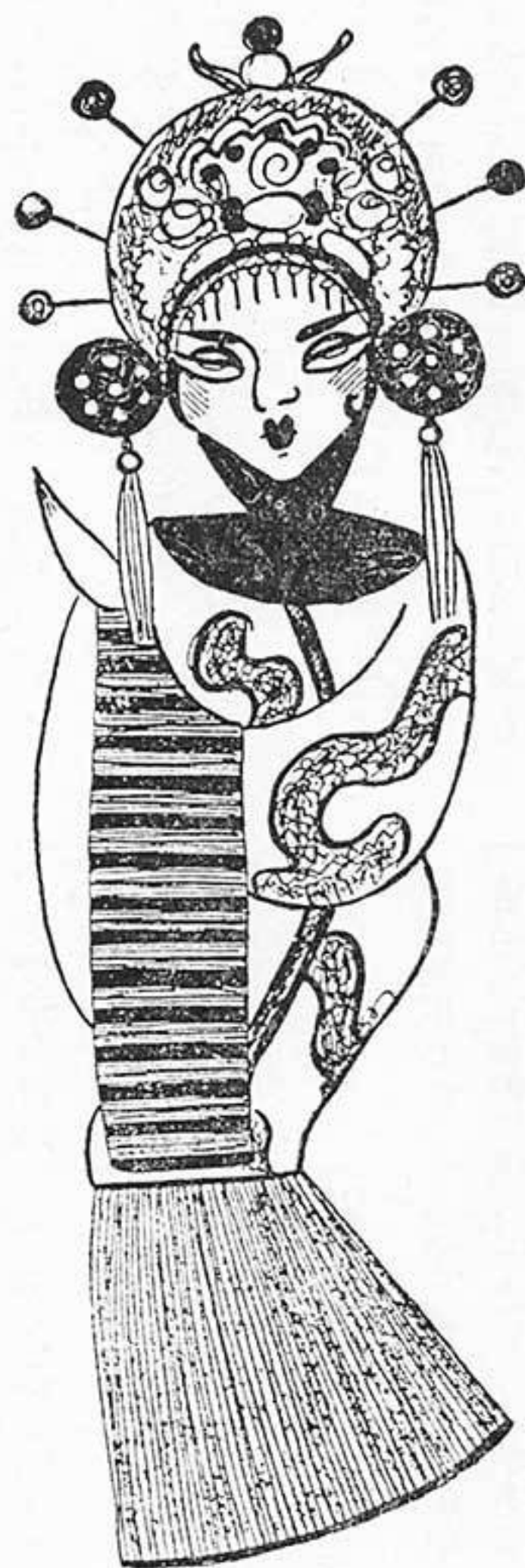
仙人は、まず両腕を捻じ上げて後手縛りにして置いてから無理やり猿轡をしてしまう。

「よう、悦ちゃん。大好き猿轡をされて一段と別嬪さんになったな。よう、もっと顔を上げて、画をよく見せてくれよ——フッフ、この女の顔、お前さんが縛られた時の顔によく似ているな。お前さんだって色男と乳くり合う時は、こういう画を、喜んで眺めるんだろ。——猿轡されてしまったては、折角の芸術も観賞できんだらうが——」

「う、うう、バカバカ」

猿轡された悦子嬢が物を喋べるのが、諸君はインチキだというか。第三章でも猿轡された悦子嬢が物を喋っているが、鼻端と口唇を蔽う程度の猿轡では発音は、或る程度自由なのである。そんな事は本格派の読者は、とうに知っているし、その夜の客人達にも、責めの愉しみは、苦悶する軀全体の表情の美しさと同時に、抵抗する悲鳴や嗚咽や哀願の言葉が聞えるところに面白味がある。例えば8ミリだって無音映画ではつまらなんでしょうという意見も出たが、悦子嬢の猿轡は、お化粧と一緒に、表情は一層妖艶になるし、聴感も楽しめるといふ二重の効果があつたのである。

(つづく)



— 耕土散筆 —

『落穂拾い』

〈其の七〉

保^{やす} 藤^{ふじ} 久^{ひさ} 人^と

29、HとYと芸術と

〈補足〉 (29) に関して

30、ウルトラ・シヨウ

31、七・三の美人

29、HとYと芸術と

英文学「ファニー・ヒル」の邦訳版が「ワイセツ文学」と決められて、責任者が書類送検されたと聞く。

またまた、検察官対文芸家の激しい論争舌

戦が展開されることであろう。

これは、今に始まったことではない。

「チャレイ夫人の恋人」に「悪徳の栄え」それに今後を予測される「ファニー・ヒル」を戦後の三大文芸裁判とでも言うか。

その都度、摘発、発禁に始まり、処分、処置に到るまで、作品の価値評価と判断基準が論議の的となり、雑誌や新聞などで騒がれて附随し廻る。

いわく〈芸術〉か〈ワイセツ〉か——と。

しかし、それを決定的に定義づけるものはないというのが、識者の意見のように思われる。唯、結果的には「有罪」と判決されることが多いが、それでも実際には、各国の、歴史・宗教的思想・道徳・国民性などによって異なる、というのが実情のようで、従って、時代により判断や解釈も違ってくるものものうである。

そのなかで、特に興味のあるのは法律（裁判官・検察官）と文芸（文学者・芸術家）の間に、いくつかの、根本的な対立点を見出すことであろう。

司法側は「社会の不況や生活的不安が深まり、退廃ムードが流れると、必ずワイセツ文書が氾濫する」と、明言し

文芸家は「政治緊張が高まり、その收拾に苦慮すると、必ず芸術作品がワイセツなりとヤリ玉にあげられる」と、反撓する。

法律は「現実」の秩序を重視し、判断の基準を「結果」におく。

文芸は「動機」を尊重し、現実より一步先んじた「未来」への可能性を追求する。

法律の「ワイセツ基準」は、原則として、「部分的描写」をもって「全体」に及ぶ。

文芸の「部分的描写」は、それによって、「ワイセツ」を健康的に昇華し、作品を芸術の域にまで高めようとする。

このような相違点がいくつもある。

結果的には、何となく「水掛け論」の要素があり、決定的な解決に到るのは、ほど遠いような気がするのだが――。

それはそれとして、刑法のいわゆる「ワイセツ三条件」は

「①性欲を刺戟し、②羞恥心を与え、③良風美俗を害する」と、というのが定義のようである。

『ワイセツは万人共通の心理で、それ自体に罪はない。また、感じ方も、人・時・場所によって異なる。従って、作品には何の関係もなく、販売陳列の方法が問題なのだ』

『部分的なワイセツ（性的）表現を摘出して妄想を起こす方がいやらしくてエッチだ』

『H（エッチ）とY（ワイ）を、イコールでつなぐのはおかしい。Hはもともと変態的なあくまで異常的なものだが、Yは人間の心身の、健康であることの象徴といえる』

『作家の創作態度（動機や心構え）が問題になるが、芸術作品ならば、たとえ反社会的、非倫理的であっても、読者の、読後の感じ方や行動まで、作家の責任になるものでない』

『大体、性文学が青少年に読まれた場合、すぐに、行動への教示になるかのように、早合点するのがおかしい』

『過去の例をみても、文学がワイセツ罪とされるのには、社会環境に関連があり、歴史的にみても、政治的緊張のただよっている時代や、青少年非行が増大しているという社会の背景があったようだ』

△補足▽（29）に関して

戦後続出したかずかずの雑誌、その中に、「夜話」石神書店発行」というのがある。

二十四年九月号は特集「世界名作・性愛奇

書」と銘打ってある。

十六、七篇の紹介で、内容はとり立てていうほどのことはない。が、その冒頭に

「性愛奇書巻頭言」として、矢野目源一の一文があるので、要所を抜萃してみよう。

『文学は政治でも倫理学でもない。文学の対象としている内容を、そういうものと混同して批判するものがあつたなら見当違いも甚だしい――』

『世に、性愛の書と呼ばれる幾多の文学がある。カーマストラ以下遊仙窟、デカメロン、カザノヴァ情史、サド諸作品、ファニー・ヒル、ガミアニなどが一括してこの中に入れられているが、これらは皆、啓蒙の書であり、小説稗史であり、実録である。唯、取扱われている対象が異っているのに過ぎない』

『従来、非文明国家ほど、青少年を誤まらせる害毒の書として禁断して来た』

『たとえば、どんなことを対象にしようとも、それが、芸術として昇華されたものであるならば、不当に弾圧を加えることは、その時代の役人乃至、社会の不明である』

『どんな本でも、読んで悪いというものはないはずだ。と、これはゲーテの語録にもある』

『これらの本によって誤まれる青少年より知識のない人間の悲劇の方がはるかに大きいものなのだ。私は本誌の奇書紹介に、心から賛同する』

『禁じられたなら隠れてでも読むがいい。訳していけないというのなら、原文で読めるように勉強するがいい。フランス最大の劇詩人……若き日のラシヌは、僧院での教育中に厳禁の書「ダフニスとクロエの恋物語」を何度も没収されながら、最後に、暗記しましたからもう入りません。と、その本を僧院長に提出したという逸話をここに述べて、性愛文献を渉猟する人びとを激励する』以上――。

30、ウルトラ・ショウ

堅苦しい話は、これぐらいにして、今度は少々やわらかく、ストリップ談義とシャレしてみよう。

最近、ストリップ・ショウに関する話題を非常に良く耳にするようになった。

一種の時代逆行現象でもあろうか。別段、今更、ヌード・ショウに対して、認識を新たにした訳でもあるまいとは思うが――。

要するに、問題は、その「露出過多」にあるらしい。

私の知友なども、正月の某日、某所で……と、そのウルトラぶりに対しての驚きを、面白おかしく、その場の状況を手振り宜しく聞かせて呉れたものである。

宣伝に歌いあげている文句が△超特出▽。つまり△特・出▽にも△超▽がつくようになり、そのようなウルトラ級でないと、客足を、魅きつけることが出来ず、公演がさびれる、という訳なのだ。

元来△特・出▽は、関西地方の専門(?)だったようで、ショウ内容のドギツさは定評らしく、そうと気がついて注意すると、近頃は関東地区の劇場やミュージックの広告に、必ず、と言っていい程『関西ストリップ』という文字がついている。

『関西』という文字は、「過度露出」の代用語のようなもので、少くとも△特・出▽という、その文字の本来の目的を意味しているらしいのには、今更ながら驚き入る。

考えてみると、ストリップ演芸界も有為転変。当局の取締りと、観客の要求――その、需要と供給のアンバランスで、いくたびか、存亡に関するほどの危機的な時代をむかえながらも、それを乗り越えて来たものだが、ふと、それを思いみると、まるで、世相をその

ままに反映しているような部分が多い。

ウルトラ級は過去にもあった。

数度の取締りに会いながらも、顧客の熱烈な(?)要望に答えて、遂には検挙され、実刑を言い渡された踊り子さんもある、と聞いている。

それが、東京オリンピックの聲が高まるのに比例して、極端な圧力のために、確かに、一時ながら影を潜めたように思う。

が、オリンピックは終わった。

そして世の中は、その浮かれ景気の反動的余波……虚脱状態のうちに、深刻な不況に見舞われ、社会不安がつきまとい――。

するとまるで、その不況を迎合するかのようにウルトラ級が輩出して来たのだが、これもまた、世の流れ……不安ムードの漂う環境の内にいる人心からすると、当然の結果ということも出来そうだ。

ある落語家が、こんなことを言っている。

『不況など、社会的に不安のある時代には、奇想天外なものや、荒唐無稽の「金儲け術」のようなものが喜ばれ、逆に、世の中が平穏だと、ばかばかしいと相手にされない』と。

馬鹿馬鹿しさには何時の場合も変りはないのだろうが、聞く人の心理状態で、それが、

「笑い」となり、或はまた「憂い」となるのであるうか。

不況と好況では、「笑」の質にも変化がある、ということだが、如何にも穿った見方だといえそう。

最近のストリップ界のウルトラぶりも、この辺りに真因があるもののように思える。

不況・値上げ・生活不安と、加うるに頹廢ムード。やりきれない人びとは、なんらかの「超刺戟」で、心理的な慰安をと、一種のウサ晴らしをしようとするのであろうが、それに適した△公認展示物▽がストリップ・ショウだといえぬこともない。

確かに、若い女性のハダカ姿は、男の心に軽い欲心を湧き出させ、その時には、心のウサを忘れ去るほどの快よい刺戟を与えて呉れるものなのだが――。

私は俗物なので、ご婦人のヌードは到って好物。このところは、別に理由はなく、何となくごぶさた続きで、最近の実態には接していないが、以前は臆面もなく、前の方に陣取って拝観させて貰ったものである。

確かに、カブリッキで Labium minor (ラビウム・ミノール) の表情が窺がえるような△超級▽を、眼の当りにして

「成程、なるほど……千差万別!!」

などと、ヤニ下がるのも、楽しいには楽しいに違いない、とは思ふ。

しかし、そのような状態になると、最早やエロでなくグロ……美が感じられず、人間のいやらしだけが浮き上ってくるのではないかと、ふと思ふ。

熱狂的な客の希求——その通りには違いないからう。が、ショウ(?)を演じる彼女たちは、こののち、一体何をストリップ(脱ぐ……剥ぐ)するつもりなのだろうか、と、奇態な、言い知れぬ寒々とした物悲しささえ覚えるのだが――。

既に夢的な美は、無残にも敗れてしまっている。更にこの上の△超▽ともなれば――。

彼女たちは、それこそ「生体解剖」……白い弾力のある腹部、その正中線を断ち割って中味まで見せなければならなくなる……のではなからうか——と。

同時に、続出して見せ場的になりつつある彼女たちの心理動向に、異常味のある露出趣味的風潮が蔓延して、それが「過多」ウルトラの一因では……と、妖しい期待と共に深い興味を覚えるのだが――。

31、七・三の美人

ひところ、美人の体型を、「八頭身」として、大いにもてはやされたものである。

確か二十八年、日本女性が始めて「ミス・ユニバース」第三位という栄誉を獲得したための産物だった――。

欧米(白色人種)女性を畏敬するという思潮は戦後の一特色であり、その思想が、世界第三位という事実に向直して更に強度となり「八頭身」を憧憬的態度で眺めて来たものであるが、正直に言つて、欧米人とは體質的に劣るわれわれ男性は、その美的観に多少の疑義を抱き続けて来たのではなからうか。

日本人には、日本人にふさわしいゴールデン・プロポーション(理想体型)があるはずだ――。

ところが、意外に早くから、その解答が出ている。

七・三——これが理想体型だという。

つまり、日本女性の均整美の定義ということになるらしい。

このことは、もう、世の女性がたにとって常識内の事柄で、今更、仰々しく書き並べては、認識不足と笑われそうだが、案外に、

知られていないような気もする。

ゴールド・プロポーションに対するデーターは、17歳から24歳までの近代女性の細部計測によるという。

人体を、美学的に解剖して得た指数、というものがあり、その指数をもとにして、日本女性のデーター的計測を分析した結果、出た答えは「七・三頭身」即ち、日本女性の美人体型が生み出された。

身長一六二センチ。体重五〇キロ。

バストライン 〓八五。二頭身の位置。

ウエストライン 〓五九。三頭身の位置。

ヒップライン 〓八九。1/2身長位置。

アンダーバストライン 〓七二。

以上（寸法はセンチ）が、理想的な各部位のバランスということ、これに相当する知名人は、桑野みゆき（女優）だという。

データーによると、この理想体型に該当する女性は、全体の四乃至五%という僅少さで年令的には20歳の女性が圧倒的に多い。

が、この計測値を見て、ふと、美人的要素を自分の身近かなものに感じるのは、私だけでないだろうと思う。

「八頭身」は縁遠い……というより、まるきり異った人種のように思ったものだが「七・

三頭身」なら、憧がれるのにふさわしいような気がしてくる。と同時に、現実的な「均整美女」のすがたかたちを、脳裡に浮かび上げせることも出来る。

このような想念は、非常に楽しく愉快なもので、女体の美を、この上なし、と愛でる私など、忽ち、嬉しくなってくるのだが――。

●七・一頭身――身長一五二。

バスト八〇 ウエスト五六 ヒップ八三

●七・二頭身――身長一五七。

バスト八三 ウエスト五八 ヒップ八六

●七・四頭身――身長一六七。

バスト八八 ウエスト六一 ヒップ九一

× × ×

新年の紙上で、日本画家堂本印象が、美人の要素について次のように言っている。

『――本当の美人は、単に顔だちのよさなどでなく、いろんな要素が必要です。』

教養、挙措動作、スタイル。声も大事で、話しぶりにリズムがあり、言葉使いがいいということ。それに、美しい人は良いにおいがある――』

画伯の言葉の中で、美人と芳香を結びつけ

ている点などは特に注目してもいいと思う。『――何処かに美点があれば、他をカバーすることも出来る。長所によって短所を補う。これもまた、美人への要素です――』

また外国女性（洋装）と日本女性（和装）を対比して、次のような発言をしている。

『外国の衣類は配色が大柄。素肌を引き立たせる「肉体の美」日本の着物は小味で複雑。全体が美しく、生み出す「形態の美」――』

各人の好みにもよるが、和装の容姿に、言い尽せぬ「美」を感じるのも、日本人であるが故の古来よりの伝統的な郷愁なのか――。

× × ×

再び本題に戻って、定義的美人体型＋アルファ（各要素）した結果は、全体の15%弱だという。数字的に見て美しいお方は少ないといえそう。だが、世の中はうまく出来たもので、個人的な好みや、順応性も加わり、結構楽しく暮して行けるものようである。

実際に、人間の美醜とは関係なく微妙な結びつきも生じてきて、愛憎以上のものさえ芽生えてくるものだが、この辺りが、人間関係の妙味とでもいうか。アブの萌芽もまた、そのあたりにチラホラしているように思えるのだが――。

ポケットブックに発見した

M的小説のクライマックス紹介

河津 安 春

「魔女探求者」

ファビアン文庫

題名だけを見ると、中世紀の物語を想像するが、実際は米国ヴァージニア州、フォートマクビーと称する田舎町を舞台にしたもので、時も一九五九年と現代である。町の風紀粛清を叫ぶ、狂熱的なリーダー、クラリッサ・トムソン夫人が題名の魔女探求者で、町の書店を臨検しては、性に関する書籍を撤回せしめたり、売春の疑いのある未亡人に、集団でリンチを加えたり、一時は道徳を守る清教徒の代表として、町を風靡するが、新しい思想の持主である牧師夫人が現われるに及んで、

一敗地にまみれて退却する。

何うも、このファビアン文庫が、社会の風紀を害するものとして、最高裁判所に採り上げられた事に対する反論として、書かれたものようである。中世紀の魔女探求の残酷さを永々と記述したり、性的書籍の有用性を論じたり、又、文体をわざと古風にして見たり最初通読した時は、混乱して何の事だか判らなかつた。私がここに紹介しようとするのはそんな事には関係無く、『女の館』の経営者ダイアナが、自分の部屋にベッドの代りに、巨大な玉座を置いている事や、町の保安官の秘書、醜い老嬢のイネスが歪められた性欲の為に、遂に保安官夫妻の寝室に一個の道具として登場するに至る事である。

ダイアナは学校を卒業すると、生れ故郷のフォート・マクビーに帰って来てダイアナ・ダンスクラブを開業する。ダンスフロアはあるが、実際は売春の家である。先きに記したように、ダイアナの室は、他の女とは異なりベッドの代りに玉座が置いてある。つまり彼女はサデイスチンである。ダイアナの理想はノーマル、サデリスト、マゾヒストの為に、三種類の室を完備したいと言う事である。……あと十分で閉店だわ。ダイアナは人気の無いフロアを眺めて考えた。そうだ、未だ一人、エド・ゲートが二階のマジの部屋に残っている。何を、グズグズしているのだろう。ここ数カ月、毎月決って二度、彼は通つて来る。この辺で彼にも一度、私の映画を

せてやった方がいいかも知れない。

ダイアナは、彼女の目当てに通って来る客が、まだ余り多くは無いので少し淋しいと思っている。理想としては、毎日一人、客があればいいのだけれど、否、もっと多くても構わない。そうすれば、私は大威張りで言うてやる事が出来る。今夜は駄目よ、お帰り。帰って私の夢でも見ておいで。私の事を夢見て、悶えあかすといいわ。来週、もう一度来て御覧、もしかしたら、手が空いているかも知れない。約束はしないけどね。でも、若し貴方が私の言う事をよく聞く、良い子だった

ら来週来た時に、特別に私のスケジュールに組んであげてもいい事よ。こう言って追い出せたら、どんなに良い気持ちだろう。

その時、エド・ゲートが階段を下りてくるのが見えた。

「ゲートさん。私の部屋へいらっしゃいよ。

良い物を見せてあげますわ」

ダイアナは、彼を客間へ連れて行った。プロジェクターもスクリーンも、既に予定の位置に用意してある。スクリーンと客の座る椅子の角度も、実験済みである。ダイアナは今日到着したばかりのフィルムを、映写機にかけると、電灯を消した。未だ編集を

ートを見下した。高慢ちきな、人を軽蔑したような表情を浮べている。ダイアナの視線は彼の目を捕えて放さない。再び正面に向き直ると、両脚を大きく踏み開き、腰に両手を当てて勝ち誇った笑みを浮かべ、彼を見下す。その姿勢のまま、映画が終る迄、ずうっと彼を見据えている。

ダイアナは、横目で、ゲートの表情を観察している。そうだわ、この男の目。畏怖、渴望、崇拜の念に満ちている。こいつは、私の物だわ。

突然、画面が消えて暗黒となり、再び灯りが点じられた時、丁度、画面と同じように、本物のダイアナが立ちはだかり、腰に手を当てて、彼を見下していた。ゲートは彼女の目を見返えず事が出来なかった。彼の目は気弱く女の目を避けて、足許に移り、目瞬きをすると、今度は彼女の腰の辺りに視線を向け、又、足許に向った。

さあ、ボツボツ降参する頃だわ。この男は私の眼を見る勇氣も無いらしいわ。私の肉体をもっと良く見たい癖に、憶病そうにモジモジしている。おちびちゃん。お前は私が怖くて、不安で堪らないのだろうか？ そうそう、もっと汗をかくといいわ。



「魔女探求者」の表紙

カッチリ二分間、彼女はその俛の姿勢で、彼を見据えていた。男も、まるで麻痺したように動かない。彼女は一步、彼に近寄った。男はピクツとして、両手をだらりと下げた。彼女は更に近寄って、ハイヒールの爪先きが男の靴に触れた所で立ち止まった。男は未だ上を見る事が出来ない。彼女も黙って、男を見下している。ようやく男が眼を挙げた。身体が少しふるえている。

もう、これ位でいいだろう。急がなくて大丈夫。釣針にかかった魚も同然、滅多に逃す事ではないわ。

「この次には又、異ったフィルムを、お見せしますわ、ゲートさん。今の映画、お気に召しまして?」

「キ、キ、気に入りましたとも。全く素晴らしかった。口には言えない位です。本当に貴女は美しい。来週、又、来ますよ」

「アラ、ゲートさん。貴方、二週間に一度の予定じゃありません?」

「ええ。だが一週間に一度にしても、多過ぎるとは言えないですね。人生は一度きりなんだから」

男は弱々しく笑った。ダイアナは彼の頬を軽く愛撫して送り出した。

ダイアナはベッドに横になると、幼馴染みのロッドの事を考えた。私のフィルムを見せてやった時の、彼の顔。私に参っている事は確かだわ。それなのに、何故、私の足許に身を投げ出さないのか知ら。彼自身のプライドが許さないのか、或いは、仲間の男達が、彼を私の足台にするのを、妨げているのか、それ共、子供時分から、お互いに知り尽している私を、今更、愛の女神として崇拜する気にならないのだろうか。いいわ。私はこの誘惑を続けてやる、ロッドのように遅ましい、ハンスムな青年が、私の奴隷になったら、どんなに素晴らしいだろう。私の脚を崇拜して喜んでいる常連もいるが、彼等は、私がその弱点を利用して、奴隷にただけで、本当の征服とは言えないと思うわ。もし、私より美しい愛の女神が現われたら、彼等は忽ち、尻尾を振って、そちらへ行くだろう。だけど、ロッドは違うわ。若し、彼を奴隷にする事が出来たら、これは私自身の力で創り出した奴隷で、永久に私の物だわ。私もロッドが好きだけど、普通の男女の関係なんて真ッ平だわ。私の奴隷にするか、さもなくば無よ。

ああ、彼の柔かくて熱い唇が、私の足の裏にあたる。湿った唇が、私の脚を愛撫しながら、

ら、だんだん上に登ってくる。素敵だわ……

エド・ゲートは、ダイアナのような女に、出逢ったのは始めてであった。若い時、シェイクスピアの『ヴィナスとアドニス』を読んだが、昂奮の余り身体ふるえるのを抑える事が出来なかった。彼の理想は、このような男女関係だった。能動的な、遅ましいヴィナスに愛撫される可愛い小さなアドニス。

彼の妻、キアサリンも、若い頃はアトラクチヴで、ゲートには、理想のヴィナスと思われた。だが夜のベッドでは、まるで灰のように味気無かった。妻を刺激しようと、マゾッホや、アグリッパ、セミラミスやルクレチアと、色々妻に話して見たが、全然、興味を示さない女だった。

エド・ゲートにとって、こんなに一週間で、永く感じた事は無かった。約束の日には、まるで青年のように昂奮して、ダイアナを訪れた。彼女は満足気に笑って彼を迎えたが、態度は尊大であった。

「まあ、ゲートさん。ふるえてるんじゃないの。あの晩から、きつと、よく眠れなかったと思うんだけど、そうじゃなくって? 嘘を言わないでよ。でないと、今夜の約束は取消すわよ」

「嘘は言わないよ、ダイアナ。夜もよく眠れなかったし、ものの五分間も、貴女の事を考えずには、いられなかったよ」

「おや、お世辞のうまい事。じゃ、私、仕度をしてくるわ。二分後に、私の部屋へ来て頂戴。そんな着物より、もっと良い物をバスルームに用意しているから、着換えて、待っていてね」

二分後、ゲートは、そわそわしながら、ダイアナの部屋に向った。ダイアナは居なかった。部屋にはベッドも無かった。正面の壁に沿って、高い床があり、その上に大きな玉座が置かれていた。床には熊の毛皮が敷かれていた。それ以外、何一つ無い裸の部屋は、胸が締めつけられる程、壮厳であった。

バスルームの扉を押すと、ローマの奴隷が着るような、小さな布片と腕環が置かれていた。彼は裸になると、それらを身に付けた。ダイアナの如何なる気紛れにも、もう逆う事は出来ないのだ。

部屋に戻ると、ゲートは、扉の側に踞まった。その時、どこかに隠されているスピーカーから、柔らかな音楽が流れて来た。玉座の左側の扉が静かに開かれて、ダイアナ女王が這入ってきた。輝やくような金髪の上に王冠

を着け、足には宝石を鏤ばめた踵の高いスリッパを穿き、紫色のガウンの裾を長く、引いていた。彼女の身体の前は、何一つ着けていなかった。全くの裸身であった。本能的にダイアナの欲する所を悟って、彼女が誇らかに階段を昇る間、ゲートは奴隷のように跪いていた。

玉座に腰を下したダイアナは、傲慢な態度で、ゲートに前に進むよう指で命じた。ゲートは尊敬の念をこめて、ゆっくりと前に進んだ。血が上って、頭がズキズキしていた。

奴隷は女王の足許に跪いた。女王の真白な腿が次第に開いて行くのを、奴隷は息をつめて、見つめていた。やがて秘宝が目前に現示された。女王の優美な声が、更に次の命を下した。奴隷は直ちに命に服して、頭を差し延べた。焦れ求めるものに、その唇が触れるまで。女王の指が、彼の頭髪を握り、豊かな腿が彼の顔を強く挟みつけた。まるで電動バイスに締めつけられたように、奴隷は感激の余り、気を失って行った……。

町の公衆プールで、エド・ゲートの息子、ハロルドと、その友達が遊んでいる。ハロルドは女友達のロリーナに夢中である。

「俺はロリーナを見ていると、堪らなくなる

んだ。あの日焦けした脚と、素晴らしいヒップを見ていると、俺の血は沸るようだ。ああロリーナが、ここへやって来て、あの腿にキスさせてくれたらなあ」

「お前、少し変だぞ。変態だぞ」

「馬鹿を言え。これ以上、自然な事があるものか。俺はロリーナがくれる物なら、乾いた物でも、湿った物でも、何でも喰べるよ」

「お前の親父のようにかい？ お前の親父がダイアナのを喰べてるって事、皆知ってるぞ。お前も親父と一緒にだな」

「ロリーナに関する限りは、お前の言う通りだ。だが親父とは違うよ。親父は金を払っているんだから、あれはビジネスだ」

「親父の事、恥しく無えのかい？」

「つまらねえ事を言うなよ。男と男なら変だけど、男と女の間じゃ当然の事じゃないか。親父のするようにしない奴の方が、むしろ変態だと思うよ。見ろ、あのロッドを。とうとうダイアナの所へ、通い始めたじゃないか。女殺し、この町一番と言われた伊達男、ロッドがよ」

「うん。プールのクラブに貼紙がしてあるのを見たよ。面白いんだ。ハロッドは、いつ何ときでも、女王のPUSSYを飲む御用を相

い勤めますV^毛のついたパイの御用は御座
いませんかV^済むと、俺はいつも歯医者へ
行くんだ。髪を刈ってもらいになV^未だ他に
も色々あったよ。だから、ロッドは恥しくっ
て、プールへ顔出ししないようだ」

あれ程、頑固にダイアナを拒否して来たロ
ッドが、どうして彼女の前に跪いて奴隷の誓
いをしたのか、ダイアナはクラブの女に聞か
れると、次のように話す。

「ロッドは随分強情だったわ。私も彼を好い
ていたけれど、彼はそれ以上、私を愛してい
たわ。でも私は、私流の条件で、彼を愛した
かったの。判るでしょう。」

私の肉体を武器にして、彼を興奮させ、魅
惑して、私の足許に跪かせようと、随分永い
間やってみたけれど、この馬鹿男は仲々降参
しないの。

所がある日、いい事を思いついたの。それ
はね、透明で、とても強靱なプラスチックで
パンティを造る事なの。上にジッパーをつけ
て、小さな錠をかけるの。次に彼が来た時、
私のヌード映画を、彼が一心に見ている間に
着物を脱いでこのパンティを穿いたのよ。映
画が終った時、私はこの透明なパンティをつ
けただけの姿で、彼の前に立ってやったの。

彼はその時、目を丸くして私を見ていたけれ
ど、そのうちに段々呼吸が荒くなっていって行くの
が、よく判ったわ。そこで私は頃合いを見て
ヒップを悩ましく揺すってやったの。すると
この馬鹿男、とうとう椅子から下りて、床に
手をついて四つ這いになったじゃないの。そ
して顔を私の脚の間に差し入れて、何とかパ
ンティを脱がそうとするんだけど、駄目で
しょう？ 今度は頼むから、パンティを脱い
てくれと言い出したわ。勿論、頭からはねつ
けてやった。仕舞いには頭に來てしまったロ
ッドは、泣き声を出して、舌でパンティを破
ろうとし始めたわ。あんなに威張っていた男
が私のP U S S Yを喰べようと、氣狂いのよ
うになった姿を見ているのは、凄いスリルだ
った。でも私は許してやらなかった。ええ、
待たせてやったの。こんな連中には、待たせ
るのが、最良の方法だって事、知ってるでし
ょう。待たせれば、待たせる程、夢中になっ
て追いかけて来るものよ。

今の彼は、私の玉座の前に跪く奴隷達の中
でも、最も熱情的で、最も柔順な私の所有物
になり果てたわ。私が永い間、こうしてやり
たいと思って居た場所に、やっと彼を置いて
やったのだから、私にとっては全く素晴らし

い経験だったわ」

……朝の九時である。保安官事務所で、秘
書の老嬢、イネスは不味そうにコーヒを啜っ
ていた。保安官のスチルナーは未だ出勤して
いない。イネスにとっては、この事務所に保
安官と二人だけでいられる間が、一番嬉しい
時間なのだ。何故って、その間だけは、男と
二人っきりで、一つの部屋に居られるのだか
ら。イネスは男とデートした事が、一度だけ
あった。しかも町一番の伊達男ロッド・アン
ダーソンが相手であった。それもロッドが、
仲間を相手に、町の女なら、誰とでも寝て見
せると賭けをした揚句、白羽の矢が彼女に立
ったのだ。彼女は何の躊躇も無く、ロッドに
処女を捧げた。暗闇の樹蔭で、『イネス、君
は素敵だ。愛しているよ』と言ったロッドの
声は、醜い老嬢イネスの胸の中に、一生涯、
抱きしめていられる貴重な想い出を、残して
くれた。それ以後、彼女は男に誘われた事が
無い。金があれば上流階級の夫人のように、
ジゴロでも買うんだけど、彼女のような貧し
いB Gには無理な話だ。一層のこと、街路へ
出て、男の手を引いて見ようかと思う時もあるが、そんな事したら大変、忽ち町から追
い出されるだろう。

保安官スチルナーが出勤して来る。

「未亡人のルスが昨夜、痴漢に襲われてね。調査で暇取ったよ。可哀想にルスは、恐怖で半狂乱になっているよ」

「恐怖ですって、スチルナーさん？ 私には天国だと思えますけど」

「イネス、そんな言い方は危険だよ。男達が皆、君を自由に出来ると思うかも知れない」「スチルナーさん。貴方は私の好きな男性の一人です。尊敬するたつた一人の男性です。貴方とでしたら、私どこへでも御一緒に参りますわ」

「イネス、私の立場を考えると、君の希望に

限定版写真集 第七集

発売中！

限定版写真集 第八集

発売以来大好評で、お申込み殺到しております。未見のお方は、何卒今すぐお申込み下さい。折返しお送りいたします。

△美しき縛しめ▽ 第七集

刺青の魅力を探ぐる

一部 一〇〇〇円 略号△美7▽

△美しき縛しめ▽ 第八集

女斗緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号△美8▽

応える訳には行かないよ。君は今迄に何度となく、私にヒントを与えてくれた。だが私は家内に充分満足している。だから君の要求に酬ゆる何ものも無い訳だ」

「私は、何も要求をしていませんわ。私の全部を投げ出しているだけです。昇給も、贈物も、ローマンスも要りません。貴女の奥さんと同じ様に、扱って欲しいとも言いません。只、私を喜ばせて、夢中にさせて下さい。私を陶醉させて欲しいだけです。そうだわ、スチルナーさん。貴方が家庭では絶対に味わえない、特別な事をして差し上げますわ。或る女にとっては、地獄のような事も、他のある女には天国になる事もあるのです。私、今すぐ、その天国に行きたいのです」

二人の遊戯は、偶然、買物帰りに事務所に立ち寄った保安官夫人、オーガスタに見られてしまう。

その夜、帰宅した保安官は大変だった。待ち構えていた夫人は、良人の耳の側で、叫び泣き、怒り、逃げる保安官を追って、家の中をぐるぐるつけ廻した。賢明な保安官は、夫人が少し落ちついた所で、弁明を始めた。「今迄、一度でも、君が厭になったと言った事があるか？」

夫人は黙っていた。

「なあ、オーガスタ。僕は君が好きだ。ずーっと愛して来たよ。これからも愛し続けるだろう。君は素敵な奥さんだよ。非の打ち所のない奥さんだ。料理も上手だし、パーティに出ても、僕は何時も、君の優雅な態度を自慢に思っている。ベッドの上の君も、素晴らしい。君に支障が無い限り、殆んど毎晩、君を愛して来た。過去において、君の要求を、一度でも拒絶した事は無い筈だ。これ迄、イネスとは、全く関係の無かった証拠だよ。僕は毎日の食事と同様に、君とは離れる事は出来ない。実際、君の部屋に、一日に三度も行った事があるだろう。」

だが誰でも、食事の後で、デザート欲しい事もあるものなんだ。然し、デザートが欲しいからと言って、汚らしい女の所へなんか、一度も行った事が無いのは、君も知っている筈だ。その点、イネスは清潔で、安心出来るよ。醜い彼女を、男達は誰も相手にしないからだ。だから……おい、どうしたんだい？ そんな顔をして」

「私は食事で、あの女はデザートだと言うお積り？」

「待ってくれ、オーガスタ。別の言い方で説

明しよう。いいかい？ 君も僕も、よく考えて見れば、セックスについては、旧弊だと思ふよ。そうだろう。腰から下は、汚ない物と教えられて来たんだ。僕は君に、その唇で僕を愛撫してくれ等と、言った事も無いし、仮令君がそう言っても、僕は拒絶するだろう。そんな事をしたら、君を愛し、尊敬する事が出来なくなる。同じように、僕も君を唇で愛撫した事は一度も無い。ダイアナが男達に要求するような方法ではね。然し、そうすれば風変りな喜びがあるだろうとは、想像していた。君はどう言うか知らないが、女の方も同じだと僕は思っている」

夫人も、良人の愛は変わっていないと判り、段々、落付いて来た。

「貴方の言う事は判ったわ。でも矢張り厭よ。私達は是れ迄、何もかも一緒にして暮して来たのよ。それなのに、貴方が一人、私に隠れて、コソコソするなんて厭な事だわ。その間、私は一人ぼっちになる訳よ。貴方の魚釣りに反対するのも、その為よ」

「君を一人ぼっちにしない方法があるよ。今思いついたんだがね。入口の所に、寝室が一つ、空いているだろう。その部屋をイネスに貸してやったらと思うんだが」

「ジョン……一体、何を言い出すの？」
「二人で分ちあうのさ。僕のデザートを、君にも喰べさせてやうと、言う訳さ」

「ジョン！」

夫人は悲鳴を挙げた。

「厭らしい。私はレスビアンじゃ無いわ」
「勿論、違ふさ。だが先ず、イネスを女とは考えない事だな。二つの唇と舌のセットだと思ふんだ。いいかい、蛇のように、唇の間から、自由に突き出したり、引っこめたりする事を知っている舌と、君を有頂天にする喜びを、どうすれば与えられるかを、よく知っている唇だと思ふんだ」

夫人の息使いが、弾んで来たようだ。

「それなら、イネスが女でも構わないわ。私が眼を閉じて、見なければ宜いんだから。そして、只、感じれば宜い訳ね。だけど、イネスは、私にも、そうするかしら。貴方にだけじゃない？」

「あの女は、そうしなければ誰も相手にしてくれないと言う事を、良く知っているよ。彼女に部屋を貸してやろうよ。今、彼女のいる下宿より奇麗だし、事務所にも近くなるし、それに、オーガスタ。考えても御覧。これから先の長い夜、又、ウィークエンドや、休

暇の間、私達が、どんなに素晴らしいデザートを楽しめるかを！」

「どんな風に楽しむの、ジョン？」

「うん。先ず、湿った唇が、強い力で、君の乳房の上にやってくるんだ。ゆっくりと一つの乳房の周りをまるく撫でながら、だんだん中心に近付き、最後に乳首をギュッと捉らえて引きつける。これは男より女に良いものらしいよ。イネスは女のどこが感じ易いか、色々教えてくれたよ。」

それから唇は、だんだん下の方へキスしながら移って行き、臍の辺りで止まるんだ。想像して御覧、温かいヌルヌルした舌が、お臍の凹みの中を探り廻すのを。その時分には君はもう我慢が出来なくなる。君はその頭を持って、自分の好きな所へ導いて行く。そこで唇と舌は、凄く活潑に働き出すんだ」

「素敵だわ」

「なあに、まだ是れは序の口なんだよ。君は欲望を満足させて、グッタリとベッドに俯伏せになる。その時、又、唇がくるんだ。君の足の裏に、そして足の指の間を、温かく柔らかな舌が、チロチロと出入りする。擦ったくって、身ぶるいするよ。それから、脚を次第に上の方へ移ってくる。すると君は、何が何

だか判らないが、何かを無性にして欲しくなるんだ。そして唇が太腿に達した時、君は始めて判るんだ、何をして欲しかったかがね。だが唇は止まらない。腰の横側を通して、脇腹、肩へと登って行く。君は騙まされたような気になるが、欲望は更に強くなる。唇は首

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です
毎月確実に二十五日発売!

一月分	一冊	三〇〇円
三月分	三冊	九〇〇円
半年分	六冊	一八〇〇円
一年分	十二冊	三六〇〇円

○本誌は只今の情勢から場所によっては入手が困難な所もあると思われましますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に(阿倍野局私書箱第十四号) 予約購読料をお払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従って、予約購読料は一月一冊三〇〇円、三ヶ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌

筋から、背筋を通して、又、下方に向って行く。だがもう君には辛抱出来ない。又、頭を持って、望む所に導き、君は今迄に味わった事も無い喜びに叫び出すのだ。始めの間は、君は何度も、もう我慢出来ないと感じるが、そのうち、段々と判って来る。速くクライマ

代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一齊に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何ヶ月分とお書き願います。何月号からお書きにならないときは、重複や欠号をさせていただきますので、お留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受け取りになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

ックスに行くより、ゆっくりと、時間をかけて、進む方がよいと言う事が。君はもう、横になっいて、時々呻き声をあげるだけだ。その内に、本当に我慢が、出来なくなっていく。そこで君は再び、寝返りをして仰向けになる。そして熟練した唇を、前よりも更に永い喜びを期待して、待つのだ」

保安官の話は、夫人をすっかり喜ばせてしまった。

「私にはわからないわ、経験が無いんですもの。でも、私、今直ぐにして欲しいわ。ジョン、あの女を呼んで頂戴。そして言ってやって。私達二人一緒だって。それが厭なら、明日から、早速新しい仕事を探した方がいいって。この週末に、引越せさせましょう、私達も伝って。さあ、急いで、ジョン。電話をして頂戴」

「落付けよ、オーガスタ。彼女には僕が良く話すよ。あの女にとっては、凄くスリルだろうな。だが承知するだろうよ。随分永い間セックスの無い人生を送って来たんだからな。きっと旨くやるよ。それに彼女は、俺にとっては、随分有用な秘書なんだから」
保安官、ジョン・スチルナーは満足そうに微笑んだ。



“シチュエーション・ウォンテッド”

三 原 寛

彼女は、薄いそばかすの透いてみえる頬をすぼめ、鼻に小じわを寄せて、身を乗り出した。そして、茶目っ気の多そうな眼を輝やかせていった。

「ちょっとした、おなぐさみだね。わたしにとっては、はんたいする、りゅうはないわよ」

青野は、伏せていた眼を上げて、眼の前ににゅっと突き出されている二本の脚に視線を移した。長過ぎる位に、すらりと発達した細身のすねには金色のうぶ毛が光り、素足には毛皮の縁どりのしてある革のスリッパが今にも落ちそうにひっかかっていた。よく暖房の

きいた部屋の空気は暖かかったが、それにしても、青野は顔中に汗をかき、極度の緊張から、口のまわりの筋肉をひきつらしていた。

彼女、十八才のミス・キャサリンは、ソファの上で、ぴよんぴよんと腰に弾みをつけながら、まるで急に自分が女王様にでもなったような気持で、床の上に正座して、おずおずとものをいう三十男の青野を見下していた。青野は必死だった。

『トウキョウイヴニング』紙の案内欄で彼女と連絡がついて、今日が、その英会話個人教授の第一日という訳だった。国電の四谷駅で下車して、電話で教えられた道順を辿って、

アパートの四階の彼女の個室の扉の前に立った時、青野は、大きく深呼吸を一つして、呼鈴を押したのだった。

「サクジツ、オデンワシタ、アオノデス」

「おめにかかれて、うれしいわ。どうぞ、おはいりなさい。おでんわで、おはなししたときもかんじたのですが、あなたは、たいへんりゅうちょうにえいごをはなしますね。ほかに、おおくの、えいごをはなすにほんじんをしっていますか、かれらのだいぶぶんは、はつおんがまんぞくであります。あなたは、あめりかにいたことがあるのですか？」

「ソウデアアルコトヲキボウシテイルコトヲ、

オッシャッテイタダイテ、タイヘンアリガト
ウゴザイマス。シカシ、アメリカヘハ、イッ
タコトハアリマセン。マニラニハ、二ネンホ
ドイタコトガアリマスガ……」

「おう。それでは、ことばにかんしては、あ
めりかにいたのとおなじですわ。どうぞ、お
かけなさい」

ここで、青野は、ぐっと息を詰め、家を出
る時から、何度も、頭の中で繰返して暗記し
てきた科白を、意を決して口に出したのだっ
た。

「オキニサワラナイコトヲノゾムノデスガ、
ドウモ、ワタクシハ、ニホンノシュウカンニ
シタガ、ツテスワッタハウガラクニデキルノデ
スガ、アナタガ、ソレヲオユルシニナルホド
カンダイデアルコトヲキボウシマス」

「あなたは、なにをいみたいのですか？」

「ワタクシハ、ニホンノフルイシュウカンニ
ヨッテ、キビシイキョウイクヲウケテキマシ
タ。ソッケイスベキセンセイト、タイトウニ
ツマリ、ムカシハ、ニホンデハ、ミブンノア
ルヒトダケガ、アナタガアメリカジンナミ
ニ、イスニスワルケンリヲモッテイタカラデ
スガ、アナタタイトウニイスヲモチイルコ
トニハテイコウヲカンジマス。ワタクシノモ

クテキハ、エイゴデカイワスルチャンスヲ
アタエテイタダイテ、ワタクシノエイゴヲ、
ブラッシュ・アップスルコトデスガ、ワタク
シジンノコウドウニツイテハ、ニホンノシ
ュウカンニシタガウコトヲユルシテイタダキ
タイノデス」

こうして、青野は、ミス・キャサリンの前
に正坐する事になったのである。青野はマゾ
ヒストである。青野は、同じマゾヒストとい
う事で、交際している中田という劇場支配人
が、眼鏡を光らせて、

「思い切ってぶつかってみなければ、だめで
すよ。最近の女子大生なんか、この方面に興
味をもってる子が多いですよ」

と強調していたのを思い浮べた。ミス・キ
ャサリンは、学生交換で日本に留学中の女子
大生である。吉川という、バーのマスターに
「白人女性に飲まされるのは魅力ですよ」

とけしかけられた事もあったが、まだそれ
を切り出すのは早過ぎる。折角ここまで、思
惑通りに運んだのだから、慎重に振舞ねば
と心に決めた。

若い彼女は、授業料だけは、ちゃっかり決
めたものの、このレッスンをどうはじめて良
いのか戸惑っていた。すくなくとも、A・B

・Cから教える必要はないのである。青野の
努力でこの時間を、彼女にとって、すくなく
とも、気に入った時間潰しの一つととして貰
わねばならない。青野が話題を提供した。

「ワタクシハ、チイサイトキ、マンシュウノ
ハルピントイウトコロニイマシタ。ソノトキ
ハクジンノジョセイガ、シナジンノショウニ
ンヲ、コオリツクサムイニワデハダカニシテ
ムチウツテイルノヨミテ、ハクジンハエライ
ンダナトカンジマシタ。カノジョガワタクシ
ノミタハジメテノハクジンデスガ、トテモビ
ジンダッタトカンジマシタ。ヨウボウヨミテ
モ、タイカク、スタイルヨミテモ、タシカニ
ハクジンシュガ、ワタクシタチヨリ、スグレ
タジンシュデアルコトハ、ウタガイアリマセ
ン。センソウトウジ、ワタクシタチハ、セン
ソウニマケタラ、アナタガアメリカジンノ
ドレイニナラナケレバナライノダトオシエ
コマレマシタ。ソシテワタクシハ、ハルピン
デミタコウケイヨオモイダシテ、ワタクシタ
チヨリスグレタヒトタチノドレイニナルノハ
シカタノナイコトダトカンガエマシタ。トコ
ロガ、ワタクシタチハセンソウニマケ、アメ
リカノオカゲデ、ケイザイテキニモ、シャカ
イテキニモ、ヒジョウナハッテンヲトゲマシ

タ」

「わたしは、にほんについては、なにもしらはなかったわ。ハラキリとかフジヤマはきいたことがあったけど。あなたは、ほんとうに、あめりかじんのどれいになると、かんがえていたの？」

「ワタクシハ、ソノコトニキョウミヲモツノデス。ゲンダイシャカイデモ、アルイミデ、ドレイセイドハサケラレナイモノデス。アナタハ、セカイゼンタイガイザイテキニシンボハッテンシ、ゼンジンリガイシアワセニナルコトガカノウトオモイマスカ。アリエマセン。フクザツナケイザイリロンヲモチダサナクテモ、アキラカナコトデス。ハクジンコソシアワセニナルケンリガ、アルトオモイマス。イチバンスグレタ、ジンシュナノデスカラ。アナタチガ、ワタシチユウシヨクジンシュノギセイノウエニタツドレイケイザイヲサイヨウシタラ、アナタガタノヨリシアワセナコウジョウガノゾメルデショウ」

「あなたのりろんはきよくたんすぎてりかいがこんなんです。あなたは、わたしたちはくじんにたいして、れっとうかんをもっているわけではありませんか？」

「タシカニ、ソレハミトメマス。ムシロ、カ

ンカクテキナガイネンガサキニタツタ、カンショウテキリロンカモシレマセン」

「そしてあなたは、どれいになりたいのですか。どれいにじゅうはないし、だれでも、じゅうをもとめるものではありませんか」

「ジュウニタイスルカイシヤクノモンダイデス。アルイミデハ、アナタジンヨリ、アナタノカッテイルカモシレナイ、イヌノハウガジュウトハイエマセンカ？」

「あなたは、いぬの、じゅうをのぞむのですか」

「ワタクシガドレイニナルコトヲキボウスルノハ、ソレガジュウダトカンガエルカラデハアリマセンガ、イヌニナルコトジタイニハミリヨクヲカンジマス」

「どれいになるということは、あなたたちにほんじんが、わたしたちあめりかじんのためにのうじょうやこうばではたらくということですか？」

「ゲンジツテキニハ、ソウイウコトニナリマス。シカシ、カンネンテキニハ、ドレイトイウト、ワタクシニハ、ドウシテモ、ハルピンデ、ハクジンジョセイノアシモトニヒレフシタママ、セナカラムチウタレテイタコウケイガウカブノデス」

青野は、じゅうたんの上でも、さすがにしびれの切れて来たひざを坐り直して、ソファにおさまったミス・キャサリンを見上げた。彼女と眼が合った。それから彼女は、小卓の上の置時計に眼を移した。

「わたしは、あめりかのだいがくで、しんりがくのかもくをとったことがあるので、なんさつかのちよしもよみましたから、このほうめのちしきをもっています。あなたはわたしが、きょうみをもつかもしれないしゅるいのおとこかもしれないませんが、いま、それをたずねたいとはかんがえません。あなたにすすとをしましょう。あなたのかんがえていることをしようじきに、くわしくてがみにかいてほしい。つぎのれっすんは、らしいゅうのどうびですから、それいせんに、あなたのがみを、わたしがうけとることができるようになってください」

深々と額を床につけて挨拶した後、彼女の許を辞した時、青野のひざはしびれ切って、立つのもやっとだったが、どのようにして家まで帰りついたかも覚えてない程に興奮していた。青野は机にかじりついた。書き進んでは何度も便箋を破り捨てた。あらゆる空想妄念が頭一杯になり、胸の鼓動はますます高く

なって、一時も、物を書く事に精神を集中する事は困難だった。ミス・キャサリンはサディスティンであるのかも知れないし、単に教室で習ったマゾヒストの心理に興味をもったのかも知れない。しかし、彼女は、心理を正直に書けといった。正直にとわざわざ断ったところからみると、単に、概念的にマゾヒストというものを理解してみようという興味だけでなく、青野自身がどの程度のマゾヒストであるかを具体的に知りたいということであり、つまり彼女はサディスティンである可能性が強いと考えられる。

青野は長時間机の前に坐って自分の性癖欲

情を綿々と陳情した。分厚い手紙になった。

待ち兼ねた翌土曜日の午後、青野は万一の期待で、下着も新しく取替え、早くも上気した気分でミス・キャサリンの部屋の扉の前に立った。部屋の中には彼女のほかに、若い男が先客となっていた。

「わたしのぼーいふれんどのりちゃーどよ。いっしょに、わたしたちのかいわにさんかすることにあなたもさんせいしてくれるといいけど？」

彼女はこの男に自分の事を皆話したのだ。今からその変った男を散々なぶりものにしてやろうという魂胆なのだ。青野は耳まで真っ

赤になると同時に、眼のくらむような屈辱を感じた。所が、彼女は彼の気振りには一向に構わない調子で「さあ、どうぞ、いすにおかけなさい」と招じ入れるのだ。

青野は判断に苦しんだ。手紙が届かなかったのだろうか。リチャードというこの男のいる前で、真逆、この前のように床に正坐する訳にもゆかない。しかし、自分がこのまま、椅子に腰を下したら、ミス・キャサリンが何かいうのではないか。そして、今にも、此の間自分の書いた、あの恥かしい手紙を持ち出して来て、リチャードに、此の男よ、この手紙を書いたのは、等といい出すのではないか。しかし、リチャードの態度に変わった所はみられず、ミス・キャサリンも素知らぬ顔をしている。覚悟を決めて、青野は椅子に坐った。そして、帰るまで、遂に何事も起らなかった。此の間の航空機の遭難事件、月着陸成功の話、火事の話等、一通り話題が出た所で時間が来て、レッスンは終わったのだ。青野は判断に苦しんだ。同じ都内だから、月曜日に出した手紙が未だ着いてない筈はない。確かに手紙を読んでいる筈の彼女が、ああいう態度に出た理由がどうしても判らない。青野は次週の土曜日を待ち焦がれた。

(続)

現在在庫『本誌既刊号、特集号、限定版』案内

○臨時増刊号「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号「文献」

○限定版写真集「豊満と清楚」

女体緊縛グラフィック集

頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号「美4」

○限定版写真集「女性刑罰拷問特集」日本版

頒価 一〇〇〇円 略号「美5」

○限定版写真集「緊縛美女艶姿百態」

頒価 一〇〇〇円 略号「美6」

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

黒 淵 嬰 一

ビブリオテーケー　さいへんせい
／＼希臘神話の再編成／

ヤーヴェー

旧約聖書出埃及記第十二章には全エジプトの長子を殺した神の手が書いてある。ヴェリコフスキーに依れば長子とは「選ばれた者」の転訛であり、彼等を殺した神の手は世界的規模の地震だった。神王も臣下も夜半に撓ね起き、エジプト中を叫喚で満ちた程の大天災であり、宮殿の王子から地下牢の囚人迄差別なく被った惨害だった。

聖書は神の手がゴーシェンの地を過ぎ越しエジプト人のみが罰せられて、ハピル人には害が無かった旨を記している。神殿、宮殿、

邸宅、牢獄等、エジプトの大建築は石材で作られ、此の建材は大規模な地震に対しては返って抵抗力を欠き、一旦崩壊すれば屋内の住人は例外無く死傷した。ハピル人はゴーシェンの低地で、軟弱な地盤上に蘆と粘土の泥小屋に住んでいたが、地震の衝撃は貧弱な構造物を『過ぎ越し』た。時に屋根が落ちるような事があっても軽い為の中のは致命傷を受けなかった。

旧約聖書の記述は、ハピル人がエジプト出国に際して隣人から金銀の装飾や亜麻の衣裳を『請い求め』て行った次第を伝えている。これは暗黒の恐怖と地震の騒乱を利用した掠奪、暴行を暗示しているように思われる。「各軍団の屯営に伝令を急派せよ。叛乱の危

険あり。特にゴーシェンに警戒を要すと」

武勇の神王は斯かる超非常時に際しても沈着だった。選抜された近衛軍団の将士はトトメス二世の態度を見習った。指令に応じて伝令を乗せたチャリオットが各方面に走った。

メンフィスの離宮は一部が倒壊し、若干の廷臣が死傷した。併し神王は無事で、即刻武装を固め広い中庭に出て軍の掌握に努めた。暴風の息吹きは鎮まりかけ、幾つかの篝火が吹き消されずに闇を照らしていた。神王の金兜に高く飾られた羽毛が火に映えた。

地球の自転は一時変調を呈したが、回転軸が彗星の方向から外れると共に再び廻り始めた。大気の運動も地球自転に慣れて西風は風力を減じた。オリエント附近は夜の側を向い

て停滞していたが、漸く東天に薄明を見る事が出来た。これ等の原因が重って宇宙動乱の終了が近いとすべての者が思った。併し最後にして最大の異変は寧ろこれから起きようとしていた。

「報告。ゴーションに暴動が起りました。ハピル人は町や村に乱入し、殺戮と掠奪の限りを尽くしています。集団逃亡の気配も感じられます。至急増援をお願い致します」

将校と兵士各一人が壊れた門から駆け入って来た。二人共、戦車軍団の徽章を帯びていた。報告を聞いて中庭は騒然となったが、トメス二世は当然な事が起った如くに聴取した。神王が見咎めたのは、二人がチャリオットに乗っていない点だった。

「報告の趣は了解した。併し汝等は戦車兵であるにも拘らず何故徒歩なのか。ゴーションに通じる道路が壊れて通れないのか」

戦車将校は隠さずに答えた。

「道路は、チャリオットの通行可能な状態です。徒歩で来たのは思わぬ不覚で車を曲者に奪われたからで、ゴーションの形勢が余りに重大と判断した為、処罰を覚悟で報告に参上致しました」

彼の言う処に依れば、メンフィスの市街に

入る曲り角で待伏せに会い、車を奪われたとの事だった。西風が激しい上に地震の揺り返しが収らず、馬は恐れ、四辺は暗く、潜伏している敵を発見出来なかった。至近の風上から一握りの砂を顔面に浴びせられ、驚愕すると同時に他の一人が側面から飛び掛り、車上の戦士と馭者を二人共引き落した。両手で一人の首を締めながら両脚でもう一人の頭を挟み、跳躍の勢に体重を加えてチャリオットの後方に転った。決して強い腕力ではなく、体重も軽い感じで、手も足も柔らかだったが、その動作は機敏且つ正確であり、且つ跳躍力は常識を超越し、防ぐ隙さえ与えなかった。此の間に砂を投げた最初の曲者はチャリオットを向け変えた。第二の曲者は戦車将校が剣を抜くより早く闇の中に高々と跳躍し、既に走り出している二輪馬車の左席へ正確に飛び込んだ。チャリオットは忽ち追風と共に消え去り、敵手の正体を確認する事も出来ない俣取り逃した。

「組みつかれた時に、曲者が麻の粗衣を着ていた事だけが解りました。奴隷の服ですが」

聞き終ったトメス二世は腕を組んだ。

「奴隷に戦車の操縦が出来る筈がない。軽快な動作。女のような姿態。大胆な行動。そし

てチャリオットを必要とする目的を持つ者。余にはその二人組が誰であるか解る。だが何うやって牢獄を脱出したのか。地震で石牢が崩壊した時に免れたのだろうか」

静かな女の声がトメス二世の独り言を遮った。

「アリアドネとコルクユネは、妾が解放致しました」

闇黒に紛れてよく見えないが、声はハトシエプスト王妃に違いなかった。

「申すな。囚人が自力で逃げたに相違無い」

トメス二世は慌てて制止した。併し王妃は黙らなかつた。

「アリアドネを魔女として幽閉したのは陛下の御失策です。血の雨、火の雹、天の竜。一として外れた予言はありません。神通の聖者を禁獄する事はアムモン神の御意志に背きます。過ちは速かに改めるべきと存じます。が故に此の手で鎖を解く鍵を与えました」

神王は止むを得ないというように声で答えた。

「妃よ。言っただけだ。余の本意ではないが、国事犯を逃した罪は問わねばならん」

ハトシエプスト王妃は傲然と見返した。

「神王の権威と国法に依って御存分に処罰願

います。アリアドネを入牢させた罪の幾分かを此の身が償いましょう」

神王は苦しそうな顔をして脇を向いた。先刻の戦車将校が、その前に進み出た。

「陛下。戦車を奪われた私共の御処分は」

此の催促で大元帥の責任感が蘇った。

「戦車兵がチャリオットを敵に奪われた時は死刑。これは動かさない。併し相手が人間でない場合は別だ。曲者の一人はアリアドネ。恐る可き魔女だ。汝等が不覺を取ったのも、無理はない。依って汝等の生命は暫し預け置く。次の軍事行動では必ず罪を償うに足る戦功を樹てよ」

二人は地に平伏した。それに向って神王は命令を押しつけた。

「アリアドネを牢から逃した者にこそ罪がある。王妃を縛れ。遠慮は無用。手加減するではないぞ」

戦車将校と操縦士は、一瞬顔を見合わせたが、すぐに神王の意中を察して、命令に従った。ハトシエプスト王妃は抵抗しなかった。将校が腰の麻綱を把って背後に廻ると、自分から両手を背に廻した。将校は一礼して縛り始め、王妃は平然と縛られた。

エジプト風の緊縛だった。臂から手首迄を

二本束ねた棒のように縛り合わせ、更に腰縄を掛けた。此の形式の拘束は豊満な質の者にとって極度の苦痛を伴うものである。ハトシエプスト王妃は吐息と共に端いだ。併し姿勢は動かさなかった。

エジプトの古代壁画には、幾種類かの縛り場面が見えるが、臂を軸にした形式のものが多い。メソポタミヤの壁画、インカ帝国の土偶、ローマの彫刻等、縛りとは、手首を背に重ねて結ぶ形式が常識になっている（と筆者は思う）のであるが、エジプトだけが例外のようだ。そして此の原則はルネサンス芸術を経て近代映画に到る迄、東西に共通したものであるらしい。

「イプワー。王妃を監禁せよ。牢獄は地震で損壊しているから、中庭の何処かに繋いでおけ。解いてはならんぞ。余がモーセとアリアドネを捕えて来るから、その時に三人揃えて処刑するでしょう」

トトメス二世は故意に面を背けながら言った。イプワーに属する数人の兵士が王妃を引き立てた。

「近衛戦車軍団に総出動を命じる。目的地はゴーション。砂漠中への長駆追撃となる可能性が大きいから歩兵隊は馬糧と水を用意して

続行せよ。急使をペルシウムに派遣しろ。国境を封鎖するのだ。急げ」

武勇の神王はエジプト軍大元帥の責任と威厳を忘れなかった。従卒が牽いて来た金装、銀輪のチャリオット上に突っ立ち、銀線を編み合わせた鞭を高く掲げた。

「乗車。出動」

戦車兵は一斉に乗車した。アピス（聖牛）ホルス（鷹神）アムモン（太陽神）等を象った神聖な軍旗を先に立て、六百輜の近衛戦車軍団は、行軍縦隊を形勢しつつメンフィスの城門から溢れ出た。

中庭の木柱に立姿で縛りつけられたハトシエプスト王妃が黙然とそれを見送っている。「王妃様。陛下は気が立っておいでです。逆らわれてはなりません。暴動の鎮圧が終ったら取り成して差し上げます故、暫く御辛抱願います」

大臣イプワーが傍に寄って耳打しながら縄目を緩めようとした。王妃は顔を振り向けながら老臣の好意を拒否した。

「イプワー。志だけは受けます。併し妾は陛下がアリアドネに加えた無態の償いをさせて戴きましよう。それよりも陛下の身を案じて下さい。早く歩兵隊を率いて陛下の後を追ひ

お諫めして陛下とアリアドネが両方共無事であるように取り計らうように。何方に危害が加えられてもなりません」

此の頃、ゴーンエンからは数万の群衆が東を指して溢れ出ていた。

杖や棍棒を持った壮丁達。大荷物を背負った女達。歩くだけが精一杯の老人や子供達。それに車や家畜の群。

急造の武器は血に染まっていた。昨日迄貧しい奴隷だったハピル人共は汚れた身に高貴な亜麻服を纏い、金銀象牙の装飾を帯びていた。車の上には食糧や衣類が積まれ、牛や羊の中には諸神殿の焼印を押したのもも混っていた。どの顔も赤く興奮し、意味のない事を叫び、用も無いのに走ったりした。

大群衆を率いているのは白髪のもーセだった。尖の曲ったアカシヤ杖を持ち、その偉大な感化力を以て、無統制な暴徒を東方へ導いていた。

「ハピル人よ。自由と独立を得る時は来た。神は我等を救い給う。我等を導く神の御使いを見よ」

彗星の形をした怪天体は地球の直前を横断しようとしていた。その頭部は未だ地球軌道の内側にあり、長大な尾は地球の前程から遥

かに流れ、オリエントの地より眺めれば、頭は東の地平線に半ば隠れ、尾は西空に及んでいた。光輝は太陽にこそ劣ったが月を遥かに凌ぎ、『夜は火の柱の如く』見えだし、龐大な大気を伴う為に白昼には『煙の柱』と見紛うばかりだった。頭部は東を指し、恰も『東へ進め』と示す神の手と観察された。

人と車と牛と羊の大縦隊が東へ東へと流れて行く。その先頭から後尾にかけて、一輛の二輪馬車が幾度も往復していた。操縦しているのはコルキュネであり、傍に乗っているのはアリアドネだった。

「エジプト王の戦車軍団が、必ず追って来ます。急がなければなりません」

乱れ易い隊列を整え、落伍した者を前列へ運んだ。機に応じて遙か前方を搜索し、後方を偵察して追跡者の有無を確かめた。クレテに於てコルキュネはチャリオットの優秀な操縦技術を知られていた。アリアドネの天体観測で鍛えた視力は砂漠中の遠望でも比類が無かった。そして二人が奪って来たチャリオットはハピル人の集団が所有する唯一の機動力だった。

アリアドネは天を仰いだ。火焰の竜蛇が空一杯に巨姿を拡げて躍っている。その頭部は

巨大な火の玉となって燃えていた。

「エウローペ様の予言された通りだ。古い秩序はすべて亡びる。併し此の同じ天変はクレテ王国をも襲っているに違いない。大丈夫だろうか」

アリアドネの脳裡をラビリンス（迷宮）が走った。更にエウローペの顔が。ヒュペリオン（太陽神）の黄金円板が。

「アリアドネ。頑張りなさい。ハピル人を東方へ導くのが貴女に与えられた使命であり、試練でもあるのですよ」

幻のエウローペが呼び掛けた。

それを吹き消すように砂塵が渦を巻いた。疾風の唸り。地響き。灼熱せる岩石の雨。

地球自転の変調で地殻内部が摩擦を起し、高熱が発生していた。溶岩は地表を破って溢れ、水系は沸き、上昇気流が砂漠や海面から立ち騰った。エジプト砂漠の至る所から砂嵐が噴き上げた。

「東方へ。それこそ、エウローペ様の示された方角だ。そして、その方角こそは何百年も虐げられて来た此の人達の約束された地がある。わたしの愛の神を発見すべき方角でもある。老予言者のもーセと共に進もう」

アリアドネはコルキュネを督促してチャリ

オットを駆けさせた。

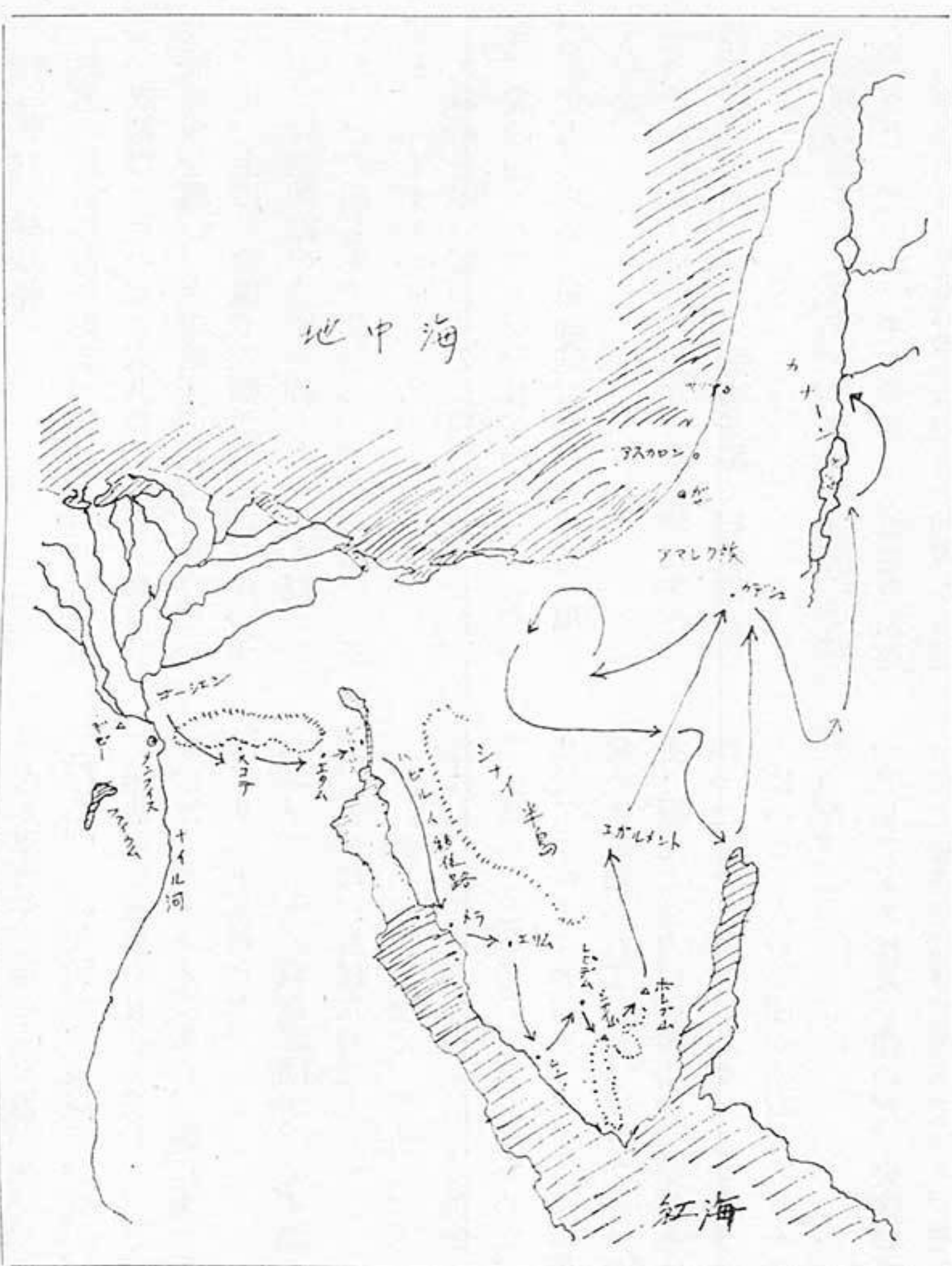
近衛戦車軍団を率いたトトメス二世は、一日行程遅れてハピル人を追っていた。デルタ地帯東部の戦車軍団三箇がこれに合流した。

「東方へ脱出した者は約七万。ゴシエンには老人や幼児が僅かに残っているだけで、何れも叛乱や脱走の能力を欠く者ばかりだ。一

えた集団に何が出来よう。必ず、国境迄に追いついて殲滅してくれるぞ」

トトメス二世は決然と宣言した。

ゴシエンから紅海沿岸に向って低い丘陵が東西に連なり、その南麓には無数の足跡や轍が乱れていた。掠奪品を積んだ重い車や、足の遅い家畜迄引き連れて歩いている証拠であ



方家畜用奴隸の一部がハピル人の暴動に便乗して逃亡した形跡がある。壮丁の数は約二万か。併し武器も揃わず、女を交

る。エジプトの精強戦車軍団は砂漠と丘陵に車輪の轟音を響かせながら急追撃した。

ゴシエンから海へは三日行程。その丁度中間にスコテの集落がある。此の小さな町は完全に破壊されていた。地震に続いてハピル人の掠奪を被り、エジプト人は殺され、奴隸は逃亡したようだ。短時間宿営したらしい痕跡も周辺に認められた。怪天体の光輝は夜をも明るく変え、ハピル人は夜を徹して東方へ歩き続けたものと思われる。

エジプトの戦車軍団は戦術的には高速力を出し得たが、砂漠中に戦略機動を行う為には補給が不可欠だった。馬は発動器以上に熱源を必要とする。水と食糧を与えなければ忽ち機能を停止する。スコテの資源一切は掠奪されていたから、トトメス二世とその全軍は危く立往生する処だった。大臣イプワーが歩兵と輜重を連れて追及しなかったら、その通りになっただろう。

翌日はエタムを通過。此処から砂漠を離れて海岸地方の沃野に入る。ハピル人は海岸線を北上し、紅海を迂廻しようとしていた。

「前路は閉鎖されています。エジプトの戦車一箇軍団が展開中です」

チャリオットを駆けさせて来たアリアドネ

がモーセに告げた。

「後方からはトトメス二世が追跡して来ているに違いない。突破して通るには武器が足りない。奇蹟を祈るしかないか」

ハピル人が停止した場所を旧約聖書はビハキロスと記している。

怪天体の公転速度は地球より僅かに早く、次第に地球を追い越し、正に地球軌道を横断しようとしていた。両天体の衝突は一髪の間にある。長大な尾は遙かな宇宙空間に流れ、大気は触れ合い、帯電した。急激な距離短縮に伴って潮汐作用が高まり、両天体の液状物質は互に突出部を形成した。旧約聖書は彗星の地球軌道通過を『火の柱、煙の柱』の形をした『神の御使いは前を離れて後に立った』と表現している。

ゴシエンを離れて三日目の早朝。エジプト軍とハピル人は殆んど同時に相手を発見した。トトメス二世は司令戦車上に躍り上って叫んだ。

「蹂躪せよ。掃射せよ。ハピル人を此の一挙に殉滅せよ。モーセとアリアドネは必ず生捕れ」

真鍮の長管喇叭が信号を吹鳴した。

「突撃体形作れ」

の合図である。三千輦のチャリオットは傘形に展開し、ハピル人を海岸に向けて圧迫すべく三面包囲態勢を執った。続いて、

「全軍突撃せよ」

喇叭、缶鼓、鐘、凡ゆる鳴物が総進撃の譜を奏した。鷹、牛、河馬、太陽等凡ゆる神聖な標章が諸隊を導いた。青銅の利鎌が車軸に従って旋回した。これに触れたら人は寸断されて了うだろう。

ハピル人の中に大恐慌が起った。車も荷物も抛り出して奔った。その中でモーセがアカシヤの杖を振って叫んでいる。

「恐れるな。神が味方し給うのだぞ」

と、驚く可き現象が起った。ハピル人の一部が血迷って海中に飛び込むと同時に、物凄い勢いで潮が退き始めた。紅海の水は吹き払われる如くに南方へ流れ去り、後に広大な干潟を残した。

アリアドネは遙か南方に異様なものを認めた。青黒い巨大な孤峰が彼方に突っ立ちつつある。その麓は霞んで見え、頂部は水蒸気の雲に掩われていた。アリアドネはそれが水の隆起である事を知った。

「奇蹟が起った。オケワヌス（海神）が海水を吸い上げている」

併しこれは奇蹟ではなかった。怪天体はオリエントの僅か東方に在り、地球に必敵する質量と、月より近い距離の相乗積は近東と極東の二箇所に複潮汐の堆積を盛り上げつつあった。海水は二箇所に集って山の如く聳え、柱の如く伸びた。両天体間の距離短縮に伴って海水の山は急速に成長した。それに反比例して周囲の海水は退いた。旧約聖書に記された如く『海は裂け』て『世界の基礎が露出した。同じ現象は極東にも起り、古代中華人に依って記録された。

既に陸正面の全部を遮断されていたハピル人の大群は争って干潟に駆け降りた。

「神の御手は我等に道を開き給うた。必ず救われるぞ。急げ。走れ」

モーセが群衆の渦に揉まれながら叫んだ。アリアドネは奇蹟を信じながらも、此の現象が大規模な潮汐の一種である事を察知した。

「干潮は永く続きません。早く対岸に上らな」と海が寄せ返して来ます。急いで下さい」

コルキユネはチャリオットに輪乗りをかけた。アリアドネはハピル人の後衛位置から彼我の形勢を見較べた。そしてハピル人の大部分は干潟に逃げ込めそうだと判断した。

「コルキユネも早く逃げなさい。わたしは後

から行きます。足が早いから、すぐ追いつきます」

アリアドネは、チャリオットを自分で操縦し、正確にトトメス二世の司令戦車へ指向させた。車台に備えてあった投槍を引き抜き、二頭の馬の尻を刺した。馬は狂奔して走り出す。アリアドネはチャリオットの疾走方向を確認してから一跳躍して飛び降りた。

トトメス二世は驚かなかった。

「女の考えそんな事だ。余の手練を見せて遣すぞ」

右腕が二回、弧を描いて半旋した。銀線を曳くように飛んだ二本の投槍は正確に馬の額を貫いた。二頭の馬が折重って倒れ、チャリオットが転覆するより早く、トトメス二世の司令戦車は、その傍を駆け抜けていた。

逃げ遅れたハピル人の後殿が粉碎された。

一方的な殺戮だった。エジプト兵は車上から弓箭で掃射し、投槍を擲射した。戦車の重い青銅の車輪は人体を轢断し、車軸に装置された回転鎌が手足を飛散させた。併しハピル人の大部分は後衛の犠牲に於いて潮が退いた干潟に駆け降りた。

「チャリオットは砂浜を走れません。早く対岸へ」

アリアドネは戦車軍団の弱点を知悉していた。此の重量ある車輛兵器は、軟弱な地盤や凹凸ある地形では使用出来ない。

トトメス二世は海岸で一旦全戦車を停止させた。殺戮したハピル人の数は不満足な程度でしかない。何万もの逃亡奴隷は砂地に転びながら遁走して行く。そしてモーセもアリアドネもその中に居た。

遂に、戦場心理が理性を圧倒した。トトメス二世は鞭を高く掲げ、致命的な決断を発令した。

「追撃」

三千輛の戦車は砂浜に駆け入った。

一九一八年のイーブル戦線でも、一九四四年のウクライナ戦線でも、これと同じような事が起った。血迷った指揮官は戦車隊に対して泥湿地への進入を命じたのである。キャタピラ付き近代戦車と雖も地形に対し万能ではない。その結果、旧約聖書に記載されたと同様の事が起った。『戦車の車輪は重くなり』進撃は遅々として難渋を極めた。

トトメス二世も、エジプト軍すべての操縦士も、馬に鞭を加えながら進撃を焦った。併しその速度は人間の歩行と幾らも違わなかった。戦車兵は車内に装備された弓箭を把って

急射した。だが震動する車上から正確な狙撃を加える事は出来なかった。

「戦車の速度は落ちています。早く対岸の高地へ。戦車は崖を登れないのです」

敏捷なアリアドネはハピル人の大集団の外側を往復しながら衆を励した。多数のハピル人は矢に当って倒れ、又は落伍して蹂躪された。併しその先頭は遂に対岸に達し、蟻のよう群って崖を登った。先の者が続く者を引き上げた。モーセやアロンやミリアム等の老人も大勢の手で担ぎ上げられている。

此の瞬間、火の球と煙の柱を劈いて大閃光が走った。落電に千倍する音響。怪天体と地球の電位差が遂に大放電となって現れた。多数のエジプト兵は感電即死した。頭上に掲げていた青銅製の武器が良導体である為アンテナの役を果たしたのだ。

電光は地球から怪天体に向って突出した満潮の隆起を叩いた。放電に依って電位差を失った両天体は、クーロムの法則に従って反撥し、撞球の如く飛び離れた。アリアドネは山のように聳えた海水の推積が百千万の大瀑布と化して崩壊する様を見た。

「海水が押し寄せて来ます。崖の上へ早く」アリアドネは未だ海底に相当する平地に立

っていた。

「アリアドネ様。危い」

コルキユネはアリアドネの脚力を信頼して先に崖を登っていた。危急を悟り、上の方から呼び掛けた。併しその声は地響きと激流の轟音に掻き消された。印度洋の水が大小脈の揺らぐ如き津浪と化して紅海を押し上った。

トトメス二世は司令戦車上に棒立ちになった。異変を知った戦車の一部は西岸に向って逃げ出した。北に転回して破滅を数秒間でも引き延ばそうとする者も居た。併しその一切は無益だった。噴流はすべてを呑み尽くし、地峡越しに地中海へと押し流した。エジプトの精華たる戦車軍団は飛沫の一滴と化して消え、泡立つ水面上に戦車や将兵の撓ね跳ぶ様も見えたが、忽ち沸き返る渦の底に沈み去った。

アリアドネは、跳躍して崖の上に立ち、恐るべき自然の破壊力を眺めた。ハピル人は歓喜するよりも寧ろ呆然として、大いなる神の御業を見下した。

噴流はハピル人の多数をも奪い去った。アリアドネが自身の危険を冒して督励したにも拘らず、ハピル人の後殿は犠牲になった。旧約聖書詩篇第六十八篇は『我が民』の一部が

『海の深い所』にとり残された事を暗示するようだ。併しその犠牲は軽かった。旧約聖書はエジプト軍が『薬の如く焼かれ』『鉛の如く沈んだ』情景を鮮烈に伝えている。圧倒者は眼前で亡び、忌むべき国との間は噴流の海で遮られていた。

「神を讃えよ。偉大なる力に感謝を捧げよ」

モーセはアカシヤ杖を差し伸べながら囁れ声で言った。ハピル人は唯一神の信仰に達してはいなかったが、各々信ずる神に祈願し、且つ選民の信念を固めた。ミリアムは楽器を把って進み出、女共の一隊がそれに随った。

「水を呼び寄せ給うた海神に対し、千年の昔より伝えられた勝利の踊りを奉納致します」

疲労を知らぬアリアドネは、ミリアム達の奏楽に合わせて牡牛の舞を踊った。クレテ以来の手練は、少しも衰えていなかった。巖上に立ち、噴流の飛沫を浴びながら旋々と舞い、空中に転回した。ハピル人は手を打って感嘆し、神を讃え、モーセを讃え、アリアドネを讃えた。

紅海の西岸では歩兵隊を率いて来た大臣イプワーが放心の態で海を見ていた。トトメス二世と戦車軍団を呑み込んだ海は轟々と音を立てながら逆巻いている。

三千四百余年の後、エル、アリユシユで象形文字を刻んだオベリスク（方尖石碑）が発見された。それには九日間の闇、大暴風、逃亡する悪者達、それを追撃した神王の行動が記されている。此の不運なエジプト王は渦巻の地に陥ちた。その土地の名は、ビ・キロテイ、王の名はタウオイ・ソムと読める。即ち旧約聖書の記す『ビハキロスなる地』でありギリシヤ音のトトメスに当る。このトトメスが第何世であるかは解らない。

数日の後、メンフィスの離宮に於いて、イプワーは玉座の前に平伏していた。ホルス神の鷹を飾った玉座には両エジプトの紅白二重冠を戴くハトシエプスト女王が在った。

「先王は聡明、勇武の明君でした。併し三つの徳を欠いて居られたが故に非業の最期を遂げられました。信仰、人類愛、そして平和への情熱の三つです。このハトシエプストは女性の身であり、資質も先王の英才に遠く及びませんが、先王の持ち得なかった三つの君徳に留意しながらエジプト王国を治めたいと思います。だが、三つの徳を教えてくれたのは外国人のアリアドネです。あの清純な少女にもう一度会いたい。出来る事ならアリアドネを連れ戻し、政治顧問になって貰いたい。そ

れが叶わないならアリアドネにアムモン神の御加護が下されるよう、祈願を捧げようではありませんか」

此の頃、アリアドネは、六万余のハビル人と共にシナイ半島の西岸を南下していた。時は紀元前一四九五年の盛夏だが、天は灰色の幕で掩われ、日光は直射せず、地は冷涼だった。聖書に於いて『死の影』と呼ばれる此の幕は雲ではない。怪天体が置いて行った微粒子や塵埃やガスから成っていた。

怪天体の大気は主として炭化水素で出来ていた。それは成層圏で電離層に接触し一種の炭水化物に変化した。油性の炭水化物は空気中で飽和し、夜間には凝固し、昼間には溶けた。久しい期間に亘って空中から供給され、食用に適した。旧約聖書の『マナ』北欧神話の食物となった朝露、希臘神話のアムブロシア（神聖食糧）及びネクタール（神聖飲料）はすべて共通の性格を持っている。

炭化水素の俤で地球大気に吸収された成分も多かった。地球の方が冷たかったから炭化水素は容易に液化し、地の割目にしみ込んだり地表で燃えたりした。此の物質は石油と同じ性質を持っていた。

マヤ族の古典は『粘性物質が雨降し、火と

化して燃えた』伝説を記している。イプワーム『水面で燃える火』に就いて言及し、ヘブライの古伝説は『熱いナフタの雨』を伝えている。ナフタはヘブライ語の石油である。

旧約聖書に依れば、ハビル人は天から降ったマナを食べながら平和的に四十年間も砂漠を放浪した事になっている。併し実態はどのような平穏なものではなかっただろう。自由を得たハビル人は直ちに野性に返った。シナイ半島の山地やアラビヤ砂漠に隠れ、時に沃野を襲って掠奪する遊牧民に変化した。

コルキユネはクレテ女性の一般教養として剣槍弓箭に一通りの熟練を持っていた。ハビル人は壮丁の数には事欠かなかったが、久しい奴隷生活期間中、武器の所持を禁止され、剣技を知る者が少なかった。コルキユネはハビル人の中で次第に有力な地位を得た。

アリアドネはコルキユネに就いて武術を覚えた。鍛えられた体力と、生来の勘の良さは忽ちにして群を抜く上達を示した。

モーセはハビル人をシナイ山に向って導いた。シナイ鉾山地帯を襲って銅や金を奪い、鉾山奴隷を吸収するのが目的だった。

天災地変はオリエント一帯の居住地を荒廃させた。多くの民族が耕地や牧場を棄てて放

浪した。アマレク族も此のようにしてパレスチナの住地を離れた民族の一つだった。鉾山地帯を目標に南下し、旧約聖書に記されてある如くシナイ山北方のレビデムでハビル人と衝突した。その結果は数的優勢と信念を有するハビル人の勝利に終り、アマレクに属した人数の大部分は勝利者に吸収された。

予言者モーセが如何にして統帥者としての才能を顕したか。コルキユネがどれ程な武勇を示したか。愛と平和を念願するアリアドネが間断無き闘争の中に居て何時理想を失ったか。空想は際限も無く延びて行く。併し筆者は此の空想に魅力を覚えながらも先へ急がなければならぬ。「十戒」の確立及び、モーセとアリアドネを決定的対立に逐いやった事件は此の直後に起った。

聖書の断言にも拘らず、ハビル人はエジプト出国当時未だ一神教的確信に到達していなかった。モーセの信奉する神が砂漠の神であり、古代オリエントに普遍的な地母神の蛇の形をしていたらしい事は旧約聖書民数記第二十一章に暗示されている。此の真鍮の蛇たるレビ族の守護神が「ねじけたる蛇レビサン」に変化したのかもしれない。一方に於いて、エジプトのアピス（聖牛）信仰を受け、牛畜

を崇拜する有力な一派があった。蛇と牛の二神以外にも余り顕著でない神を戴く諸派があったが次第に有力二派に吸収されて行った。

レビ族始め農民出身の大部分はモーセに従った。牧羊者や漁撈者は牛神派に加担した。

その指導者はアピラムやダタンやコラでありアロンやミリアムもその支持者になった。

アリアドネとコルクユネは躊躇なく牛神派に加った。アリアドネにとって蛇形の神は、クレテの地母神を連想させるが、パーシファエーと共に余り良い思い出は無かった。アリアドネ自身はオケワヌス（海神）の巫女であり、牛の形をした神は最も親しい信仰対象だった。

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。

○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

怪天体は地球に大接近した際、本体の一部を剥離され、その破片は地球を一焦点として長楕円軌道を描く臨時衛星になった。（新衛星は定期的に地球に接近し、大気との摩擦で次第に低くなり、ヨシユア時代になって大気圏に突入し、砕けてカナナイト諸王の上に落ちた）

ハビル人が紅海を横断した直後に地球は彗星の首根を突っ切り、尾部を引き千切った。電気ポテンシアルと大気の大部分を地球に奪われた怪天体は裸となって遠く去り、ガスや塵は地球を取り巻いた。新衛星は厚い塵雲に掩われて明視出来なかったが、赤熱状態にある為、芒と輝く光体として透けて見えた。

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用した御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部▽

モーセがハビル人を率いてシナイ鉾山地帯を占領し、武器食糧を獲得し、解放奴隷や放浪民を吸収改編し終った時、新衛星が頭上に接近して来た。大気は帯電し、「神の栄光」が「雲の中に現れた」山体は鳴動し、大地は唸った。液化した炭化水素が地表に噴出し、到る処で燃えた。『シナイ山は煙を吐いた』塵雲は低く垂れて山頂を隠した。

放電の震動は全世界に響き亘った。すべての民族がその音を聞いた。黄河流域の東夷族は、『ヤーオー』と感じ、メキシコ、インディアンは『ヤーフー』と思った。ハビル人は『ヤーヴェー』神の自現と信じた。

新衛星と山頂との間に放電が交された。距離の短縮に伴ってピッチが変り、大地は呻いた。電光。雷鳴。火の柱。厚い塵の雲に反響しながら『喇叭の如き響き』は十回に亘って鳴り渡った。モーセがその音を注釈した。

「Lo tithah（不殺生）」

火焰の躍る中に神の声が轟いた。

「Lo tithat（不邪淫）」

シナイ山が鳴動し、雷鳴が答えた。

「Lo tignou（不偷盗）」

『十戒』は斯くて確立された。数万の信徒が『ヤーヴェー神』に忠誠を誓った。モーセは

『十戒』を石板に彫刻する目的で神聖なシナイ山に登って行った。

同じ頃、シナイ山の反対側の麓では牛神を奉ずる一派が黄金製の牛を作り、それを担いで解放と勝利の祝宴に酔っていた。

此の牡牛像はエジプトのアピス（聖牛）を象ったものであり、同時にクレテのオケワヌス（海神）の相貌も帯びていた。冶金術にも非凡な技術を有するアリアドネが素材を熔解し、モーセの兄アロンが鑄造した。

三百年後、パレスチナに建国したヘブライの国は旧約聖書で見ると二種の相反する要素を内含していた。閉鎖的、国粹的なユダヤ型と、開放的、国際的なイスラエル型である。前者はヤーヴェ信仰を固執し、後者は常に外来神を受容したがる進歩派だった。そして分裂の萌芽はエジプト出国の初期から兆していた。

「祝え。勝利と解放を」

十六人で井桁を担いだ金牛の偶像が群衆の環の中を疾走した。アリアドネは正面から牛の頭部に跳び上った。

「讃えよ。海神の栄光を」

アリアドネは金の雙角を掴んで倒立した。群衆が歓声をあげた。アリアドネが一転する

毎に、首の珠玉が輝き、腰の金鈴が鳴り響いた。生きた牛を相手に修練を積んだアリアドネにとって、偶像上の舞踊は遊戯に過ぎなかったが、然も尚ハピル人達を感嘆させるものがあった。牛神の信徒は歓喜と解放感に陶酔し、金牛の躍動に合わせて踊り騒いだ。

旧約聖書の記述から推測すると、蛇神派と牛神派の衝突はシナイ山の麓で起った。レビ族の壮丁が武装して牛神派を襲撃した。踊り疲れ、且つ酔っていた牛神派の三千人が此処で虐殺された。

愛と平和を念願するアリアドネの理想は金牛と共に微塵となった。悲歎するアリアドネの眼前で海神の像は粉碎され、レビ族の男達に依って金片は最も汚れた物質であるかの如く踏み潰された。興奮した群衆の渦に飛び込んで阻止しようとしたアリアドネは忽ち幾箇所も打撲傷を受けた。生来の脚力とコルキユネの援助が無かったら生命も危かったかもしれない。

女性の強さは本来防禦的なものであるが、アリアドネは始めてコルキユネの武勇を知った。或はコルキユネ自身も己の強さを今迄認識していなかったのかもしれない。兎に角彼女はアリアドネの危険を見ると同時にレビ族

の一人から木槍を奪い取り、十人程の相手を突き刺した。穂尖が折れると柄を振廻して更に数人を叩き倒した。これに励まされて牛神派が反撃に移り、蛇神派から『十戒』を記した二枚の石板を奪って破壊した。モーセは砂漠に火焰や洪水の幻覚を見せて威嚇を試みたが、アリアドネは金牛の破片を投擲して打破した。雙方共多数の死傷者を生じた。

本来、信仰上の対立は一方の絶滅迄戦われる事が多い。此の闘争も或は最後の一人が死に絶える迄続けられたかもしれない。

両派共疲労して一時休戦となった時、牛神派の指導者達は一族と共に祭壇を築き、薫香を焚いて加護を願った。不運なアリアドネはその際一度に支持者を失った。

怪天体の大気を成していた炭化水素は地表に降下し、液化して滲透した。その一部は地熱に触れて揮発性ガスを分離し、時々噴出しては低地に溜った。此の引火性ガスの性質は知られていなかった。旧約聖書民数記第十六章の記事は揮発性ガスの誘爆を思わせるものがある。爆発的燃焼に続いて大地は裂け、反モーセ派の指導者一族二百五十人は跡形も無くなった。薫香を焚くのに用いた青銅の火皿だけが残っていた。祭壇の火が石油性ガスに引

火した為の事故だった。牛神派は戦慄した。

モーセは『ヤーヴェー神』の権威を確立した。アロンもミリアムも帰順し、牛神派は改宗を申し出た。アリアドネは孤立し、味方はコルキユネ一人だけだった。

砂漠の中で数万人の憎悪に曝されては、アリアドネの敏捷もコルキネの武勇も無効だった。

「オケワヌス（海神）はわたし達を見棄てられたのでしょうか。それとも未だ試練が足りないのでしょうか。エウローペ様の予言を守って東に進んだのに此の有様とは」

群衆の悪罵と嘲笑を浴びながら、アリアドネは後ろに廻った手の指でコルキユネの手を握った。エジプト麻の太綱が肩から足首迄、隙間も無く巻きついていて、幼時から逆境に鍛えられ、クレテを出てからも幾多の困苦危険に耐えて来たアリアドネだが、今度程絶望的な悲運に曝された事は無かった。十九才の身に、運命の変転は苛酷であり過ぎた。

「オケワヌス（海神）の奇蹟を、信じて下さい。石牢を破壊し、電光を放ち、海を分けた偉大な神が必ず救って下さいます」

コルキユネも全身を縛られていた。武器を把って抵抗した為、到る所に傷を負い、破れ

た衣服の上に血が滲んで見えた。そしてアリアドネと背中合せに連縛されていた。併し思想の単純なコルキユネの方が紅海横断以来絶対的な信念を固めていた。虚勢が幾分入っていたかもしれないが、母親と娘に相当する年齢差は矢張り強さの源泉だった。コルキユネは落胆するアリアドネを励まし、実の母のような優しさを籠めて背中で手を握り返した。

レビ族の男達は曠野の中に人体を容れるに足る程の穴を掘った。女共は握り易い程度の石を穴の周囲に積み上げた。

「コルキユネ。もう駄目。あれは石子詰めという死刑の用意です。わたし達を、あの穴に落し、皆で石を投げて殺すのです」

アリアドネは諦めた。手も足も縛られた上に、背中合せに連縛されては何うする事も出来ない。レビ族の連中は極度の興奮状態であり、憐憫など起しそうにもない。アリアドネが如何に柔軟、敏捷でも、此の姿勢、位置から遁走を計る事は不可能だった。

石子詰め の起源は西アジアであり、仏教と同じ頃、同じ経路を辿って日本にも伝来したと説く者が居る。此の処刑方法が僧兵や修験道者の間で行われたらしい事から連想された説であろうが筆者は賛成しない。機械的高等

技術を必要としない、斯かる簡単な手段は、人類の智慧にとって世界的、普遍的なものである。大勢で「石を擲て殺す」場面は聖書の中に幾度も出て来るから、西アジアでは昔から行われたものであろう。ソフォクレス作の『アンティゴネ』にも石子詰めが暗示されている。

余談に亘るが、美少女アンティゴネは結局クレオン王に依って、墓の中に生き埋めにされる刑に減刑され、執行を受けた。最後迄、美しい容姿を損わなかった点に於いて大いに筆者の好みに合致するものである。女性が名を残そうとすれば魅力の絶頂に於いて、又は少くとも更年期直前に於いて死ななければならぬ。事実、史上に顕著な美人の多くは三十九才以前に殺害されるか若しくは自殺している。此の意味で筆者は奇く共和国法務局総裁と思想を同じくするものであるが、筆者は血を好まない。生首も四肢寸断も嫌悪を感じる。これは自ら流血の場を経験した者に共通の感情ではあるまいか。

脱線序にもう一つ。王女アンティゴネは神話時代のギリシャで重要な女性であり、その生涯は奇巧的場面の連続だった。その父は近代心理学でオイディプス・コンプレックスの

名を留めるテーベ王オイディプスである。盲目の廃王に只一人従い、手を曳いて全ギリシヤを漂泊し、父の骨を持って故郷に帰ると戦禍に遭い、兄弟の死、妹イスメネの背叛。最後は叔父クレオン王に依って処刑される。その不遇な一生を通じ、遂に人類愛を失わず、自らその犠牲となって死んで了う。アンティゴネこそはペネロペと並んでギリシヤに於ける婦徳の双璧である。両者の相違はペネロペが人妻であり、アンティゴネが処女の俤で終った事。及び前者が遂にハッピー・エンドを擲んだのに対し、後者が悲劇としての最期を遂げた点である。而してソフォクレスの三部作から推算するに、アンティゴネの生きた時代は有名なテーベ七門戦役時代であり、テセウス王とも関係し正に本篇と同時代に当る。且つその年齢も本篇のアリアドネと殆んど同じでなければならぬ事になる。アンティゴネは本篇の一章として扱うには余りにも魅力的な女性であり、機会を得れば是非書いてみたい人物伝の一つである。

扱、アリアドネとコルキユネは連縛された筈、穴の中へ乱暴に蹴落された。ハピル人達は歓声をあげ、手に石を握って駆け寄った。次の瞬間には数万の石の雨が二人を埋めて了

うだろう。だが、コルキユネは未だオケワヌス（海神）の奇蹟を確信していた。

「オケワヌスを念じて下さい。エジプトの石牢から遁げ出した時も、紅海を渡った時もそうだったように、神様は最後の間際という時には必ず現れて救って下さいます。オケワヌスの神がアリアドネ様を、お見棄てになる筈がありません」

石子詰めは総員の憎悪に基き、執行への全員参加に依り行われる。人を殺すという罪悪感は無限小に細分化され、且つ一時的興奮の群衆心理が働くから最初の一石が投げられたら止める手段がない。

だが石は飛んで来なかった。ハピル人共の歓声は、次第に低くなり、やがて静かになった。穴の傍にモーセが立っていた。

モーセはエジプト出国以来のアリアドネの功績を忘れていなかった。且つ彼女の叡智を惜しみ、学識を尊敬し、高貴な人格に感嘆していた。老予言者は身を以てハピル人を阻止した。そしてその代りに「ヤーヴェー神」の信仰を受け容れる事を勧誘した。アリアドネはこれに応じなかった。

「折角ですがヤーヴェーの神は、わたしの捜し求めている神ではなかったようです。この

神は全人類に普く愛を授けられる神でなければなりません」

コルキユネの方はもっと頑強だった。モーセの干渉自体を一種の奇蹟と解釈していた。「クレテのオケワヌス（海神）こそ真の神です。この神が守って下さいます」

ミリアムが監視役と説服役を引き受けた。「何時かは改信させる機会もあるでしょう」改宗したばかりのミリアムはモーセに対し必要以上に忠実だった。アリアドネとコルキユネは後ろ手に縛られ、移動するハピル人の隊列中を曳き立てられた。時には車を挽かされたり、食物袋を縛られた俤で背負わされたりした。

怪天体の残した塵の雲は厚く、一切の観測は妨げられた。太陽は塵雲の上に茫と輝くのみで所在も確かでなく、東西の方角も解らなかった。食物も水も欠乏していた。その中をハピル人の大集団はカナン平原掠奪の目的で北上していた。

「エウローペ様の予言を余りに狭く、安易に考え過ぎていたようです。東で愛の神を求めよ、というのは、フェニキヤやシナイ山でなく、もっと遙かに東という事なのでしょう。世界は広く、東は限りない向うを持っています」

す。愛の神を見出すのは、話に聞く両河地方のメソポタミヤか、その向うのインドか、或はもっと遠い未知の地方か」

コルキユネに励まされて、アリアドネは少

し宛希望を取り戻していた。

「必ず遁げ出す機会があります。カナーンと呼ばれる地に着いたら其処の住民と大きな闘争が起るでしょう。その時を待つのです」

コルキユネは教養こそ持たないが、処女アリアドネが持つ事の出来ない年輪に基く忍耐力を所有した。それはアリアドネに対して、母親としての強さに似た影響力を表した。

△華々しき女体緊縛の組写真集△

美しき縛しめ

〔第四集〕

限定版 グラビヤ印刷写真集

頒価一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美4」

◎縛られた美女ばかりのフオート八十態◎

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛フオートに加えるにベテラン大塚啓子の極最近撮影のフオートなど、ここ数カ月に亘って、フオート・アルバム「美しき縛しめ」用として撮影し保存してきた写真を、極めて鮮明なるグラビヤ印刷の特アート紙によって、皆様にごらんに入れます。写真は、どれも未発表のとおきおきの傑作ばかりです。

登場モデル 山原清子、木村洋子、玉田美佐子、大塚啓子

◇写真集アルバム内容◇

- 刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
- 鉄扉に緊縛首吊り晒し (玉田美佐子)
- ブロックの石抱き責め (木村洋子)
- 箆子の浣腸器と鼻責め (大塚啓子)
- 両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
- 古墳にて後手吊り組写真 (木村洋子)
- 両手吊りに悶える組写真 (山原清子)
- 立木から完全逆さ吊りに揺れる女体 (木村洋子)
- 猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)
- 革拘束具による組写真 (大塚啓子)
- 柱縛りの晒し責め組写真 (玉田美佐子)
- セーラ服緊縛組写真 (大塚啓子)
- 野外に於ける晒責組写真 (玉田美佐子、木村洋子)
- 刺青女体の柱吊り責め (山原清子)
- 捕獲された縛られ女、裸身の悶え (大塚啓子)
- 入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
- 両足半吊りの表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真八十葉△

以上、何カ月分にも本誌のグラビヤにし、鮮明なる写真、特アート紙に印刷して、写真集を完成いたしました。必ずや皆様の御満足を得ることと信じています。限定版につき一般書店には姿を現わしません。数にも限りがあり、お早くとお申し込み下さい。

一般書店売は一切いたしません。直接発行所へお申し込み下さい。

のおと・あと・らんだむ (四)

千草 忠 夫



八、セックスと

エロチシズム

『二月号』に掲載された西条操氏の「想うこと」を読んで奇妙な感慨にとらわれた。どうもピンとこないのである。そして何回か読み返えたあげく、その原因はセックスとエロチシズムとを混同しておられる所からくるのではないかという結論に達した。そして更に氏は、セックス（ということは氏においては

エロチシズムと同義語なのだが）とSMとの関係を否定し、SMをひとつの独立した現象——セックスという汚らわしいものとは無関係に存在する現象として、とらえようとされている。

しかし私に言わせればそれこそ無謀な、それこそ虚妄としか言いようのない論である。私は氏に問いたい。氏はなぜ「法のきびしさに打ちひしがれ、制裁の苛酷さに打ちふるえ、悲運に呻吟する者の姿」を、あれほど克

明に、不必要なまでに克明に描写されようとするのか？　そしてまた、その対象がなぜ異性でなくてはならないのか？

ここらあたりに、私は氏が見降されている点（あるいは強いて眼をふさごうとされている点）があると思うのだが、その前に、セックスとエロチシズムとの違いから考えてみなければならぬ。

私が「セックス」と言う場合それは男女の「性別」と、その器官を結合させる「性交」そのものを指す。特に後者に重点を置いて用いるよう心掛けている。即ち「セックス」は性交という行為、そのものだけを指すというふうに理解してほしいのである。（一般的にもそうである筈である）

それに対してエロチシズムは、もっと広い範囲を包括する。それは、リビドーに根ざした生命力のあらわれ——我々の官能にうったえかけて、涅槃の安らぎを与えてくれるもの——とでもいおうか。それは、セックスよりもより深くより高く、人間存在の根本にかかわる。それは行為そのものではなくて、行為をうながし、行為に満足感を与え、生命の充足をもたらすものである。

どうも、わけのわからない表情になってし

まって恐縮だが、こんな大風呂敷をたたみ込んで、次のように言った方が良いだろうか。

ストリップはエロチックである。

恋人のストッキングに包まれた脚はエロチックである。白いうなじにかかるほつれ毛また然り。

パンティマニヤにとっては、干されたパンティが、神酒党にとってはグラスに満たされた浅黄の、少し泡を浮かべた液体が、革マニヤにはブーツを召した足が、ゴムマニヤにはヌメヌメしたゴムオシメの手ざわりが、エロチックである。

私はこのエロチシズムの多様なあらわれをペルソナと名づけた。(三月号参照)そしてSもMもエロチシズムの一ペルソナに過ぎない。

だから、セックスを伴わないSやMは、確かに存在するであろうが、エロチシズムを抜きにしたSMなどは、およそナンセンスと私には思えるのだ。氏の論とは逆に、「SMの片隅にエロチシズムがあるのではなくて、エロチシズムの一隅にSMがあるのだ」と言いたい。

西条氏にかぎらず、本誌に投稿される方には、エロとかセックスを毛ざらいされる方が

多いように見受けられる。(最近は大分その気風がゆるんだようではあるが)それらの人々の言葉を聞いてみると、自分の趣味はエロチシズムとは何の関係もない、もっと高尚なものである、という気持ちがあらわにうかがえるのである。そのくせ世に認められない自分の趣味をかかえて悶々としている。どうしてエロチシズムを絶縁することが高尚なのか私にはトンと理解できない。「純粋なSM」というのは、氏の言われるように、エロチシズムから絶縁することによって得られるのではなくて、自己のSMの個性を更に深く極めることにある。さしあたり、先に氏に呈した質問にお答えねがえれば、私の論は更に発展すると思うのだが、そこにSMを愛好する者の相互成長と純化が行なわれることを確信する。

氏が「想うこと」の最後にかかげられた、同好の士に対する呼びかけの文句を読みながら私はなぜか、戦争中、無実の女性を取調べると称して素っ裸に縛りあげ、口では「不忠者」とか何とかののしりながら、鼻の下を長くしてシナイをふるっている憲兵軍曹の姿を思い浮かべた。

粘膜や分泌物だけがエロチシズムと考える

視野のせまさを、自己の嗜好に執するあまり理由なく他を責める狭量は、結局自己にとっても何の成長をもたらさない。切手蒐集が王者の趣味なら、パンティ蒐集も又王者の趣味なのである。

九、私のエロチシズム

前章でエロチシズムについて大風呂敷を拡げたが、実をいえばエロチシズムの本質は何かという点について、私はよくわからない。いろいろ本も読んだつもりだが、諸家一致する点があまりにも少なく、結局何が何だかわからなくなってしまった。

ただ、エロチシズムの問題が近來とみに思想界において問題となりつつある事だけは否定することのできない事実である。エロチシズムを、たんにセックスに付随したものであるという見方から離れて、もっと人間存在の根本にかかわるものとして見ようとする傾向が強くなりつつある。議論のわかるゆえんであろう。

さて、このようなむずかしい本質論は哲学者にまかせておくことにして、実際問題として、エロチシズムは私にとってどんな形であ

らわれるか、即ち私の用語を使えば、私において、エロチシズムはどんなペルソナを持っているか、ということに問題をしばらく。

昨年一年間、私はこのペルソナを探るために、実生活や小説において、私の心をくすぐった事実と描写を蒐集して見た。非常に雑多なものが集まった。その範囲の広さは自分自身戸惑うほどだが、それでも、その中に一定の方向がないわけではなかった。

以下、それについての私なりの分析を述べることにする。

二月号の「のおと・あと・らんだむ」に、『花と蛇』論を書いたが、その中で私は次のように書いている。

「私が『花と蛇』を、こよなく愛読するのはそれが私の好みにピッタリ合っているからに外ならない。好きなSMの世界で『花と蛇』スタイルのものが最も私の好みに合っているのである。

そのスタイルというのは、一口でいえば、凌辱による女の実存の開示である。とりすました美女（それは必ず、財閥の令夫人とか、ミス××とか、女学校の優等生とか、衆にすぐれた存在でなくてはならない）も、一皮めくればただの女にすぎない、雄の暴力に甘ん

ずる雌にすぎない、ということの確証を示すことである」

結論を先に言ってしまったようなものだが一年間の蒐集の結果は、まさにこの事を立証している。即ち、女がひとつの人格として立ちあらわれる場合は、我々はそこに全然エロチシズムを感じないが、我々が女を、単なる性欲の対象として見る視点を獲得するとき、女はたちまちエロチックな『物』と化してしまふ——ということである。ボーヴォアールの自伝『娘時代』にある次の一節が、この辺の事情を明瞭に物語っている。

「マルグリット・ド・テリクールは（中略）

彼女よりずっと年上の爵位のある男性と結婚することになっていた。一同は彼女におめでとうを言い、彼女は無邪気な幸福感に輝いていた。『結婚』という言葉が私の頭の中で破裂した。しかし、ある日、授業の最中に、級友のひとりが、いつも手袋をはめ、帽子をかぶり、品よく微笑しているあのまじめなお嬢さんと、男の両腕に抱かれて横たわっている桃色でなやかな体をいっしょにして考えることができるだろうか、と言った時、私はさうにびっくりした。私はマルグリットの裸体姿を想像するまではいかなかったが、ふさふ

さい、乱れ髪、マルグリットの長い寝衣の下、その肉体は男に捧げられていた。この突然の淫らさは精神錯乱に近い」（傍点筆者）

「男に捧げられた女」は、次の文章でより端的に表現されている。それだけに、さりげない表現でありながら、うったえかける力は強い。

「明では、皇帝の閨房のことをつかさどる所を敬事房といい、その長を敬事房太監といった。これは、もっぱら皇帝と后妃との夜の関係を処理することが任務である。

まず皇帝が皇后と交わったときは、その年月日を記録にとり受胎の場合の証拠にする。

妃の場合はこれとは異なる。日ごろ帝のお氣に入りの妃には、それぞれ緑頭牌といって先の方を緑色にそめた名札が作られている。皇帝が晩餐をとるとき、敬事房太監がその名札を十余あるいは数十枚、大きな銀の盤にのせて食膳と一緒にもってくる。帝が食事をおえるとき、太監が盤をささげて帝の前にひざまずき、その指示をまつ。帝にその意がないと、ただ『さがれ』と言うが、意が動けば、帝がみずからその名札を一枚とってうらがえしにする。すると太監は、さがって別の太監にその札をわたす。彼は伽をつとめる妃を帝

の寝台に送ることを任務とする。時間になると、彼は妃を裸にして羽毛でつくった毛衣につつみ、背におぶって寝台の所までおくりとどける。

このあと、太監と敬事房太監は寢室の外に立って一定の時間のあいだ待っている。きまつた時間より長びくと、太監が大声で「是時候了」(時間でございます)と叫び、帝が応じないと、また同じように叫ぶ。このようにして三度くりかえし、三度目にはさっさと妃をつれてかえる。同時に、帝に伽をつとめた妃に子供をうませるかどうかにについてお伺いを立て、帝が無用といえは避妊法をほどこし「とめおけ」といえばそのままにして記録にその年月日を記し、後日の証拠にするのである。皇帝の子を生む場合とそうでない場合とでは、あとになって妃の身分の上に大きな違いがでてくる」(三田村泰助「宦臣」)

少し長くなったが、帝妃の非人間的なあつかわれ方がよくうかがえよう。同じような事が、野上弥生子の「秀吉と利久」の中にも出てくる。

「床をともにする嬖妾のほかに、年配の侍女がふたり、終夜寢室にはべってゐた。その夜えらばれたひとの、着飾った錦繡を剥ぎとつ

て白絹一重の寝衣にするのも、あとの着がへに手伝ふのも彼らなら、寝台のかみ手としても手におかれた燭台の灯をまもるのも、彼らであつた。でも、重要な任務はほかにあつた。その夜の添ひ臥しが誰であり、いつ来て、いつまで関白と眠って、いつ去ったかをはっきり記録しなければならぬ。

いっさいの権威化には、生理的な秘事までおほやけごとに等しい。その必要もあつた。女たちがいかに嬋娟と美しからうと、いはば性具にすぎなかつた。またそこにのみつけられるいのちが芽吹いたとしても、疑ひなくそれが関白の子であるかどうかは、胎そのものは実証しえないのだから。」(傍点筆者)

この「性具」である実態は、次のようである。

「まだからだの細い、夜の悦びをしらぬ身を太守にせめられ、新夫人が苦痛の声をあげる

と、
『お胤をおもらいなされますのじゃえ、御辛抱あそばせ』

お添寝の女房がそう言って、そつと頼りの手を握らせたり、桜色にすき透って小さい貝のような姫の耳朶をくすぐったり、太守に満足のゆくまで手伝うのである。」(五味康祐

「女無用」

スーツに身を固めた女性とネグリジェを着流した女と、どちらにエロチシズムを感じるかといえはバカでも後者と答えるであろう。

これはしかし、一般に考えるように、その身なりがベッド・セックスを連想させるからではない。女みずからが、自己の人格的なものを捨てて、男性の愛撫を受ける肉体であることを認めた姿であるからだ。つつしみ深い女性性は決してネグリジェ姿を男性に見せないことも、この辺に理由がある。

女性の羞恥に対して感ずるエロチシズムも同じように説明できる。羞恥とは、自分が相手の眼差しの対象になった事を認めたしるし——即ち、相手の眼差しによって自分の人格をはぎ取られ、単なる『対象』としての存在に転落したことの証しにほかならない。もっと簡単にいえば、『マイッタ』ということなのである。だから、いくら裸にしようが、股を拡げようが、少しも羞じらいを示さない女性には、我々は音をあげるより仕方がない。羞恥こそ、エロチシズムの母である。

「花と蛇」は羞恥文学と呼ばれるだけあってよくも考えついたものだ。アキレるばかりのあの手この手が登場するが、同時に、美女の

めんめんも具合よくその手に乗って、羞恥の極に身悶え泣きわめいてくれる。若しこれがいっとうにピンとこない表情で突っ立っているのだとしたら、いくら毛を剃ろうが何しようが、いっとうにハッスルする気にはならなうであろう。女が、羞恥を示したとき、すでにその女はエロチシズムの犠牲になったのである。

「女は女として生れるのではなく、女というものに作られてゆくのだ」と、ボーヴォアール女史は「第二の性」の冒頭で述べているがいやおうなしに「作られてゆく」のはともかく、みずからの意志で「女になろう」「女らしくしよう」という女性がまだまだ多いのは私のような男性にとって有難いことといわねばならない。

戦後女性が強くなったといわれる。最近の小説映画におけるエロチシズムの氾濫は、それに対する反撓と見られないことはない。例えば、エロチックな作風とは、最も遠い所にあると思われる山本周五郎の「樅の木は残った」にさえ、次のような描写が見られる。

「宇乃はゆったりと近よって来て、甲斐のあけたところへ腰をおろした。そのとき、香料と、そだちざかりの乙女の、肌の香が、かな

りつよく、あまやかに匂った。

宇乃が手をあげて、自分の髪に触ると、香料と肌の香が、またつよく匂った。肌の香はあまやかで、そしてほのかに刺戟的だった。少女から乙女に、そうしてやがて、女に、成熟してゆくかなしさ。よろこびであると共に、女性であることの宿命的かなしさといったものが漠然と、けれどもおもくしく感じられた」（傍点筆者）

あまり良い例とはいえないが、傍点の箇所の描写は、女を一個の性としてとらえた表現であり、宇乃の人格とは無関係な所で成立している。小説における女性の美しさの描写はこのように、女性をたんなる対象として見る所に表れる。だから、作家は強くなった女性に対する復讐を、小説の上で行なっているとさえ言えない。

だが、このような文学映画におけるエロチシズムの氾濫は現実生活における生命感の喪失により多く由来している。直接体験より間接享楽へ——これは一種の衰弱現象である。まやかしのセックスの氾濫の中に活力にあふれたセックスは見失われ、真のエロチシズムは窒息させられている。女性はエロチシズムをひけらかしながら、金のない一般大衆には

それを拒む。そして、大衆はエネルギーを喪失しつつある。

ここに、強姦という行為が重い意味をになって登場する。

「贅沢な肉体は常に強姦への期待をいだかせるものだ。裕福と贅沢の中心への、便利な、てっとり早い、水いらずの侵入、奪い返される恐れのない強奪」（セリーヌ「夜の果ての旅」）

強姦において、エロチシズムは女から「与えられる」のではなくて「奪う」のである。自主性の全面的な回復と、相手の完璧な物体化。次の文が、その事をはっきりと示してくれる。

『つまりは、人の生まれつき……

かわいい娘を壁におしつけるのも

彼女の下着を引きおろすのも

むりやり、関係つけてしまうのも

つまりは、人の生まれつき』

しかし、ここでは、この詩の中の『彼女の下着』という言葉と、それが娘をたよりなげにしているのを暗示していることを、記しておこう。（もし娘が男といっしょに壁のかげにはいり、喜んでセックスするとすれば、男はどうして、彼女を犯すというイメージを持

プレイとかなんとかいっても、結局は代償行為にすぎないのではないか？ 奇クを読むことによって、あるいはプレイすることによって、欲望を発散させる、ということとはよく

言われることではあるが、遂に代償行為は代償行為に終るのではないか？ プレイ自身すでに一種の衰弱現象でないとは言えなからう。

「強姦、毒殺、刃傷、さては放火が、
惨めなわれらが運命のありふれた布地を、

その快い模様で今日まで飾らなかったのは
われらの心に、ああ意気地が足らぬため」
(ボードレール「悪の華」)
そして、この私も「意気地の足らない」人
間に他ならない。

△日本版▽

頒価 一〇〇〇円(送共) 略号〔美5〕

モデル……………美木乃々子……………山原清子

待望のグラビヤ印刷によるアート紙の「刑罰拷問写真集」成る

印刷紙焼付による分譲品として美木乃々子嬢出演の『日本拷問刑罰集』並に山原清子嬢出演の『入墨女賊拷問刑罰集』の二集をキヤビネ判にて企画分譲しましたところ熱心な女性拷問刑罰ファンの方々から、いち早く多数のお申込みを頂き迫力ある人刑罰写真集として好評を賜りました。その頃よりアート紙に対するグラビヤ印刷の「女性拷問刑罰写真集」の刊行を強く要望されました。ここにアルバム「美しき縛しめ」限定版写真集の一卷として、前記印刷紙焼付の写真集とは全く異なる観点から35ミリカメラにて撮影した写真（従って内容も全然違います）を「日本版」「西洋版」と

二種に分け、今回は美木乃々子、山原清子
二嬢による「日本版」を八美しき縛しめ
(第五集)として刊行いたしました。
純白の特アート紙に對する極めて鮮明な
グラビヤ印刷による迫力のある写真集を是
非お残め下さい。七十四葉の八女性拷問
写真がぎっしりと全紙面を埋めてフアンの
方々の御一見を得ております。売切れに
なりますと絶對に入手できません。どうか
未見の方は今すぐお申込み願います。

△アルバム（写真集）の内容▽

（刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による女性刑罰拷問写真集）

○木馬責にあつて苦悶する女囚八一葉▽（美木乃々子）○白州の上で非人の鬻りものになる女囚八連続四葉▽（美木乃々子）○牢内にて折檻を受ける女囚——海老縛りと笞打ち。八連続四葉▽（美木乃々子）○非人に縛り上げられる哀れな女囚八連続十二葉▽（美木乃々子）○海老責めに放置され全身蒼白となった女囚八二葉▽（美木乃々子）○非人に不浄繩を掛けられいたぶられる女囚八二葉▽（美木乃々子）○荒庭の上にて荒縄の緊縛に泣き悶える女囚八連続八葉▽（美木乃々子）○算盤責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する女囚八四葉▽（美木乃々子）○荒縄で乳房もくびれるまで縛られた女囚八三葉▽（美木乃々子）○土壇で胴斬りにされる死罪の女囚八四葉▽（美木乃々子）○算盤責めと石抱きの拷問八四葉▽（美木乃々子）○囚衣を剥がされ竹のささらで打たれる女囚八四葉▽（美木乃々子）○刺青を晒して木馬責にあう女囚八三葉▽（山原清子）○海老縛りでムチ打ちに喘ぐ女囚八四葉▽（山原清子）○海老責に苦悶する女囚八四葉▽（山原清子）○竹の棒に折檻される女囚八三葉▽（山原清子）○全裸にて白洲に股間縛りにあう刺青の女囚八六葉▽（山原清子）○礫台に括られた人墨姐御一葉▽（山原清子）○足首を上にして逆さ吊りにされた女囚八一葉▽（山原清子）

以上合計七十四葉——

はな

へび

花

と

蛇

団

鬼六

蛇

と

花

続編（第十七回）

若いコンビ

地下室の階段口で田代と森田が待っている
と、義子や悦子、それに井上達が文夫と美津
子を引き立て、階段を上って来た。

「密室の方の準備は、万端とどこおりなく出
来たぜ。それに関口一家や熊沢組の若い衆達
ももうお集りさ。さ、行こうぜ」

森田は素晴らしい、先に立って歩き出す。

「さ、行くんだよ」

縄尻をとる義子と悦子に背をつかれ、つん
のめるように、ふらふら歩む文夫と美津子。

これから、どのような場所に連れて行かれ
どのような行為を無理やり演じさせられるか
二人はわかっている。

恐怖と屈辱の鳴咽にあえぎつつ、体を前か
がみに折り曲げるようにして、冷たい敷石の
上を素足で歩む文夫と美津子を田代と森田は
時折、振返って見て、せせら笑うのだった。

「朝食にうんと栄養のつくものを食べさせま
したし、精力のつく注射もケツに打ってやり
ましたよ、社長」

美津子の縄尻をとる悦子は田代の顔を見て
素晴らしい、ニヤリと笑う。

それに、この美少年と美少女は全身美容も

されているようであった。文夫の頭髪は、い
い匂いのするポマードをつけて七分三分にわ
けられていたし、美津子も、その黒い艶のあ
る黒髪はカールされ、新しい紫色のヘアバン
ドがしめられてある。

やがて、この美少年と美少女を取巻く一団
は、庭の奥にある竹藪の中に入り、密室に向
かって行く。

密室のドアが開くと、むっとする人いきれ
関口一家と熊沢組の若い衆達が十数人、日頃
から仲良く渡世の交際をしている両者だけに
何やかやと話がはずむらしく、互に盃のやり
とりをし、笑い合っている。

七輪に大きな鍋をかけて、ぐつぐつ肉を煮こみ、酒の匂い、煙草の煙、等々、室内はどぎつい熱気を充満させている。

田代等が、文夫と美津子連れて入って来ると、一座は、ふと話し声を止め、一せいにその若いショーのスターに眼を向けるのであった。

「ひえー、こりゃたまげた。ずいぶんと若いスターだな」

やくざ達の酒に濁った眼は、ギラギラ異様に光る。

恐怖のため、肩や膝のあたりをぶるぶる震わせ、屠所へ入るのを嫌がる小羊のように、体を硬くして立すくんでしまった文夫と美津子に対し、

「何してるんだよ。皆さんは待ちくたびれてるんだ。さっさとお歩き」

悦子と義子は、若い二人の背をどんと押すのだった。

文夫と美津子が慄然としたのは、足の踏み場もないほど、そのあたりを埋めつくしているやくざだけではない。その奥にある、すでに準備一切をととのえられてある舞台であった。

真白なシートが敷かれた幅広い布団の周囲

には、照明器材がものしく配置されており、スターの登場を待っているのである。

「ちよっと道を開けて下さいよ。ハイ、ごめんよ」

森田は、やくざ達の間をかきわけるようにして、二人の若いスターを舞台の方へ押しやって行く。やくざ達は、スターにサインを求めるミーハ族のように、森田や田代の制止も聞かず、わっとばかり押し寄せて来たのだ。

きらめくような美津子の美肌に少しでも手を触れさせようと、浅ましくも、酔った勢で押しかけて来たのであるが、

「困るよ、無茶をしちゃ。今日は、この二人の厳粛な結婚式なんだからね」

悦子と義子は、大声で叫んで、やくざ達を押し戻すのであった。

「まあ、舞台が台なしになっちゃったじゃないの。仕様がないわね。じゃ、元通りにする間、あんた達、この台の上へあがっていて下さいな」

激しく嗚咽しながら、真っ赤になった顔をねじ曲げるようにしている美津子と文夫を悦子と義子は追い立てるようにして、舞台のすぐ手前にある雛壇の上、つまり、何時であつたか、静子夫人と京子が同時に剃毛された拷

問台であり、美津子と文夫がサイズを計られたというおぞましい台の上へ、再び、乗せあげ、わずかな間隔をはなして打ちこまれてある丸木にひしひしと立縛りにつなぎ止めるのだった。

やくざ達は、ごくりと唾をのみこむようにして、若い二人の全身正面像をしげしげと見つめている。

美少年と美少女の足首をぴったり合わせて丸木に縛り止めた悦子と義子は、こちらをギラギラした眼で見つめているやくざ達に、「どう。この二人、童貞と処女なのよ。もっとこっちへ寄って、ごらんなさいよ」

ズベ公達のその言葉に、やくざ達は、ぞろぞろと台の上へ上って来た。

悦子は胸を張るようにして男達にいった。

「このお嬢さんはね。美津子さんといって、今年十八になったばかり。夕霧女子高校の才媛で、将来、スチュアデスになる希望だったんだけど、心境の変化で、森田組の秘密映画のスターを志望する事になっちゃったのよ」悦子がそういうと、やくざ達は、美津子の前に立ったり、坐ったりして、しげしげ見つめながら、

「へえ、これが女子高校生ね。そうとは思え

ねえ、いい体をしてるじゃねえか」

そして、次に、眼を文夫の方へ向ける。

義子がいった。

「こちらも、まだ学生。どう、映画スターなみのハンサムボーイでしょう」

やくざ達は、うなずきながら、眺めていたが、互に顔を見合せて、ニヤリと笑い、

「なかなかでっかいのを持ってるぜ。なるほど、これだけありゃ、この種の映画のスターとしても恥ずかしくはねえな」

などというのだった。

立縛りにされている文夫と美津子の間に森田が入って来ている。

「さて、皆さん」

森田は、密室の中を埋めつくすばかりつかけている関口一家と熊沢組に対していったのである。

「これから、兄さん達に見て頂くショーは、ごらんの通り、全くのズブの素人、しかも、今日が始めてという、こういう若い二人で演じるってわけだけに、色々手間がかかり、スムーズにはいかねえ。まあ、色々見苦しい点はあると思うが、それがまた面白味ってわけだ。その点、一つ——」

「いいから、早くやってくれ」

誰かが大声で叫ぶ。

「へへへ、せいては事を仕損ずる」

そういつて、隅から立上り、のっそりやって来たのは、鬼源である。

鬼源のうしろから、鈍重な動きで、ついて来る大柄の男は捨太郎。今朝方、鬼源が浅草から連れて来たこういうショーの男役を受持って食っているいわばプロであった。静子夫人や京子のショーの相手役にさせるため、鬼源が連れて来た男であるが、子供の頃、脳膜炎で頭が少しおかしくなったという彼は、よだれを流しつづけ、とろんとした眼で周囲を見廻している。

捨太郎は小脇に播鉢をかかえている。鬼源に指さされて、立縛りにされている文夫と美津子の間に坐った捨太郎は、すりこぎを握って、播鉢の中のとろろ状のものを熱心にすり始めたのだ。

それを不思議そうな顔して見つめる男達に對して、鬼源が説明した。

「山芋を始め、色々な薬草を混ぜ合わせて、この若い二人のためのぬり薬を作ってるんですよ。こいつをぬりこめられると、かゆくとかゆくて、たまらなくなる。その、たまらねえかゆさを解決させるにや方法は、一つしか

ねえってわけ。へへへ、おわかりでしょ」

鬼源は、口元に薄笑いを浮かべて、やくざ達の顔を見るのだった。

捨太郎は、一心に、播鉢の中のとろろ汁のようなものをこねまわしていたが、頃はよしと見て、悦子と義子がそれぞれ茶わんを持ち寄りたっぷりとすくいあげる。

義子は文夫の傍へ、悦子は美津子の傍へ近寄っていくのであった。

嫌悪の戦慄を全身に走らせ、石のように体を硬くする文夫。

恐怖に胸を慄わせ、齒をキリキリ噛み鳴らして首を振る美津子。

悦子は、美津子の声をあげて泣き出す一手前のような、ひきつった表情を楽しそうに眺めて、

「さ、お嬢さん。そんなに体を硬くしちゃ駄目。そりゃ、とてもかゆくたまらなくなるけど、文夫さんが何とかしてくれるわよ」と、含み笑いしながら、身をかがませるのであった。

「あっ、嫌っ、嫌よっ」

美津子は、悲鳴をあげ、悦子のしようにする事にさからって、必死に腰を振り動かす。

「動いちゃ駄目よ」

悦子は、茶わんに入っているものをたっぷり指先にすくい取り、半分、意地になったようにそれをぬりこもうとする。

それを眺めていたやくざ達も、たまらなくなつたようわらわらと美津子の周囲を取り巻き、悦子の持っている茶わんの中へ指を入れて、悦子の仕事を手伝うのだった。

「な、なにすんのっ、やめてっ、嫌っ、ああ文、文夫さーん」

美津子は、遂に声をあげて、泣き出してしまふ。

体全体をたまらない嫌悪感が稲妻のように貫ぬくのだ。如何に悶え、如何に叫ぼうと、両手両足は、がっちり柱に緊縛されている身、どうしようもない。

やくざ達と悦子は顔を見合せて、くすくす笑いながら、たっぷりとぬりこんでいくのだった。

「な、何をするんだっ、け、けだもの！」

文夫の方も声をはりあげ、身をくねらしつづけている。

義子と井上が、それをぬりつけようとするのに必死にさからつたものの、美津子と同じく、文夫も両手両足の自由はきかず、防げるものではない。

「この野郎、おとなしくしろいっ」

井上は、いきなり、わしづかみにし、義子は、くすくす笑いながら、万遍なりぬりつけるのだった。

美少年と美少女は、もう反撓する気力も失せたよう、やくざ達とズベ公達にされるがままになってしまふ。

「さあ、もうそれだけ、ぬりこみゃ充分だ」

鬼源は、煙草を口にしながら、眼を細めていった。

「へっへへ、どうだい、二人とも。むずむずしてきたろう」

鬼源は、美津子のそれと文夫のそれを見くらべるようにして、口元を歪めるのだった。

くすりの効き目は、忽ち、その威力を発揮し始めたのである。

美津子も文夫も、しきりに足をもじもじさせ始め、やがて、尻をブルブル震わせ出したのだ。

「うっ、あっ、ああー」

美津子は、カールされた黒髪を左右に振りつづけ、切なげに首をのけぞらせるようにして、鼻を鳴らして、すすり泣く。

「うっ、嫌、嫌っ、くっ、くうー」

美津子は、うめくような声をあげ、しきりに

に尻を左右へ振り始めたが、それを見守るやくざ達は、こいつは傑作だ、と笑い合い、仔細に観察すべく眼を近づけていくのだ。

田代は、井上に注がれたウイスキーを、うまそうに飲んでいう。

「美津子、かゆい所がかけないというのは切ない気持だろ」

その通りで、美津子は、もし、両手が使えなければ、大勢の人眼もはばからず、身をかがめて、指を使ったかも知れない。しかし、柱を背にかたく緊縛されている悲しさ、尻をもじつかせ、かゆみと必死に戦うより術はないのである。

文夫の方も、歯を喰いしばった表情をしてそのかゆみと戦いつづけているのだ。

悦子と義子は、くすくす笑いながら、額に脂汗を浮かべて身悶えしている二人にいう。

「お坊ちゃんもお嬢ちゃんも、がまんが出来なくなったようね。何時までもほっておくと気が狂うかも知れないから、そろそろ、始めてあげるわ。恋人の悩みをといてあげ、自分の悩みもといてもらおう。どういう風にすればいいか、いわなくなつて、わかつていくでしょう」

ズベ公二人がそういったのを合図にしたよ

う、森田は、舞台の周囲に待機している照明係や撮影係に合図した。

こうこうとした光りが、白いシートの上を照らす。

文夫と美津子は、ズベ公達の手で柱から体を離されたが、後手に緊縛された縄はとかれず、そのまま、背中を押され、縄尻をたぐられて、舞台の上へ押し上げられて行くのだ。

舞台の上へあがった美少年と美少女は、互に顔をそらせ合い、ブルブル身体を震わせつづけている。

鬼源と捨太郎は、舞台の上へあがって来ると田代の方を見ていった。

「じゃ、社長、そろそろ始めるとしますか」
田代は、うなずき、

「何しろ、これだけの二枚目と美女の組合わせだ。プレイそのものだけじゃなく、二人の顔もちゃんとカメラに入れなきゃ駄目だぞ」という。

へい、それは百も承知でさあ、と鬼源は、シートの上に身をかかめ、激しく嗚咽している美津子の肩をうしろから抱きすくめるようにする。打合わせ通り、捨太郎は、文夫の肩をぐいとわしづかみにするのだった。

舞台の周囲には、ぎっしりとやくざ達がつ

めかけギラギラ光る好奇の眼を向けている。

バラの肥料

「ホホホ、どう奥様、御気分は」

千代はまた、ガラスのポンプをほんの少しだけ押し、静子夫人の表情を楽しそうに見るのであった。

「うっ、あっああ——」

静子夫人は、美しい眉を八の字に寄せて、キリキリ歯を噛み鳴らし、艶やかなうなじを大きくのけぞらせる。

千代は、ニヤリと笑い、横から銀子が差し出す盃を受け、うまそうに酒を飲むのであった。

「さあ、次は、伊沢先生よ」

千代は、フラフラする足で立上り、場所を井沢と交代する。

わざとゆっくり時間をかけ、千代や銀子達は静子夫人を責めつづけているのだ。

伊沢は、舌なめずりをするように坐り、千代の手つきを真似て、ポンプを一押しする。

「あっ、ああ——」

静子夫人は、再び、眉を寄せ、美しい顔を畳にすりつけるのだった。

伊沢は、じゃ、も一つ、おまけだ、といいながら、更にガラスのポンプを一押ししようとする

「駄目よ、先生。そんなに一度に注ぎこんじゃ駄目。少しずつ、時間をかけて遊びましょうよ」

と、朱美が笑いながら制するのだった。

「さ、次は、川田さんよ」

銀子にいわれて、川田が伊沢とかわる。

千代は、わくわくする思いで、静子夫人の頭元へ来て坐るのだ。そして、汚辱にまみれすすりあげている静子夫人の頬に両手をかけ自分の膝の上に夫人の頭を乗せる。

「ホホホ、奥様、嬉し涙を流してらっしゃるのね。そんなにいい気持なの」

静子夫人は幾筋もの涙を頬に流しつつ、唇を震わせるのであった。

「——お、お願い——早く、早く——すませてください」

「あら、駄目よ。そうはいかないわ。最初の予定通り、たっぷり時間を使って、注ぎこんであげますわ。ホホホ、その方が奥様だって長く楽しめるってわけじゃありませんか」

「あっ、ああ——う、う——」

静子夫人の美しい顔は、千代の膝の上で、

嫌、嫌と左右に揺れる。

川田が、ポンプを押し始めたのだ。

「でも、どうやら、半分以上は、体の中へ入ったようだな」

川田は、ガラス管の中身をのぞいてそういう。

「じゃ、今から、五分間の休けい。それからまたつづきを始めましょうよ。さ、奥様、お煙草でもお吸いになって一服して頂戴」

千代が煙草を探し始めると、伊沢がポケットから太い葉巻を取り出し、

「これの方がいいだろう」

「そうね」

千代は、それを受取り、先端を歯で噛みきって、口にくわえ、火をつけた。二三服、けむたそうに葉巻をくゆらせてから、

「さ、奥様」

千代は、葉巻を夫人の口にくわえさせようとする。

静子夫人は、首を振って、それをさけたがすると、夫人の尻の方に陣どっている川田が口を出した。

「そっちの口で吸えねえのなら、こっちの口で吸わすぜ」

川田につつかれた静子夫人は、はっとした

ように、

「や、やめてっ、嫌っ嫌よ！」

「ホホホ、それなら、ちゃんとお口にくわえるんだよ」

静子夫人は、むせび泣きながら、小さく口を開け、千代の押しつけてくる葉巻をくわえるのであった。

「社交界の花形でもあった麗夫人が、煙草ぐらいすえないでどうするの。口からすって、鼻から煙を出すだけでいいのよ」

銀子と朱美は、葉巻をくわえた静子夫人の頬を左右からつつきながら笑ったが、途端に静子夫人は激しく煙にむせこみ、葉巻を口から落してしまう。

銀子は、おどけた顔をつくり、

「駄目ね。煙草一本すえないようじゃショーのスターとしても困るわよ。仕方がないわ。

川田さん。そっちの方ですわせてあげてよ」

「よしきた」

川田は手をのばして、銀子から葉巻を受取り、

「さ、ここですってみな」

途端に静子夫人は、別の衝撃に打ちのめされたよう

「あっ、な、なにすんの。嫌っ、嫌よ！」

夫人は、首を振って、泣き叫んだが、強引に川田に呑みこまされてしまう。

「まあ、傑作だわ」

静子夫人の悲鳴などにはおかまいなしで、銀子や朱美は、ガラス管より少し離れた所に立って煙を吐いている葉巻を見、吹き出すのであった。

そんな静子夫人を酒の肴にして、再び、盃の交換をし合い、千代や銀子達は、笑ったり唄ったりする。

やがて、これ等の悪鬼達は、さて、続きを始めようか、と盃を置くと、葉巻を抜き取りガラス管のポンプを押し合うのだった。

静子夫人は、美しい額に細かい汗の玉を浮かべ、幾度も艶やかなうなじをのけぞらせるようにして、うめきつづける。固く眼を閉じこの地獄の責めを歯を噛みしめて耐えつづける静子夫人は、ただ一心に、このいまわしい時間が早く終るよう心の中で神に祈りつづけているのであった。

だが、浣腸器の液が全部注入されないうち夫人の下腹に鈍痛のようなものが起り出す。静子夫人は、唇をかたく噛みしめ、しきりと美しい顔を畳にすりつけ出した。

残った溶液を一気に注ぎこんだ川田は、空

になった浣腸器を夫人の鼻先へ近づけた。
「そら、ようやく終わったぜ。長い間、充分、楽しんだろう」

銀子は、脱脂綿をそのあとに当てがい、もみほぐすようにしている。

静子夫人は、このいまわしい注入がおわっても、ほっとする余裕などはなかった。次に当然、起ってくる生理的な苦痛と新たに戦わねばならない。

だが、いくら耐えても、それは無駄な事である。川田や銀子達は、静子夫人の排泄行為を千代の眼前にさらけ出させる事が目的なのだから。

「どう、奥様、お庭のバラの花の肥料をお出しになる？ それとも、もう二〇〇〇ぐらいお体の中へお注ぎ致しましょうか」

銀子は、くすくす笑いながら洗面器の中の溶液を浣腸器に再び吸いこませているのだ。

静子夫人は、ちらとそれを見ると、肌に粟粒の生じる思いになり、嫌、嫌、と激しく首を振るのだった。

もう限界に達してしまっている身に、更に溶液を注ぎこもうとしている鬼のような川田や銀子。心も体も、バラバラになってしまったような静子夫人であるが、責め抜く事に

あく事を知らない悪魔達の顔を、憎悪をこめた瞳をキラリと光らせて見るのであった。

「そら、また、そんなこわい顔をする。だめね、奥様は。そんな美しい顔をしているのにどうして、可愛い笑顔が作れないの」

朱美は、そんな事をいいながら、銀子の手から浣腸器をとり、ぴったりと夫人の尻のそこへ当てがったのだ。

「あっ、お願い、もう、もう嫌！」

静子夫人は、狼狽して、狂気したように首を振る。

「もう充分だというのね。じゃ、今まで楽しませてもらった事を充分感謝して、容器の使用を千代夫人にお願いしな」

そして、銀子と朱美は、汚辱にむせび泣いている静子夫人に対し、感謝の仕方を教示し始める。だが、その間にも、夫人の腹は、ごろごろと音鳴りを始めたのである。

「そら、お腹が鳴っているじゃないの。ぐずぐずすると、洩れちゃうわよ。さ、早くいのよ」

それを口に出していわない限り、便器の使用は許さず、汚物の始末もせず、二三日、このままの恰好でさらしておくとして銀子はおどすのであった。

静子夫人は涙を呑みこんだような悲痛な表情になって、横手に坐っている千代に美しい切長の瞳を向けるのであった。

「——千、千代子奥様、静、静子、心から感謝致します。とても、楽しませて、頂きましたわ」

息もたえだえに、静子夫人がそういうと千代は金歯を見せて、ニヤリと笑い

「そう、そりゃよかったわね、奥様」

と、涙に光る夫人の黒い瞳を楽しげに見るのであった。

「——静子、こ、これから、むさいものを、お眼にかけますが、お願いです。お笑いにならないで」

静子夫人は、銀子に教示された通りの事を口ごもりながらいったが、たまらなくなったよう顔を伏せて号泣し始める。

千代は、ハンカチを出して、とめどなく流れる静子夫人の涙をぬぐってやりながら、
「笑うものですか。奥様がお庭の美しいバラのために心をこめた肥料を作って下さるのですもの。私もお手伝いさせていただきますわ」

千代は、ブリキの便器をとって、静子夫人に当てがうのだった。

ブリキの冷たい感触が、尻に触れると、夫

人は、ビクッと体を震わせる。心臓は高鳴り耳たぶまで紅生姜のように真っ赤になるのであった。

銀子が意地悪い笑顔を作って、再び、夫人の熱くなった頬をつつく。

静子夫人は、すすりあげながら、唇を動かした。

「——伊沢先生、川田さん、もっと傍へいらっして、よく見て下さいまし、少々、くさいのは、が、がまんして——」

むせび泣きつつ、夫人は、やっと口に出しているのであった。

伊沢や川田達が、一段と身を乗り出して来る。静子夫人は、連中の視線を痛いばかりにそこに感じながら、呼吸を止めた。落花微塵の姿を露出させ、この連中の笑い者になればいいのだと、慄える自分の心を叱りつけるようにして、再び、かたく齒を噛みしめたが、なかなか慄えは止まらず、その行為は実行出来ない。伊沢や川田の好奇にギラギラする眼を感じると、生理的には限界に達している身ではあるが、女の本能が、その行為を阻止するのだ。

「やい、何をもったいぶってやがんだ。とつとと始めねえか」

川田が舌打ちして、手をのばし、静子夫人の豊かな乳房をわしづかみにし、ゆさゆさ揺すぶる。

うっと夫人は身をよじりながら、哀願するような気弱なまたたきをして、川田を見上げるのだった。

「お、お願い、こんな、こんな恰好のままじゃ嫌」

「何だと、また、ぜいたくな事をぬかしやがる。おい、朱美、そいつをかしな」

川田は、朱美の手にある浣腸器を取り上げる。

ふと、それに気づいた静子夫人は、はっと血の氣を失くして、

「待、待ってっ、します。しますから、もうそれだけは、嫌っ、ああ、嫌です！」

しかし、川田は、有無をいわせず、一気に突き立て、力一杯、ポンプを押した。

「うっ、うー、ああー」

静子夫人は、打ちのめされたように、艶やかかなうなじを大きく見せた。頭ががんがん鳴り、氣が狂いそうだった。激烈な痛感と快感めいたものが並列的ではなく、全く一つのものとして起り、静子夫人の身体全体は火の玉のように熱くなったのである。

一息に二〇〇〇あまりを注ぎこんだ川田はせせら笑い、

「さ、もうどうしようもあるめえ。元、遠山財閥の令夫人として恥ずかしくないよう堂々と排泄するがいいぜ」

といい、千代が再び、ブリキの容器をびったりと当てがうのだった。

「ホホホ、さあ、奥様、あとの事は心配なさらず、どうぞ、お始めになって下さいまし」

静子夫人は、もう一言も発せず、一種惨なばかりの美しい容貌をゆがめる。足首を青竹の両端に縛り止められ、高々と上へつりあげられている太腿あたりが痙攣した。

「まあ、ホホホ」

容器を当てがっている千代は、突然、吹き出し、片手で口元を押さえる。

銀子も朱美も、声をあげて笑い合い

「まあ、いやーね。お部屋がくさくなっちゃ困るから、障子を開けるわ」

朱美は立上り、四囲の障子や襖をバタバタ開けて廻るのだった。

「そーら、二つ目が出て来たわよ」

銀子は手をたたいて、キャツキャツ笑う。

静子夫人は、ズベ公達の嘲笑も哄笑も、もう耳には聞こえない。時々、光を失った空虚

な瞳を物悲しげに細めて、遠いものでも眺めるように天井を見上げている。

「へへえ、三つ目だ。ずいぶんと貯めこんでいたんだな」

川田が笑った。

静子夫人は、固く眼を閉ざし、眉を寄せ、白い真珠のような歯を噛みしめるようにし、ズベ公達が盛んに哄笑する中で、ようやく、三つ目を放出した。

「でも、さすがに大家の令夫人だわね。音をたてて派手にやらかすのかと思ったら、一つ一つ物静かに行儀よく落していくんだもん。あたい、感心しちゃったわ」

朱美が妙な事に感心していると、川田は、「そりゃ、手めえ達とは育ちが違うさ」と

といって笑ったが、ふと、川田の脳裡に、慈善パーティなどへ静子夫人を高級車で送り迎えしていた当時の頃が浮かんでくる。

高級車のバックミラーを通して見た静子夫人の気高いばかりの美しさ。品のいいお召に黒紋付を重ね、瑞々しい艶やかな頭髪を品よく巻き、澄んだ濃い黒眼、高貴な感じする鼻の線、美しい瓜実顔は雪のように色白で、全体に高尚な匂いに包まれていたような麗夫人であった。慈善パーティなどでも勿論、社交

界の花形として、色々な名士から下へも置かぬもてなしを受け、日本を訪問した外国の映画俳優達と英語やフランス語を使いわけて談笑し合っていた遠山静子夫人。それが、今、眼の前で、ズベ公達の残忍な責めを受け、嘲笑と哄笑の中で、次々と放出しつづけているのだ。川田は、何だか、得たいの知れない不思議な気分になってしまう。

銀子や朱美が、もう流す涙も枯れ果てたといった感の静子夫人の頬をつつき、くすくす笑っている。

「どう、奥様、さっぱりした気持ちになったでしょう。でも、もういいの。遠慮はいらないのよ。どんどんお出しになって——」

朱美がそういうと、銀子は、ブリキの中をのぞいて、

「でもまあ、嫌、嫌、といいながら、ずいぶんと出したじゃないの。あきれちゃうわ、全く」

やがて、ズベ公達は、手拭を水につけて、よくしぼり、千代に渡す。

静子夫人をきれいに掃除した千代は、

「はい、おわり、御苦労様」

といって、笑い、ブリキの容器を手にとつて眺め、

「ずいぶんと健康的な色をしているわ。これで、体のコンディションは上々という事がわかったわ。妊娠するにも、今が一番いい時じゃないかしら」

静子夫人は、軽く瞑目したまま、むっちりした白い肩と乳房で大きく息づいているだけもう嗚咽する気力もないようであった。

川田は、そんな静子夫人の耳もとに口を寄せて、

「おい、奥さん、すばらしい事をしてもらったというのに、黙りこんでいちゃ失礼じゃねえか。浣腸から、その後始末まで、親切にして下さったのは千代夫人なのだけ。ちゃんとお礼をいわなきゃ駄目じゃないか」

それを聞くと、銀子や朱美も、
「そうよ。知性や教養を身につけてるといわれている割にこの奥様、少し、礼儀を知らないようね」

と静子夫人の尻を平手打ちし、千代に感謝の言葉をかけさせるべく、また、色々教え始めるのだった。

静子夫人は、もう完全に意志を失った人間のような銀子に教示された通り、千代の方へ、妖艶なばかりの美しい瞳を向けるのだった。

「——千代子奥様、ほんとに有難うございま

した。こんなすばらしい気持ちになったの静子始めてですわ」

千代は、鼻に小じわを寄せて笑いながら、夫人の頭元に膝を折って坐り、

「もっと、色々な事してあげたいんですけど夫の遠山が淋しがると可哀そうだから、今日はこれでおいとましますわ。どうか、お元気でね。それから、このバラの肥料、約束通りお庭のバラの木の傍へ埋めてあげますわね」

千代は、櫛を出して、静子夫人の乱れ毛をすきあげてやりながら、そんな事をいうのであった。

「さ、奥さん、黙っていちゃ駄目よ」

銀子が夫人の尻をはじいて、次の科白を教示する。

「こんな、すばらしい思いをさせて頂いた御恩返しのもりで、千代子奥様が今度ここへおいでになるまでに、静子、立派に妊娠するつもりでございます」

「あら、つもりじゃ駄目よ。本当にそうなって頂かないと、私、何だか本当に安心出来ないの。必ずお願い致しますわね」

千代は、そういい、銀子や朱美達に向かつて、

「貴方も、その点、よろしく頼むわよ。何度

もいううだけど、この奥様を妊娠させてくれたなら、充分なお礼はさせて頂きますからね」

というのだった。

「とにかく一生懸命やってみますわ。丁度、今日は熊沢組や関口一家の血の気の多い若い衆が集まって来るようですから、早速、今夜から、この奥様に客をとってもらう事にしますわ」

そして、銀子と朱美は、つり上げられている静子夫人の足首にかかっている縄を解き始める。

バサリと夫人の両足は畳の上へ落下し、川田は夫人の肩に手をかけて上体を起させる。

静子夫人は、がっくり首を垂れ、投げ出された形の両足を自然にちぢませ始めたが、銀子は、夫人の眼の前に、ブリキの容器を押しつけるのだった。

はっと顔を横へそらし、その中のものから眼をそらせる静子夫人に対し、銀子や朱美は意地の悪い眼つきをして、

「何も奥さん、顔をそらせる事はないでしょう。自分の体から出たものじゃないの。さ、よく御覧遊ばせ」

銀子は、そういって、夫人のあごに手をか

け、顔を容器へ向けさせるのだった。

放心したような表情で、それに眼を向け出した夫人を千代は頼もしげに見、夫人に寄り添い、頬を近づけて、一緒に容器の中のもの眺める。

「なかなか健康的な色じゃありませんか。それに、ホホホ、まあ、ほんのりと湯気がたっているわ」

朱美が大きな西洋皿とフォークを持ってやってくる。

「遠山家に持ち帰って頂くものですから、このお皿にちゃんと盛りつけをしましょうね。でも、それは、奥様御自身でなさって頂くじゃないの」

成程、と銀子はうなづき、千代と一緒に、後手に縛られている静子夫人の縄を解き出すのであった。

両手が自由になった静子夫人は、本能的に胸を抱き、身をちぢませようとしたが、すぐに朱美が皿とフォークを夫人に押しつける。

「さ、奥様、このお皿にきれいに盛りあげて頂戴」

言語に絶する浣腸責めで、身も心も、くたくになっちゃってしまっている静子夫人の手に皿とフォークが無理やりに手渡される。

「さ、早くして頂戴。こっちも色々忙がいんだから」

銀子や朱美に、肩や背をつつかれ、静子夫人は、小さく、すすりあげながら、震える右手にフォークを握りしめ、その中のものをすくい取ろうとするのだった。

千代は、銀子や朱美と顔を見合せながら、口に手を当てて笑いこける。

人間的感情を喪失した女のように、皿の上へ、それを運んでいた静子夫人。じわじわとこみあがってくるたまらない屈辱感に、皿を持つ左手がぶるぶる震えている。

やがて、仕事を終えた夫人は、皿を畳の上へ置き、そのまま、わっと泣きくずれてしまふのだった。

そこへ、急に縁側越しの障子が開き、入ってきたのは、田代と森田であった。

「何だ。こんな所にいたのかい。ずいぶん、あっちこっち探したんだぜ」

森田は、川田や銀子達を見ている。

「密室の方じゃ、もうとっくに文夫と美津子のショーが始まって、お客は大喜びさ」それを聞くと、銀子と朱美は口をとがらせた。

「そうならそうと、どうして、あたい達を呼

んでくれないんですよ、親分。せっかく楽しみにしていたのに」

「だから、あちこち、おめえ達を探したといってるじゃねえか」

森田は、そういつて、ふと、ブリキの容器の前で、泣きくずれている静子夫人を見て、奇妙な顔をした。

「実はね、親分——」

朱美が含み笑いをしながら、森田と田代に説明する。

森田は大きく口を開けて笑い、

「成程、自分でやらかした事の始末を自分でつけたという事か」

といったが、すぐ

「実は、一寸、弱った事になったんだ」

と、いい、田代と一緒に、その場へ、あぐらを組んで坐るのだった。

開幕準備

森田の説明によると、文夫と美津子のショーは、二人とも新鮮な若さと美しさを持つスターであり、それも、双方、始めての経験というだけあり、見る客達の度胆を抜かした企画としては大成功であり、値打のつく映画

も出来たのであるが、一本分十五分の映画を作る事がせいぜいで、二回目の映画撮影は、不可能だというのであった。

「つまりよ、素人の悲しさで、鬼源と捨太郎のリードでそんな事をやってるのに、文夫の野郎、やっまいやがんのさ」

それを聞くと、銀子も朱美も吹き出し、

「そりや無理よ。ショーの男役が完全に勤められるまでには、相当な期間が必要よ」

銀子は、そういつて、

「それで、美津子の方は？」

「いや、美津子の方も、違算を生じた恰好だな。何しろ、出血がひどい上、気を失っちゃいやがるんだよ」

「なるほど、それも仕方のない事だわね」

銀子はうなずく。

「でも、これで二人は完全に結ばれたというわけね」

「そうさ、美津子は、皆んなに祝福され、撮影してもらいながら、立派に女になったわけさ」

森田が困ったというのは、つまり、文夫も美津子も、そういう状態になってしまったので、ショーの続行は不可能であり、かといって、それでは、集った客達がブツブツいい出

すし、ここは一番、静子夫人か京子を出演させ、時間を埋め合わせなければ、おさまりがつかぬという事である。

「関西の岩崎親分がいらった時、うちのドル箱スターの静子夫人と京子に大活躍して頂こうと思ったんだが、こういう事情だ」

田代は、そういつて、畳にうつ伏している静子夫人の雪白の美肌を、ちらりと見るのであった。

「京子は今、どうしているのです、親分」

銀子が聞くと、森田は、再び、苦り切った顔して、

「それが、こいつも弱った事に、まだ、吉沢とプレイの最中らしいのだ」

へえーと銀子と朱美は眼を丸くした。

「しつこい人だとは聞いていたけれど、まだ続行中とは驚いたわ」

「何しろ、吉沢にしてみりゃ可愛さあまって憎さが百倍といった風な京子だ。骨までしびれるぐらいに責めあげているんだろうよ」

森田は、そういつて、銀子に注がれた酒を口をとがらせて吸いこむ。

そんな最中にある京子が無理やり引っ張り出して、ショーへ出演させても、疲労困憊の極に達っしていて、満足な芸を見せる事は出

来ない、と田代もいうので、銀子は、畳に額を押しつけて、すすり泣きをつづけている静子夫人の傍に身をかがめ、いたずらっぽく笑いながらいった。

「ねえ、奥様、こういう事情なのよ。お疲れのところ、申し訳ないけど、もう一度、桂子とプレイして下さい」

わざと甘ったるい調子で銀子はいいい、夫人の背のあたりに手をかけるのだったが、静子夫人は、びくっと体を痙攣させるようにして泣きぬれた瞳をあげ、銀子を見上げるのだった。

「——そ、それは、約束が違います。後生です、銀子さん」

静子夫人は、今にも号泣しそうな表情をきつとこらえるようにして、必死な眼で銀子を見上げるのだった。

「でもね。今、奥さんの相手をするスターは桂子しかいないじゃないの。文夫の姉の小夜子は、まだ何の調教も受けていない生娘だしね」

「——お、お願い、桂子とだけは、二度とあんな真似をさせないで下さい。そ、それ以外の事なら——静子、どんな事でも致します」「仕様がないわね」

銀子がくわえていた煙草を灰皿にもみ消した時、朱美がふと何かに気づいたよう、首をあげ、

「銀子姐さん、一寸——」

と、銀子を部屋の隅へ呼ぶのであった。

何だ、いいアイデアがあるのかい、朱美、と、田代も森田も川田も、朱美を取囲む。

朱美は、含み笑いしながら、静子夫人には聞こえぬよう小声でいう。

「桂子とプレイさせるより、もっと愉快的事があるわよ」

「へえー一体、どうするんだ」

川田は森田と眼をかわしながら、ニヤニヤして尋ねる。

「これで、美津子はめでたく文夫と結婚、美津子の姉の京子も、吉沢さんと固く結ばれたというわけでしょ。となると、静子夫人だって、ちゃんとしたお嬢さんを持たせてやるべきだと思ふのよ。ね、わかるでしょう。鬼源さんの連れて来た捨太郎という馬鹿」

それを聞くと、田代も森田も、なるほど、とうめいた。

朱美の理屈はこうである。——静子夫人ぐらしいの美貌と教養を兼ね備えた女ともなれば田代にしる森田にしる、男である限り、商品

であるという観念は、あやふやになり、自分と特別関係を持続させたがる事になり、それは、内輪もめの原因ともなる。だから、静子夫人に特定の男を持たせる必要はあるというのだ。

「それは、いい考えだと思わうわ」

千代は、満面しわだらけにして御機嫌になる。

「白痴の男と結婚させ、その男の子供を作らせる。素ばらしい方法じゃないの」

千代は、わくわくした気分でそういうのだった。田代も森田も賛成する。

銀子と朱美は、ブリキの容器の傍で、ちぢかんでいる静子夫人の傍へもどった。

「フッフ、奥様、お望み通り、桂子とプレイする事はかんべんしたげるわ」

静子夫人の泣きぬれた表情に、ふと、安堵の色が横切ったが、それならそれで、この毒婦達は一体これから、どのような事を自分に強要する気なのかと、別の恐怖が胸にこみ上って来た。

「桂子とのプレイをかんべんしたげるというのだから、何も、そうビクビクする事はないじゃないの。密室へ行ったら、お客達の前で森田組の看板女優らしく、貫録ある所を見せ

てくれりゃいいのよ」

銀子は、わけのわからないいいかたをわざとして、朱美と二人、静子夫人のおどろに乱れた黒髪を櫛ですきあげ、なれた手つきで、セットし、化粧をし直し始めるのだった。

昨夜は、伊沢に責めさいなまれ、今日は千代達におどましい浣腸責めにかけられた身を更にこれから密室へ運びこみ、一体、次にどう責めようというのか。静子夫人は、すっかり覚悟をきめたとはいえ、悪魔達のあまりの執拗さに、恐怖の去らぬ胸の慄えで、がくがく歯が鳴りそうになる。

「——銀子さん——わがままいうようですけど、私、もう体中が——お願い、あまり手荒な事は、なさらないで——」

静子夫人は、哀願的なまたたきをして、こわごわ銀子にそういうのだった。

銀子は、静子夫人の唇に口紅をひきながら「大した事はないわよ。果物を二三本、切って見せるだけでいいのよ」

次に、朱美が、ふと、のぞくように見て、

「あら、奥様、大分黒くなってきたわね」

静子夫人は、はっとしたように上体をかがめたが、

「無駄なものは、剃ってしまった方がいいわ

よ。昨夜、京子も吉沢さんの手で、さっぱり断髪してしまったわ。だから、お客様に、それをさせてあげるのよ。わかった」

静子夫人が、相も変らぬズベ公達のおくどい考えに、思わず体を震わせて、顔を膝の上に埋めようとすると、

「そんな事より、桂子とプレイする方がいいというの」

と銀子が意地悪く、夫人の背をつつく。

夫人が激しく首を振るのを見て、

「じゃ、いいのね。メソメソしたり、もたもたしたりしちゃ駄目よ。大スターらしく、色々とお客様に話しかけたりして、皆さんを楽しい気持ちにさせてあげるの。わかったわね」

そのあとの事は、向こうへ行ってからのお楽しみよ、と、銀子と朱美は、わざと捨太郎の事は口に出さず、

「さ、行きましょ、奥様」

と、銀子は、夫人の肩に手をかける。

朱美が、ちょっと、待って、とそれを止めて、

「お客様にこういう風に愛嬌を振りまくか、ちょっと、ここでリハーサルをやって行こうよ。銀子姐さん」

田代と森田は、顔で合図し合うようにして

立上り、

「じゃ、俺達は、密室へ戻って支度をしておくからな。なるだけ早く連れて来るんだぞ」

と、銀子達にいい障子を開けて出て行く。

「となると、せっかくだから、私も、ショーに出演なさる奥様を隅から拝見させて頂く事にしますわ」

と、千代が楽しそうにいう。

「そうなさいましよ。大勢の客のいる中で、この奥様、どういう風に色っぽく演じるか、話の種になさいまし」

◎本誌二〇〇号突破記念◎

▽内容△

一、特異なる風俗文献誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。
一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文献的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。
一、SMの他、フェティッシュ、切腹、女闘美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。
一、形式は創作、小説などのフィクションも結構ですし、自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を発揮できるものを、お選び下さい。

△原稿募集▽

▽規定△

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。
一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。
一、枚数は一切御自由です。
一、締切日は別に定めません。優秀な作品は、最近号に掲載いたします。
一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。
一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。
一、〇以上の内容規定にて、奮って御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

△奇巧編集部▽

朱美は、そういつて銀子と一緒に静子夫人の両手をかいこむようにして立ち上らせる。

「さ、川田さん、本縄をかけてやってよ」

銀子にいわれて、川田は、はいきた、と立上り、部屋の隅から、真新しいロープを持ち出して来た。

「さ、手をうしろへ廻して、胸を張りな」

川田が、手に唾して、ロープを肩にかけ、近づいて来ると、静子夫人は、観念しきった妖しいばかり冷静な表情で、軽く眼を閉じ、艶やかな白い両腕を静かにうしろへ廻してい

くのであった。銀子も朱美も手伝い、夫人の雪白のうなじにロープをからませ、キリキリと後手に縛りあげていく。豊かな乳房には、ロープの棒がかけられて、ことさら見事にはりきり、形のいい、臍を中心に、ロープは菱形に結ばれていくのだ。

「一寸、その床の間に立ってごらん」

銀子にいわれて静子夫人は床の間に上る。

「さ、こっちを向いて」

静子夫人は、いわれるまま、銀子達の方へ向き直るのだった。ローションを吹きかけられ、初々しいアップのヘアスタイルに結われた艶々しい黒髪。彫りの深い、端正な気品のある瓜実顔。二重瞼で、切長の美しい瞳。つい今まで、浣腸責めの汚辱にあえぎ、落花無惨の姿を露呈した女とは思えぬ気高いばかりの美貌を、千代も伊沢も、溜息をつく思いで見るのであった。如何に責めても、いたぶっても、宝石のような艶やかな美しさを失わぬ静子夫人を、銀子達も舌を巻いて見つめる。「じゃ、奥様、一通り、ショーの打合わせをしておきましょうか」

銀子は、そういつて、化粧箱の中から、香水を出し、静子夫人の耳元から、乳白色のうなじのあたりにふりかけ始めた。



(フェチ小説)

カード・プレイ

ト ガシ マル ゾウ
富 樫 丸 三

(一)

僕と悦子たちとの出会いは、そもそもこうだ。昨年の夏の終り、台風シーズンの訪れと共に、ついこの間まで若い男女の狂騒を極めた中央アルプスも漸く本来の自然の静けさを取り戻した頃。××大学医学部夏期診療所もいよいよ今日で店仕舞。

ここに数日居候した僕は、仲間の出ばらったあとをひとり留守番して、しんかんとした小屋の窓ごしに暮れなずむ剣ヶ峯の稜線の厳しいたたずまいに我れを忘れていた時、ひと

りの女性ハイカーが尋ねてきた。会ってみると仲々のグラマーな美人。女の友達が急に具合が悪いので診てくれという。僕は医学生ではない。断ろうと思ったが何となく好奇心も湧いた。

△手に負えないと判ってからでも遅くはなからう▽と何喰わぬ顔で病状を聞いてみるとその友達はひどい頭痛とめまいで倒れたという。△その程度なら何かビタミン剤でもやれば充分だろう▽と僕は友人の診療鞆を取っておもむろに女のあとに従った。

這松と岩肌をむき出した道を下り岳樺の茂みに入った時、それまで黙って先導した女は急にうしろを向くと張りつめた表情で「実は先生に浣腸をお願いしたいんですの」と一気に吐き出した。宵闇にまぎれてさだかでないが女の顔は赤く染まっている。

「……」

僕はあっけにとられたが、さっきの予感が適中したことに現実を疑った。尻をつねてみたが夢ではない。しかしさりげなく、「さっき、君が言ったことは……」

「うそではありません。そのひとはいつも便秘がひどいんです。それで時々めまいを起すのであたし達浣腸をすすめるんですが恥かしがって聞きません。ですから先生に……」

「浣腸など、こん中に入っていないよ。錠剤ならあるが」

「錠剤なんか効きません。実は昨日から飲んでいるようですが一向に駄目なんです。それから浣腸のことですが、軽便のあれなら、あたし持ってますの。それで先生に……」

僕は内心ゾクゾクした。今まで特殊な本などで空想にひたったことはあったが、そんな機会がこのような形で現実になろうとは……

「ともかく診てみましょう。君達、浣腸など

「やたらに使うもんじゃないよ」

僕は心と反対のあらぬことを言っただけをたしなめた。嬉しさをかくすに容易でない。女は流石に恥しくなったか、それきり口を閉じて答えないで怒ったように先を急いだ。十五分近く歩いたか、カールの底にある岳樺に囲まれたヒュッテの中に招じられた。

(二)

「あら、お帰りなさい。洋子ねえさん」

ストーヴを焚きつけていたひとりが、顔をあげて声をかけた。まだ、おっぱ髪おっぱの学生風だ。

「ああ只今。先生をお連れしてよ」

みると、薄暗い片隅に、ひとりが伏せている。ヒュッテの中は三人の若い女の体臭でむせかえった。僕は胸のどうきを静めるように一つせき払いした。

「ねえ、このひとなの」

案内した洋子と呼ばれた女は急に打ち解けたように始めて僕に笑った。そうして、

「トシエさん。先生をお連れしてよ。大人しく診ていただくの」

僕はのどがカラカラに乾いていることを意識した。

「じゃあ、一つ拝見」

僕はトシエという病人の傍に近付き立膝して女のおなかに手を触れた。瞬間、女はびくつとけいれんして体を硬くした。顔はそむけたままだ。

「そんなに硬くなつては診れないわ」

洋子が病人を叱った。僕は「どれど」と声にならぬ声でつぶやいて女のおなかをまさぐった。ヤッケを胸の方へ上げズボンのバンドを解いた。向う側にまわった洋子がチャックをはずし、下着を上下に開いてしまった。素肌がふるえている。手をさし込む。柔かな温かみ。僕の冷たい手が可哀想になる。そんなに大したしこりようでもない。だが僕の口をついて出た言葉は

「……」

だが、また洋子に、こづくように、うながされて

「きのうのあさから……」

「薬は飲んだの」

「ええ。何度も。でも……」

洋子は伸びあがるようにして僕のそばに何やら置いた。携帯用のエネマだ。

「錠剤も持ってきたが即効性からいえば、や

っぱり浣腸が一番だね」

僕はついに洋子に加担した。同好の巧まざる共犯関係!!

「それごらん。先生もそう仰言ってるじゃないの。ね、いうことようきいてするのよ」

洋子はここを先途と淑江をくどく。淑江は消え入るように体を縮めた。

「悦子。ちょっと手を貸して」

呼ばれたオカッパ髪の女学生は珍しいものを見るように寄ってきた。淑江のおえつが洩れる。洋子は病人の下着を剥ぎにかかった。ズボンが膝の下まで下げられた。ズボースに手がかかる。

「ああ、よして。お願い」

「悦子。何してるの。その手を押えて」

「ああ……。ああ……」

両手を悦子に取られ、僅かに腰をふって切なく拒みつづける淑江からズボースと、そして最後のショーツまで、剥ぎとられてしまった。豊かな丸いお尻が目の前にあった。

「くっ、くっ、くっ、くっ……」

恥しさにしのび泣く淑江。

「悦子。淑江の膝をもっと引張って」

僕はといえもう催眠術にかかったように洋子の指示に従うだけ。スポンジを適温に暖

め横抱きの形でおののく淑江のお尻に顔を近づけた。深呼吸一番。二〇ccが二本きっかり淑江の直腸に注入された。

(三)

「さあ、これですっきり気持ちがよくなるよ」
「よかったわねえ、淑江。ねえさんの言う通りでしょう」

「あら大変。淑江ねえさんたら、まあ…下穿きをこんな汚してしまつて」

今迄無口だった悦子が、突然とんきょうな声をあげた。残酷な悦子。淑江の恥しがりやうといつたらない。

「ねえさん。あたしのお古で悪いけど、さっぱりしたパンティがあるから穿きかえましようね。さあ」

悦子は自分のザックから洗いさらした白いパンティをたぐり出した。僕はその間眼をそらす紳士のエチケツトを守ったが、パンティの装身が終った時タイムリングよく、

「淑江さんは疲れておるようだから、ついでに一本注射しておこう」

とパンティの方に顔を向けた。

「腕にするのが普通だが、またヤツケからいろいろ脱ぐのが厄介だから脚へしよう。いいよ。いいよ。そのまま」

上半身を起してズボンを上げようとする淑江の体を押しとどめて寝かしつけると、有無を言わず無垢な白さにかすかに青い静脈を浮かせた淑江の太腿の内側のパンティに近い所を消毒ガーゼでこすった。アリナミンの筋肉注射。これはかなり痛い。一瞬、淑江の口から声とも叫びともつかぬ声が洩れたがあとは静かになった。一生懸命歯を喰いしばっているようだ。

「さあ、これで一切完了。よく眠れるよ。明日の朝はもう大丈夫だ」

僕はシリンジをしまいかけた。と、

「先生。ビタミン剤はもうなくなつて。あたしもなんとなくくたびれたから、出来たら注射していただきたいわ」

洋子が横合いから声をかけてきた。みるといつの間にかスカートの穿きかえていた。

「あたしにも先生」

と悦子も同調した。

「えーと。してもよいが、あと一本しかないね。どうする？」

僕は二人を見やる。

「半分ずつでよくつてよ」

「さんせい。さんせい」

「ついでだから先生。注射器、あたしに貸し

て。あたしだって、出来るのよ。自分でしてみたいの」

「自分じゃ、仲々難しいぞ」

「だったら先生。洋子ねえさんが、あたしにして、あたしが、洋子ねえさんにしてあげたら、いいわよ」

「あなた、わりかし頭のめぐりが早いね」

洋子はにっこりした。その眼は何かこうことうと輝いている。僕も知らず知らずその場の妖しいムードに酔ってきた。俺だって全くの素人の物まねだ。一つ美しい二人のお嬢さんのアブチックな遊戯をとくと見せてもらおうか▽

「針を折ったら大変だぞ」

アンプルを切つてシリンジに充たして、

「じゃあ、やってみなさい」

洋子は神妙な表情でシリンジを手にとってランプにかざした。眼が妖しく燃えている。

と、悦子が突然、身をひるがえして起ち上るとGパンを無造作に脱いしまった。黒い運動パンツを穿いている。よく日焼けした脚はまだ幼なさをとどめて一種のアンバランスな色気を発散した。そのまま洋子の前にきちんと、おかしまして坐った。眼を軽くつむってニッと笑った。

「いい度胸だわ。でも、そんなお行儀いい恰好じゃ針がささらないわよ」

さすが洋子は知っている。悦子の脚を投げ出さし、その太腿に上体をかしげた。あっけない位簡単に終わった。洋子には一応の心得があった。だが未練たっぷりな眼で半分残ったシリンジを見つめて僕に返した。僕はさりげなく針だけ取り替えた。

「さあ、あたしの番よ。洋子ねえさんも脱いだり脱いだり」

「あたしは脱ぐ必要ないわよ」

そうしたやりとりの内にも洋子は悦子の若さに少し圧倒された形。足を二本投げ出すと裾の開いたスカートを幾らか羞恥をこめて徐々にたくし上げた。きめ細かなよく熟れた肉体が露出した。稍長めの真っ白いズロース。何とも言えないふくよかな香りが甘く鼻をついた。黒い下穿きのまま悦子は頬にかかった髪を払いのけシリンジを構えた。片手で洋子のズロースを気持だけずらせ、女の中心部近く筋肉に針を突きたてた。

「い、痛い。悦子、何してるの」

射し損じた二箇所から血の斑点が浮き出した。しかし悦子の眼は、それに屈せず真剣そのもので獲物を追う。三度目の正直。悦子は漸く洋子の軀に或る満足を印した。

「おお痛かった。まるで気狂いに刃物ね」

それでも洋子は先輩らしく応揚に悦子を見やると傷ついた部分をいたわりながら、そつとスカートの乱れをなおした。

(未完)

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

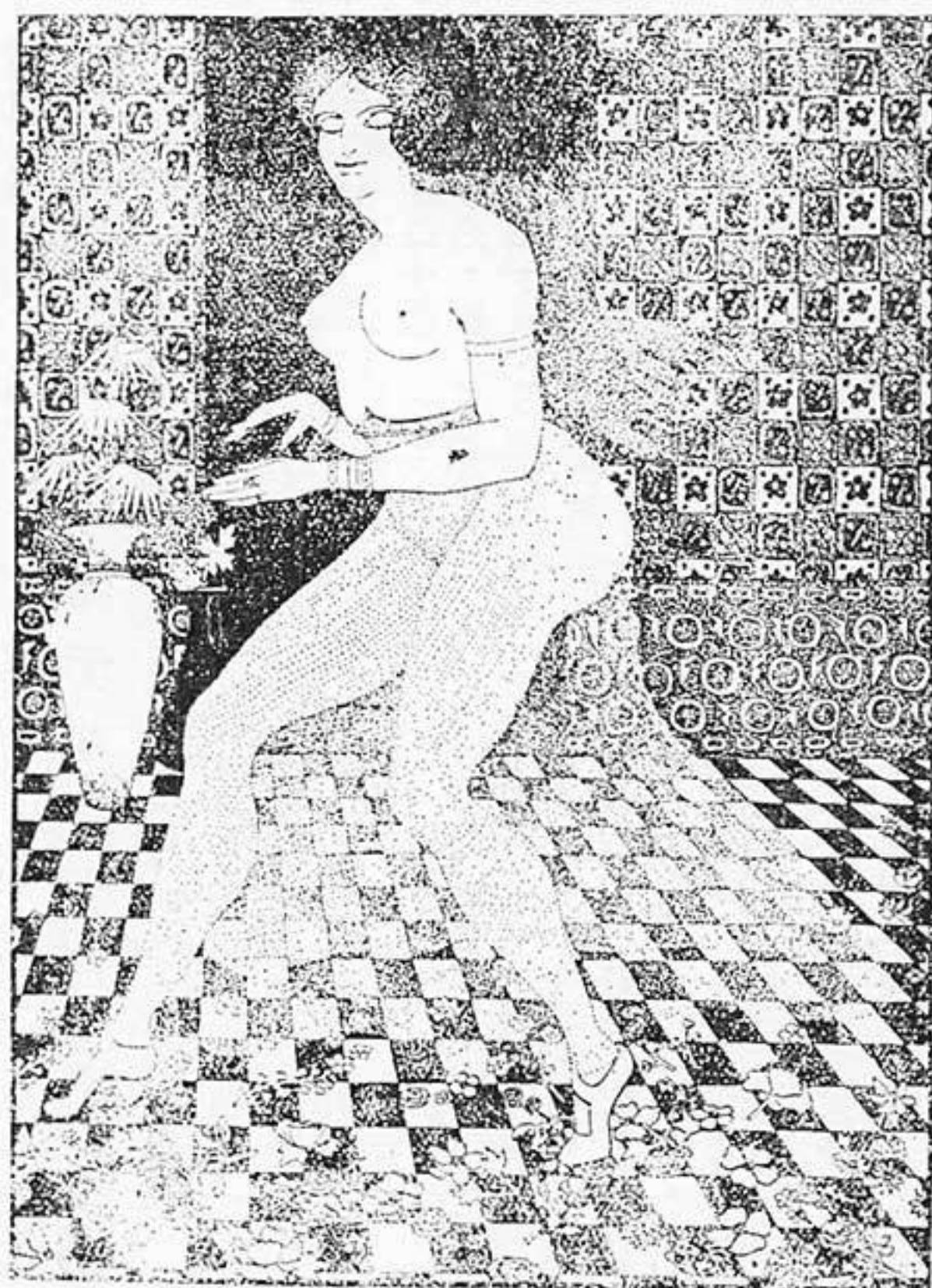
K組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

K 1	全裸刺青自慢緊縛 (山原)	一組一枚	一五〇円
K 2	恍惚たる責の境地 (山原)	五組五枚	五〇〇円
K 3	苦悶の表情海老責 (大塚)	十組十枚	九〇〇円
K 4	海老責にあえぐ女 (大塚)	二十組二十枚	一七〇〇円
K 5	全裸のぐるぐる巻 (玉田)	三十組三十枚	二五〇〇円
		四十組四十枚	三二〇〇円
		五十組五十枚	四〇〇〇円

K 6	豊満な臀部を晒す (刑部)	K 18	猿轡で鼻を虐める (増田)
K 7	厳しき縛りに酔う (山原)	K 17	緊縛にあう若妻姿 (増田)
K 8	荒縄で仕置される (美木)	K 16	夫にされる鼻責め (増田)
K 9	土壇に観念した女 (美木)	K 15	裸縛りに恥らう女 (山原)
K 10	ムチ打たれる女囚 (美木)	K 14	後手の複雑な縛り (玉田)
K 11	縛り人形を眺める (山原)	K 13	足首と首を連繫す (大塚)
K 12	開孔器で鼻を弄ぶ (山原)	K 12	黒禪豊満刺青縛り (山原)
K 13	踏みこまれた女 (山原)	K 11	古墳にて吊り準備 (木村)
K 14	拷問にあう裸女賊 (山原)	K 10	ロープブラジャー (山原)
K 15	厳重な後手縛猿轡 (刑部)	K 9	エビ縛りにあう女 (木村)

K 19	開股縛にあう女囚 (美木)	K 34	エビ縛りにあう女 (木村)
K 20	罪状を訊かれる女 (美木)	K 33	厳重な後手縛猿轡 (刑部)
K 21	股間縛りの全裸像 (山原)	K 32	拷問にあう裸女賊 (山原)
K 22	荷造り縛りで晒す (玉田)	K 31	古墳にて吊り準備 (木村)
K 23	革拘束衣で括らる (大塚)	K 30	ロープブラジャー (山原)
K 24	庭木に立縛りなる (木村)	K 29	踏みこまれた女 (山原)
K 25	柱に晒される裸身 (玉田)	K 28	黒禪豊満刺青縛り (山原)
K 26	セーラー服しばり (大塚)	K 27	高手小手首縄緊縛 (山原)
K 27	黒禪豊満刺青縛り (山原)	K 26	古墳にて吊り準備 (木村)
K 28	踏みこまれた女 (山原)	K 25	ロープブラジャー (山原)
K 29	拷問にあう裸女賊 (山原)	K 24	厳重な後手縛猿轡 (刑部)

K 35	イルリのある風景 (大塚)	K 49	立木より逆さ吊り (木村)
K 36	麗しき裸身を晒す (大塚)	K 48	エビ縛り刺青姐御 (山原)
K 37	亀甲縛り正面裸像 (刑部)	K 47	縛りに典子の素顔 (刑部)
K 38	豊満乳房縛り上げ (山原)	K 46	伸びやかな裸縛り (刑部)
K 39	全裸を投げだして (山原)	K 45	猿轡の下にあえぐ (刑部)
K 40	縛しめに哭く乙女 (木村)	K 44	笑顔を縛る強烈さ (刑部)
K 41	エビ責め放置十分 (木村)	K 43	観念アグラ縛り図 (玉田)
K 42	豊かな全裸を緊縛 (玉田)	K 42	笑顔を縛る強烈さ (刑部)
K 43	観念アグラ縛り図 (玉田)	K 41	猿轡の下にあえぐ (刑部)
K 44	伸びやかな裸縛り (刑部)	K 40	縛りに典子の素顔 (刑部)
K 45	エビ縛り刺青姐御 (山原)	K 39	立木より逆さ吊り (木村)
K 46	縛りに典子の素顔 (刑部)	K 38	豊満乳房縛り上げ (山原)
K 47	伸びやかな裸縛り (刑部)	K 37	麗しき裸身を晒す (大塚)
K 48	エビ縛り刺青姐御 (山原)	K 36	亀甲縛り正面裸像 (刑部)
K 49	立木より逆さ吊り (木村)	K 35	イルリのある風景 (大塚)



SMコレクションから……………

自称雑学アブ博士の書拔帖

江川詩二

私はマニア作家でもあろう江戸川乱歩氏のオールド・ファンである。という事は、幻想怪奇なる場面の数々を夢みる一人でもあるからだ。昔、(大正末期から昭和の初期にかけて)乱歩氏は変格物と称される中・短篇を続々と発表された。それは、バルビユスの「地獄」などのように、覗き見の心理をとらえた『屋根裏の散歩者』やレンズ狂の男を主人公にして内側に鏡を張った球形の物体をつくりそのなかに這入り自分の姿を見て発狂すると

いう心理小説『鏡地獄』または愛人を殺し、刻々と微生物に蝕れて変貌するその死体を愛撫し保存しようとする苦闘を正面から追求した、無惨で猥雑な対象から醜の美を抽象した『虫』等々。それら、浪漫怪奇の文学は、一般文学雑誌に掲載されたとしても、潤一郎・春夫の正統を承ぐ素地を含む者として評者の絶讃を浴びた佳品である。時代は流れ、現在は探偵小説も推理小説とよばれ、社会派推理小説なども出現するに及んで八変格物Vのジ

ヤンルは薄れた。特に乱歩氏はその作品に、サド・マゾヒズム的な要素を好んで用いられた。これは本誌・新年号「或る真面目なたわごと」(乱歩作品からのマゾフィズム的空想など)須朔渾氏のエッセイなどでも大方マニア御存じのことだ。

私が「奇譚クラブ」を読みはじめてからそんなに月日は過ぎてない。投稿は『人魚責めパノラマ館』が新年号に掲載されたのみである。私が奇クを手にとってその魅力に引かれ

たのは毒の花の香りが紙面全体に流れていたからである。いまよく言葉に出されている悪書的な意味で言っているのではない。乱歩氏が開拓された幻想的な凄美な世界が未だここに温存されていたことへのよろこびだ。四十年十二月号で『江戸川乱歩式ファンタジックムードをもう少しとり入れてもいいと思うのです。空想力のカケラもないリアリズムは純文学にまかせましょう』——という室井亜砂路氏の言葉はわがこと至りであった。私の異常美の世界追求は乱歩の作品で開眼され、その地点を中心として諸雑誌及単行本などのSM的分野に及んだ。

某日。書棚を整理した際、SM的な場面のあれこれが書物をひろい読みする私の気持ちを刺激した。ここにそれらの作品の一部を摘宜拔書し大方マニアに提供したい。よろしく御賞覧のほどを——。

はじめに今は亡き江戸川乱歩氏に敬意を称する意味で昭和三十年一月号と十二月号にかけて△面白倶楽部△に連載された『影男』の美女と獅子男の一節。「獅子男は四つん這いになった。鏡の中の百千のはだか男が四つん這いになった。そして、ポカンとひらいた厚いドス黒い唇から涎よだれをたらして、けだものの

ような卑屈ひくつな、狡猾こうかつな横目で、女獅子使いの颯爽たる立ち姿を盗み見た。——中略——どこから取り出したのか手綱代りの同じだんだら染めの紐が、男の口にくわえさせられ、その両端を持って、ハイスイドウドウと、お馬の曲乗りがはじまった。百千のはだか馬と、赤い縞の女騎手とが縦横にはせ廻った。刹那せつな、刹那に例の鞭が、時に空を、時に男の毛むくじやらの大きな尻を、ピシリ、ピシリと打ちお尻にはまっ赤な毛糸の網模様が出来て行った。——中略——男は乗りつぶされて、グツタリと蒲団の上に、横たわったまま動かなくなつた。大きなからだは汗とほこりと血にまみれ泥どろのように汚れて、烈しい息使いに、肩と胸と腹が大波のようにゆれていた。「ウ、ウウウウ、もっと……、もっと……、ふんづけてくれ。ふんづけて、ふみ殺してくれい！」言葉ともうめきともわからぬ音が、男の口から漏れて来た。プロテアの美女は、横倒しえんぜんになった醜惡なけだものを見おろして、嫣然と笑った。牡丹の花が開くように笑った」

註・乱歩は倒錯心理をよく好んで諸作品に投影させたようであるが、いまは昔、昭和五年一月から十二月まで「文芸倶楽部」に連載された『猟奇の果』の主人公・青木愛之助が

秘密の家で覗き見る場面△影男△と同じく、女曲馬師と哀れな人間瘦馬やせうまを登場させているのも興味深い。

『首を接換えた侏儒』この小説は、異色画家・竹中英太郎の挿絵が付けられてある。作者は久野豊彦。昭和六年三月号△文学時代△新潮社刊。

「——だって昔から笑い話があるじゃないの。有名な外科の大家河藻先生と堂茂ドクトルとが、大王の御前に於いて、お互いに首を切つて、接換つげかえて見よって命ぜられたもので、早速、お互に首を切断したところが、遂に、どうもこうも仕様がなくなつた。っていう落語があるでしょ。あんたが、首を接換えるってどうしても、妾わかしの云うことをききいれなかつたとき、妾は心のなかで、ほんとうに、あんたは、どうもこうもならなくなって、そのまま死んじゃうかと妾はびくびくしてたのよ。それでも、うまく、首が接換えられてさ、そうして、二人が、こんなに、楽しげに散歩ができるんですもの。まあ、よかったわ。」

註・首の接換えというテーマが面白い。紹介した一節は、そのこと(外科手術成功)によつて犯罪を逃がれようとした侏儒こびとに対する

情婦の会話である(怪奇ふぁんたじー・ストーリー)。

『マゾヒズム小説集』(文学時代)昭和六年八月号。(おくがき)の「記者より」によると「岡田三郎氏の訳になる、マゾヒズム短篇集は、変態性慾文学者として知られているマゾッホの短篇中から、見本格的なものをここに示したものです。マルキ・サアドのサアディズム、虐待狂に対する被虐待の病的心理を取扱ったのが、このマゾッホの作品で、マゾヒズムの名ある所以です。その名だけはずい分知られていますが、実際作品に接せられるのは、諸君も多分これをはじめではないだろうかと存じます。」

(註・原文のまま) 岡田三郎訳によって「獅子使の女」「二十五番目の鞭」「城の女」が三篇紹介されている。編集後記と思われる「記者より」を長々と引用したのは昭和初期のマゾッホ観の事情がうかがいえる文献価値を考慮した為である。「ザッヘル・マゾッホ小伝」が本稿、冒頭に掲げられている。

Leopold Von Sacher-Masoch (レオポルド

・フォン・ザッヘル＝マゾッホ)は一八三五年ガリシヤのレンベルグに生れ、一八九五年リンドハイムで死んだ。父はガリシヤの警察

署長であった。はじめ、父の転任地であるプラーグの高等中学校に学び、後、オースタリヤのグラッツ大学を卒業するに及んで、同大学の講師となった。それは、一八五七年である。その翌年、一八五八年に処女作「ガリシヤ物語」を上梓して好評を博したが、またいくばくもなく、今度は郷里レンベルグ大学の教職についた。一八八二年以後は、ライプチヒで雑誌を発行したり、また、ブタペストに転じて、同じように雑誌を発行していたが、晩年はマンハイムの新聞社に勤務し、文芸面を担当した。この間に多数の作品を発表したが、そのうちでも傑出したものは、多くはハンガリア、小ロシア、ユダヤ等の生活に取材したものである。「カインの遺物」(一八七四年)——「ハンガリア物語」(一八七六年)——「ユダヤ物語」(一八七八年)——「新ユダヤ物語」(一八八一年)——「ポーランド物語」(一八八七年)等は代表的作品である。ここに紹介する短篇小説は、「ハンガリア物語」から採択されたものである。

「獅子使の女」

はじめごろ
一九五九年の冬の初頃、有名なハルスベルグ動物団の一行が、初のお目見得としてブカレストに乗込んだ。全市こぞって、この珍奇

な動物の大きかりな集団に驚異の眼をみはった。特に数頭の獅子は人気を呼んだ。それはこの猛獣を自由に使いこなす美人の獅子使いがいるせいでもあった。彼女は瑞典生れで、名をイルマ・ダルストレムと云った。まれに見る美貌の上に近づきたい気品があつて、然もそれでいて命知らずと云われる程の豪胆な氣質を具えていた。風聞に依ればイルマはこの動物団の団長の、愛娘と云うことであつた。そして富裕な貴族達が、よく彼女を射落そうとして出かけて行くのだが、その都度、いかにも冷淡なよそよそしさと傲慢な態度しか見せてくれないので、さすがの貴族達も云いよる勇氣が失せて、諦めると云う風であつた。——中略——或る日のことマニアスコ公爵は二、三の友人と連れだって、ハルスベルグの動物団を見に行った。さまざま動物に興を覚えながら見て行くうち、最後に獅子の檻の前に立止って、謎の微笑を唇に含みながら、有名な獅子使いの女の出で来るのを待った。程もなく、檻の向うの小さな戸が開かれたと思うと、熱狂的な拍手に迎えられてイルマが現われた。だれにも真似の出来ないような悠揚せまらざる応揚さで、毛皮附きの天鵝絨の大外套を脱ぎすて、赤鼬鼠の毛で縁どられ

た白襦子の服で、微笑をたたえ、軽やかに、猛獣檻のなかへとはいって来た。手には真鍮の針金の鞭を持ち、すっきりとした姿で、その顔は高雅をきわめ、色沢は生き生きと、そして黄金のようなブロンドは房々と波うち、すべてが魅力に充ちあふれていた」

(註・ブカレストの貴婦人社交界に人気男として鳴らした公爵は、この獅子使いの女を一眼見るや、忽ちふくれあがる感情の虜となりまた、イルマも芸が終って檻を出ると、魅力ある公爵の面に見入った。ここから、市中の評判となるほどの情事が展開されるのだが省略。遂にこの関係は幾多の物語をはらんで

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食

大手札 三十六枚組 六〇〇〇円

略号(ほや)

〔S女性……刺青女性山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者M・H氏〕
男性をいたぶることについては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊満な肉体の女性と共に二人して一人のM男性を、こてんこてんに虐めしめ尽す有様を、順を追って刻明に写真化しました。縄、ローソク、浣腸器などの小道具を用い、マゾファンの思わず、ぞくぞくする場面ばかりを連続組写真に編集しました。どうか、この写真集にてマゾの醍醐味を心ゆくまで味って下さい。

破局へと進む。以下、ラストの場面のみ紹介する)

約束の時間―夜の十一時に、小屋の裏手の戸口に公爵は姿を現わした。いつも同様に、難なく戸は開かれた。雪を照らす蒼白い星明りのなかに、イルマは毛皮附きの短いジャケツを着て出て来たが、公爵の手をとって、暗い通路を用心しながら導いた。

(註・イルマは公爵をたくみに獅子檻の鉄格子の中にさそい込む描写があつて)

燃えさかる松明を、獅子檻の鉄格子にイルマが結えつけた。その檻なかに公爵が猛獣にとりまかれているのを発見するや、名状しがたい恐怖に全身をおそわれた。イルマは胸に両腕を十字に組んで、檻の前に真直に立ちながら、その碧い冷酷な眼で公爵をしげしげと睥睨した後、悪魔のような断続的の笑いを発した。公爵は精かぎり戸を開けようと試みたが徒労であった。

「イルマ！ これは一体、どうしたことなんだ？」

と、公爵は泣声で云った。

「今夜はあなたとわたしの結婚式なの。そしてこの獅子共は、お客さんに来てくれたんですわ」

「そんなことを云って、お前、気でも違ったんじゃないのか？」

「どう致しまして、気は確かですよ。あんたはわたしを裏切ったんだから、その罰で死刑にしてやるのよ。……それッ！ みんな彼奴に飛びかかれ！」

こう云って彼女は、眠っている獅子共を鞭で叩き起し、けしかけた。公爵は死物狂いになって救いを呼んだ。この叫声で却って猛獣達は煽りたてられ、猶またイルマの鞭にけしかけられ、先を争って公爵にとびかかった。

彼等の鋭い爪や牙にかかって、忽ち公爵は血みどろにさせられたが、絶望しながら猶も彼は嘆願しつづけ争いつづけた。イルマは冷たい鉄格子に凭れかかりながら公爵の苦しみもがくの快感に満喫していた。獅子共はようやく彼等の惨酷な仕事をなしとげた。公爵はまったく絶命し、檻の床上看るも無惨な死骸となり終るや、彼等は臆病そうに遠ざかって、血にまみれ足をめいめい舐めずりはじめた。

その夜、美しい獅子使いの女はブカレストから姿をかくしてしまった。それきり彼女がどうなったか誰も知るものはなかった。

「二十五番目の鞭打」

△奴隷にでも何でもなりますとも▽と若者は云うのであった。△あなたのお気に召すまで私はどんな苦しみでも喜んで受けます。：そ。うですとも！この貂の毛皮を着け、手に鞭を持てば、それこそあの物語の惨忍な女主人公そっくりです▽

男爵夫人は暫く相手を見ていたが、やがて独特の微笑を浮べた。(註・一節のみ。「城の女」は省略す)

「獄中性愛記録」シヨワジ女史著・酒井潔訳
△風俗資料刊行会▽昭和六年八月刊。

シヨワジ女史は、当時のフランスの探訪記者。△一、男色▽の項を抜萃しよう。

「徒刑場の男色は、オスカー・ワイルドのその如く知れ渡っている。——巴里大学法学部教授・H・ドンヌデュー・ド・ヴァーブル氏はこのために、一章の全部を割いている。おまけに看守も、これを抑止しない。——すべての愛は、窮乏と夥多の結合である。我々はすでにこれをプラトンに見出す。妓楼におけるが如く、ドン底生活者におけるが如く、放蕩三昧者におけるが如く、最もアブノーマルな不徳におけるが如く、徒刑囚の場合にあつても、人間を向上せしめる唯一のもの、それは愛の火花である」

△第四章未成年者の刑務所▽の「十歳になる一少年囚の手紙」の項を紹介しよう。

「私は一九二九年三月四日からここに入れられております。二十一歳にナラナイのでラ・ロケットにキル。この内は、みなさんがおいでになるとワカルが、ツメタイひどいカッコウをしています。シンタイケンサをうける時みなさんは、ヒツジのように、ひっぱられます。それから体を洗いにつれて行かれますがこの不呂にいつてる時はやっこさで十分位です。そして皆分れ分れにべつの内につれていかれます。そして其コで、私たちの苦しいカワイそうな生クワツがはじまります。又あるカン守は、とても伊地がワルくて、何かオチドはないとウの目たかの目でさがして、ちよつとしたオチ度があつてもひどいバツをくらはせる。——中略——私はときどき人間かけだものか、わからなくなります。——つみがきまるとき、血をとられるやうな、しぬのじやないかとおもひました。——中略——私はまへてはよくわらう子供ですけれども、今はしづかでつめたくなりました。アタマはつかれるのに何のカンガへも出ません。セイシツがかはります(後略)。

△註・この手紙は脱字判読に堪えない原

文のままのせてあるので、訳文もそのつもりでやっておいた——の訳註が附記されている。なお、この書物は、ようやく大衆文芸にあきあきして来た実話文学拾頭の時流に乗って、ほん訳出版された、所謂曝露的報告文学の一つである▽

『ソドムの百二十日』これはもう大方マニア御存じのサド文学であるが、すでに昭和六年七月刊の「犯罪科学別巻・異状風俗資料研究号」に丸木砂土氏によって図書紹介されている(発行所・武俠社)。

「ソドムの百二十日」——侯爵サアドの一著作について——丸木砂土。「ソドムの百二十日は、サアドの著作の集大成と共に、この世の中に存する、あらゆる悪徳の集大成のようである。この中に描かれてない淫慾と惨虐と悪事は、もうありそうもない。「チユスチス」「ヂュリエット」「化粧の哲学」に現れたるサアドは、この『ソドムの百二十日』に於て、全く人間以上のものである。サアドを軽んずる人は、この世の一切の悪をないがしろにする人であらう。悪魔を見ない人であらう。それ以上に神を知らぬ、と言つてもいいかも知れない」として七頁にわたって論説している。△註・ソドムの百二十日(世界セク

シー文学全集第三巻）大場正史訳・昭和三十
六年刊・新流社▽渋谷竜彦訳△新サド選集▽
（桃源社刊）の内第八巻『ソドムの百二十日
序章・付ゾロエ』予価四〇〇〜五〇〇円（昭
和四十一年四月新刊）

『刺青』福土政一・これも△犯罪科学別巻▽
に所載されているものだが、口絵に本文刺青
の項参照として掲載されているフォトは珍ら
しい物で頭にまで刺青がほどこされているの
など紹介されている。

現在。△奇ク▽にあって、「山原清子・刺
青の魅力を探ぐる」など限定版グラビヤ写真
集・第七集が広告されてあるが、犯罪科学別
巻の方は男性である。（口絵一枚をこの稿に
そえたが、はたして転載されるかどうか）輝
一本の刺青男が登場し、マゾ女性を責めるフ
ォトなど本誌に発表されたら、それこそ迫力
のあるSMフォトができるのではと夢見るも
のだ。

『変態魔術考・全』変態文献叢書第一巻・佐
々木指月△文芸資料研究会▽昭和三年五月刊
——「同性愛倶楽部」の章より。同性愛倶
楽部と云う秘密な倶楽部があると云う話をき
き出して、S君は、その六十九丁目の百〇一
番の家から、大都会の隅々に向って目を光ら

したことであった。△註・ここからS君の倒
錯的世界放浪がはじまるのだが、その本文よ
りはむしろ、ラン外に注されてある解説が面
白いので、その方を引用しよう。

△セントラルパークの西側にある街。この
クラブの人に云わせると、キリストも、シャ
カも、みんなホームセックス（同性愛）だと
云う。男性のなかには、女性よりも同性愛が
さかんであると云う。芸者を交えぬ日本紳士
の宴会などはお互いに猥談ばかりして、あれ
はまさにホームセックス倶楽部に似ている▽

△女でいて男の真似をするのは、同性愛患
者だ。日本の男優が女の真似をするが、ああ
した男優は、それが天才であればある程同性
愛患者と見てさしつかえない。凡て男性的な
女に惚れる男。女性的な男に惚れる女は皆こ
の同性愛の病状にいたのである。田之助と云
う役者があったそうであるが、彼の伝を読ん
で見ると、かれたダブル・ホームセックスで
最も完全した同性愛の魔物である▽

『絞首台に上るまで』——女革命家ペロフスカ
ヤの血の記録——尾瀬敬止。昭和六年八月号△
犯罪科学▽。自称・殺人趣味の黒田寿氏等の
よろこびそうな実話。記録の終章△絞首台の
露と消える！▽より抜萃しよう。

「今日の死刑執行に関する一切の事務は、凡
て警視總監の指揮による事とされた。処刑場
には、ペテルブルグ控訴院の検事プレーウエ
を始めとして、同地方裁判所検事及び書記等
が臨席していた。絞首吏フロロフは特別の馬
車に乗って処刑場へ来た。彼の周囲にはいつ
も警官が護衛していた。死刑囚が到着する以
前、五人の僧侶が三台の馬車に分乗してやっ
てきた。——中略——刑の執行は、先ずキバリチ
ツツから始められた。順序から云うと、ミハ
イロフはその次であったが、彼の処刑はそう
容易には片付かなかった。どうしたわけか、
ミハイロフは、その首を絞めつける紐から抜
け落ちた。で、群衆は叫び出した。『紐がく
さっているのじゃないか』そして、二度目の
処刑で参って了った。

ソフィヤはミハイロフの傍に佇んでいた。
彼女はもう凡てこのことを観念してでもいる
ように、あたりを見廻そうともしなかった。
そして、首架にかけられたのであるが、その
踏台がはずされると、すぐ絶命して了った」
△註・表題の女革命家ソフィヤ・ペロフス
カヤは一八八一年三月十日、アレクサンドル
二世に対する大反逆事件に連座して捕われ、
遂に後に処刑された。

これはその記録で、十九世紀末葉のロシアを嵐のように震撼させた珍しい大反逆事件とカット写真数枚入りで十頁にわたって紹介されている。なお筆者・尾瀬氏はその本文附記で、本稿は一九二〇年労働ロシアの国立出版局から刊行された「ソフィヤ・ペロフスカヤ」(エヌ・アシエシヨフ著)によるとしている。

『デカメロン』昭和六年八月号(風俗資料刊行会)。

この風俗誌は、△犯罪科学▽などと違って大衆性あるエロ・グロ・ナンセンスを編集方針にしているようだったが、特に軽いエッセイが毎号呼び物となっていた。

△エロは覗く▽として二作掲載。

「竊み見る心」島洋之助。

△隠すほど見たがる心理——は文明人ほど多い。野蛮人には秘密がない。秘密は、文明人に付き物である。——中略——千九百二十七、八年頃、巴里の洒落娘たちが、素脚で街を歩いたと云って、欧米人達は、そのフラッパ一ぶりに、あきれ、おどろき、喝采したものだが、娘の素足位なら、少し風の吹く戸外でいやと云うほど見せられるわれわれ日本人から云ったら、正に失笑のさたである。(註・

一九六六年の現代は、ビキニ・スタイルが海水浴に登場するかと思うと、乳房を露出する海水着もうわさとなっている) 竊み見る行為は文字通り、ひそかに人に知られず覗くところに悦楽がある▽。——作者はここからナポリのホテルでは浴室となる室の戸棚から、のぞく話や、巴里には硝子の腰掛と称する、硝子製婦人用便所があって、好き者は、これをのぞくという青楼(商売屋)があるとか、その△のぞき芸術?▽をひろうしているが、

終りになって昭和五年十月、名古屋津島署に検挙された三重県生れの内崎静雄の如きは便所専門の竊視狂で、三月以来市内各女学校の便所を住居とさだめ、「用便する学生達を糞尿中から眺めていた不思議な男」と、新聞記事を紹介して結んでいる。

「新東京艶笑譜」紫田道司。△風をつぶす少女▽という変わった三章の内。〃ヒョイと変に真面目くさった表情で僕を仰いだ。「なあにそれ?」「風!」と、彼女はどなった。そうして、急にウフフ!と笑い出した。「ね、あのピチッ!ピチッ!と風のつぶれる音が、何とも云えない野蛮な快い響きを持ってるじゃないこと? 殺人狂が人を殺す時の快感であたくしこんなじゃないかと思うの。こう云

うサジズムの傾向は、誰でも持ってるものなのね。：風をあたくし沢山飼ってあるのよ。押入の中」この文は〃こうして、基督降誕以来一千九百三十一年の東半球の一ヶ所では白昼の太陽の真下で、奇妙な風潰しの光景が演じられていたのである」と終っている。

『グロテスク』昭和四年新年号(文芸市場社刊)

この新年号は倍大号三七〇頁。特に△サデイストとマゾヒスト(対話)梅原北明・杉田直樹▽がよび物となっており、約二十頁にわたって二段ぎしりと対話速記が掲載されている。杉田氏は医学博士。梅原氏は「グロテスク」誌・主宰であり風俗文献出版者。冒頭がマゾヒズムだろうと思うのですがね。細君はサデイズムの傾向がありはしないかと思ひます——という梅原の言葉ではじまる。

梅原「彼が少しおそく帰って来ると、上らせずに玄関で引かき廻すので、体中が傷だらけになると云う始末です。引搔れるのがくるしくて、まれに早く帰って来ると細君が非常に媚を呈して何処も引搔きはしない」

杉田「そう云うことが却って物足らない」梅原「ええ、どうしても是はあの活劇を一

回演じないとねつかれないと云うくせになつたらしいのです——と、マゾ男の心理分析に移り、それから、細君の方も徐々に、サジスチンとしての本領を^{はつき}発起する所でクライマックス。

梅原「晩の十時頃帰えると、細君はもう待ちくたびれて蚊帳の中にねてたそうです。さ

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演

Mフオト
最新作

M場面決定版

裸女二人の尻の下

略号
(まふ)

遅ましい素肌の臀部が男の顔の上に乗ってゆく、全裸の美女二人から責められる幸福なるMモデル男の生態。

二女の戯むれと男

略号
(まも)

美しい蝶々のように二人の裸女が尻に敷いた男の上にて、戯れていたが、やがて尻の下でうごめく男をなぶるのだった。

美女から縛られる

略号
(まね)

暴君と化した二人の遅ましい美女の前に跪いたM男は、必死の抵抗も空しく縄で厳しく縛られてゆく甘美な過程。

男馬を乗り潰す女

略号
(まめ)

二人の肥った女を背中に乗せてハイドウドウ。いくばくもなく乗り潰された男は、勝気な二人の美女から辱められる。

て彼は、その細君の枕元で何を発見したか？、そこには皿に梨が三つ置いてあり、ナイフもあったので、細君を起しもせずに、其の梨を食べちゃった。所が細君はふっと目をさまして、いきなりすくっと起き上り、彼の顔と梨をむいた皮とを等分に見るや否や、飛び起きて近所へも聞えるような大きな声で、自

Mファン待望の超傑作集

大手札印画紙焼付
各組十二枚一組 二〇〇〇円
八組全部にて 一三〇〇〇円

痛烈ムチのご馳走

略号
(まれ)

後手に縛りあげられた男は、二人の裸女にとつては恰好の弄び道具である。男の肌にムチが炸裂してミミズ脹れが凄い。

首絞めで刺す止どめ

略号
(まむ)

いくら痛めつけても喜んでるM男に対しては、最後の止めとして遅ましい太股による首絞めで昇天させてやるのがよい。

汚臭と足舐の強制

略号
(まり)

女の肌にじかにつけていたパンティを頭にかぶせられ、口に押し込まれても、縛られてる男はどうすることも出来ない。

二女の臀臭に泣く

略号
(まみ)

肉づきのよい二女の臀の下に押し潰された男の顔は、醜くひしゃげ、その臀臭をいやという程嗅がされている。

分が食べようと思った梨を而も一番でかい梨を皮むいて食べちゃったと云って暴れて仕様ががない」

この梅原の話はとうとう、巡査までも仲に入る所まで進んで「普通の女房をもらった所で、彼程の刺激のある女はないだろうと思う。たえず虐められたり何かしておらぬと生きていくような気がしないもの」という友人Aの梅原への告白なども入って対話は続く。

梅原「女のサディストの例は」

杉田「割合に少ないと云うよりは、実際にぶつかることは余りありませんね」

梅原「今度、実際に御眼にかかった(友人夫婦のこと)此例なんかは大した事件じゃないかも知れぬけれど、非常に珍しく感じました」

杉田「マゾッホのような男が、女をやとつて来て、そういう生活をしている中に、女がサディストになる例はありますけれど、それはつまり教育されたサディストで、本来のものじゃない。教育されれば誰でもなります。皆お互いがそう云う性質を持っている」

(註・昭和初期公刊された風俗雑誌にSM対話として堂々と二〇頁にわたって発表されていることに興味深いものがある) (終)



死刑台に載せるまで

—英国死刑執行人ジョン・エリス氏手記—

牧野 正

(筆者前がき) ここにお伝えするのは、英国の死刑執行人であったジョン・エリス氏の回想手記である。

氏は英国の死刑執行人として、在職の二十五年間に、婦人や名士も含めて数百人の首を締め命を絶ったのであるが、この回想録は、その体験の中でも特に印象深いものを取り纏めたものである。何れも、実際の体験であるから、想像や作り話とは違って鬼気迫るものがある。

余談であるが、周知の様に英国では仏国などと同様に、歴史的にはチャールス一世な

ど国王さえ、公衆の面前で死刑に処した時代があったし、わが国でもこれは死刑と言ってよいかどうか分らないが、「弑せられた」天皇も史上に散見するところである。それが、世の中の進歩と共に段々死刑ということが少くなつて、有り難い御時世となり、英国では先頃死刑廃止のための法律も通つたと伝えられるが、それらのことは兎も角として、エリス氏のこの手記は、貴重な文献記録となるであらうことは間違いない。

筆者は読者の皆様に、先ずこの手記の全体を知っていただいた方が理解に好都合

ではないかと思うので、最初に著者の序と、本文と口絵の目次を夫々お伝えし、それから次に本文に入ることとしよう。

それも本文の方は全部をお伝えすることは分量からいって不可能なので、所々抜萃することとし、それでもなお一どきには難しいので、数回に分けて御覧に入れようと思う。

著者の序言

月日の経つのは早い様でもあるが、さて過去を振り返ってわが身の越し方を、それからそれへと辿って見れば、又それが案外に永い旅

路であつた様にも思える。私とその初め大英帝国の死刑執行人に任命されてから、ツイ先程、その職を辞するに至つた迄には、実に二昔に余る二十五年という相当に永い年月が経過したのである。その間北は蘇格蘭から南は愛蘭の端迄、監獄から監獄へと旅行して、死刑執行の事を司るのが私の役目であつた。そうしてこの二十五箇年間に、私の手にかかつて幽明所を異にした男女がザッと数百人にも上っていることを思うと、今更ながら、何とはなしに、慄然とする感じを覚えない訳には行かないのである。

由来死刑囚の監房や、絞首台の周囲には、兎角秘密と沈黙との幕が付物となつてゐる。罪を悩む心を以て間もなく永遠の死に直面しなければならぬことを知っている死刑囚の末期の言葉やその一挙一動が、頗る意味深い暗示と氣味悪い謎を投げるものであることは、今更言う迄もないところである。

——ましてや身に罪を犯した覚えのない無辜の被告人が、不幸にも誤つた裁判の犠牲になつて、も早どう腕いても殺人者としての死刑を甘受しなければならぬことを知つた時のその言うにいわれぬ靈魂の懊惱は到底私達の想像の及ぶべき限りではないのである。

私は多くの死刑囚の監房の内外に、私の生活の大部分を送つてきたのである。従つて私は彼等が不用意でいる時のその動静を秘密に観察した事もあり、或は狂的ともいふべき彼等の哀訴歎願に耳を傾けた事もあり、或は殆ど無頓着とも思われる迄に自若たる彼等の態度を見た事もあり、或は生命を続けたい為の彼等の絶望的の争闘を目撃した事もあり、或は又間もなく私の手にかかつて死ななければならぬことを知る彼等の或者から、思い掛けなくも歓迎の言葉をかけられたり、又は冗談を言われたりした事すらもあつたのである。

本来、死刑執行人は、その職掌柄からいつても、自分の本体を成る可く公衆に現わさない様にし、又絞首台の惨たらしい悲劇などを外部に漏すべきものではないとしてある。しかしながら、私の死刑執行人としての仕事も今回私の辞職と同時にその終りを告げたのであるから、私は従来滅多に世の中に開示されたことのない死刑囚の犯罪の秘密や、その監房内に於ける一挙一動や、絞首台に載せる迄のいろいろなロマンスをここに初めてお話ししようと決心した次第である。幸にしてそれが犯罪捜査の任に当る警察官、検事、司直の事に与る裁判官、陪審員、刑政運用の局に当る

司獄官は勿論の事、一般に犯罪の研究に興味を有する世人の参考資料として多少の裨益を与へることを得ば私の本懐之に過ぎないのである。

目次(注、小見出は省略)

- 第一章 私は何故死刑執行人となつたか
- 第二章 死刑執行人としての最初の経験
- 第三章 最後迄無罪を叫んだ死刑囚
- 第四章 トムソン夫人の死刑
- 第五章 監獄吏を困らせ抜いた死刑囚
- 第六章 冷静な死刑囚と臆病な死刑囚
- 第七章 死物狂の格闘を続けた死刑囚
- 第八章 クリッペン博士の犯罪と其死刑
- 第九章 十八才の死刑囚と其最後

口絵及挿絵目次

口絵

- 一 著者ジョン・エリス氏
- 二 英国倫敦中央刑事裁判所陪審法廷
- 三 百年前の英国死刑執行
- 四 ホロウエー監獄前で公衆が死刑囚の死刑赦免を嘆願しつつあるところ

挿絵

- 一 眞人形で死刑執行を練習するところ
- 二 死刑囚に手錠を嵌めるところ
- 三 『覗き穴』から監房内の死刑囚の状態を

探るところ

四 『浴槽の花嫁殺し』スミス

五 浴槽中に発見されたムンデー嬢の屍体

六 艶麗なるトムソン夫人

七 バイウォータースがトムソン夫人を刺した小刀。死刑囚バイウォータース。

八 バイウォータースとトムソン夫人の死刑執行に対する反対示威運動の一例

九 気絶した俚死刑台に運ばれたトムソン夫人

一〇 軍人姿のホルト

一一 砂丘から掘出されたブリークス夫人の屍体

一二 パロー嬢を惨殺したセツドン

一三 ウィリヤムスに狙撃されたウォールス警部

一四 モート・ファームの犠牲ホルランド嬢

一五 モート・ファームに於けるお濠の浚渫

一六 男装のネーヴ嬢とクリッペン博士の妻ベル・エルモア

一七 汽船モントローズ号上のデュー探偵とクリッペン博士

一八 十八才の死刑囚ヘンリー・ジャコビー

一九 地下室に発見された三人の子供の死骸

死刑囚の種々相

「貴方にお目に懸ることが出来て、私はこんなに嬉しい事はありません。この二三週間というものは、只貴方にお会いすることばかり待ち焦がれていたのですよ」

これは、曾てエリック・セッドウィックという若い死刑囚が絞首台で初めて私と向い合った時、如何にも満足らしい顔付をして、私に叫んだ言葉であった。

私は絞首台上の死刑囚から、こんな思いがけない挨拶を受けようとは予期しなかったから無論聊か驚かざるを得なかったのである。セッドウィックはまだ二十才になったばかりの青年であつたが、自分の恋人を殺した上、その冷たい死骸に心ゆく迄接吻を与え、それが済むと、悠然として警察に自首して出て、早く裁判をして絞首台に送って呉れと迫った男である。私が彼の顔にホワイト・キャップ（白帽子）を被せた時、（これは死刑執行人の挙動を見させぬ様、死刑囚に目潰しを呉れる為めの慣例である）彼は殊更ら私を呼び懸けて

「私は神様が私の靈魂に慈悲を垂れ給うことを疑いません。私は愛人の跡を追って今から

天国に参ります。いざさらば！」

と最後の言葉を遺したのであった。

これとは全く違った態度に出たのは、六尺豊かの巨体に恐ろしい程の腕力を湛えたウィリアム・パーマーという男であつた。私はこれ迄、リースター監獄のあの狭い死刑囚監房内で、死の直面に身体を悶え抜いている多くの人々のみじめな有様を屢々見た。しかし、たとえ彼等がどんなに腕いても、それは到底腕き甲斐の無い争闘に過ぎないのであった。

然るにこの巨漢パーマーに至っては決して身体を腕く位では、済まして居られる奴ではなかった。死物狂いの憤怒が揮い起した平素にも三倍もする程の彼の腕力は、十人の獄吏を向うに廻わして、永い間の争闘を続けた後、漸く力尽きてその手と足に枷を嵌められたのであった。

パーマーは、田舎に住む或る年取った寡婦の家に押入って金品を掠奪した上、ただ気紛れ半分に寡婦を殺したのである。公判中も、判決が確定してからでも、彼は殆んど無神経と思われる程の冷淡な態度を採っていたが、愈々死刑執行の時が近寄って来ると、彼は今迄の冷淡の仮面を全然脱ぎ去って、その代りに恐ろしい死物狂いの兇暴性を現わすように

なり、遂には威丈高になって「神様だろうが人間だろうが、この俺を絞首台に送ることは到底出来るものではない」と、公言するに至ったのである。

しかしながら、私の永年の経験に依ると、死刑囚がその行き着くべき運命に対して、徒らに争闘を敢てするということは、殆んど稀であると言ってもよい。

彼等の多くは、たとえ、どのように反抗しようが、どのように哀訴しようが、それが結局何の役にも立たぬことを自覚しているのである。そうして結局彼等の或る者は、無頓着と間違えられそうな諦めと忍従とを以て絞首台に向い、又或る者は顔を真蒼にして身体を震わせつつ監房を出て行くのである。

死刑囚のこの世の見納めの朝は、彼等の勇気を試練するこの上なき好時機である。私個人としては、たとえ死刑囚がその前後の瞬間に於て、醜い喪心状態を見せたからとて、別にそれを不思議とも何んとも思わない。何故かというに、私は絞首に依る死刑が他の如何なる方法に依る死刑よりも、恐らく迅速な又最も苦痛の少ないものであることは知っているが、しかし私は又それと同時に、たとえば如何に気の強い身体の強健な人でも、その首に

しっかり索を捲き付けられ、気味の悪いあの「陥し戸」の上に立たせられるその最後の瞬間に於ては、多少なり恐怖の念に類する或る物を抱かすにはおれないことを、よく知っているからである。

ここに私の経験した不思議な現象として、身体の大きな腕力の強い死刑囚が身体の小さい弱々しそうな死刑囚よりも、どちらかというところ、この点に於ては寧ろ臆病勝ちであることを挙げねばならぬ。しかし、そうかといって私は必ずしも、総ての大男が一般に死を恐れるものであるとは断言しない。ただ私の記憶を辿って見ると、特にずば抜けた大男が他の如何なる種類の死刑囚よりも、その最後の瞬間に於ては、一層気後れ勝ちであることの多くの実例が頻々と私の頭に浮んで来るのである。

その証拠として私は一九一六年中相前後して起った二つの好適例を、ここに挙げる事が出来る。第一は私が同年の九月六日にスワンシーで死刑を執行したダニエル・サリヴァンという男で、その綽名をビッグ・ダン（大男のダン）と呼ばれた者。第二は、同年十二月十九日にマンチェスターで死刑を執行したゼームス・ハーグリーヴスという大男であ

る。この兩人共、愈々最後の瞬間が近寄って来たことを知ると同時に、甚だしき恐怖に襲われて遂に本心を喪い、全く腰を抜かした俣絞首台迄這って行ったのである。その上彼等の大きな図体は、止め度のない啜り泣きの為に波の様な痙攣を打ち、涙は滝つ瀬の様に彼等の重々しい頬を伝うて流れ落ちたのであった。

そうかと思うと、或る不幸な一死刑囚の如きは監房から絞首台に引立てられて行く途中「私に害を加えないで下さい。オー、どうか私に害を加えないで下さい！」

と、オロオロ声で哀願した者もあった。私の手にかかって彼の世に旅立った多くの婦人達についても、今から考えて見ると、いろいろな悲しい回想が次から次へと、私の頭に浮んで来るのであるが、それ等はいずれ後章に於て緩々お話することとし、左にちょっと私が死刑執行人となった道筋を一通り述べて置きたいと思う。

死刑執行人志願

さて読者の中には、何故に私が死刑執行人などになったのであるかと、多少不審を持たれる方がないとも限らない。成る程、考えて

見れば、他に仕事が無いでもないのに、何を好んで私が人の生命を取ることを職業として生計を立てる途を選んだのであるか。読者がこうした不審を抱かれるのも満更ら理由の無いことではない様にも思われる。

しかしながら、死刑執行人の仕事は、そんなに迄人から嫌がられる性質のものであろうか？ 私に言わせると、それは一国の法律で立派にその権能と責任とを承認されている尊敬すべき官吏の仕事であって、結局何人かが死刑執行人となるのを希望することが、国家の為には是非必要な条件でなければならぬのだ。私が死刑執行人となった動機も、全くこうした私の確信から出た訳で、決してそれについて、深い他の理由があった次第ではない。しかし、その初め私が愈々この官吏の地位を志願する意志を発表した時には、追に私の母の驚きは非常なものであった許りでなく殊に私の妻などは、テンデこの事柄に付いて私と口を利くことさえ拒んだ程であった。

「お前が死刑執行人になるなんて、実に飛んでもない事だ。世の中の人は私達一家の事を何んと批評するだろう。そんな考えはもう廃めた方がいいよ」

母親は呆れ返ったという顔をしてこう叫ん

だ。そして又妻は

「マア、そんな仕事は誰か他の人にお譲りになったがよいでしょう。私は死刑などの事を耳にするのも嫌です」

と言いつつ、以後この事については一切口を利かないと迄断言した。

しかし、それにも拘らず、私はどうしても死刑執行人になろうという決心を固めた。そこで急ぎ志願書を提出すると、四五日経ってから、倫敦の内務省に出頭する様にとの指令書が到着した。

言う迄もなく、たとえ死刑執行人となったからとて、そう毎日引続いて死刑の執行がある訳ではない。そして私は全英国の総ゆる監獄で行われる死刑を取扱ったのであるけれども、時としては数日間、又時としては数週間も無為に手を空けて居る場合もないではなかった。又死刑執行人となるにしても、法律は或る適當の期間、その人には仕事の見習を要求することになっており、その期間中は死刑執行のある毎に、必ず本職の執行人の助手として働かねばならないのである。

私が愈々この助手としての任命を受けた時には、最早余程老年のゼームス・ピリントンという人が本職の死刑執行人を勤めていた。

この人がその頃迄手にかけて死刑囚は実に数百人以上にも上り、死刑執行人といえは、ああ、あのピリントンかと言われる程、その名が全国に響いていた。死刑執行人及びその助手は一定の月給を受けるのではなく、その行なった仕事の分量に依て報酬を支払われることになっている。即ち死刑執行一回に付き助手は金貳磅（約我二十円）本職の死刑執行人は金拾磅（約我百円）を受けるのである。しかし内務省も抜目なく経費節減を励行する結果、同じ日に引続いて二度の死刑執行がある場合には、本職の執行人に二件引括めて金拾五磅（約我百五十円）の報酬を支払うことにして居る。或る時私は三日引続いて毎日一人宛の死刑を執行したことがある。その所得三日間金参拾磅（約我参百円）である。

思慮ある沈黙

閑話休題——さて私が内務省に出頭して、ニューゲート監獄で仕事の練習をすることの命令を受けた時、私は私の倫敦行きを目的を母や妻に打明けることを注意して差控えたのは言う迄もない。そして私がニューゲート監獄に於ける仕事の練習を終り、死刑執行人の助手としての辞令をポケットに収めて一旦家に

〔最新版〕 女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

A1	五十組五十枚	四、	〇〇〇〇円
A2	四十組四十枚	三、	〇〇〇〇円
A3	三十組三十枚	二、	〇〇〇〇円
A4	二十組二十枚	一、	〇〇〇〇円
	十組十枚	九、	〇〇〇〇円
	五組五枚	五、	〇〇〇〇円
	一組一枚	一、	〇〇〇〇円

A16	裸自慢縛りヌード	(長野)
A15	正面縛蛙股ひらき	(長野)
A14	色輝の開股しほり	(長野)
A13	うねる緊縛裸身	(長野)
A12	全裸正面強烈縛り	(長野)
A11	膨隆臀部さらし	(長野)
A10	全裸後手高小手	(遠藤)
A9	鼻責鼻梁いたぶり	(遠藤)
A8	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A7	豊満乳房いじめ	(遠藤)
A6	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A5	亀甲強烈乳房縛り	(遠藤)

A33	荒縄全身縛り豆絞	(大塚)
A32	猿轡乳房いたぶり	(遠藤)
A31	羞らいの両股縛り	(大塚)
A30	捕われの全裸緊縛	(梨花)
A29	投げ出した全裸縛	(長野)
A28	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A27	乳房晒し肉体自慢	(長野)
A26	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A25	両股縄掛け開股縛	(大塚)
A24	疼れんする裸身像	(関谷)
A23	両手膝下しほり	(関谷)
A22	両手吊り股間吊り	(桜井)
A21	両手前縛り髪首絞	(大塚)
A20	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A19	遅ましき裸しほり	(長野)
A18	正面大の字開股縛	(長野)
A17	正面アグラしほり	(長野)

A50	立木縛竹棒責め	(桜井)
A49	亀甲本縄股間縛り	(絹川)
A48	ガンジガラメ立縛	(愛川)
A47	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A46	豆絞り高小手呻	(絹川)
A45	白バンド後手吊り	(東浦)
A44	手吊りパンティ落	(絹川)
A43	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A42	正面乳房くびり縛	(関谷)
A41	強制片足挙げ責め	(大塚)
A40	くさり乳房責め	(長野)
A39	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A38	縦縄股間縛り正面	(関谷)
A37	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A36	ムチ打悶えポーズ	(関谷)
A35	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A34	盛り上る乳房縄目	(長野)

帰った時、私はここに初めて総ての事実を家族達に告げたのであるが、その時私の新しい職業を知った母や妻の顔には、実に言うに言われぬ悲し気な表情が浮んだのであった。

しかしながら、今から思うと私が私の義務を良心から尊重した事や、多くの死刑囚の最後の瞬間を成る可く苦痛を少なくする為に、死刑執行上能う限りの人道的工夫を施した事や、又は殆んど病的に傾いている世の中の物数寄連中の総ゆる好奇心に対して固く沈黙を守った事などに依って結局曾て一度は私の職

業の故を以て私に偏見を抱いていた多くの人々の好意を贏ち得るに至った事を、私は衷心から一つのプライドとして感じない訳にはゆかないのである。

私の母もその他の家族も、漸次に私に対する反対心を忘れるようになり、妻でさえも遂には私がこの新しい職業に就いたのを、寧ろ当然の事として承認する様になって来た。しかしここに断っておくが、私はいつ如何なる時にも、死刑執行の事に付いて妻と議論を闘わした事は曾て一度もなく、又その他の何人

ともこの事について、談話を交換した事は無い。実に私は最初から「思慮ある沈黙」を職掌上の鍵鑰として採用したのであった。従って今ここに私の半生の経験談をお話しせんとするに当たっても、私が絞首台に於て見たり聞いたりした事柄については、全く私の臍の緒切って初めて唇を開きつつあるのだという事を承知して貰いたいのである。(つづく)

(付記—本文は、昭和三年酒井書店発行の英
国死刑執行人ジョン・エリス氏手記、安東
禾村訳「死刑台に載せるまで」による)

マニアの交流、より親密

本文充実、ワンダフル！

濡れの眉美氏「大阪」行状紹介



橘 行 司 子

<KK文芸時評>

——四月号の展望——

百鬼夜行。しかも鬼どもは大小をとわずお山の大将、一城の主である。編集これまた型破りの雑誌を呼称。時評も八方破れにならざるを得ない。この頁、タメになるとは申しません。読んで刺戟になることだけは、タイコ判。そうでなければいつでもサヨナラ。

△花と蛇より読まないお方。そう、あなた

に是非！ この時評をよんでももらいたい▽

行司子、感動したね

まず、それからはじめよう

いつも軍配を天にばかりむけているオセツカイ程度では、「読む雑誌脱皮」開眼になった現在。もう行司子が出る幕じゃないと、二月号の展望では、サヨウナラ！ その寸前に

思いとどまった楽屋裏をさらけ出したら、捨てる神あればナントカヤラ。早速、奇クの二枚目スター？ 河津安春大人（こう尊称するね）から「先生の温健なる時評が、奇クの指針として必要であると存じます」とはね返ってきた。いや感動したね。私は育ちがよいのか（ホントかね）過激な言葉の乱舞にはただおろおろ。それが激励され、共鳴者が出たのだからホッとした。なお、河津大人よ。あなたの△奇ク三月号雑感▽なかなかお上手。まるで百貨店の期末大売出し」という表現は時評のタイトルにもraitakatta。時評のペン先はこと、文学（文章の世界）にはSM公平であるのが建前なのに△どうもSに詳しくMに冷たい▽と僻^{ひが}まれた。反省したい。評の本質にはずれることだから。

『読者通信』山口広さんの、便りうれしく拝見。こと小説について述べれば「プレイの体験も乏しくどころか殆んどなく、而も想像力も貧弱で」などモヤモヤしてるより△書く▽という事が大切。ペンを持つことで想像がふれるのが創作上の本質と思う。作品はその作者が、あれこれと判断するのでなく読書が評価する。その意味でマンネリは、自己の影におびえる犬のようなもの。気にしないこと

あくまで人物論でなく、私は作品評をしたのですから、山口さんよ——心苦しいことなど無くして下さい。そして『流転』をまた評させてもらいたいね。ガンバレノ

味が出てきたマニアの交流

さて、どんなところが——

「ゴーイング・マイ・ウェイ」の辻村氏の名句は、まだ生きている。△読者通信▽「特に名を挙げてケチをつけた芳野眉美氏と夜乃探郎氏にお詫びしたい」の横浜・津治良一氏のお言葉、ご立派でした。なんといってもK誌は、共通の広場なのですから。雨降って（乱戦）地かたまる（読む雑誌脱皮）。すべては過渡期の副産物。行司子、ペン持つ手に微笑が浮かぶ。同頁の（川口市・富田生）、「文章もベテランの人達のように」書けないとおっしゃっているようだが、「原稿募集」にも（どうか、皆様の真実の叫び）をと言ってます。どうです。本文充実のため、まず、あなたの云う「高校時代の時、女性数人の奴隷扱い」の告白を投稿されたら。その作品に刺戟されて、この所、女性の読者も増えてきたようですから、もしかしたらレターがドッサリプレイも実現。

東京都・かぶらぎ・てるおサン。今回の時評の△風俗雑誌▽に、行司子、少しばかり刺青にふれてます。是非、よんで下さい。

（神戸・林生）。谷崎氏の「痴人の愛」は名作ですね。暗誦されてるとは、おそれ入りました。読者通信の方にも、軽い気持で、歯切れのよい言葉をこれからもきかせて下さい。

静岡・伊那柴子さん。松崎京子さんのお返事でなく行司子の言葉で恐縮しますが、△導尿でチョロチョロとカテーテルの先から尿の出るのを見るとカテーテルの一端を肛門に△の一節は、ぐうっどアイデアですね。机の抽出しにねわっている文書。もったいない。投稿したら。編集部で、きっと作品によっては、なおして発表しますよ。どうせホコリにまかせて置くなら、ものはためしという事あり。

元気で行きましょう（行司子。東宝スター植木等のファンです）。

編集部よ。行司子は大阪・宮田明さんと共に願う。この所、M男性モデル募集をしているのだから、フォト入りの実況報告を奇クサロンなどに——。

知性派の作家（福田久文）さん。今回は通信だけのようでしたが、また「深紅の歌」後

の新作をおよせ下さい。

「芳野様、わたしも母を五年まえに失いました。ご不幸を心からおやみ申し上げます」

このお言葉。むねにじーんとききました。マニアの交流とは、プレイ、作品評の根底にこのような便りが、かわされてはじめて△共通の広場▽という文句も生きてくると存じます。

おそまきながら私も心から芳野さんのでご不幸、おくやみさせて頂きます。

△読者通信▽といっても、文献価値ある長野・高岡久人さんのような便りが現われはじめたことをよろこびたい。このランのいっその充実のために——。

おそかりし？ 千草ゆらのすけ殿

行司子せめて粗酒なり一献

百花燦爛期の論客、千草忠夫氏が『のおと・あと・らんだむ』をひっさげて、サッソウとして二月号の論壇に登場した時は、あたたかも、どこまで続くぬかるみぞが、彼方に暗示されていたときなので、ことさらに、武者ぶりはホレボレするほどだった。その鋭筆は、その（三）まで、どの項目も、すべて、重要な論壇提起あるものだ。だれが、受けて立つか。行司子は、その一点に注目した。三月号

そして四月号。ここで△編集後記▽「論評ものが嫌われるといった風潮から掲載を見合わせて以来、急激に投稿も減少したので」という言葉が眼にイタイほどに映った。開花があれば、落花あるは自然の情。また時期来れば花も咲く。いまさら論壇は——などしたり顔はヤボ。せめて、この千草ゆらのすけ殿と、行司子、散る花ながめ、酒などくみかわさんか……。

濡れの眉美氏

陣羽織など召して大阪の巻

座談会や対談などは、読んで楽しむ。時評のペンなどよけいなこと。十人十色でよろこべばよい。一読者として眉美氏の写真初登場その笑顔やタイプをひやかすのみにとどめよう。

「ガン作・マニヤのノート」などで想像した眉美氏は、アクション・スターの小林旭のような長身の若者タイプ。バー「よしの」のマスターであるから、実物はちよっぴり、スゴミもあるかと思った。なんといっても酒のみがお相手だから（失礼）。ところが、常識円満、日々是好日という会社員タイプか、それとも学校の先生サマ。まったく、あれよ、あ

れよとおどろいた。ニヒルな笑いは、どこにあるのかね。△このおしゃくしてる仲居さんお色気あるね▽といった、至極、たあいのない笑顔だよ。ホント。

「昭和40年台風23号顛末記」

ムードあるS日記など

恋人同志のプレイ。夫婦のプレイなど、ムードある告白物を期待する読者の声は多いがここにフレッシュな筆致をもって森中雨奇男氏（責め日記）が登場した。

△ピンクのゴム引レインコートをつけさせ△た妻と作者の暴風下を背景としたこの描写は△ゴソゴソとゴム衣の音を立ててもがき始めた▽という一節に、なぜか、いまは伝説的マゾヒスト・古川裕子の△たしか私にゴムの袋を、かぶせてしまうといったわね▽——猿ぐつわの嵌めたい人は嵌めるがいい——のさけびとダブって懐しく、また、ハッとさせられる。

「SMカメラ・ハント」△小原真澄の巻▽辻村隆・は、可愛い小悪魔マスキの△実に見事な乳房としか形容出来ない素晴らしさである。床の間の柱まで引っ立てて行って、柱に縛りつけ、私は思わず一方の乳房を力強く握

りしめていた▽のクライマックス場面が、併載されたフオトとがあって、まさに油の乗り切った辻村氏のハント、——快調。

河村操『妻の写真にそえて』写真同封の手記を見るのは楽しいものだ。作者が好みだというバレエの練習着を思わせる衣裳をまとった妻のからだに、白いロープがくつきり見えるフオトは、赤裸な体験記があって興味入る感がある。

『かずひこのノートから』とやま・かずひこ氏の書きぶりは、眉美氏のモダンなタッチとくらべて、こちらは年輪が入った濃厚さがある。なんといってもこの「ノートから」と、△ガン作・マニヤのノート▽はK誌を彩る二大好読物。『濃厚な、チョコレート味の』と△運行しています▽の結び付けの「放送」の一節など、ごく珍味なものです。

『マゾヒズム天国』田沼醜男・『モッキン・バード』三原寛・『八重桜』万田不二・『檻の中のお正月』増田喜代司・『M的小説のクライマックス紹介』河津安春と、ようやくズラリと揃った粒よりのM作品にカッサイを送りたい。

耽美幻想『夜の演技者』。ラスト近くなるまでKK的というより、まるで純文学同人雑

誌式の淡々とした書ぶりにはじまるこの小説は、あまりK誌には見られなかった作風である。「死」という深刻な世界が終り近くまで続く割合に、読後感のさわやかさは作者のロマンが盛込まれているからだろうか。

風俗雑報

◇

なぐる、けるの「キック・ボクシング」全日本協会(野口プロモーション社長。野口修)

がこのほど東京で発足した。四月九日、大阪で初興行の予定だが、このスポーツは東南アジアのタイに古くからつたわる格闘技でタイ式ボクシングとよばれている。選手はこぶしにグローブをつけるが、足はハダシで相手の急所をけったり、腕でカラダをかかえて投げとぼしたりする。プロボクシングやプロレス以上にすさまじく、これほど荒っぽいものは世界でも類をみないといわれ、試合はかならず流血戦の評がある。しかも昨年(四十年)には日本の空手の選手がタイに遠征し、本場の選手と五分五分であったという実績から、タイ選手と空手選手の血戦も当然、見られるだろう。

本誌ではいま迄、告白・読物などで女相撲レスリング、柔道などマニヤの好みにそって

種々と取上げられてきた(奮斗士好太「花の女斗美たち」など)。このキック・ボクシング開催にともなう男同志を外に、女・キック・ボクシングのようなストーリーが、紙上を彩る事になるのではと興味は深い(註・空手の有段者は素手、素足で瓦^{かわら}五枚、十二枚余は試割するというが、人間の肋骨^{あばらばね}の強さはおおむね瓦二枚に該当する)

◇

△週刊現代V2月17日号によると、東京でいえば山の手夫人、関西でいえば芦屋夫人にお産のときの帝王切開(腹切^{はらきり})希望者がふえている(医事評論家・水野肇)という。これは産道は「夫専用」。かわいいこどもといえども「この細道は通しゃせぬ」というわけ——と解説されているが、この世相をマニアから見れば、さて、どんな答えが出るだろうか?。なに、きまってるアとおっしゃるそのお声は高野原美さん、それともどなたかな。

◇

目下、撮影中のエロ事師「人類学入門」は鬼才・今村昌平の作品であり、ブルーフィルム、ダッチワイフなどが飛び出てくるのでなにかやかと制作こぼれ話は多いが、「内外タイムス」2月20日号には、主役の小沢昭一が

大和のOL(BG)と女子大生とセイ談をしている。その中で小沢「あたしのそのオー映画のエロ事師ではですね。髪の毛に対する愛着というのがあるんですよ。一種の毛髪フェチズムといいますか」など言葉がでるので興味ある。女性側の石保人お下げにしてのころ、吊り皮に結ばれたこともありますVなど話もマニア向となっている。毛髪と言え、かの責絵の大家、伊藤晴雨老も特筆していたようだ。

東映「非行少女ヨーコ」に出演中の岡田英次は初の変態役にとりくんでいると宣伝されている。なんでも、うすよごれたジーパンとセーター姿を女に要求、それをビリビリとやぶかなければ欲望をおこさないという役(日刊観光・二月二十日号)

松竹「やさぐれシリーズ」は、女が男どもをやっつけることでBGや女子工員たちに人氣があるシリーズ。その第三作「危い遊び」監督、湯浅浪男がもっか撮影中だが、対立するやさぐれと、コルガールの乱闘シーンがこのほど、練馬区関町の風呂屋でおこなわれた。いずれも新人女優ばかりなので文字通り体当り演技。ピシッ、とほんとうになぐれば湯舟の中で組んずほぐれつ、まさにすさま

じい勢い。△湯ぶねに発散するお色気・コール・ガール裸の乱闘▽と、内外タイムスは写真入りで三面トップに派手に報じている（二月二十日号）。女斗美マニア必見か——。



「私たちが、本当に殺しの時を楽しもうとするとき、かつては殺しというものが、芸術であり、創意工夫に満ちた、趣きのあるものだった、ということ、思い起さずにはいられません」そして「結婚生活にあきたひとに、遺産をねらうひとに、あなたの心からあたたかい花束として、この『殺しの手帖』をプレゼントしてあげてくださいませ。おくりものに殺しの手帖を」この暮しの手帖をもじったとんだ唄い文句は、『話の特集』二月号、日本社のそれこそ特集。殺人空想マニアはどうぞ。



この所『小説現代』では△性的人間研究▽相馬均・が、連載されているようだが、三月号には「サディストの誕生」という耳よりな話が載っている。三島由紀夫氏の「サド公爵夫人」が、たいへんな人気を博し、あらためてサドの名前を世間に知らしめる結果となったが、サド公爵によって代表され、その名前

まで付けられているサディストとは、どんな人たちなのだろうか——という書出しで、興味ある実例を引用している。形よく隆起した乳房をもつ美しい女性のムネをナイフで切りつけた孤独な青年の話だが、これについて作者は△彼が乳房を切りつけるまでは、彼女はただ美しいだけで、自分とはなんの関係もない冷たい存在にすぎなかった。乳房を切りつけられ、泣き叫ぶ彼女の姿に、彼ははじめて人間らしいほとばしりを感じ、自分に近いものと感ずることができたのだという。興味深い点は（美しいものをけがし傷つけること）でない△サディズムは、成立しないことである。もしセックスなら、美しくなくてもよいわけである。——サディストは愛の結合だけでは相手の人間性を確かめられないということを知っているが、しかも、そのむなしさにたえられず虐待する。相手が叫び苦しむとき、相手もやはり、自分と同じ人間であることを感じて、始めて人間的なふれあいを充すことができる▽。ナイフで切りつけるという青年の行動はおだやかでないが、人間性を求めるという、その心理の奥底は考えさせられるものがある。ともあれ、サディズムと△美・価値あるもの▽を結び付けた筆致は鋭いも

のがある（同号には、宇能鴻一郎『殉死教未遂』（芥川賞作家）が発表されている。マニア作家とみなされる谷崎・江戸川両大家亡き後、もっと注目されてよい小説家。△可愛い蘭子——いつものように、ほくの額に足を当てておくれ。そして軽く小突いておくれ。踊りの練習のように——君の柔かい匂いのひんやりする足の指で▽という「密戯」からこの△美像愛好者△とある女が閉じこめられた地下室。性器をそなえた人工女性。ワグナーのレコードの荘麗な洪水▽による『殉死教未遂』にいたる倒錯美ある一連の作品は、マニアとして評価できる物がある。——また『ウマ年・初乗り』として大滝英子（美容家）。戸川昌子（作家）。石川あき（服飾研究家）のさっそうたる乗馬フォトがグラビヤ頁にあるのも見逃せない。



呼吸もすればセキもする。肩の筋肉ばかりじゃないよ。男を最も喜ばす、大事なところの筋肉もピクリピクリ、ヒフはこすれば赤くなり、つねった跡は青くアザにもなるよ。生きた女体そっくりの「人造ウーマン」。この女体を抱えて、キスすれば——赤い唇の中からベロがネットリペロペロ立派にフレンチキ

スをやつてのける。価値は三十八万ドル。何しろ生身の人間をやたら切ったりはったり、突ついたり出来ないの、米南カリフォルニア大学医学部が多年の研究の結果発表した実習生用実験道具。「オール読物」三月号八世界の窓。女体一億円なり」として掲載された物の抜萃。(行司子は、この人造ウー

マンをS・M両方の実験モデル。つまり縛ったり、鞭うったり、また土下座して……というような白日夢にふけたが、マニアのみなさんはどうでしょうか)

◇

「コレクター」飯沢匡。刺青マニアが主題となっている小説だが、文中にK誌モデル・山

原清子さんかと、はっ！とさせられる女性の過去が紹介されている。よく読んでみると羽衣の天女と玉取姫で紋柄が違う。それにしても、他方も芸者上り(世間は広いね)。

「オール読物」四月号

◎訂正(四月号誌上の三月号の展望一終りの章は八あれこれ一筆)

〔最近撮影新趣向分譲品〕

極鮮明印画紙焼付写真

遅ましき腎責め

大手札三枚一組 三〇〇円
美木乃々子 略号(ぬい)

柔軟二つ折緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
美木乃々子 略号(ぬに)

猿ぐつわ全裸縛り

大手札五枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号(ぬへ)

真紅腹巻着用縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号(ぬち)

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(つめ)

柱縛り全裸腎晒し

大手札五枚一組 五〇〇円

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(つも)

座禅縛り足吊り揚げ

大手札二枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さは)

柱抱擁全身嚴重縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さけ)

足挙げ全一正面縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さこ)

柱縛り腎部晒し

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さく)

柱縛り正面晒し

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さき)

鼻腔煙草挿し責め

鼻責めのアップ

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬは)

強烈縛り美貌翻弄

大手札八枚一組 八〇〇円
美木乃々子 略号(ぬほ)

開股高手小手逆吊り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(つほ)

高手小手逆吊り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(つふ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の義味

大手札五枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)

縄に悶える裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(さひ)

全裸股間縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(さふ)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

相撲揮着用裸女艶姿

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
美木乃々子 略号(ぬわ)

六尺揮着用裸女艶姿

大手札七枚一組 七〇〇円
美木乃々子 略号(ぬお)

S
M
カ
メ
ラ
・
ハ
ン
ト

……△沖村れい子の巻▽……

「恍
惚
抄」

抄

箕田氏から沖村れい子の便りの回送を受取ったのは、もう二年も前のことであろうか。

岐阜県中津川市××町と、封筒の裏書には番地までしるされていたが、一向になじみの薄い新市の名称であったのを覚えている。

少々固い文体、それに角ばった字は、何か沖村れい子を男性めいたものを感じさせて、その時私は、お座なりに、来阪された節は一度お目にかかりましたようと、簡単に返事を書いておいただけだった。年齢はその時確か二十才、かなり身長、体重共ボリュームのある数字がしるされてあった。

忘れるともなく記憶から遠ざかっていたその沖村れい子から、今年の一月初旬、ヒョッ

コリとも思いも掛けず便りを受取り、私は突嗟には思い出せずにいたくらいだった。二年の間に生硬だった文体も筆跡も、際だって優美に、そして婉曲になっていた。

以下彼女の原文である。

『前文御免下さいませ。寒さ厳しうございませが、辻村様にはお体の方もよろしく、御活躍の程、奇クを拝見致しまして、蔭ながらおよろこび申上げております。

長い間、全然お便りも差上げず、今こうして、突然にお手紙さし上げ、さぞかし勝手なる女だとお叱りでございましょう。御無音の段本当にお許し下さいませ。

一昨年でございましたか、私の心に潜んで

辻村

隆

いる、やむにやまれぬ願望を、辻村様によって開いていただこうと、思い立つと矢も楯もたまらず、あんなぶしつけなお便りさしあげ編集長様の特別のおはからいで、辻村様に廻していただいて、貴方様から、懇篤なお返事いただきました時は、もう飛立つ思いで、すぐにでも大阪へ参りたい気持で一杯でございました。けれど、前にも書きました様に、父一人娘一人の、私達親娘二人暮しでは、それも思うにまかせず、心ばかりはやりましてもなかなか機会もなく、ずるずると日がたつてしまい、そのうちに、辻村様もきつと約束を破った、ひやかしただけの女だろうと思ひなされるに違いないと思ひまして、とうと

う半ばあきらめておりました。

奇クはその後直送していただいております。毎月毎月、心はずませて、先ず第一番に辻村様のカメラ・ハントを開きます。二番目は『花と蛇』でございます。辻村様は決してハントされる女性には困っていらっしゃらないのだなあと、毎月読むたびに一寸口惜しくなったり、しつとめいたものを覚えまします。私ごとき女は、とっくの昔に忘れていらっしゃるにちがいないのだわと思うと、少し癪にさわったり、そのくせ、自分がお便り差上げないから、きっと相手になさらないのだと、独りで勝手気儘なことを考えているれい子です。

辻村様の『楽我記』サロンにも、一言もわたしのこと触れていらっしゃらないし、私の様な女は、筈ではくほど存在しているのかなあなど、勝手な想像をしています。

とりとめもないことをダラダラと書きつらねてまいりましたが、実は私、一月下旬、奈良県天理市の天理教本部へ、御教祖様八十年祭の行事に、私の友達信仰している天理教々会の団参バスに便乗して帰参します。約三日間天理市の、所属する教会の詰所という、信者の宿舎へ泊りますので、その機会にお逢

い出来ますれば、これに越したよろこびはございません。奈良県の天理市への到着日、宿泊する詰所、そしてその電話番号を最後に書いておきますゆえ、どうか御連絡下さいませようをお願い申し上げます。私ひとり父の許を離れて、単独行動出来る機会は、もう二度とあるかないか分りません。

辻村様に一眼お逢い出来て、こんな私でもお気に召していただければ、どんなにうれしか分らないと思います。私自身の願望やら飲こびやら、いろいろ書きたいことは山ほどございますが、いざとなれば、何一つかけないれい子をお許し下さい。

被虐に陶醉と恍惚を心から感じる私でございます。すべては辻村様の御意にお任せするれい子です。はしたない私とお叱りにならず是非是非お目にかかれる時を楽しみに、取急ぎ書きしたためました。

気候不順の折柄、くれぐれも御自愛下さいませ。ではその日を夢みつつ。かしこ

沖村れい子

× × ×

一月二十六日から始まった、天理教御教祖八十年祭は、新聞も大々的に採りあげ、記念ピースも発売されるほどの華やかな祭典ぶり

であった。人口五、六万人に過ぎぬ大和の一宗教都市が祭典中は、数十万に膨れ上って、色とりどりの全国から駆けつけた観光バスが横幕をつけ、梅鉢の紋を鮮やかに染めぬいて天理へ天理へと、草木もなびくように走り去って行く。

沖村れい子に昨夜午後八時頃電話したら、待つ間もなく彼女の声が響いてきた。澄んだハイトーンの爽やかな声であった。

「辻村です。お便り見て早速約束の今日電話したのだけど、疲れたでしょう」

「ええ少し……。何だか夢中ですわ。今日四時ごろついて、お詣りして、あちこち歩いて今やっと落付いたところです」

「一寸信者には弱いなあ……」

「あらッ、でも、それとこれとは別ですわ。

逢っていただけです？」

「いつがいいんですか？」

「明日は奈良から京都の方へ皆さんと見物に廻るのでダメなんです」

「じゃあ、あさって？」

「その方がいいんですけど……。午後一時頃天理へいらっしゃって、お電話下さいませんか？ とってもスゴイ人出なんです。その時はつきり場所をきめましょう。今ここで余り喋

べれませんし、今からきめて予定変ってもいけませんから……」

「分りました。じゃあ」

電話を切った。信者の詰所であれば、沖村れい子も、他人目を憚かって、何も喋れなないのであろう。明後日は少し用事があったがそれも朝の間に片附けることにして、私は兎も角も天理市へ出掛けることにした。私自身も万更天理教に無縁でもないから、この際、八十年祭の歓びに沸きたつ、天理の姿をこの目で見ておくのも悪くあろう筈はない。

……………

そして今、私は独り、混雑でごったかえす天理駅を人浪に揉まれて吐き出されて来た。

この日のために総合された、国鉄、近鉄の共同の駅前広場は、次々と到着する信者の群を求めて、それぞれの所属教会の旗をふりかざす、ハッピー姿の若者の血走った振舞いで、むしろ殺氣立ってさえ見える。

人垣をぬけ、人並に続いて歩いて、万国旗がアーケード狭しと飾られた商店街の一角で私は公衆電話のダイヤルを廻す。随分待たされて、やっと沖村れい子の声が出た。

「辻村さんね。すみません、お待たせして。

今、お食事の準備で大変なの。そうね、一時

半頃、本部の前に天理小学校の入口の門があるからそこでお待ちしますわ。目印に、私黒眼鏡をかけています。そして服装は黒オーバーに花模様のマフラーして、胸に赤いバラのブローチつけております」

「私は縁なし眼鏡に灰色のオーバー、紺色の袋を提げている。そうだ革手袋を握っていますよ」

「じゃあ、きっと。何もかもその時……」

早々に電話はきれた。どうも手紙のあの懇願調と、電話の調子とはかなりの隔たりがある。ぎっちり埋められたスケジュールの中から、私とのデートのひとときをつくるのは、相当に困難なわざであることを、私は電話の声から感じとり、少しみじめな自分の気持をまぎらわせようとした。時計をみると十二時半ジャスト。腹ごしらえのつもりで、商店街の中の、とある食堂に入る。凄い混雑で、辛うじて椅子をひとつ奪うように見つけて坐る。注文した寿司も、荒々しく投げ出すようにガチャリと叩きつけて置いて金は先取り。薄っぺらな蛸の切身が、その拍子に落ちて、半ばつぶれかかった握りが歪んで、私を嘲笑している様に見える。この機会に儲けようとする気持は分るが、この遅ましい商魂は浅ま

しい。全国から集まった、善男善女に対しても、宗教都市の食堂として恥かしくはないか――。

そんな感懷も或いは私一人なのか、サービスピ精神ゼロのこの店内で、人々は不平も云わず、普段より格高の料理を皆当然のようにたべている。五分間足らずで飛出す。沖村れい子に逢うまでの一時間、私は混雑の頂点を押しつ押されつ、本部への道をよろめき乍ら辿っていった。

御教祖中山みきがなくなられて、今年で丁度八十年。既に新興宗教の域を脱して、日本一の教団にのし上った地場(じば)は、天理市長自らが天祭の推進者となり、市を挙げて沸き返り、煮えくり返っている。全国の露店商が集まり、スリも稼ぎどきと許り津々浦々により集まっていることだろう。

八丁四面は神のやかたといわれた教祖の言葉は、着々とその成果を挙げ、本部を中心にややとやかた。総合病院、大学、炊事本部など、等しく神造りの鉄筋の建物、聳えている。

信じて助かるも助からぬも、すべては自分の心一つ。神とは、あるといえはある。無いといえは無い。信ずる誠によって現われてく



るりやく、これが神の姿だと、御教祖中山みきはいみじくも申されたとのことだが、御教祖の偉大さは別として、この膨大な組織をつくりあげた現在の教団の在り方は、徳川幕府の施政方針と何ら変りないと、或る友はいつていたが、そんな匂いを、私は地場で感じとった。

仮に将軍が真柱であり、教団経営の人々が老中、旗本。大教会が譜代、外様の大名。分教会が代官。信者が年貢を納める民百姓であったにしろ、今こうして一つの信仰を目指し

て、全国より集まった夥しい信者の群は、確かに、純粋な信仰の法悦境と、信ずる者のみが持つ恍惚境の中に身をゆだねていた。「匂いがけ」をし、「ひのきしん」をして、月日親神に感謝の真心を捧げる人々は少なくとも今の私よりは、心の平安を得てしあわせであるかも知れない。

石だたみ一杯に整然と脱がれた履物類を、ハッピー姿の人々が、謙虚な姿で、その一つ一つを並べ直し、汚れた靴はふき潔めているのに、フト面映ゆい感懐を覚えつつ、私は本殿

に昇る。形式的にせよその刹那のみ敬虔な気持で礼拝して、廻廊を廻り、御教祖殿を廻って、再び元へ戻っていく。時間の浪費とはいえ、ぼんやり待つよりは遙かにましである。ほこりで汚れていた私の靴も、綺麗に磨かれて、チャンと無事にある。恐縮して履くと、私はハッピー姿の若い青年にペコリと思わず頭

を下げた。確かに無報酬のこの「ひのきしん」精神は、今の日本にとっては尊いものであった。

時間もよし、私は頃合を見計って本部の前にある小学校の門の前で佇ずんだ。激しい往来は、唯一人エトランゼの私の姿に気を止める者もない。山辺の山々から吹きおろす風冷めたく、小雪のちらつきそうな空もようである。傍らのたこ焼屋の店出しの前は、黒山の人だかりで、熱けるのを持ち兼ねるようにして、次から次へと飛ぶ様に売れて行くのを漫然と眺めていると、その人気に誘われて、私もタコヤキを二ツ三ツほうばってみたい誘惑にかられた。

人混みを巧みに縫うて、小走りにこちらに向ってくる黒眼鏡の女性を、十メートルも先に私はその時見た。正しくそれは沖村れい子に違いなかった。私は無意識にそれに向って手を挙げた。逸早く認めたらしい彼女は、ハアハアと息せき切って私の前かけよった。随分急いで来たらしい。

「本当に御無理許りいって済みません。こんな大変なところへワザワザお呼びしたりして御免なさいね」

「いやあ……。それよりも、うまく逢えてよ

かったですよ」

「私もそれ許り心配してましたわ。やはり神様のお導びきですわ」

沖村れい子は早速神様を引合いに出した。

私は返事もうわの空に、今、眼前に喜びを一杯湛えた、沖村れい子の均整のとれた、つややかに若々しく張切った姿かたちに見とれていた。現実には逢うまでは、これ程の美人だとは想像もしていなかった。黒いオーバーに蔽われていても、豊かな肉付きはかくしようもなく、部厚いオーバーの生地胸の辺りを大きくふくらませて、そのくせ、脚線はしなやかに、流れるように整って美しかった。十二才である筈だった。

「美人だなあ——」

私はお世辞めきで、思わず唸るようにつぶやいた。

「いやですわ。岐阜の田舎育ちですよ」

「いやいや、とんでもない。ところで時間はどのくらい都合つくの？」

「夕勤めまでに帰ればいいんです。でも午後五時くらいには戻りたいと思います。ホラ、あそこの炊事本部で、一切の給食をしているんですけど、詰所での配食の準備が大変で、夕食もお手伝いしないといけないし、団体行

動ですから、なかなか思うようにゆかないんです」

「それじゃ、余り時間がないね。静かな奈良公園の方へでも逃避しましょうか？」

「辻村さんに、すべてお任せしますわ。私、何も分らないんです」

円らなキラキラと黒耀石のように、よく輝やく瞳が私を見つめい。肌の色が抜けるように白く、ふくよやかである。

私達は直ちに行動を起した。今や私のSMの虫は、鎌首をもたげて蠢動しようとしている。一分一秒も貴重な時間だ。

本部前の黒大門を潜り、天理プールの横の小路に添って舗装道路へと出る。隣接都市からも相当応援にタクシーは来ているが、一挙に膨れ上った、今や奈良県下随一の大人口の天理市では、タクシーも途迷っているのか、容易にみつからない。それでも数分後、恰度私達の前で降車した老夫婦のあとへ、這二無二乗込むと、奈良へ命じた。団参客で道路は寸断され、奈良へ通ずる道路は車が轟めいてる。しかも一カ月許り前完成を見た、名阪道路の、標本インターチェンジは、東海方面よりの団参バスで大混乱し、身動きもとれない。運転手もイライラしているが、私達二人

は尚更である。普段なら十数分で行ける奈良への道が、倍近くの三十分以上もかかってしまった。標本を過ぎれば奈良へは殆んど一直線。市内の循環バス道路を、団地の立並ぶ紀寺町で右折し、奈良学芸大学前を左折して、奈良公園内を春日大社の方角に向かう。もうここまで来ると冬枯れで、辺りは静かにヒソツとし、餌を求めるシカの群があちこちに点在しているのが眼につく。春日奥山へのドライブコースの出口を少し入った処に、近鉄経営の、かなりいい料亭旅館がある。

知合いがいるので、呼んで貰って頼むと、一儀に及ばず、和洋折衷のかなりいい間へ通してくれた。

私は気持のせく余り、ここまで逸早く到着させてしまったが、この数十分の車の中の、私達二人の会話に、話を戻そう。車にのりこむなり話しかけ、降りるまで話は続いていたのだから——。しかし、とりとめもない。

「ずっと本読んでるの？」

「ええ、でも好きなところだけ」

「お父さんに気付かれない？」

「父は朝七時半頃出て夕方帰ります。郵便は朝十時頃と午後三時頃だから大丈夫ですわ。以前は日曜日も配達されて、時々配達日近く

の日曜は気掛りだったけど、近頃は日曜日配達しないので、その心配ありませんわ」

「すると貴女は、ずっと家事ってわけだね」

「母が私の十四才の時なくなりましたの。高校だけは何とか出ましたけど、父一人でしょう。とてもお勤めは無理ですし、今は家について、編機で内職したり洋裁したりしてますのよ」

「でも、一日中時間自由じゃないの」

「それは自由なの。だから私、文才でもあれば、何か書いて投稿してみたいなあって、思う時もありますけど、そんな才能もありませんし——」

「沖村さん、Mでしょう？」

沖村れい子は、白い頬をパッと染めて、黙ってうなづいた。運転手には私達のSMの会話はさとられたくない。強いて私はその方面には言及しなかった。だから二人にだけ分る式の会話で進めてゆく。

「カメラ・ハントに出していい？」

「……」

暫らく返事はなかったが、彼女は決心したようにかすかにうなづいた。

「あのう、全部本当のこと書くのですの？」

「差し障りのある個所は伏せたり、フィクシ

ョンにしますよ。でもすべてフィクションだと、貴女と二人の今日の出来事はウソになってしまう」

「辻村さんを信用することにしたわ」

「深く掘り下げた話は、のちほどのことにしましょう。ところで、貴女、もう古くからの信者なの？」

「辻村さんに逢いたいたために、信者になったという少しオーバーだけど、この八十年祭で帰参する事は五年も前から計画されていたらしいですよ。私の仲のいいお友達がこの教会へ参っているの、誘われていったのですけど、教会の先生の仰有るような、身状や事情は余りありませんの。お友達だって誘った時、奈良から関西方面に、団参バスでゆくと安く行けるし、お詣りと観光を兼ねてゆけると奨めるもんだから、フトその時、或いは辻村さんに逢えるチャンスあるかも知れないって、その時感じたの。それが今、こうして実現して、御一緒できるなんて、まるで夢のようですね。辻村さんがお忙がしくて、お返事なかったら、それ迄ですものネ。でも私何だか確信がありましたわ。きっと逢えるって気がしましたもの……」

「でもプレイは勿論始めての経験でしょう、

今日これからが……」

私は声を潜めてきいた。れい子が私の耳に口を寄せるようにして囁いた。

「たった一度だけ、イトコが私にそんなことをしましたのよ。高校二年の時に——」

「のちほど聞きたいですネ」

「白状しますわ。ありのままにすべて」

普通の声に還って、

「イトコは今も来るんですか？」

「いえ、その時東京の大学の四回生でした。翌年東京の方で就職しましたが、時々便りあります。そのことがあって以来、くの方へは帰って来ませんのよ。夏休みで帰省した時でしたわ」

「貴女は、それでMに開眼した」

「だと思えます」

「ということは、貴女はイトコの方が好きだった。今も忘れられないってわけですね」

「裏返せばそうなるでしょうが。私はその行為を許しているのですが、彼はそれに対して罪悪感を感じているようですわ」

「どうして、貴女的心情を綴らないのです。

彼に——」

「その気になれないのです。彼は私の母の姉の子供です。これ以上進んでも結局は血が濃

いから、どうにもならないのです」

「それでMは深く内攻し、深沈していった挙句、私への手紙となったのですね」

「あの時は、出してから後悔しました。若し辻村さんが私の家を訪問なさってたら、恐らく逃げ隠れしていたでしょう。でも今は違ふようです。この二年間、Mの感覚が、随分と精神的に成長した様に自分では思いますわ」

「蕾が開花したとでもいうのかな」

「今度は一度機会があったら、お越し下さればいいと思いますわ。一日中私一人ですからどんなに振舞っても大丈夫なんですよ。つまらない田舎町ですけど」

「中津川市って、どんな処かな。私には全然これっぽちも予備知識がないんでネ」

「岐阜県の東南部に当るんです。もう市制になって十四年近くなるんですよ。大方は山だけと市としては広い方ですわ。木曽川の流域と、中津川、阿木川って川が流れていて、昔は中仙道の宿場でした。人口は天理と似たりよったりの五万人ぐらいでしょうネ」

「何が産物なの」

「山地ですから、製紙や木材の工場は大きいがありますわ。東の方の恵那山に昇ってもいいし、恵那峡も近いし、保古山の湖は、冬

はスケートで賑わっていますわ。中央線を利用されたら、案外ラクに来られますわ」

「近いうちに行きたくまりましたよ。貴女一人っ切りというのが最高だしネ。夏と冬とどちらがいいかしら」

「春から夏にかけてが一番いいようですわ」

こんなとりとめもない話をしているうち、到着したのである。運転手に少しチップをはずんで、私達は樹木に囲繞された門庭を通り部屋に案内された。沖村れい子は全然憶するところがない。それが彼女の最大の長所でもあろうか、絶えず柔かい微笑がその頬から消えることがなかった。本番は近い、私の心は逸りに逸っている。

× × ×

この名物の鍋ものは時間を食うので、料理を見繕ってもらって、ビールを頼み、仲居さんに心付をして下ってもらった。春日の原始林の樹海は窓越しに、眼前に迫っている。

ビールを奨めると、コップに半分許りのんで、両手で頬を挟んで、眼元を染めた。愛らしい巧まぬしぐさが、フト我を忘れかけそうになる。無難な髪が彼女を幼なく感じさせた。彼女の身体からはのかな香料の匂いがした。それは私の逸る心をそらずにはおこな

い妖しいかおりであった。いつしか私は二本のビールを空にしていた。

「そろそろ始める？」

「いいわ」

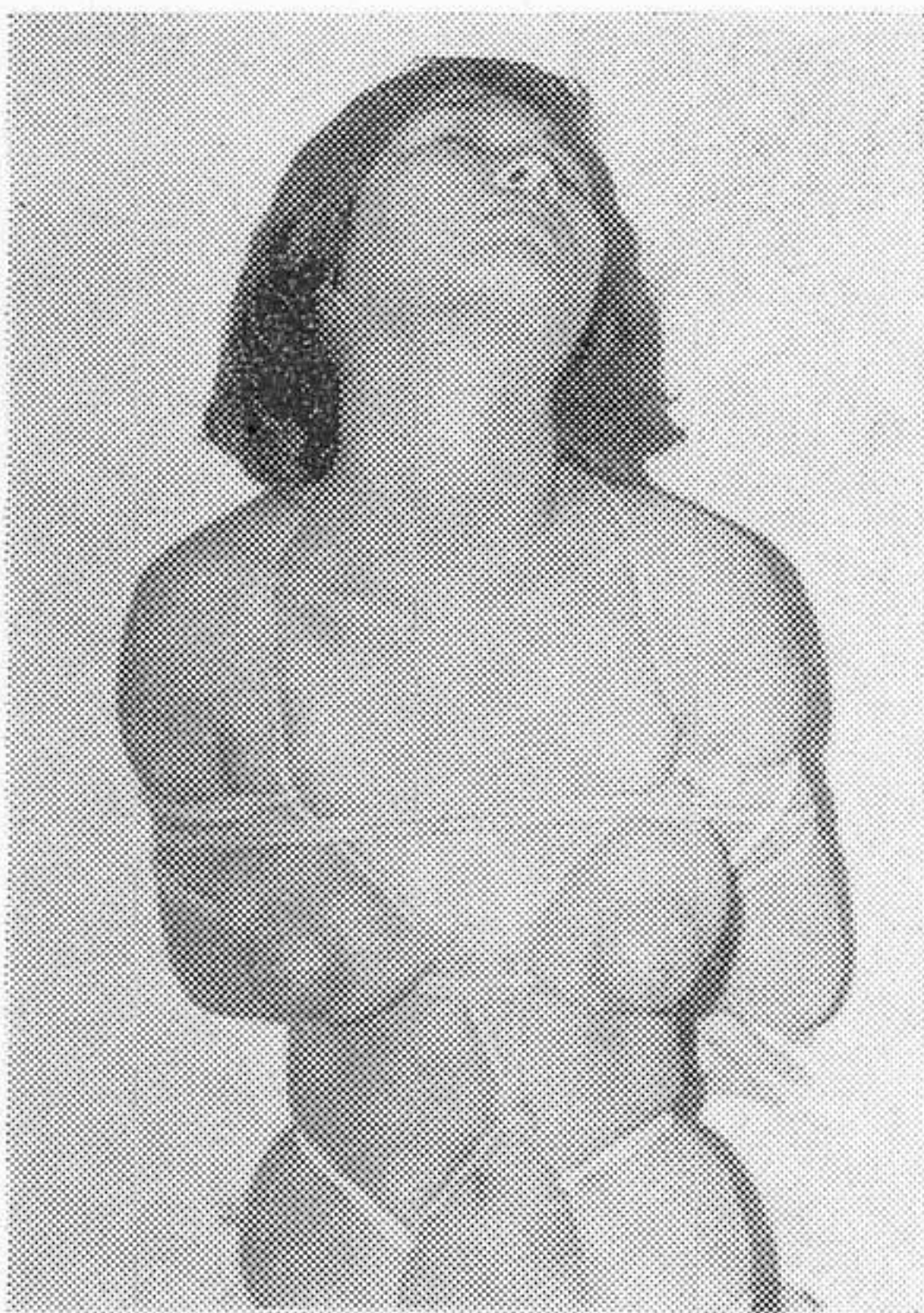
私の言葉をしおに、れい子はトイレに立った。机を片隅へよせて、部屋に空白をつくり私は準備を始める。カメラ・ハントを承知しているとの想定から、細目のロープの長いめのを二本忍ばせて来てあった。

戻って来て、佇立している彼女の手を取った。白磁のように白く冷やかな感触が、私の掌に伝播した。それでいて羽二重餅を握りしめたように柔かい。これが餅肌とでもいうのだらうか。部屋は暖房がきいていて適当に温かい。

「全部脱ぎますの？」

「その方がいいけど……構わなければネ」

彼女は黙ってツーピースを脱ぎ、素早く下着を外していった。殆んど抵抗がない。私の網膜に、白磁の姿が、惜しげもなく焼きついた。予想に違わぬ張ちきれそうな乳房が、重たげに彼女の胸で波打っていた。胴は想像以上に細く、体は如何にも柔かそうであった。私のSの血は脉々とたぎって来た。強烈な縛りでこの女体にいどみたい慾望にかられた。



時間はかなり経っている。既に三時に近かった。帰る時間を計算にいければ、プレイの時間は幾許もない。

「君の最初の手紙のこんな個所が、私の脳裡から灼きついて離れないのだが、文字通りの緊縛を望みますってあったのを覚えてるよ。本当の緊縛をやるうか」

胸を抱いて蹲踞のポーズで見上げ乍らしい子はいった。

「いいですわ。好きな様になさって——」
そして、アルカイックな笑みを口許に浮べ

て、れい子は瞑想した。こんな場合のテクニックを、彼女は心憎い許りに心得ている風にとれた。

私の両手は敏捷に、獲物を求めて走った。一本の縄を二つに折り、途中で二重結びの結び目をつくっておいて、彼女の首にかけた。結び目は恰度、彼女のお臍のあたりに位置した。それを股縛りにして、お尻から背へ引っ張り上げ、両手を背で大きく後手に組ませて縛り上げた。一条の縦縄が、首から掛って股を割り後手にしめ上げたわけだ。微笑が静かに消えて、微かな苦悶

が走るのか、れい子は股をよじらせ身を開いてねじった。彼女の吐く微かなビールの匂いは、身にまとわりついた香料と混って、甘く切なく私の鼻腔をくすぐった。体を引寄せて私は静かに彼女を横たえた。観念したように閉じた眼は、この恍惚の境を遊んでいるのかいっかな開こうとはし

ない。私のカメラから数回の尖光が彼女に向けて前後左右から光った。

ポーズを変えるべく、私は背に廻した腕に力を入れた。体を半ば起した時、彼女の唇が何かを求めるように喘いだ。のどが大きく動き、唾をのみ込むさまに、私の心はフトよめいた。私は思わず体を抱きよせた筈、れい子の顔に自分を近づけていた。彼女の吐く息が、熱く私の唇の上下をくすぐった。吐く息と共に眼を閉じた筈、唇は心なしか突き出した様に私には思えた。いや確かに受けようとして突き出していた。唇が肉感的に見え、しかも彼女の現在の恍惚の状態を微妙に示しているかの様に見えた。

咄嗟に合した唇に、私はれい子の唾を飲んだ。眼の醒めるような快感が、ジーンと私の背骨をつらぬいて走った。

今れい子の、尖った舌は、蛇の様にくねりと鋭さをおり交せて、私の唇の中で躍動していた。舌先と舌先が纏れ合い、吸引力がお互いの愛情を確かめ合うかの様に、激しく交互に交錯した。

そして、その俣抱きしめてしまえば、そこには、これ以上のプレイはなくなってしまうかも知れない。強烈な誘惑を退けるように私

は、静かに唇を離した。吐息が彼女の口から洩れて、微かな呻き声が、れい子の心の状態を示すかのように二度、三度断続して消えていった。△私は飽くまでも冷静なプレイボーイでなければならぬ。もう少しで感情に溺れるところだった△私は危うくも埋没しそうになった気分を取り戻して、本来の自分に返ってプレイを続けようとした。もっときつく縛ってやろう。快感の後に伴う残忍な歓喜を全身にみなぎらせて、私はやや手荒く彼女を引起すと、残る一条の縄を、縦縄に通して二の腕をしめ上げ、ついで、乳房を強調させるしめ方で、胸にきつく巻きつけ、臍の辺りで、更に縦縄を左右に絞り、太股の辺りでもう一卷きして縄は途切れ果てた。發育盛りの乳房に、更にお碗を伏せた様に重なる乳暈はポックリとレリーフの如く浮かび上り、それは呼吸と共に揺れて喘ぎ、妖しく淡紅色に染まって息づいていた。

恍惚の境地にあるれい子の、仰向いたあごの線は、見事な曲線を浮き上らせていた。汗ばんだ肌はうっすらと刷毛をはいたようにほのかに色づき、脂をぬめらせて、蛍光灯の下で、妖しくセクシーに光っていた。

かなり長い無言のこのパイントマイン・プ

レイを破ったのは私だった。

「眼を開いて私を御覧——」

彼女は黙って首を振った。坐椅子をあてがってラクにしてやったが、私はこの緊縛ポーズが凄く気に入って、あっさり解くのがためらわれた。

「どこも痛くない？」

「ええ」と微かに返事がかえる。

私はエンコラサと姿見鏡台を彼女の前へ運んで来ると再びいった。

「眼を開いて、自分を御覧よ」

はにかんで、沖村れい子は細目をあけ、やがてぱちりと開眼して、自分の緊縛ポーズを喰い入るように魅入っていた。

「こんなポーズ気に入った？」

「いいと思うわ」

これはナルチシズムのあらわれでもあろうか。れい子は暫らくの間、しげしげと我が緊縛のポーズを鏡中に見とれていたが、体をくねらし斜面や横面もうつして見た。それに向って私はカメラのシャッターをきる。

「フोट送って下さる？」

「貴女の方さえ大丈夫ならね」

「御一緒にとりたいわ。ダメかしら」

私は無言の俤、長尺レリーズを装填し、彼

女を背後から、かき抱くようにして鏡に向かつてシャッターをきった。

「どう、これでいい？　じゃあ、もう少しやろうか」

「いいわ、いくらでも。私泣かないのよ」

素早く解くと、くっきりと赤く、縄の跡がれい子の白い肌に、今の緊縛その俤に、歴々と残っていた。

泣かないといった言葉が、私の嗜虐性を更に刺激した。泣かせてやりたい気持がしきりにおこりのように疼き始めた。この柔軟な体を極端に彎曲させて、極限を試してみたい慾望にかられた。

縄の喰い込んだあとの二の腕を、揉もうともせず、れい子はさながら放心したように、私を凝視していた。黒耀石のように黒く輝やく瞳孔の奥はうるんで、甘い陶酔にしばれているようであった。ダラリと垂れ下った両手をとると私は後ろに振じ上げ、指先が肩にとどくくらいまで高手小手にして逆手に縛り上げ、縄を首に廻して結び目をつくり、二の腕をしめ上げた。

坐った姿勢で、両脚を伸ばして拡げさせ、私はれい子の髪を鷲掴みにして押さえつけていった。頭部が両腿の間に陥没するまで押え



つけて、その上に馬乗りになると、もう一本の縄を腿にかけ、頭をめりこませて左右の腿に交互に縄をかけて引き絞った。れい子の体は真二つに腰で折れて、腿の下から頭が覗いていた。両足首を持ち上げて、臀部の底辺に重心をおくと、アクロバットのように、彼女の顔は、完全に両腿の肉に挟まれて、その間から突き出ていた。苦悶の表情もなく、閉じた喉に緊縛の果ての悦びが、ひそと溢れているかに見えた。表情は変らなかった。

私はその白い表情を叩き破ってしまいたい

衝動を覚えた。

二の間の境の襖を開き、整理タンスを開いて、丹前の帯紐を二本とり出してくると、それを繋いで、れい子の両脚首を縛り、鴨居に引き絞るようにして吊り上げた。臀部の底辺が、かろうじて、敷居の上に接触しているに過ぎなかった。重心がとれず、ゆらゆらと彼女は左右に揺れ動いた。腿の間から覗く白磁の表情は、やや苦しげに歪んでいたが、呻きは洩れなかった。

「バンドで鞭打ちしてやろうか——」

わざと悪魔めいた口調で、私はしゃがみ込んでその頬をつつく。返事はなかったが首は振らない。いや、振れないのかも知れないのだ。しかし私は応諾の意味にとった。

プレイは熟している。私は腰の革バンドを抜きとる。ズボンがずり落ちたのを足で外して、腰に向って、一曳、バンドを振った。

ピシリと快い音が、部屋の空気を引裂き、弾みで、彼女の体は半廻転した。ウーンとこらえて、れい子は歯を喰いしばった様子だった。更に一曳又一曳。この極度に弯曲した不自然極まる対象へ、私は鞭を十数度振った。私の呼吸は切迫する。恐らく眼球は血走っているだろう。白い柔肌に、徐々に細く長く、バンドの鞭跡が、あぶり出しの如く浮び出した。

私の嗜虐の探求はそこまでであった。バンドを投げ捨てると、机上のピースをとって、大きく煙を吐き出した。胸を圧迫されるのかれい子の呼吸はかなり逼迫していた。大急ぎで脚首の紐を鴨居より外し、両腿の縄を解いて首を出してやり、体を伸ばしてやった。既に高々と背に吊り上げられて縛られた両手首は蒼白に変じて、触ればヒヤリと冷めたかった。感覚を失っているのかも知れない。

「痛かっただろう。つい力が入り過ぎたよ。

御免、御免」

「いいんです。私が自分で希んだことでもの。でも辻村さんって凄いですわね。私ヒョツとすると、このまま息が止まるんじゃないかと思って——」

「どうして叫ばないの」

「恥かしいもの」

「そうかなあ」

被虐に堪える女性の、これはプライドであるかも知れない。

「少し寒くなりましたわ」

「気がつかなかった。ついプレイに熱を入れて過ぎていて、うっかりしていたよ。丹前ももってこよう」

無理もない。一步外へ出れば厳しい寒さの一月末である。私は暖房された部屋の温度になれて、つい彼女の裸であることにうっかりしていた。

「今何時？」

彼女は私に時間をきいた。

「三時四十八分——」

「そう」

彼女は暫らく考える眼付になったが、やがて腹をきめた様に

「もう少し、いいわね。少しぐらい遅くなっただって、もう二度とこんなチャンスないんですものねえ」

となかば自分に言いきかせてる口ぶりですぶやいた。

「お風呂へ入らないかい。貴女を縛って、その上から丹前させかけてゆくんだ。縛った貴

女を風呂につけて、すっかり洗ったげる」

「構わないけど、誰か入って来ないかしら」

「アベックだから、仲居さんが承知しているよ。じゃそうしよう」

私は又もやれい子を後手に、今度は両手を垂らして腰の上あたりで縛ると、腰や胸に廻し、特に乳房を張り出すように強調して胸をしめつけた。その上から丹前をさせかけ、帯をしめてやると、懐手している様に見えた。

帳場へ電話しておいて私も丹前に着換える。仲居に入浴をつげると心得て引下り、間もなく空いている事を知らせに来た。アベックホテルでないだけに、バス付とは行かないが、かなり広々とした浴場につかれるのも一面反ってよかった。私は彼女をかばうようにして数度来ていて、勝手知ったる浴場へと出掛ける。午后なので湯は未だ沸し立てか新らしく、熱が皮膚に泌み通る。

私は縛ったままのれい子を抱きかかえる様にして、浴槽に沈める。

「体のあちこちがヒリヒリとしみるわ」

眉をしかめて彼女は立上ろうとした。鞭痕と縄のあとが湯にしみるのか。その体をぐつと押えつけて辛抱させる。徐々に湯になれて愁眉が開く。湯の中に彼女を浮かせて私は横

抱きにする。濡れた髪が私の頬をくすぐる。

じっと私を見上げるれい子の瞳は挑発的に光っていた。そっと顔を寄せてくる。又しても唇を吸えというのか。

吸った唇を離すと、苺のように紅につややかに濡れて光っている。

（どうして、数時間前に始めて逢って突発的に、こんな調子になったのだろう。私を岐阜の木曾の奥深く誘い込む、これは手管なのだろうか。妖しい魔女の魅力にとりつかれて行くようだ）

「イトコは君を縛ったの」

「縛ったわ」

悪戯っぽく、その眼は笑っていた。

「どんな風に……」

「いろいろによ」

「それをききたいな」

「ぎごちないのよ。辻村さんのようにテキパキ出来ないわ。何しろアマですものネ」

「私がプロとでもいうのかい」

「縛りのプロよ」

「変なプロだ。で、それから？」

「ネクタイだとか、腰紐とか、細い紙紐だとか、その辺りにあるもの手当り次第で縛ったのよ」

「驚いたでショ」

「そりやもう。でも彼、スゴく真剣なのよ。真蒼になって、ブルブル震えながら縛っていたわ」

「ハダカにして？」

「セーラー服はぬがしたけど、シュミーズの上からよ。そして（こんなボクきらいだろ）って、何度もきくの」

「で、何とやってやったの」

「ええ、きらいだわ。卑怯よってやってやったら泣き出して、許してくれっていうの」

「君が好きだったんだよ、きつと」

「そうネ。私も純粋なあの子好きだわ。縄をといてから、私のオッパイが素晴らしいって拝むようにするのよ」

「私だって拝みたくなる」

「私のオッパイって、そんなに大きい？」

「スゴく立派だよ。圧倒されるネ」

「何故でしょう」

「私の方がききたいネ。これは神様が君に与えて下さった宝物だよ。大切にするんだな」
「お風呂へ入っても、女の人々が皆ジロジロと私のオッパイばかり見るのよ。何だか恥かしいみたい」

「大いに誇ってやり給え。皆んな羨やましく

って見ているんだよ」

「私の乳首、こんなにお椀のように飛び出してるでしょう。女の人でもロコツなこというのよ。余りサワるからだって。私自分じゃちつともサワったりなんかしないのに」

「実に素晴らしいんだよ。私は一番の君の魅力は、オッパイだと診断するネ。いや、すべてかな」

「縄が段々しまって来て、腕がしびれちゃった」

「ほどこうか」

れい子は、コクリとうなづいた。濡れてぐっしりと水分を吸収したロープは至極解きにくい。私は随分の時間をかけてやっと解きほぐす。自由になって、彼女は両手を私の首に巻きつけてぶら下る様なポーズで、両脚をユラユラと湯舟の中で宙にうかせてゆらめいていた。

「で、イトコとは何もなかったの？」

「私の体をあげちゃった。私ってどういうわけか、すぐ順応して相手のなるようにこちらもなってしまうのネ。彼が求めるからあげたまで」

「いやにアッサリしているネ」

「惚れっばいのかしら。すぐ好きになってし

まうの。好きになったら、もうどうなったって構わないと思うのネ」

「それなら私が君の体をほしいといったら」
「あげるわ」

れい子は上気した頬をすりよせ、体をくねらせてまわりついて来た。どうしてこんなことになってしまふのだろう。私はいささか勝手が違って、この世にも可憐な童女、沖村れい子を持ちあつかい兼ね出した。

× × ×

何事もなく私達は、旅館さし廻しのタクシーに乗り込んだ。既に春日山の原始林に黄昏の色が染まり出している。

車中で、れい子は私の胸に顔を埋めて、やがて別れるその刹那を悲しむかの様に、ヒタと体を寄せて来た。

「私がキライなの」

「大好きだよ」

「だったら何故、あの時……」

「好きだから、綺麗にそっとしておきたかったのさ」

しかし、この言葉は、中年男の悲しい虚言である事を白状せざるを得ない。

意馬心猿に燃え立った私の心とは反比例して、私の体は萎えて行く一方だった。それを

隠す為に、私は慌てて風呂を出た。れい子を残して、先に部屋に帰ったのは、決してれい子のせいではない。私自身悲しかったからに外ならない。

先刻のプレイの激しさと、浴槽の熱気に、心とはうらはらに、私のセックスは昇華していたのだ。

千載一遇のチャンス逃した残念さは、沖村れい子以上に、私の体内に、くすぶっている。恐らくそのくすぶりは、れい子にだってあるに違いない。不燃焼の俤に終ったれい子は、それが彼女自身の行為から出たこととカシグって訴えかけてくるのだが――。

私はこの時程、私自身の体に対していまいましく思った事はなかった。

(糖尿はインポテンツにさせるというが、私の症状は、それ迄に進んでいるのだろうか) 或いはプレイの激しさに、私自身の糖尿病の肉体は忘却の彼方にあつたのであろうか。

この文がカメラ・ハントとして、奇クの誌上にのつたその時に、沖村れい子は私の苦衷を知ってくれるであらう。

さもあらばあれ、私は車中では最早、節度を弁まえた紳士としての仮面をかぶらざるを得なかったのである。

帰りは早かった。夕闇について、タクシーは忽ちに天理の市庁前の交叉点を左に折れて本部に向っていた。慌てて車を止めて私達は下りる。別れの時は、刻々として近づいている。プールの横の道を上って本殿の前に到ると、早くも万余の神殿、おやさとかたを飾る教会名入りのチョーチンは、一斉に点火されて、とっぴり暮れ果てた夜空に眼も綾なる不夜城を現出していた。群衆は等しく拝殿へ拝殿へと、吸い込まれる様に引きもきらず続いている。既に、夕勤めの時間も近いのだろう。

別れは辛く淋しかった。真綿を握っているように、握れば握るほど、深く喰い込む柔肌の掌を、私は一入力を籠めて握りしめると、絆を断つように思い切って放した。

「貴女の事は一生忘れないよ。私は生活があって岐阜まで行けないかも知れないが、貴女が天理教に御縁があれば、又団参で帰る機会もあるでしょう。私達の縁結びの神様となつた天理教なら、私も又違う意味で結構でしたと感謝して帰りますよ。又来年にでも逢えるかも知れない。いつ迄も貴女との、強烈なイメージを私は仄々と胸に温めているよ」

「……………」

沖村れい子は無言だった。そしてその睨の切れ目から、スーッと一筋尾を曳いて涙が流れ落ちた。

プレイの強烈な責めにも見せなかった涙をれい子は別れに際して始めて見せた。そして弱々しく微笑み、万斛の想いをこめて、その微笑みは明く変っていった。

立去りかねて、いつ迄も相対して佇立する私達を引裂くかの様に、夕勤めを告げる太鼓が、莊重に広い境内に流れ始め、万雷の如き拍手が四度、夕騒のように響き渡ってきたのであった。

心の汚れを洗いきろうとするかのように、沖村れい子は、神殿に向って足を早めていった。その姿は夕靄の中にシルエットとなつて、私の睨に強く灼きついて残った。

(さよなら……いつか又逢えるだろう)

眩やいて首をすくめ、私は独りごつたがえす、目抜き通りを駅へ向って人浪にもまれていった。

彼女の温かい肌の感触を掌の中に、いつまでも懐しく感じながら、出札口では思わず引返えしたくなる自分の心を押さえかねていった。

濡れにぞ濡れし 子供の世界

芳野眉美

二月十七日、H氏に再会する。

新学期が始まって、新しい制服の女学生たちの姿が、街に目立ち始めるのを見るのは楽しいものだ。

セーラー服の彼女たちは、青く、健康で、美しい。

小学生の頃、子供心に、好きだった、セーラー服への憧憬は、今も消えていない。

そう、消そうとしても、消せない思い出があるからなのかもしれない。

その時、牙子に、どういう理由で縛られたのかわからない。

小学校の低学年だった私は、牙子の弟の悦

郎と遊んでいたのである。悦郎のほうが二三年上級であった。近所に、牙子の家族が引越しをしてきてから、そんなに日はたってはいなかった。

牙子の家は元大使館で、すばらしい洋館だった。国名が書いてあっても、そこがどの国なのか、どこにあるのかは知らなかった。住む人は代っても、その洋館は今もある。

牙子の部屋も、悦郎の部屋もベッドがありトイレは洋式だった。何もかもめずらしかつたことだろう。

牙子が、どうして私を縛ったのか、思い出せない。

三 牙子が女学校から帰ってきた時、私が、牙子の部屋にいたからだろうか。

セーラー服の牙子は、カバンを机の上に置くと、

「許せないわ」と私に言った。

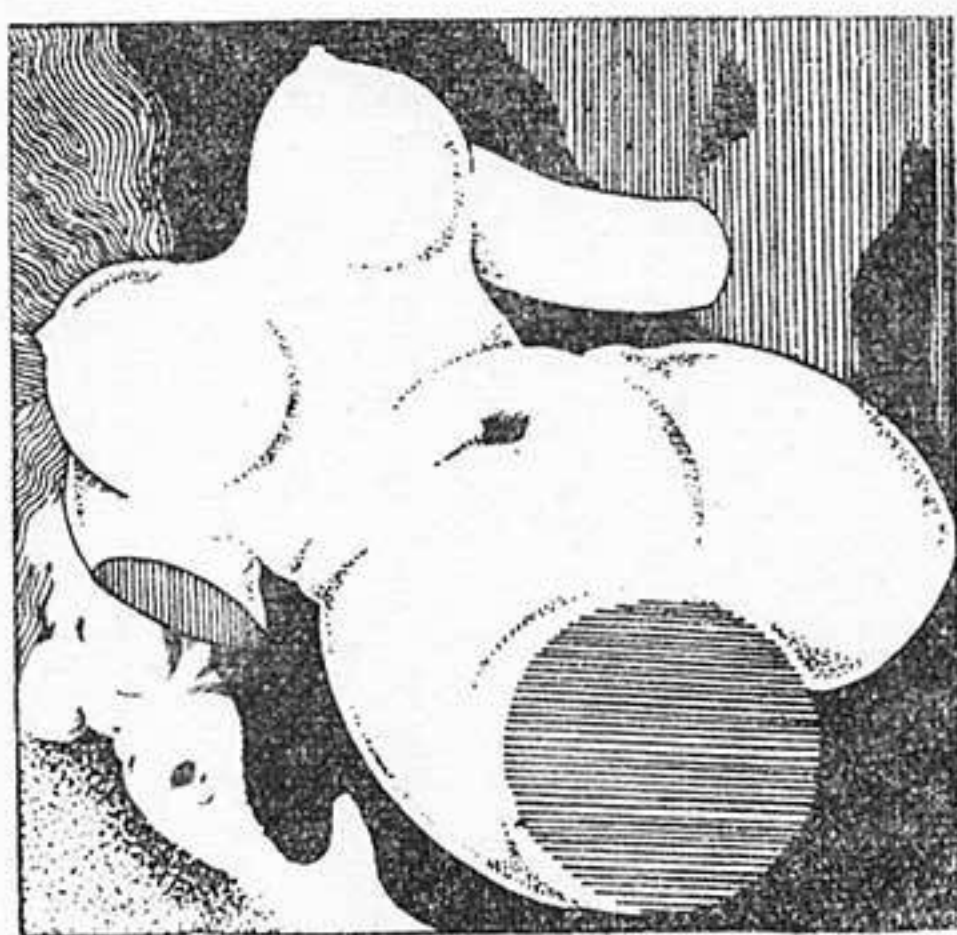
「私のお部屋でいたずらをしていたのでしょう」

「何もしていない」と私は答えた。

「うそ」

「うそじゃない」

「悦郎は」



「お母様に呼ばれて、下に行った」

「悦郎が入れたのね」

私は頷いた。

「女性の部屋に、ことわりもなしに入るのはとても失礼なことなのよ」

「ごめんなさい」

私はあわてて廊下に出ようとした。

「お待ち」

牙子の手が私の腕をつかんだ。

「逃げるの」

牙子に両腕をつかまれて私は立ち竦んだ。

「逃がさないわ」

牙子が私の顔を覗き込んだ。胸の、赤いリボンが頬に触れた。

そのまま、牙子は、私の顔を見下ろしていた。何か、考えているらしい。

腕を放すと、

「そこに立っていないさい」

と牙子は言った。

「動いちゃ、だめ」

牙子はドアに鍵をかけた。

カバンから縄飛びの縄を取り出すと、

「お仕置をしたら、許してあげる」

縄をほどいて一本にした。

「縛るわよ」

そう言われても、当惑した顔で、私は立っていたのに違いない。子供が見せる、困ったときのあの表情である。

「縛るわよ」

と牙子はまた云った。

「縛っていいの」

いきなり、胸に縄がかけられた。

「手をうしろに廻して」

「組むのよ」

「ぐず」

牙子の鋭い声が部屋に響いた。

そんなに大きくない身体を、胸から脚に、がんじがらめに縛るのは、縄飛びの縄で十分だった。

牙子は、私を縛りあげると床に転がした。

そして、私の足首をつかむと、ずるずる引きずって、ベッドの下に押し込んだ。

ベッドカバーが深く下された。

「許すまで、そこに寝ていなさい」

牙子の笑い声がベッドの上でした。

しばらくして、ドアがノックされた。

「Jは」

私の名を呼ぶ悦郎の声がした。

「いないわよ」

「何処に行ったんだらう」

「帰ったのじゃない」

「おかしいな」

悦郎が階段を下りる足音がして、ドアの鍵は再び閉められた。

そのまま、私は、しばらく放置された。

悦郎は、それから、二度ほど、牙子の部屋に來ている。

「Jの下駄が玄関にあるんだけど」

「そう」

「おかしいなあ」

「おかしいわね」

「お姉様、本当にJを知らない」

「知らないわ」

私は、別に、猿ぐつわをされていたわけではない。声をたてれば、悦郎にわかるはずであった。

が、私は、声を出そうとも、助けを呼ぼう

としなかった。勿論、泣かなかった。

ベッドの下で、私は、きっと、困惑した顔

で横たわっていたことだろう。

牙子がこわいわけではなかった。牙子の命令を、忠実に守っているわけでもなかった。

ただ、牙子のベッドの下で、縛られて、い

つまでも、このままでいたいと思った。

快感が、そこにあった。

漠然とした性欲を感じていたのかもしれない。

牙子が許してくれたのは、小一時間ほどたってからである。

牙子は縄をほどき、手首をマッサージして赤味を消すと、悦郎を呼んだ。

「Jったら、ベッドの下で寝てたのよ」

「ちえっ」

悦郎は舌打ちした。

「ずいぶんさがしちゃった」

これだけのことである。

牙子は、二度と縛ってはくれなかった。

女学生の牙子に縛られて、それだけだったのだが、気持が良かった。これは確かなことである。

そう感じる性格が、私の一部分にあるのだろう。

久し振りに、こんなことを思い出したのは大阪で編集長に紹介していただいたH氏が上京して来られて、一月ぶりに再会したからである。

「そういう性格で、生れてきたのですよ」

とH氏は云った。

「どうして、飲んだり、たべたりすることが好きになったのか、動機なんてありません」

以下は、H氏の話である。

H氏も、子供心に、上級生の女の子に興味を示したらしい。

H少年は、木に登って、下校して来る女生徒を待っていた。

どこの学校でも、クラスの中に、ボスの存在はいるものだ。気が強く、男の子でも、平気でぶっとばす女ボスがいるものである。

H少年は、そのボスの女生徒を待っていたのである。

女のくせに生意気だから、不意打ちをくらわして、女ボスを攻撃しよう、などという正義感に燃えていたわけではない。そんな少年らしい単純な気持ではない。

女ボスに最大の侮辱をあたえれば、女ボスに簡単に捕獲されて、最高の恥辱をあたえられるであろうという、少年らしからぬ複雑な気持なのである。ここが普通の少年と違うところであった。

そして、この考えは危険きわまりないことでもあった。女ボスが怒りすぎて、どんな仕打ちをされるか、わかったものでないからである。

木に登ったH少年は、まさしく決戦の覚悟で女ボスの下校を待っていたのに違いない。

そして、その決定的瞬間が来たのである。四五人のお供を連れた女ボスが、H少年の木の下の通りかかった。

H少年は、やにわに着物の前をひろげた。

H少年は、最低のいたずらをしてかしたのである。

「この野郎」

木の上の少年を見つけてボスが叫んだ。

「下りて来い」

「下りるもんか」

とH少年も負けずに叫んだ。

「下りないと承知しないぞ」

「下りてあやまれ」

「きたないじゃないの」

「かかったわ」

女ボスとそのグループは口々に叫んだ。H少年の水しぶきを浴びた少女もいたらしい。

「絶対、下りるもんか」

「よし、落としてやる」

よってたかって、木をゆらし始めた。

着物の前をはだけたまま、H少年は木の枝にしがみついていた。

「落ちるもんか」

H少年は女ボスにペッと唾液を吐いた。一人の少女が、木の枝をひろってきた。

それを受け取ると、女ボスは、こともあらうに、H少年がさっきから露出しているところを乱暴に突き始めたのである。

「痛い」

とH少年は悲鳴をあげた。そこまでは考えていなかった。

「痛いよ」

「下りて来い」

「下りるから、突かないでよ」

「早く下りろ」

女ボスはH少年の尻を、いやというほど殴りつけた。

木から下りたH少年が、女生徒たちに押し倒されたのはいうまでもない。

水しぶきがかかった少女の泥足が、H少年の顔を踏んづけた。

「よくもきたないものをひっつけたわね」

H少年の胸にどっかとまたがった女ボスが憎々しく云った。

「お前にもひっかけてやる」

「ひっかけられるものなら、やってみろ」

口だけは負けていない。が、H少年の内心の目的はここにあった。女ボスの、そして、女生徒たちの Urine を飲んでみたい、と思ったのが、この計画を、実行する発端であった。

た。そんな考えを持っているとは、少女たちは気がつかない。考えられもしなかったことだろう。

「よし」

女ボスが中腰になって、くるりと着物をまわったとき、手足を少女たちにおさえられていたH少年しめたと思ったのに違いないが、そこでにやにやしては計画が失敗する。

H少年は手足をばたつかせてあばれた。

「静かにしろ」

可愛いお尻を露出した女ボスが、H少年の顔にかがみこんだ。その頃の小学生が下穿きをはいていたかどうか、H氏に聞くのを忘れた。多分穿いていなかっただろうと思う。

「こら、口を開けろ」

「――」

「飲ませてやる」

「飲むものか」

「あけろ」

細い竹が二本、H少年の口をこじあけた。と、女ボスの Urine が激しくH少年の口に注ぎこまれた。

「うふ」

H少年はむせた。むせて、むせ返った。「飲め、馬鹿野郎。飲むんだ」

がらがらとH少年の喉が鳴った。

「うがいをしているんじゃない」

あふれた水流は、H少年の首を濡らし、着物をびしょびしょにさせた。

H少年が浴びたのは、女ボスばかりではなかった。

「お前たちも、飲ませてやれ」

女ボスは、子分の少女たちに、こう命令したのである。

立ったままH少年の顔にした少女もいた。

H少年の顔にまたがっただけで、

「でないわ」

と棄権した少女もいた。

すでに、数人の少女たちの Urine でH少年は満腹であった。H少年の計画は成功し、H少年は満足であった。

が、予期せぬ出来事が最後に起ったのである。これはH少年の計算違いでもあった。全く考えてもいなかったことであった。

最後に残った女生徒がもじもじしているの、女ボスが、

「早くしろ」

とけしかけた。

「お前だけだぞ」

「だって」

とその少女が云った。

「もし、したら、困るのよ」

「困るって、何よ」

「でちゃうのよ」

「いいじゃない」

「よくないわ」

「面白いじゃないの、飲ませるの」

「そうじゃないのよ」

その少女は、竹で、土の上に字を書いた。

「わあ」

と周囲に立っていた女生徒たちが笑いだした。

「ね、困るでしょう」

「いいよ」

と女ボスが云った。

「たべさせちゃえよ」

「まさか」

「唾液をかけた罰よ」

「やれやれ」

「たべさせろ」

「面白いわ」

少女たちは、また、口々に叫んでけしかけた。

「いいかしら」

その少女は、おずおずとH少年の顔にまた

がった。くるりと着物をまくる。お尻の下にちょうどその下に、H少年の口があった。

少女がまっ白なお尻を露出してかがんだとき、H少年は突然激しい恐怖におそわれた。

Urineと書いた Kot の、潜在的な不潔感におびやかされたのだろうか。

また、少女の健康な Kot を口の中にさらたら、喉につまって窒息してしまふ、そんな考えが一瞬頭をよぎったのだろうか。

「いやだ」

とH少年は叫んだ。

「やめてくれ」

「たべるんだ」

女ボスは、H少年の頭を泥足でこづきながら、勝ちほこった顔で云った。

「たべさせてやる」

「許して」

「許すものか」

H少年の口は、再び、二本の竹でこじあげられた。

H少年の顔の上で少女の吐息が聞えた。

「してもいい」

誰となく少女は云った。

H少年の手足をおさえている少女たちも、

竹でH少年の口をこじあげている女ボスも、

息を殺して、次に展開するシーンを見つめていた。

H少年の瞳が大きく見開かれた。

少女たちが笑いながら帰ったあと、H少年はしばらく路上に倒れていた。

H少年がその時何を考えていたか知るよしもない。自分でもわからないかもしれない。

激しい興奮と、憑きが落ちたあとのなんともいえない奇妙な感慨がそこにあった。

H少年は起きあがると駆けだした。走って走りぬいた。

美しい落日がH少年の背中に細く映えていた。

× × ×

私は別に、牙子に Urine を飲ませられたわけではない。

子供の頃の私に、そのような経験は皆無である。

二月二十二日、A氏が上京した。

話のついでに、その動機の話になった。

「音ね」

とA氏が云った。

「音、ですか」

「そう、女性の音ですよ」

A少年が小便所にいると、廊下を走る音が

して、

「あら、坊ちゃん」

戸を開けて女中が云った。

「御免なさい。入らせて下さいね」

A少年のうしろを通過して、隣の大便所に消えた。

消えたと思ったら、ふわりと風が吹いて、激しい音がした。

若い女性の、快い音であった。

「その音ですよ」

とA氏が云った。

「私にも覚えがありますよ」

「ね」

「子供心にも興味を持った」

「興味がありますよね」

「音の発生場所に、興味があったわけでしょう」

「その時はね」

「音そのものよりも、女性の秘密のその部分に興味があった」

「知りたかったから」

「知ってしまうと、いつの間にか、音の実体のほうに興味を持つようになった」

「音で、女性の秘所を連想していたのが、逆になった」

「刺激が強すぎたのでしょうか」

「子供は敏感だから」

「性格にもよりますけどね」

「その音を追いすぎたかな」

「そうも言えますね」

「突然異変かな」

「SEXは複雑ですよ」

よくわからない。牙子に浴びせられておけばよかった。

「ところで」

とA氏にきいた。

「Urine だけですか」

「夢がありますからね」

「Kot は」

「夢がない」

「そうですね」

「そのH氏という方は」

「H氏は、どちらでもいいのですよ」

「ほほう」

「この間もね、二人の美女にたべさせられましてね」

「たべられるのですか」

「一人の美女がH氏の口に Kot をしているでしょう。進行形だな」

「ええ」

「もう一人の美女が、コーラをH氏の口に流し込んだんだって」

「それじゃ、Kot も流れ込んでしまう」

「そういうわけですよ」

「世間は広いですね」

「そのコーラがね、もう一人の、美女の

Urine になることもあったらしい」

「選手交代して、つまり、Kot を一人の美女がH氏の口の中にやると、すぐ、もう一人の美女がH氏の口の中に Urine をするのでですよ」

「それで、流し込むわけね」

「そうですね」

「たいしたものですな」

「真似が出来ないでしょう」

A氏しきりに感心していた。

「さて」

とA氏が云った。

「音の実体の研究に行きますかね」

「ホテルは」

「決めていません」

「ガールハントして、その都合でホテルを決めるわけですか」

「そのほうが気楽でいいですよ」

「いってらっしゃい」

「なんの話」

×

×

×

と常連の、いつか、私に九竜虫を無理にた

べさせた、絶世の美女がいった。

「のんだり、たべたり、って」

「子供の話」

「子供」

「子供って、いつでも、のんだり、たべたり

しているじゃない」

「ああ」

わかったような、わからないような顔で、

絶世の美女はうなずいた。

子供の世界は面白い。

どれ、店が終わったら、音の実体の追求とい

くか。

にやにやしていたら、

「また、二号さんのところに行くのでしょうか」

と絶世の美女が云った。

「浮気ばかりしているんだから」

「浮気はしませんよ」

「うそ」

「その時は、本気です」

残念ながらこの絶世の美女はくどけない。

いつも、そばに彼がいるからである。

「まあ、君たちが結婚して、夫婦喧嘩でもし

たときに浮気をしましょう」

ということになっている。

「本気でしよう」

「そう。浮気じゃなく、本気」

早く結婚して、喧嘩しねえかな。ホント。

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

キャビネ版印画紙焼付

日本女性拷問刑罰集

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

美木乃々子嬢の体当たり演技と読者有志のセッ作成並に責役出演とによりて完成された「日本女性拷問刑罰集スチール」は、発表以来、同好者の間で大変な評判を賜わりまして是非一組、お求め下さい

木馬責め

三枚一組 略号(もと)
後手高手小手に縛られた女囚が三角木馬に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫ぶ姿

海老責め

三枚一組 略号(もに)
両足の拇指はくの字にそり反って激しい苦痛と羞恥に悶えぬく凄絶な女囚の海老責め

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)
白州の粗砂に引き据えられた女囚は高手小手首縄に絞られて竹のささらで、肩口を叩かれる。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)
白紙で目かくしされた女死囚は土壇に仰向けに横たえられて、白刃一閃、哀れ女囚の腹は

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)
柔らかい脛に算盤板のギザギザが喰い込むのに更に膝の上へ伊豆石をのせて非人が揺さぶる痛さ

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)
白州の上の女囚がどす黒い捕縄で厳しく縛られ非人の手で竹の棒を縄目に捻じ込められて呻く。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)
腰の乱れを必死に防ごうとする真白い足を八の字に開かせて足首に非情の縄をからませてゆく。

白洲に悶える

三枚一組 略号(もは)
均整のとれた見事な肢体と肌、殊にすらりと伸びた脛と素足をあらわに投げだして悶える女囚。

続・蚯蚓のたわごと

あらたふと青葉若葉の日の光

——芭蕉

田代俊夫

一／＼起／＼ ハニーにおまかせ

勇しい女性に憧れる同志の皆さん、若さと美貌の女私立探偵ハニー嬢を御存知ですか。

ハニー嬢は毎週金曜日午後九時から毎日テレビ（関西地方第四チャンネル）で放送されるコミカルな探偵劇「危機一発シリーズ」に登場します。前半が「ハニーにおまかせ」、後半が「それ行けスマート」と、どちらも人を食った題名がついています。ブロンドハニーに扮するのは脚線美のグラマー女優アン・フランシスです。彼女、空手と柔道の達人で、劇中イカレ型の悪漢どもをあるいは腰車で投げ飛ばしあるいは空手チョップでノックアウト

するなど、巴御前顔負けの大立回りを御披露に及びます。正に女ボンド007というわけです。次週は一つレスリングの寝技をじっくり見せてくれないかなと、そこはかとなき淡い期待を抱くのですが、これはちょっと無理でしょうね。

一人でこっそりテレビを見たいのですが、どうもいけない、大抵邪魔が入ります。そんな時には、「生意気な女だ」とか、「なかなかいかすグラマーだ」などと、何食わぬ風を装っているものの内心胸はドキドキ、ああこんな勇しい美人探偵にコテンパンにやっつけられたら、どんなに幸せだろうなああと、あらぬ妄想を逞しくしつつ画面を食い入るよう

に眺めている現状です。

以前にも「アニーよ銃をとれ」や「琴姫七変化」のようなM派向きの作品が放送され我々を楽しませてくれましたが、ピストルの名手や剣術の達人よりもハニータイプ、つまり『格闘型』・『組打型』のアマゾンのほうが僕には尚一層ぐつとききます。M派といっても各人各様ですが、僕の場合はいわゆる『女上位系』に属し、勇しい女性と格闘の末組敷かれ降参させられる、といったパターンを最も好みます。打合いや斬合いはもう一つ物足りない。だから上記二作品ではゲイル・ラッセルと松山容子の乗馬場面のほうに惹かれました。本誌の作品の中では、女上位だけを執拗

なまでに追求される万田氏の連載物を熱心に愛読させてもらっています。ただ欲をいえば最後には必ず首をチョン切られてしまうのが残念です。どんなことでもしますから命だけは何とかお助け下さい。

○

女探偵ハニーは助手兼恋人役の青年を同伴に従えていて、彼女がピンチになると助けにくるという寸法です。(実際はその反対のことが多いようです)「アニー」や「琴姫」でもそうでしたが、勇しい女主人公には必ずワトソン役の男性がついています。これは、第一には、強いといっても女だから、その弱点を補強するという実的な必要性と、第二に何らかの意味で少し標準から逸脱した男を配して女主人公の強さ、聡明さを際立たせようとする本質的な必要性と二重の効果を与えるためで、この後の点が我々M派の専門分野となるわけです。ワトソンと女ホームズとの間に恋愛関係の成立している場合もあります。が、適当にぼかしてあることが多い。もっとも、『恋愛』を『芸術』にまで高めると、谷崎潤一郎の作品のごとく、盲になったり死んでしまったり等々の陰惨、ムードが濃厚になるのでいつも僻易します。

話変って「ワトソンは女性であった」という愉快なディテクティブがあります。世界各国のホームズ愛好家の諸氏からなるクラブがあつて(会員になるのはとても難しいのですよ)先年さる会員が精緻な考証(！)を基にして上記論文を発表したそうです。あまりピツタリくつきすぎるのでさては怪しいと睨まれたらしい。一人称Iでの記述が、かくてわが愛すべきワトソン氏にとんだ濡衣を着せた結果になりましたが、僕ならむしろ反対に「ホームズは女性であった」とこじつけたところでは。 (君、シャーロックなんて女性名はないよ、第一 *he* としてあるじゃないかと反駁されたらたちまちアウトですね)

僕はワトソンになりたい。勇しい女探偵ハニーの助手にしてもらい、その指示・命令のままにコキ使われたい。その上彼女は僕の恋人なのです。たった一日でお払箱確実の無能助手が恋人とは何とも厚顔ましい限りですが、がに気が引けますが、テレビでは一応そうなっているし(関係ないぞよ)、とにかく僕の頭の中では、『精神分裂流女上位式弁証法的即且対自展開形態価値原則』に基いてこの図式が確固不動の位置を占めているのでまずは大目に見て下さい。ハニーさん、無給でいい

ですから僕を雇って下さい。

○

アン・フランシスは清純派タイプの女優だと思っていました。それがこのテレビ映画ではガリリと一転、溢れんばかりの濃厚なお色気を発散してH男性どもを悩殺します。水着姿で見せる肉体美、特にそのすらりと伸びた羚羊のように美しい脚線をふんだんに鑑賞できるのは全くもって光栄の極みですが、「可憐なサディスティン」とでもいったその持味が僕の理想像とは少しずれます。できうべくんばハニー嬢よ、今少しセックスアピールを控え、ゾクツとくる凄みを發揮されたまわんことを。余計なお世話よ！早速こう言って叱られるでしょうね。

ついでにいいいますと、日本の清純派スターZOR、大学生の最も崇拜する若き乙女こと吉永小百合さんは近頃乗馬に興味をお持ちのようです。たしか正月のスター千一夜でその颯爽とした乗馬ぶりをテレビの画面一杯に展開して下さいました。畜生、馬のヤツめ、と羨しがるところでしょうが実は違います。彼女の乗馬ぶりを見ると、勇しいよりも可愛らしいという感じが先に立って何となく肩すかしを食った気持になるからです。義経が

なぎなたを持っても似合いません。要する我々は大抵自分だけの女神を胸の内に秘めており、それと矛盾する外部の事象があれば、できるだけその修正を試みようとするのです。ですからアン・フランシスのハニーにだけおまかせするわけにはいきません。それ行けば、早速好みの女優（後記三参照）をピンチヒッターとして起用します。ハニーさんどうかお気を悪くなさらないで下さい。

二／＼承／＼ワトソンは語る

(1) Detarame オ

いつも不思議に思うのですが、いわゆるS M的特性の中核には一体、何が存在するのでしょうか。いいかえると、それらの特性を生み出す根源は何かということです。環境、体験学習等の外界の事象がその原因だとはどうしても思えません。なぜなら、自分にはそのような経験の記憶が皆無だからです。それらはいずれい従犯又は教唆犯にすぎない。主犯はどこか別のところに隠れているはずだ。

では一体何者が主犯なのでしょう。或る声が囁きます。主犯は家の中にいる、すなわち遺伝と素質がそれなのだ、と。しかしこの考えはあまりにも馬鹿げています。とうてい

科学的証明に耐え得ない。だとすればもう一度外回りを搜索する必要があるそうです。

結局のところよく分らないのですが、人間の自我が未だ確立しない五才以下の幼年期に環境、体験を媒介としてその「原形質」が内部へ入りこみ、深層意識に強く刻みこまれてしまうのだ、などとも考えています。それなら大人になってからでは主犯を逮捕できないことも比較的容易に説明できるようです。

いずれにせよ、こんな詮索はつまらないことです。主犯がつかまったところで今さらどうにもならないのですから。それはともかくとして、小さい頃から勇しい女性による圧迫のイメージを何とはなしに胸に暖め、反芻してきたことは事実です。「蚯蚓のたわごと」でも少し触れましたが、そのイメージの物的要素について、次の二つを追加しようと思います。

(2) エレメンツ ダ

——甘やかされて育った一人息子（十六才ぐらい？）が親のいうことを聞かずに悪友達と遊んでばかりいる。ある時かなりの大金を持って家出したので、遂に意を決した母親が事件の解決と息子の性格の矯正を、さる女探

偵（女家庭教師？）に依頼する。女探偵はそこですぐその少年を捕えてくるが、反抗的態度をとってなかなか白状しようとしなない。そこで有無をいわさずその上半身を裸にして後手に縛り上げ鞭打の折檻を加える。そうされるとやはり子供のころ、痛みに耐えかねて金の使い道など一切を自供するが、女探偵は性根を叩き直すと称して、尚もその手を休めない。とうとう少年は彼女の許しを乞うとともに、前非を悔い、行ないを改めると誓わせられ完全に屈伏してしまう——。

○

たしか小学生のころ読んだ外国の小説にこんなのがありました。右はその中のごく一部分ですが、そこだけしか記憶しておらず、題名も忘れてしまいました。本のその部分に赤線を引いておいたのを、うっかりしてそのまま友人に貸してしまい大層バツの悪い思いをしたことでした。又、中学生の時、次のような新聞記事を読んで胸騒ぎを覚えました。小さなカコミ記事だったので、そこだけハサミで切り取り、定期入れの中へ挟んで一年以上も持っていました。

○

——日本駐留米軍の某部隊に軍属として勤

務する夫婦がいる。ところが二人の兵隊の位が問題で、夫が兵卒なのに妻が中尉。しかも妻は勤務中その夫に命令を与える直属の上官である。勿論夫は従わなければならない。亭主だからといって何らの特例が認められるはずはない。レディファーストの国アメリカの妻はおおむねかくのごとき優越的地位にある云々――。

(3) Kozitsuke ♪

複雑怪奇なM山脈には僕の属する女上位山の他に、馬化・畜化山系、ユーリン・コプロ連峯などがあってそれぞれ独立峯の外観を呈し、相互交流が難しいのですが、各山々の頂上に降臨される女神も崇拜者毎に違ってきます。純粹観念としての神の認識は極めて困難なことが多いので、その女神は必ず具体的人格者、たとえば物語の女主人公として姿を現わします。けれども、文字自体がいわば一種の志向の観念化に他なりませんから、読者は再度現実への回帰を、志向する傾向を有します。その場合、もし身近にそのような女性がいれば格別、まずそれは不可能に近い。そこで我々は視覚を媒介として映画、テレビ、演劇等の中に、恰好の女神を発見したがるので

す。

スクリーンやブラウン管には必ずしも実像だけが写っているとは限らず、従ってこちら側の鏡を適当に操作・選択しなければなりません。もし実像にピタリと焦点が合わさると、そこに一の完結した世界が創造されるわけです。要するに「純粹観念としての女神」――「架空の物語の女主人公」――「現実の映画（テレビ・演劇）女優」への移行がかなり成功の確率の高い一般的公式であるといえます。

(4) ナンセンス リ

勇しい女性に組敷かれない、いいたいことはこれだけです。前節(3)はこのたった一行に書ける内容を、(4)をつくるためにわざと分りにくく引延ばしただけのことです。

ああされとおもひかなはさるはうき
よのつねつれなしとよをうらみいた
るをけふつれつれなるままにあるは
かくのときよまよひことをならへ
たてあるはまた△結▽のときたは
ことをそこはかとかきつくれば
あやしうこそものくるほしけれとそ

(以上著作権侵害)

そんなわけで我ながら照れくさいのですがいつも荒唐無稽な空想を製造しています。映画でも演劇でも詩歌でも、どこか一カ所にM的情景があると、たちまち自分の都合のいいように改造する。その上御丁寧にもノートにその改悪後のストーリー・プロットを整理・記入する念の入れようです。だがそれでおしまい。折角のノートを引出しに鍵を掛けてしまいこまずにちゃんとした作品に完成させたい気もしますが、創作の能力がないのでは諦めざるを得ません。

脱線しますが、最近の本誌ではS派の「花と蛇」の華々しさに引きかえて、M系の作品は幾分遜色あることを否認しません。美しいアマゾンの登場する連載小説（シリーズもの）を発表される人はいないのかなと、一日千秋の思いで待望しています。サディスティックな女探偵、女賊、女スパイ、女調教師、女剣士、女保安官、女刑事、女王などが主人公となって縦横無尽に暴れまわり、男どもをギョウギウウの目に会わせてくれたら、どんなに楽しいことでしょうか。

三△転▽ 女神の群像

(1) フォアカード

(a) 知性美系	(b) グラマー系
モーリン・オハラ	ソフィア・ローレン
グレース・ケリー	アニタ・エクバーク
ドナ・リード	ジーン・ラッセル
エレナ・パーカー	シド・チャリシー
ジーン・セバーグ	モーリン・オハラ
ジーン・ピーターズ	のみ(3)参照

(ここ二、三年の新人は省略)

最近映画館へはあまり足が向きませんが、中学・高校時代は毎週とっていいくらい見に行ったものです。その頃邦画なんか程度の低いものだという根拠なき偏見を持っていたため、鑑賞の対象はほとんど洋画ばかりでM的内容の作品、S的ムードの女優に憧れました。代表的な人達は概ね前表のとおりです。

○
グレース・ケリー

いわゆるクール・ビューティなる形容詞は彼女に始めて、冠せられたと思います。あまりに美しすぎるためか(それで

も「真昼の決闘」では全然気付きませんでした)役の上でのS的效果を狙った作品はないようです。概して(a)グループの女優は我々M派、特に女上位族の望む役に恵まれることが少く、そのS的ムードを拡大、誇張して楽しむ他はありません。

彼女が馬に乗る映画もありました(題名失念)が、脚を開いて跨がらずに横向きに腰かけて乗っていたのでガッカリ。彼女にハニー的女探偵をやってもらえたということなのですが、銀幕を引退して現実の王妃(女王ならいいのになあ)になった以上しかたありません。

尚上記(a)グループの中ではドナ・リードが「六番目の男」の冒頭、平原を馬に乗って駆けめぐる素晴らしいシーンが印象に残っています。

○
ソフィア・ローレン

グラマー女優のピカ一で世界一の見事なバストの所有者。本邦初登場の「河の女」から最近作「レディL」まで、生来の激しい気性と勝気な性格をそのまま劇中へ持込む堂々たる演技は、大女優の風

格とよく調和して、それ自体S的ムードを発散させます。ショーガールをしていた無名時代の写真を見たことがありましたが、全く素晴らしい胸の隆起でした。デビュー当時その偉大な上半身を露出した映画があるそうですが、今からでも輸入してくれないかと念願するや切です。オムニバス映画「ボッカチオ、七〇」でアニタ・エクバークと張合ったバストの競演はすさまじい迫力があり、サンドイッチの真中(第二話)に挟まったロミー・シュナイダーが、一番美味いはずのところなのに、完全に霞んでしまいました。

○

アニタ・エクバーク

凄みのあるボリウムということではソフィア・ローレン以上です。彼女に組敷かれたらまずペチャンコになること確実。「熱砂の舞」で我々の度胆を抜く超弩級の雄大なバストを初披露しました。

(但、高まりの美しさではソフィア・ローレンに及ばないようです。)勇しい女王役を演じた「ローマの旗に背いて」では、サリーに似た薄着をまとい、両腕・両脚をむき出しにして白馬に打跨がり全

軍を叱咤、自ら先頭に立って敵軍に突入し蹴散らします。正にS的效果満点、アマゾンの女王ペンテズレーアもかくやと思わせました。そして生捕った敵将を十字架にはりつけ、その前に悠々と馬を進めて傲然と眺めやるシーンには思わず息が詰りそうでした。

○

ジェーン・ラッセル

ソフィア・ローレンに匹敵するポリューム派の筆頭で姐御タイプの典型。最近リバイバルされた「腰抜け二挺拳銃」及其の続編「——の息子」では神出奇没の女賊で拳銃の名手、ワトソン役のボップ・ホープと組んで大活躍しました。政府の役人が彼女の腕前をためそうとしてピストルを抜くとあつという間にそのピストルだけを打落します。

「坊や、なめた真似をするんじゃないよ／＼」

「ならず者」では馬に跨って疾走するところを正面から写したシーンがありカルフォルニアの二つの丘と呼ばれる見事なバストが激しく上下に波打ち観客を圧倒しました。じゃじゃ馬娘のむこ捜しがテ

ーマの「フランス航路」や「紳士は金髪がお好き」では御自慢の長く美しい脚を躍動させた肉感的な踊りを見せてくれましたが、露出面積が大きすぎて検閲で一採めしたそうです。

(2) フルハウス

手許に資料がなく又記憶も薄れているので間違っている箇所や感違いの部分もあるかと思ひます。

上記以外の女優やその出演作からいろいろM的空想の素材を仕入れさまざまに加工したことでした。「絹の靴下」、「ブラックタイツ」のシド・チャリシー、「探偵物語」のエレナ・パーカーなども印象に残っているものの一つです。尚、洋画では昔の作品がリバイバルされる他、テレビで放送されることが多いので新聞のテレビ欄をいつも注意して見えています、時に思わぬ拾い物があります。

「第三の男」のあの有名なラスト・シーン、アリダ・ヴァリが自分を待受ける男に一瞥をみくれず通りすぎる場面は、「摩天楼」のパトリシア・ニールの演技とともに、高級なM的情景として圧巻ともいうべきでした。

洋画に比較して、邦画ではどういうものか

作品自体はもとより、S的ムードのある女優が乏しいように思われます。時たまそれらしき映画はあってもチャチなものばかり、女優も大旨同様です。日本の風土や日本人の好みに合わないからかも知れません。江波杏子などかなりいいムードを持っていると思うのですが適当な作品に恵まれないのが残念です。

○

一番素晴らしいのはやはり乗馬シーンです。「女性の乗馬」については、A先生をはじめB先輩、C兄など造詣の深いその道の権威が大勢おられ僕など出る幕ではありませんが、馬に跨がったあの勇いポーズは全くタマらない。馬の代りにオートバイ、スクーター、自転車などがきても原理は同じはずですが、馬の場合に最も魅力的であるのは、やはり股の下に、挟まれるのが生きものだからでしょう。

僕の場合、そのポーズを「側面」から眺めると「馬」になり、「正面」から仰ぎ見るとそのまま「組敷かれ」、「背後」から望むと「鞍」に変身します。西部劇の好きな友達と時々一緒に見にいきましたが、彼は壮絶な打合に胸を躍らせ、こちらは女優の乗馬スタイ

ルが目あてというしまつ、あとで話を合わせるのに苦労しました。ただ、西部劇では瞬間的・断片的シーンが多いので題名や女優名はほとんど覚えていません。

乗馬及び乗馬スタイルのM的ポイントは、

- (1) 生きものであるということ
- (2) 上になるということ
- (3) 脚を開いて跨がるということ
- (4) 皮膚と皮膚とが密着するということ
- (5) 腰の上下動が極めてエロティックなこと
- (6) S的性格の女性が好んで行なうスポーツだということ
- (7) 各種拘束具の作用・効用が完全な支配隷従形態を構成していること

など、無数にあり、そのため独立峯の多いM山脈の中で、いわば、最大公約数的存在(対象)となっているようです。

数年前「女体蟻地獄」(ストーリーと無関係のおかしな題名ですが、ミス・ユニバースの全裸水浴シーンという宣伝文句にたちまちH心を起して見に行きました。その問題シーンも宣伝文句以上にスゴかったです。)というアルゼンチン映画で、主演女優イザベル・サルリの乗馬ぶりを背後から数十秒間写した場面がありました。普通このようなアングル

でとることは少く、この場合単にエロティックな効果だけを狙ったに違いないのですが、馬の動きに合わせてリズムカルに上下動する形のいい臀部を眺めていると、スキを見て自分の顔を鞍としてその下へ差入れたいという雑念がムラムラと湧き起り心臓の鼓動が早くなりました。

邦画には西部劇に相当する分野がなく、そのため乗馬シーンも少いようです。それに、日本人は脚が短かい(最近はどうでもありませんが)ので折角の乗馬スタイルがどうもシマラない。女スパイ川島芳子の伝記映画「戦雲アジアの女王」を大層期待したのですが、高倉みゆきはひどいミス・キャスト、全く失望しました。

○

洋画では乗馬シートに関するかぎりふんだんに見られますが、それ以上に期待する場面女性が男性を組敷く情景は滅多に、否、全くありません。検閲でアウトにされるのでしょうか。その代り女同士の格闘・組打シーンなら時々見受けます。しとやかな(?)はずの女性が憎悪と敵愾心をむき出し、あられもない恰好でドタンバタンやるのは、我々M派にとってもいろいろの意味で見物といえるでし

よう。

「居酒屋」でマリア・シェルが自分を侮辱した仲間の洗濯女(?)と演じた大乱闘は、この種シーンの中で最高の白眉でした。衆人環視の中でこのつき合い・つかみ合いの後寝技に移行し、一時全くの敗勢に陥ったシェルが相手の僅かな油断に乗じて一気に逆転、こんどは反対に失神寸前まで痛めつけます。そして最後に完全に戦意喪失した相手の背中に逆馬乗りとなると、相手のスカートをまくり上げ、ズロースをずり下し、むき出しになったそのお尻を洗濯板で散々に打据え止めを刺しました。

この他特に印象に残っているものとして、スイス映画「私を抱いて」と邦画「禁男の砂」での組敷きプレイが挙げられます。恋敵をめぐってという定石どりの構成ですが、浜辺でズブ濡れになりながら、前者では逃げる相手を掴まえ、後者では猛烈なとっくみ合いの末、いずれも相手をおおむけに組敷いて押えこみ完全に屈伏させてしまします。波打際の大熱戦で瞳麗子に圧勝した泉京子の大熱戦は見事なもので、素晴らしい迫力を持っていました。

最後に、もう一步というところまで追いこ

みながら遂に大魚を逸した、マコトに遺憾な事例を一つ。「お嬢さんお手やわらかに」でプレイボーイのアラン・ドロンをトッチメのしてやろうと連合戦線を結成したミレーヌ・ドモンジョ、パスカル・ブチ、ジャクリーヌ・ササールの諸嬢（正確には、ブチだけミセス）の面々、敵をうまくおびき寄せ、三人がかりで襲いかかります。三対一ならまず大丈夫（∴一人五〇kg平均としても三人で一五〇kgⅡ若秩父、一人六〇kgなら若見山）、事実女優軍圧倒的優勢でいよいよ押えこみに入ろうとする瞬間、ぬらりと体をすり抜けたドロンドロンとトンヅラ、部屋の窓を破って一目散、雲を霞と逃げてしまいました。三対〇の九回裏、ツードウン満塁ツーナッシング、そこでカチンとホームラン——無念ノ

(3) ストレートフラッシュ

〈Maureen O'hara〉

政治や文学の世界に限らず、偉大な人物には必ず心酔者や追隨者があって、自らの全人格をその人物の存在の中に、埋没し傾倒します。伝記作家と熱狂的ファンの心理構造は要するに同じ次元にあり、ただその対象が過去の人物であるか現存のスターであるかの違い

しかありません。その本質は「美化と逆上」です。それはまた「社会的不適応」であり、「盲目と滑稽」をも意味します。だが、青い鳥を探し求めたチルチルとミチルを果して誰が嗤うるのでしょうか。

にきび盛んなりし頃、「静かなる男」のファーストシーン、緑の丘陵に群なす羊に囲まれて、美しい娘モーリン・オハラが始めて姿を現わした時から今に至るまで、僕は理想のアマゾン・最高の女神としてその面影を追いつづけてきました。天然色女優といわれたその美貌のわりに、彼女の演技はそれほど上手だとはいえません。どんな役を演じて、その独特の持味、すなわちその赤髪で象徴される気性の激しさと微動だにせぬ自尊心の強さが、主得的ともいうべき性格の硬さと混り合って劇中を一貫して流れ、何となくギコチなといった印象を与えるからだと思います。ところが僕にとっては、その欠点が同時に申し分のない「女神の条件」に、なったわけですね。もしかするとオハラは本、当のサディステインなのではないか、と常に疑惑を抱いてきたのです。最近の封切映画では、その知的な容貌には相変らず昔日の美しさを止めているものの、その物腰にはすっかり落着いた中

年婦人の雰囲気漂います。そのため以前のような熱狂的崇拜の念も少しく薄れつつあるのですが、若い女優で彼女に匹敵しうるだけの「素質」のある人を見出せずにいます。無理に言えばアーシュラ・アンドレスですが、すぐ裸になりすぎるし、その他いろんな点でオハラには及びません。そして時々テレビで放送される彼女の若き頃の映画を見て、その輝かしい理知的美貌とS的ムードに今さらながら憧憬の念を新たにします。

○

今でこそSとかMとか聞いた風のことをならべたてますが、十代の頃、中学・高校時代にそのようなことを理解できるわけはありません。（今でもそうでしょうが）不確定で揺るまえないところのないモヤモヤとした一種の心理状態、つまりコンプレックス（複合体）があったにすぎない。ただ何かのきっかけでその色彩を濃厚にしたり時にはそれが固定化することはあるでしょう。そのきっかけが僕の場合「静かなる男」の半年ほど後に二本立てでみた「剣豪ダルトニアン」と「すべての旗に背いて」でした。大した内容の作品ではなかったのですが、前者では女剣士、後者では海賊船の女船長に扮したモーリン・オハラが、

股の付根まである長靴をはき、あるいは馬を疾駆させあるいは猛烈な剣の立回りを演じていたことに強いショックを受けました。先年本誌で一ノ瀬悦子さんが「女性と長靴」(?)と題する作品の中で上記の映画でのオハラのことを書いておられたので興味深く読みましたが、ツヤツヤと黒光りするその長靴は僕にはただアマゾンの象徴としての意味しかありませんでした。

——りりしい女剣士服を身にまとい、股の付根まである黒革の長靴をはいたオハラが、サディスティックな笑みを浮べつつ、剣の柄と切を左右の手に握り刀身をしなわせながら胸の前で水平真一文字に擬し、両脚をぐっと左右に開いて堂々と立ちはだかる——。この勇しいポーズを真正面から上向きの角度で写した「剣豪ダダニアン」のスタイル写真を映画館で見かけた時には思わずクラクラとなりました。何とかしてそのスタイルを手に入れたいと思いました。結局それは不可能でしたが、後になってそれと同じポーズのグラビア写真の載っている映画雑誌を古本屋で見つけた時には、天にも昇るほどのうれしさでした。長靴につつまれた二本の脚と床面とが構成する二等辺三角形のその神秘的空間の中

へ、四つん這いになって入りこみたい、その脚の間であおむけになって横たわり眺め上げたい、という衝動を抑えきれませんでした。そんなことがあってから、オハラの出演映画はかかさず見るようになり、それ以前に封切られた作品についても、場末や郊外の三流館四流館まで追いかけたものでした。その上、わざわざ原文のシナリオからオハラセリフの部分だけ訳したり、下手くそな英語でフアンレターを出したこともありました。

○

モーリン・オハラは長身・大柄な女優ですがスタイルのほうは、あまりよくないようです。若い頃の水着写真が一枚もないのもそのためでしょうし、全盛時代にコスチュームプレイの多いのもその欠点、特に脚の線を隠すためだと思います。ところが、比較的近作の「荒鷲の翼」や「荒野のガンマン」ではわずかのショットながらそのスタイル(下半身)を拝見できました。案外きれいな脚の線だったのでオヤオヤと思いました。更に近作の「マクリントック」では、ラストのところ十数分に亘ってセミヌードを披露する大サービスぶり、十分堪能させてくれました。下着姿のまま、亭主のジョン・ウェインに追われて

町中を逃げまわる。そのうち、裾を何かのクギに引っかけたため下着が破れてずり落ち、腰の部分が丸出しとなり両脚がむき出しになってしまう。最後にはそのスタイルで定石どおり水槽にはまってズブ濡れになり、身体を線にくっきり浮き出させるというおまけまでつきました。

しかしそのようなお色気シーンは全くの例外で、何といってもオハラの本領はS的ムードを発揮することにあります。西部劇などでは明らかにその効果を狙ったM派向きの演出が散見されます。「牧場荒し」ではじゃじゃ馬を乗りこなすという正にうってつけのシーンがありました。それをポカンと眺めているカウボーイが仲間の一人にこういいます。「あの女は自分の亭主をうまく操縦できるにちがいないさ」

「女性の乗馬」に関連して、「ピーピング・トム」という有名なイギリスの昔話があるでしょう。悪代官が農民を重税で苦しめるのでその美しい妻が農民に同情し、税をまけてやる交換条件として、夫のいつけどうり全裸のまま馬に乗って町中を一巡することになります。その話を映画化した「コヴェントリーの淑女コヴァダ」がオハラ主演で製作された

ので、早く日本でも封切ってくれないかなと首を長くして待っていました。結局ダメ、今でも残念に思っています。

四／＼結／＼フアンタジー

(1) 華麗な制圧

——開拓時代のアメリカ西部の田舎町。

長身・美貌の女保安官モーリン・オハラが窃盗事件の有力容疑者として町の不良少年グループのリーダーXを逮捕する。もともとXは彼女への反感から、その悪口を町中にいいふらしたり、その捜査活動の妨害をするなど、常日頃ことごとくあてつけの行動をとっていたので、折あらば一度懲しめてやろうと考えていたのである。果してXは反抗的態度に終始し、訊問に答えず自供しないばかりか、さまたぎの侮辱的言辞を弄する。怒ったオハラはそこでXを別室へ連れこむと得意の柔道の技を駆使、腰車・跳腰・浮腰・体落しなどで散々に投飛ばし徹底的に痛めつける。完全にグロッキーになって床の上にはいつくばったところ、今度はその脇腹を蹴り上げてあおむけにかえしそのままになって押え込みに入る。Xは手足をバタつかせて何とか跳ねかえ

そうともかくが、所詮は無駄な抵抗、悠々と胸の上に馬乗りに跨って組敷いた女保安官は両腕を両膝でしっかと制し、完璧な体勢で押えこむと両手を腰にあてがい厳然と見下す。「さあ、すっかり泥をはくまでこのまま取調べるから覚悟おし！」

※職務規程(①、第二節末尾註参照、以下同じ)を無視したきびしい訊問が始まる。黙否権や虚偽の陳述には激しい平手打が連発されるので、遂につみ切れず一切を自白させられてしまう。

「では、自分のしたことを反省し、今後は一切行ないを改めると誓いなさい！」

さすがに口惜しくて黙っていると、今度はそのままの姿勢で乗馬時さながら腰を上下動させ、弾みをつけた激しい勢いで臀部を胸の上に落下させる。これは明らかに、※日本国憲法第三十六条(②)に、違反する行為である。日本の憲法はアチラの丸写しであるから引用しても不合理でない。そんなことを知らないX君はその重圧にあえぎ、ペチャンコになりそうな苦しみに耐え切れず、泣きながら許しを乞いとうとう改悛の情を表明する。だが勿論それくらいで許してもらえないものではない。次は※第十八条違反(③)である。

「すなおにいうことを聞かなかった罰として私の馬になるのです！」

あまりに屈辱的なことなので答えずにいると、女保安官は少しずつ臀部をせり上げてほっそりしたのだ首の上に跨がり、むき出しにした逞しい太腿の間に両頬をきっちり挟みこむと、尻をおおひながらぐいと締め上げる。基本的な人権など問題ではない。

「どう、これでもいいやだというつもり？ はっきり返事おし！」

一点にかけられた重みと万力のような締めつけにあっては屈伏する他はなく、息も絶え絶えになってオハラの馬になることを承諾する。

○

部屋に監禁しておいたところ、わずかの隙をみて窓から脱出、逃走を企てる。すぐ気がついて追跡、大勢のヤジ馬と一緒に町中を追いかけまわす鬼ごっこ。

みんな面白いのでワアワアいいながらついてくるが、その中には、何でも知っている評論家のA氏も混っている。

B「先生、この結末はどういうことになるのでしょうか？」

A「さあ、やはり何と申しましょうか、追

手はつかまえることについては専門家ですし、そうかといって、逃げるほうもなかなかすばしいようですから、諸般の事情を勘考し、できるだけ公正な見地に立って結論を出すことが望ましいのですが、まず第一に考えねばならぬことは……」

C（イライラして）「結局つかまるのですか、つかまらないのですか？」

A「もし逃げきれない場合には、つかまるといってもいいでしょう……」

BC「?……」

鬼ごっこの当事者、特にX君のほうはこんなもんきなことを言われてられないから必死である。しかし何分狭い町であるからだんだん逃げる所がなくなってくる。とうとう路地の片隅に追いつめられてしまいました。

A「……やはり私の予想が適中しました。

何といってもあの女保安官は……」

（誰一人として聞いていない。）

保「さあ、こんどは、どこへ逃げるつもり？」

よせばいいのに他人の前の強がり、窮鼠猫を噛むの勢いで打ちかかってくるが、ストリート一発で簡単にダウン、起上ろうとすると、ころ急所を蹴上げられてその場に悶絶。水を

ぶっかけて覚醒させ、全く戦意喪失の前対戦者を広場まで引きずってくる。

子供にお仕置する母親のポーズよろしく、その辺のベンチに腰を下し膝の上にうつぶせにねかせてかかえこむと、強引にXのズボン

を脱がしてしまう。

「さっきは少し優しくすぎたようね」

衆人環視の中、片手に手ごろな棒を持ってその尻を散々に打掘える。あまりの痛さに悲鳴を挙げて泣きわめき、必死にもがくがしつかりと押えこまれているのでどうしようもない。哀願し許しを乞うのを馬耳東風と聞き流し声が出なくなるまで折檻の手を休めない。とうとうX君、女保安官の膝の上でグッタリと伸びてしまいました。

(2) 愉快的裁判

腕もだるくなってきたのでやっこのことでお仕置終了。そのまま地面へおおむけに押倒し、どっかりと胸の上に跨って組敷いてしまふ。大勢の見物人がそのまわりに円陣を作つて取囲む。その中にXの不良仲間が数人いるのを目ざとくみつけるやジロリと一瞥、

「お前達、文句があるのなら前へ出ておいで」

その氣勢に圧倒されて、件の連中、自分達のリーダーを見殺にしコソコソとその場から逃げ出してしまふ。先程のA先生背が低いので前へ出たいのだが人垣に阻まれてとても口惜しうである。

「さあ坊や、みんなの前でもう一度さっきのおさらいをしましょう。みなさん、せっかくお集まりになったのですから、これからこの子のお話いたしますことをすっかり聞いてやって下さいね。……ああ、それから前の人にお願いしますが、そうやってお立ちになる」と後の方が見えませんから、少し屈んでほしいと思いますわ」

ストリップ劇場のアナウンス嬢のようなことを言って、「最大多数の最大幸福」の原理を実地に応用する。ベンザム先生は苦い顔をするだろうがA先生は大喜びである。

まず最初に、拘禁中逃走を企てたことにつき、心からの陳謝の意を表明させる。次に第一節で自供したことのアンコール。さっきは二人だけだからまだよかった。見物人の前でもしかもこのようにみじめな状態で喋らされるのは全く耐えられぬところだが、これくらいはまだ序ノ口である。アンコールが済むと余罪の追求に移る。

「今回のことについてはお聞きの通りですけど、もっと前科があるはずですから被害者の方と一緒に訊問したいと思います」

といって告発者を募る。普段Xグループの跋扈跳梁を、お礼参りが怖いので見て見ぬふりをしていた連中、彼女の声に勇を得てここぞとばかり次から次へと被害届を申述する。中にはいい加減なものもある。闇夜の鳥のよう美しいとおだてられ、好意的に絵本と菓子の代金を払ってやった三十八才のオタ・フーク嬢は、結婚詐欺にかかって大金を騙取されたと訴えるし、安物のウイスキー一本をパクられただけの酒場のマダム、体重一〇〇kgのビヤタ・ルー夫人はジョニウォーカークロを十ダース酒倉から侵奪されたと言張る。どうも大変なことになりました。

届が出揃ったところで、一つ一つの容疑について順番に審問する。折角の好意を無視され怒り心頭に発した前記フーク嬢、テキの債務不履行を今こそ糾弾せんものと、お菓子を買った坊やの傍に立って、足の裏で頭や顔を踏んづけたり、横腹を蹴りつけたり、それはそれはヒドイ事をする。どんなことをされても、檻の中のライオンと同じである。

「正直にいわないからこんな目にあうのよ。」

……お嬢さん、そんな拷問をなさってはいけませんわ、私がちゃんと白状させますからね……」

と、自分のことは棚に上げて、取調担当のバトンタッチ。結局容疑事実を全面的に認めさせる。以下大体この要領、裁判長と検事・警察官の一人二役だから公判の進行は極めてスムーズである。保安官自体の取調べはとても優しい、にこやかに微笑みながら訊問を続ける。人前では優しい継母の真意を継子のほうでは十分に知っているから、きびしい態度をとる必要は少しもないわけだ。ただし要所要所にくると、凄い目付でほんの一瞬間、睨みつけて震え上らせることを忘れない。

結局、盗みその他数々の悪行を洗いざらい自供させられてしまう。告訴事実はすべて有効に成立する。してないことまでしたといわれる。正直で同情深いある人が、その犯行については、Xはその時町にいなかったはずだと余計な弁護をしてやると、知性と教養を兼備する彼女平然として、

「でも、相対性理論や超多時間くりこみ理論によるとそういうことも可能ですのよ」

二十世紀の発見を援用し、三次元の時間・空間を、破壊する無責任な答弁をして煙にま

く。

かくて、豚がトン死したり牛がモーと鳴くような、従来その原因の究明ができなかったことについても、責任の所在が明確になりました。

○

刑罰の選択について意見が続出する。縛り首にしるとか、簀巻きにして川へ放りこめとか、重刑を希望するのは女性軍に多い。A氏は反対で、もったいぶって教育刑の理念を説く。

「みなさんいろいろおっしゃってるけど、お前はどうかなの？ 何かいいことがあればいってごらん！」

やはり命は惜しいとみえて、乙子太夫敦盛のようにいさぎよくはない、必死になって女次郎直実に命乞い。

「本人もこのように十分※前非を悔いておりますし、A先生もああおっしゃるのですから命だけは助けてやってはどうでしょう。それに、簀巻きのような※残酷な刑は許されませんし……。少し痛い目に合せて十分思い知らせたほうがいいと思いますの」(④⑤)

と、A氏の顔を立て、併せて継母の本領を発揮する。対論の結果、「尻打の刑」という

ことになる。

今までおおむけに組敷いていたのを引っくり返し、両腕を後にねじ上げ背中に跨がって同じように押えてしまう。

「お尻の部分だけにして下さいね。かたわにとしては可哀そうですから……」

予定数を決め、被害額に比例させて割当てる。パチンコ屋なみにすれば死んでしまうから、もう一ケタは少い。

一番バッター、フック嬢登場、Xのパンツを膝の辺までずり下し、いよいよ猛攻開始、腕によりをかけてピシリピシリと鞭打つ。「猿」は「うす」の磐石の重みに全く身動きできなから「蟹」たちも安心というもの。ヒイヒイと猿らしからぬ悲鳴を挙げるが、蟹軍の打者一巡して予定数終了のころには声もでなくなっている。

「尻打の刑」の次には「見せしめの刑」である。もう一度おおむけにかえして以前と同じように組敷く。

「これだけ痛めつければ大丈夫だと思いますけど、もしみなさんの中でまだ不満足な方がありましたら、痛くないお仕置をやっていただきますわ。うんと恥しい目に合せて、A先生の教育刑の効果を与えてやってはいかがで

しょう」

みんないろんなことを考えるが、人間の通有性で始めは誰しも躊躇する。

「遠慮なさらなくてもいいんですよ。この坊やはもう足腰が立たないでしょうし、第一、私がこうやって押えつけている以上、絶対に安全ですわ。……、ルーさん、お一ついかが？」

アルパゴンの強欲な酒場のマダム、この言葉に意を決したか、一メートル三十センチのヒップをXの顔の上にまともに下し、ギューギューと押潰すようにして、気絶寸前まで下敷きにする。一人がキッカケを作ると、連鎖反応を生じ、我も我もということになる。バスに乗遅れまいとするレディの面々、次々に後続部隊をくり出す。その亭主連中、我が身に思いを致し内心X君に同情しながら、浮かぬ顔をして見ている。

「さあ、思いやりのあるお仕置をして下さった方にお礼申上げるのよ！」

その度ごとに顔を鞍代りにされたことについて感謝の念を表明しなければならぬ。たしなみの深い婦人は、恥しいので戦列に参加しない。その場合には、心理的誘導法によってX君から自発的にそのお仕置をお願いする

という形式になることはいうまでもない。

「Dさん、せっかく本人がこう申し込んでいるのですから、思いをかなえてやっていただけませんか？」

X君の毒ですね。それが済むと

「お前のたつてのお願いにより、特別のお慈悲をもって、下敷きにして、下さったのですよ。お礼の申し上げようは言わなくても分っているはずね！」

どのような「申し上げよう」がいいのか、読者の皆さん各自考えて下さい。

「もうこれで十分思い知ったようですから今日みんなの前でこういう目にあつたということ、後々まで本人や皆さんの記憶に止めておくために、ちゃんとした記録を残しておく必要があると思いますの」

A氏はもちろん賛成である。

「それに私だって、職務上とはいえ、こんな勇しい姿を皆様にお見せしているんですから、記念をとっておきたいし、又その※権利もあるわけでしょう。お前は思うの？ 無理にはいわないわ。正直なところをいってごらん」

「ノー」と言えないことは継子のX君先刻御承知のところ。財産法の知識のない彼女

「※動産」と「※占有」の意味を感違いしているのは注⑥のとうりですが、誰も気がつかなくて幸いでした。見物人の中に写真屋のE氏がいるので、記念写真をとってくれるよう依頼する。この時代はオリンパスなんて便利なカメラはなくて、例の卒業記念用専門の、ハイ、笑ッテ、……バシヤ、というのしかない。E氏商売熱心だから家までそれを取りに戻る。その間手持無沙汰というわけだが、運良く素人画家のF氏が目に入る。F画伯はいつも一式を持歩いているのである。

「F先生、厚ましいお願いですけど、私のために一枚お願いできませんかしら?……お前からお頼みするのよ!」

いつも「本人」をダシに使うのは彼女の常套手段であるが、これは、※一旦口に出して喋った以上、本人が内心どう思っているようにも問題ではない(⑦)と堅く信じているからである。意思表示の※本質(⑧)は彼女の毫も理解せざるところである。

美人に弱いF画伯、二つ返事で早速仕事にとりかかる。

「……あ、ちょっと待って! パンツだけはちゃんとばかせてやって下さいな。でないといろいろ※うるさい(⑨)ことが起りそうで

すから……」

女保安官だけあって刑法のことはよく分っている。勇しいポーズで跨がりながら、髪の毛をいじったり、スカートの乱れを直したり両手を腰にあてがったり、いろいろとしなを作るかに若心する。

A「君はどういう流派なのかね?」

F「ばかあ、クールベに心酔してるんだがね、どうも印象派というのはイカン……やはり写実派に限る。アングルやドラクロアなどその代表というべきだ」

A「なるほど。僕も君と同じで、ターナーやモローに惹かれるんだよ……」

この両先生、どうも大したことはないらしい。そのうち写真屋が戻ってくる。いろんな位置からさまざまな角度で何枚もとる。F画伯もヒゲをヒネリながら写実的作風をカンバスの上に確立する。そろそろ大詰に近い。

「みなさん、本日はどうもお忙しいところ多数お集り願って本当にありがとうございます。写真ができましたら、一枚ずつお渡しいたします。A先生、F先生ありがとうございます。それはそれからこの坊やのことですけれども今後は一切町の人達に御迷惑をかけないことを誓っておりますし、まず大丈夫だと思います

す。でも、まだ悪い性質を基礎からミッチリ教育しなおし矯正する必要がありますので、その点は私に委せて下さいね。A先生、その節は又よろしくお願いいたしますわ。ではみなさん、今日のところはこれでお引取下さって結構です。」

散々痛めつけられたX君、腰がぬけてしまつて立上る元気もない。女保安官、その肩に軽々とかつき上げて悠々と引揚げる。

ヤレヤレやっと終わった。時に午後五時〇分試合時間三時間三十分。スコア九対〇のパーフェクト。主審女保安官モーリン・オハラ、副審ルー夫人、フーク嬢、陪審A・F両先生三審その他の優しい女性達、観客百余数のヤジ馬、アナウンス担当はオバQでした。

注 関係条文抜萃

(○の中の数字は前節及本節※部分の数字に対応。但傍点及『』は筆者)

一、憲法

① 米修正第五条

「……何人も、刑事事件において、自己に不利益な供述を強制されない」

② 第三十六条

「公務員による拷問及残虐な刑罰は絶対にこれを禁ずる」

③第十八条

「何人も、いかなる奴隸的拘束をも受けない。……」

⑤米修正八条

「……残虐で異常な刑を科してはならない」

二、刑法

④第六十六条

「犯罪ノ情状憫諒ス可キモノハ酌量シテ其刑ヲ減輕スルコトヲ得」

⑨第七十五条

「猥褻ノ文書、図画、其他ノ物ヲ頒布若クハ販売シ又ハ公然之ヲ『陳』列シタル者ハ二年以下ノ懲役……ニ処ス……」

三、民法

⑥第九十二条

「平穩且公然ニ動産ノ占有ヲ始メタル者カ善意ニシテ且過失ナキトキハ即時ニ

其動産ノ『上』ニ行使スル權利（ノ）ヲ取得ス」

⑦第九十三条

「意思表示ハ表意者カ其真意ニ非サルコトヲ知リテ之ヲ為シタル為メ其効力ヲ妨ケラルルコトナシ……」

⑧第九十六条

「詐欺又ハ強迫ニ因ル意思表示ハ之ヲ取消スコトヲ得」

(3) 周到な薫陶

夜。女保安官オハラ邸宅の一室。

裸馬の背に黒いタイツにぴたりと身をつつんだ女騎手が鞭を手にして打ち跨がり、約束どおり（第一節第一款末尾参照）の調教を開始する。馬には、くつわ、鐙、手綱が付付けられているが、無論鞍はついてない。少し無理かも知れないが、鐙は騎手の脚が床面にとどくのを防止するためである。女騎手の指示・命令は専ら臀部の運動と手綱・鞭の使い方を通じて与えられる。一切無口で行われるが、これは馬が人語を解しえない（当然①）ことに基く。馬は四本の脚（当然②）で女騎手の体重をささえて疾駆（？）する。少しでも怠けると鞭でビシビシしごかれるから懸命

にならざるをえない。だが大変苦しいらしく時に人語を発して哀願するなど、馬としてあるまじき且説明のつかないことをする。馬の体力を十分考慮に入れながら、女騎手は思いのままに馬を操り、とことんまで、乗りまわす。この馬は非常に小柄（当然③）でスタミナ不足が顕著だから乗り潰すのに二十分もかからない。とうとう体力を消耗しつくして完全にヘバツテしまった。そこで女騎手は各種馬具を取りはずし、人間復活なった少年に人語で命令する。

「両脚を開いておおむけにおなり！」

鞭で威して大の字型の屈辱ポーズを強制実現させる。そして自らも大きく両脚を開いてその上に立ちはだかり、その太腿のあたりを足の裏にふみしき押えつけながら、両手を腰にあてがい悠然と見下す。（三の③第二款末尾参照）開いた脚の角度は少年のほうが少し大であろうか。

「そんなことでこの私の馬になれると思うの！」

前人間馬はどうすることもできず、堂々たる肉体美を黒タイツでつつんだ長身・美貌の女保安官の勇姿を、半ばベソをかき、半ば茫然とした表情で見上げる。しばらくその勇し

いポーズを誇示してから、今までと同じような姿勢で馬乗りになって組敷いてしまう。

精根つき果てた少年は、今や全く身動きもならず、自らの上に君臨する女保安官の重みにあえぐ。その厳然たるきびしい表情に威圧され、その鋭い眼光に射すくめられ、蛇に見込まれた蛙にも似て目をそらすこともならずこの勇しいアマゾンを押する。

○

女保安官は無言のまま一時間以上も組敷き続ける。

燃えるような赤毛、深く澄んだ瞳、理知的な広い額、端正な鼻、すっきりした頬とあごの線、形のいい唇、……。

その威厳のある美貌、骨味にしみたきびしい調教、胸にぐっと加わってくる体重、この三要因の有機的混合作用で、少年は次第次第に心理的にもこの勇しい女騎乗者に屈伏していく自己を認識する。こんな無茶なことは現実的にはありえないはずだが、今頃になってそんなことをむし返すと、第二節から全面的に書き改めなければならないだろう。

やがて少年の意識の流れの変化を見抜いた女保安官の頬に勝誇ったような微笑が浮ぶ。

「だが、馬としての乗り心地はそう悪くはな

いようね」

それから、カリキュラムの時間表に従って肉体的・精神的被征服者のマゾヒスティクな深層心理の告白を誘導的に強制し始める。全部書いていると時間がないから、主なものだけ掲げる。

(イ) 女保安官のきびしさが骨味に沁みただけか？
どうか？

(ロ) 女保安官の乗馬ぶりを眺めてどう思うか？

(ハ) 女保安官に組敷かれた感想はどうか？

(ニ) 女保安官に、大勢の人の前で、あのようにお仕置を受けた感想はどうか？

正直に答えないと、腋の下や横腹をくすぐりきびしく執拗に追求する。死ぬような苦しみにあぶら汗を滲ませながら、女保安官の征服心を十分満足させるだけの告白をしなければならぬ。アマゾンへの潜歌たる告白の内容は割愛するが、予算委員会での政府側答弁のごときいいのがれ、ごまかしの許されないことは勿論である。

質疑・答弁が終了すると、臀部をにじり上げさせ再びのど首の上に跨がり、むき出しにした太腿の間に両頬をきっちり挟みつけてしまう。

「ここの締めぐあいは正に最高というところね……」

そのままの体勢で約一時間に亘り、先程行なった人間乗馬術の基礎理論を講義する。更に人間馬としての心得・心構えを説示する。そしていよいよ最後の止めの段階に至る。

まず、昼間広場で演じられた優しいレディ達の優しいお仕置に関連し、その「内容」につき感想を述べさせる。次に、例のごとく得意の心理誘導法を使って、女保安官による「顔乗り」の願望を告白・表明させる。そしてとうとう止めを刺す。

「勇しい女保安官のお尻がどんなものか、他の女とどこがどのように違うのか、しっかりと覚えこみなさい……」

○

夏の夜。こうこうと月の冴えわたる広漠たる大平原。

白馬の背に全裸の少年がおおむけにされてしっかりとくくりつけられる。他の季節でも差支えないようであるが、夏でないと風邪を引くから可哀想である。尚、身体の「どの部分」が、馬の「どの位置」に「どのよう」にして「固定されるのか」という、物理的に極めて説明の困難な問題を生ずるが、ここが本章の

クライマックスなのであるから、少々の不合理的は無視する他はない。

かくて、りりしい乗馬服に身を固め、黒革の長靴をはいた女保安官モーリン・オハラがそのまま馬と少年の上に悠然と跨がる。全裸とはいってもこの場合法律上の問題を生じないことは、第一百七十五条をよく読んでもらうとはっきりする。(第二節注⑨参照) 女保安官はにっこり微笑んで

「このままで町の人達に見てもらいたいところね……。」

(余談ですが、このポーズでのM画は正に最高だといえるでしょう。とりわけ背後からの素晴しいと思います。その場合、騎乗者は後を振向き、少年はパンツをはいている必要がありますね。画の心得のある人、だれか書いてくれないかなあ……。)

まず、前節で説示した人間馬の心得・心構えについて述べさせる。次にアマゾンへの潜歌を総括的に復習させる。それから本物の乗馬術について講義する。そして……

「……では、私の乗馬ぶりがどのようなものか、お前の身体のすべてを鞍代りに使って、今から実際に教授してあげよう。その目と体ではっきりと受けとめ、決して忘れることの

ないよう、完全に覚えこむのです！」

女保安官は馬の尻にピシリと鞭をあてる……以後、彼はこの勇しい女保安官の忠実な配下の者となり、心を入れかえ真面目に働くことになる。

(4) 優美な結合

数年後、女保安官は彼との婚姻届を役場まで持ってくるが、戸籍係にその理由を聞かれたので、第二節のようなインチキを言わず、次のごとく理路整然たる答えをする。

「いつまでも助手だけにしておくと給料を払わなければなりませんもの。それとも、人間と馬は結婚できないとでもいう法律がありますの？」

結婚式が滞りなく終了すると、新婦は新郎を馬代りにし、その肩車に跨って教会から例の広場まで進行する。花嫁衣裳は裾が引きずって馬の行動の邪魔になるから、さっさと脱ぎすて、その長く遅しく美しい両脚をあらわにし、馬の首をきっちり挟みこむ。

広場まで来るとそのままの姿勢で見物人との記者会見に移る。おかしいといえばそのとらうりだが、子供が生れたからといって新聞記者を深夜わざわざ病院まで呼びつける低能・

無知な某国某野球選手のごとき例もあるからさして問題にするほどのことでもない。以下はその一問一答よりの抜萃である。人手不足の折でもあり、当社の派遣記者はオソ、松君なので内容の不明確な点、イカガワシイ箇所は適当に類推・補充解釈をせられたし。尚、アルファベットは質問者の符号である。

○

G——結婚の動機について

「それはいろいろありますけれど、馬だっ
ていつもコキ使ってばかりいては働かなくなり
ますし、たまにはニンジンを食べさせる必要もある
ということね」

H——恋愛結婚ですか見合結婚ですか。

「さあ、それは御想像に任せますが、ただ
これからはいつも上と下とで見合うことにな
るでしょう」

H——上と下？(名前に似合わずニブイや
つですね)

「以前みなさんにここでとった写真をお配
りしたことがあるでしょう。ああいうこと
ですわ……」

I——今後の夫君の地位はどうなるのか。

「ええ、勿論今までどうり助手として使う
つもりですの」

J——家事の分担などはどうするのか。

「何かと忙しい職業ですから、今までどうりばあやにやってもらいますけれどいい機会ですから、洗濯ぐらいはこれにやらせようと思っていますわ」

K——X君（新郎のこと）が今後以前のようには威張りだすことはないか。

「まあ、そんな御心配には及びませんわ。

今まで私のきびしさは十分に教えこんでありますし、結婚したからといって甘やかすほど優しくはありませんから」

△お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の斡旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交換は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いいたします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対するご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所などお知らせ致します。勝手に直接訪問され

A——（この先生又でできましたね）

教育理念を現実の事象に应用する際の矛盾を弁証法的にいかに止揚発展せしむるや

「おっしゃる意味がよく分りませんけれどやはり生きものには愛情をもって接することが大切だと思います。きびしくスパルタ式に訓練することも必要ですが、それだけではな、きませんから」

L——その訓練の具体例を一つ。

「そうですね、……毎日三十分はこれを馬

たり電話されることは、固くお断りいたします。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼ご相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚未着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

○原稿のご送付（読者通信を含む）は第五種便（半分を開封にするか、封の中央一カ所をとめる開封便）を利用下さると、五十瓦につき十円にて送れます。但し封筒に第五種郵便と捺印又はペン書き願います。

代りにして部屋の中を歩かせますの。美容体操の意味を兼ねているんですけれど、もう何年も習慣で続けておりますと一日休むだけで身体の調子が狂ってくるくらいですわ。鞭で十分にしこんでありますから、最近では上に乗ったただけで、その後何も命令しなくても私の意志を感じとって動くことができますの……」

A——（むつかしい顔をして）

テレパシー現象はまだ科学的に証明がなされておらんようだが……

「でも、事実がそのとうりなんですもの。第一、これは、目かくしをしていても、私のお尻を感じ分けられますのよ。いずれ折を見て、皆さんの前で実演させていただきますわ」

フック嬢——（胸に一物秘めて）

御主人はハンサムだから浮気の心配があると思うが、その対策は？

「（質問の意味をワザと取違えて）ええ、それで少し困ってますの。ちゃんとしつけてあるつもりなんですわ、これは案外ヤキモチやきで、私がこれ以外の牡馬に乗ると機嫌がよくないんですの。仲間の馬の世話全部これにやらせていますので、牡だと

それにアたるし、仕方なしに牝馬に乗って
いますけれど、今度はこちらで気が採めま
すしね。何かいい方法ないかしら……」

フーク嬢——（憤然として）人間の女との
ことで聞いているのだが！

「ああ、それなら大丈夫ですわ。これのお
尻には小さな焼印が入れてあって、持主で
ある私の名前をほりつけてありますの」

M夫人——亭主が横暴で困っている。何と
かヤツツケたいのですが……

「一番いい方法は実力行使ですね。腕づく
で有無をいわさず押えこんでしまえばそれ
までいくら口でえらそうなことをいって
いてもシュシとなってしまうに決っています
から……」

N夫人——その方法は普通はむづかしいと
思うが？

「そうですね……それならストライキで
対抗されたらいかがでしょう。昔のギリシ
ヤ人の作品にそういうのがありますのよ。
私もこれからは鞭で威すだけでなくその方
法も使えますから、これの操作がずっと楽に
なりますわ……」

A——なるほど。アリストテレスの詩学の
中にそういうのがあるね。アハハハ……

（黙っていたらいいものを、又ボロを出す
はめになる）

O——X君は保安官の助手なのに何故拳銃
を一つも所持していないのか？

「子供に危いオモチャを与えることは教育
上、よろしくありませんから。……それに、
第一、二つも持たせる必要はないでしょう
……」

P——夫婦げんかの解決法について

「私達の場合、そんなことないと思います
けれど、もしスネたりフクしたりグズグズ
いって手こずるようなことがありました
ら、ここまで連れて来て地面に押えつけ、
皆さんの前でちゃんと謝らせようと思って
いますわ。でも馬としての分際をよく弁え
ておりますから、そうするまでもないでし
ょうけれど……」

フーク嬢（さっきのしかえしとばかり、意
地悪く）

——何故人間と結婚しないのか。

「私はそういうことにはこだわらない性質
ですの。人間でないといやだという方もお
られるでしょうが……（やり返す）」

フーク嬢（ますますヤツキとなって）
——人間と馬の間に生れる子はどんな姿な

のか想像に苦しむが？

「ああ、それはやはり普通の人間でし
ょう、優勢遺伝することになりますから……
（うまく逃げる）」

フーク嬢（執念深く）

——第一世代はそうだとにしても、第二世代
には分離の法則が働くはずだが？

「そういう時には、これを人間に格上げす
るまでのことですよ。（止めを刺す）」

Q夫人——（S女性らしい）よく飼育され
ている馬なら自分に賃貸してもらえま
いか。

「他の馬ならいくらでもお貸ししますけれ
ど、これは私の専用馬ですの。私以外の者
が乗ってもいうことを聞きませんのよ、そ
ういう風にしつけてありますから……」

アルファベットは未だ大分残っているが、
この辺で記者会見を終了させることにする。
写真屋のE氏に記念写真をとらせる。F画伯
に以前と同じようにスケッチしてもらう。

「それじゃ最後にこれから皆様にも御挨拶さ
せますわ。さあ、あなた、教えてあげたとう
り、ちゃんと御挨拶なさい」

わしの巢のくすの枯枝に日は入りぬ 凡兆
——完

<告白>

ふんどしを締めましょう



香肌雲出

か だ は も いづ

二十才の女店員です。

学校の頃、出席をとる先生が、私の姓名を読み上げてから、ハッと赤くなったものでした。どの先生も二度目からは「出雲さん」と姓だけを呼びます。

「本名か？」とよく聞かれますが、ちゃんとした本名です。私は自分の名前に誇りを持っ

ています。

小さい頃、私は文字どおり『いつも裸』で育ちました。丸はだかではありません。可愛いふんどしを締めていたのです。

イタリヤの『砂上物語』というノンフィクション映画が、かくれた大入り記録を作ったようですが、あれはフランチェスカという女

の子役がビキニ形パンツひとつの裸で、そのパンツが、お尻の割れ目に深く食い込んでいるスチール写真のためだと思っています。私も胸をワクワクさせて見たのですが、あれは嘘でした。映画はブカブカしたふつうのブリーフでした。

私の子供の頃は本物です。父の識見と母の愛情がこもった小さなふんどしは、今では私の宝物です。時々とり出して虫干しをします。

色は白、真赤、黒、それに紺が主です。赤はおろしたてのまっかなのが、白は洗いざらして色が落ついたのが、黒とかすりは少し色があせた頃のが大好きです。

洋服向きの模様が入ったのや、マンガのアヒルを刺繍したようなのは、ひとつもありません。ストリップパーのツンパではなくて、あくまでふだんの下着であり、そして上着でもある『ふんどし』なのです。

鼻すじが通って、目がクルクルした、かわいい女の子(!!)が、裸でふんどしを締めて遊んでいる、その全体が美しいのです。裸の女の子は景色の中のアクセント、ふんどしはその体のアクセントですから、ふんどし自体がゴテゴテとかざり立てである必要はないの

です。

形もすべてシンプルです。ビラビラのフリルがついたり、レースでふち取りしたようなものは、ひとつもありません。

標準型は前が逆三角形、後が巾二センチぐらいのたて一本。男の水泳用バイクの型です。後の布は、横紐をくぐらせてからスナックで止めるようになっていきますので、紐をほどこなくとも用便できます。

次によそ行きのビキニ型。両よこで結びます。前も後も逆三角形です。小学校四年、娘になってからは、さらしのモッコふんどしを自分で作って使うようになりました。前も後も紐通しにしてありますので、デリケートな加減ができますし、必要なときは脱脂綿も入れられます。

中学に入ってから、試験のときなど、六尺を締めます。前だれをたらすこともあり、たらずにクーツと締め上げることもあります。

最後に母の愛用のサイズ。これは、半紙ぐらいのネルの一端に十束の黒い木綿糸を等間隔にとりつけて、その他端八センチのところを、ひとつにまとめて一メートルたらずの白い縄に結びつけたものです。ネルは濃い茶か

紺系統のがら物です。縄を腰にまわして前でむすび、布をうしろからくぐらせて、おへその上で越中ふんどしのようににはさむのです。海にもぐるときは、これが、いちばん快適です。こうら干しするときは、乾いたのとりかえて、ぬれたのは岩の上にひろげて乾かします。

私が小さい頃は、都会の観光客はほとんど来ませんでした。夏はふんどしひとつ、秋はチャンチャンコの下から陽にやけた丸いおしりにチョココンとふんどしをのぞかせて遊びました。友だちは、みんな、うらやましがりました。おとなは、とてもかわいいと言ってくれました。

小学校へ行くようになると、さすがに外では服を着ましたが、ズロースをはいたことはありません。また、夏は家の中や人のいない所では、服をぬいでしまいます。

父も母もそうだったのです。父は、いつも六尺です。母は六尺か、サイズか、たまにモッコ型をしていました。家の中では腰までのチャンチャンコをはおっていることが多かったようです。人が来ると、柄物の腰まきをグルッと巻きつけて即席スカートにして応待します。へんな話ですが、ごはんの時、母が

立ち上がると、ふんどしをキュッと締めた茶色い大きなお尻が目の前に来て、おいしそうだな、と思ったことがあります。

ことわっておきますが、父母は決してヌーディストではありません。真裸なら犬猫も同じです。いちばん美しく、いちばんはたらかやすい、すぐれた服装を勇敢に実行した世界一のおしゃれだったと私は思っています。

私は、こうしてふんどしと裸の良さをよく理解するように育てられたのです。ふつうの女の子は、自分の顔はとも気にするが、かくれた所は粗略にあつかうのではないでしようか？ 私は全身が小麦色にツヤツヤしています。そして全身から健康な「肌香」が立ちこめています。

ふつうの女の子は、ズロースが多少不潔でも、その上に晴れ着を着て、平気で人前に出ることもあるのではないでしようか？ 私は、たとえ服を着ていても『いつも裸』の心意気です。ふんどしこそが本とうの衣裳だと思っていますから、それが、体から出たもののために汚れているようなことは片時もありません。

学校を出て、おつとめしてから、ほとんど服を着つづけていますが、それでもスカー

トの下、夏ならワンピースの下は心をこめて締め上げた洗いたてのふんどしひとつです。休みの日、素足に赤い鼻緒の下駄をはいて花もようの白いゆかたを着て人のいない磯へ出て、帯をといてパツとゆかたを脱ぐとき。ふんどしひとつの、本来の私が出て来ます。そして、栗色のお尻に、真白なT字形をクッキリと焼き込むのです。

話は変わりますが、アフリカの新興国の写真を見ると、文明の仲間入りをしたというので、暑いのにズボンをはき、背広を着て英語やフランス語をしゃべる黒人が威張っています。御当人たちは本気なのでしょうが、あんなのは、ちっとも美しくないし、およそ尊敬の心はおきません。ふんどしを締めて、胸を張った昔の黒人の方が、はるかに立派に見えます。

明治のはじめの日本人も、きっとあのとおりだったでしょう。錦絵で見れば、江戸時代の労働者は、日本橋のまんなかで、ふんどし一つで仕事しています。昔の郵便配達、飛脚はふんどしひとつで、街の中を走っています。おにいさんは着物の裾をからげて、お尻のホッペを丸出しにして、ふんどしの縦の布をのぞかせて歩いています。

明治のはじめ、正直な百姓をダマして金をためた人たちがズボンをはき、ネクタイをしめ、ふつうの日本人とは違うという証拠にしたのでしよう。そして、いつの間にか北極圏に近いヨーロッパの風俗が理想とされ、ふんどしや腰巻は下等なものとされるようになってしまったのです。

明治の文明開化は、日本から裸とふんどしを追放しました。そして、天皇や昔の大名をのさばらせました。不合理でみにくい風習を育て、美しく合理的な風俗を捨ててしまったのです。

映画を見ると、フランスやイタリアの若い女の人は、越中ふんどしなどより、はるかにふんどし的なビキニ姿で、日光浴をしています。テレビで見ると、共産圏の国立サーカスでも、女の人はお尻の割目に食い込むパンツをはいて、お尻を半分以上出しています。

一方、日本ではセパレート水着と言っても殆んどが、みぞおちの所にちよっとスキマがあるだけで、オヘソさえかくれる代物です。バレリーナもタイツの下に「はいてますよ」とでも言うように大きなズロースをはいています。ストリッパーさえお尻を半分以上かくすツンパです。

日本人がまねをして来た筈の白人女性が南太平洋ビキニ島の原住民に学んで、第二の顔お尻の美しさに目覚めている今日、日本ではアラビヤのチャドリよろしく、必死になってお尻をかくしているのです。

しかし、日本にも誇を失わない女性が残っています。舩倉島や対馬の海女さん、それに時折奇クに名のりをあげるお姉さま方です。この方々は女ながらもキリリとふんどしを締め、身を以て民族の誇を、人類の宝を守り伝えていくのです。

私の母も、そして私も、粗末な服を着ていても、心をこめたふんどしをシャッキリと締めています。その誇りが、いつも私をばげましてくれまします。私と結婚する男の人に、私はお金も着物も学歴もさしあげられませんが、健康な肌香を、そして清潔なふんどしで守って来た、大切なものを捧げまします。私の子供も、男女ともにふんどしで育てまします。子供たちが娘になる頃は、日本は誇り高いふんどしの国になっているでしょう。さあ皆さん、ほんとうのオシャレなら、未来の流行の最先端に行くふんどしを締めまします。

(おしまい)

心理小説

「変身」

—黒と緑の薬包カプセルの背景—

保 藤 久 人

「変身」

1

小瓶から吐出されたカプセルは、まるで、

閉塞状態から解放された様に、勢良く又忙がしく転がり乍ら、広くもない机の上の気憊な位置に拡がって停止した。水溶性のゼラチン

被膜のそれは瓶の中にあつた時よりも一際色が冴え、黒と緑が鮮烈に艶々して美しく見える。彼はキラリと目を光らせてその一つを指

先で摘んだ。拗る様にすると真中辺りで二重の筒になっている部分が左右に別れ、塊加減

の真白い粉が音もなく零れ出る。傍らの薬包紙に同じ様なザラツとした感じの白い粉末が用意してあり、彼は注意深く瞳を凝らして、

二つの色筒にその粉末を別け入れ、元の姿に

嵌合せて、机の上のものと競べて見る。

有効成分10ミリグラムという元のカプセルに、別な薬剤を入れるについて、懸念されるのはその量だが、必要と思っただけ入れても外見に寸分の相違も認められない。

彼は、ホッと肩で息をし、その吐息で飛び散る粉末に慌て乍ら、次の新しいカプセルを摘み上げて行く。カプセルの中味である安定剤を、別種の可成り強い睡眠剤と入れ替えるのが今夜の彼の仕事なのだ。

悪用する心算はなかった。充分な成果も期待出来ない。勿論、こうして、ああして、といった、計画的な確立された意図があつた訳ではない。強いて言うなら漠然とした悪戯心

に似たもので、彼女に対して試みるという思いだけで、微かな昂奮を覚えるのだった。

その様に、彼の心を誘ったのは、もう大部以前に読み古した、谷崎潤一郎の「鍵」であつた。新書版のそれは彼の愛読書の一つで、何回となく読み返した本である。

夏前から、彼女との間に、或る種の氣不味さ、心と心の隔りを感じてから、彼は急にその本を想い出し、本箱の奥から取出して貪る様にして読みふけた。すると、作中の状況の何処かが、自分の身辺と似通っている様な気がし、かつて彼が、通勤途上では恥しくて拡げることの出来なかった、あの棟方志功の巧みな版画のいくつか、まだ、彼が垣間見



もせぬ、脳裏に画くだけの、彼女の赤裸な姿にダブって来て、胸が切なくなってくる。そして自分の熱意が遂に受入れられず霧散するならば、一目だけでも、これ程自分の全精神を魅了した彼女の、神秘的根源を見尽し度いものだと思った。それ程、彼の心は焦り気持は追つめられていて、昨夜、彼は決意した。

『嫌よッ、私は嫌!! もう我慢出来ない!』

早く出て行って……帰ってよッ。あなたが出て行かないなら私が出て行くッ。絶対に嫌!!

もう逢い度くない! 絶交よッ! これでお終い。この家からも出て行くッ』

ヒステリックに叫ぶ彼女の、憤りに満ちて睨みつける表情を、彼は、この上もなく素敵だと思い乍ら、九カ月近い努力と、心の中で大切に育てて来た偶像が、何一つ報われることなく微塵と打砕かれたことを痛感し、床に膝をついたまま悄然と項垂れていた。

『私、寝るのよ、早く出て行って——』

彼女はまだ未練そうに自分の素足を眺めている彼に、侮蔑の眼差しを投げ、存在を無視した様に枕元の薬瓶からカプセルを一包手に受け、口に放り込んで水を飲み乍ら言った。彼は、ぼんやりと彼女の動作を見ていた。そして、黒と緑の綺麗な色のカプセル入りの薬を、あれは彼女が常用している安定剤だと思って急に目を光らせたのである。

彼女を知り初めてからの日々、彼の彼女に対する心は常に新たな真心であった。兎もすれば逸り立つ気持を抑え、彼女の方から歩み寄って呉れるのを待ち望んだ。彼は信じていたし、その可能性は充分に考えられることだった。が、彼の心からの希求と裏腹に、現実の彼女は少しずつ手の届かぬところへ逃げて行く気配を見せ、とうとう彼の誠意は完全に踏み躪られた。それは、兼ねてより恐れていた破局であったが、実際に直面して、初めて彼は、日頃になく自分の心が荒々しく騒ぐのを感じ、どうしても、仮令暴行じみた行為を加えても、一刻彼女を、自分の異質な欲望の対象にしたいと思った。

彼が自分の「性」の中に自認し、そして信奉しようとする斯道にとって、此の時、発作的に噴流しようとする気持は異端児ともいえるし、日頃の信条の放棄をも意味する。それを悲しみ乍ら、しかも尚、彼は彼女の牀に対して異質的に欲情した。残されている方法は彼女の知らぬ間……例えば赤児の様に熟睡している間に総ての嗜好を満たすことだけであり、彼はその姿を△鍵▽の中の△夫▽の行動から連想し、彼女の常用する薬包カプセルを見て決意した。

彼……名は笹井省三という。三十三才、F 商事の技術部に属する中堅社員で係長。余り大きい方でなく、色白なのでひ弱く見えるが健康であり、醜男ではなかった。大学を出て就職して間もなく結婚したが失敗した。そして、妻という名の女性と起居を共にしてから自分の性を確認した。

省三の父は闇雲に突走り我無者羅に人生を乗り切ろうとしたという。その都度に挫折し寂しく故郷で生を終えた。省みることを知らずに猪突した自分に恥じて産れた息子に八省三Vという名をつけた。自己を反省し、三度まで自分を省みる余猶を持て！これが父の願であった。名は人を表わすというが、省三の場合、父の希いが通じたのか、文字通り三度顧って……という慎重さで、時には度が過ぎて、消極的な、と噂されることも多かったが、若さがそれを補ってきた。

それ程の彼に、たった一つ父に似た行動があった。結婚……である。熱病に冒された様な恋愛の末、強引に結婚したが、僅か一年にも満たず妻は彼を嫌って実家へ走った。性格の相違という理由であるが、省三の異常な嗜好に驚愕し、困惑の果にその執拗さに脅えた妻

の、彼に対する無言の抗議とも思われる。

自分の欲情点が意外な部位にあることを知った時、省三は先ず自分で驚き狼狽した。彼は女性を美しいものとして見てきた。そして美しいと思うのは、女性には神秘的な部分が存在するからだと考えた様になった。連想すると、まるで慈母の懷に抱かれている様な安堵感を覚えることが出来、何故ということなくその辺りに顔を埋めることが、愉しいことである様に思える。この性情は、省三自身の身心の成長と共に次第に確立されて行き、神秘部位を中心にして、上と下とに言い尽せる凹凸を見せ乍ら流れて行く線を至上のものと思う様になり、自分にとって郷愁をさえ感じさせる辺りを支えている二つの円錐柱がまるで神前の聖なる鳥居の様に思えるであった。省三は、敬虔な気持で額突き拝礼しようとする。いや、拝礼したいと思うのである。まして、妻は、省三が恋い焦れた女性である。省三にとっては極く自然な動作であり愛する妻に対しての心からの意志表示であった。だが彼の妻は拒否した。

『やめて、そんな変態みたいなこと、嫌!!』

自分をベッドに腰掛させてその下の床に仰臥する省三に向って、彼の妻は泣き乍ら訴え

た。省三は自分の行為が決してノーマルだとは思っていない。併し、愛していることに対する表現に、夫婦の間で遠慮はいらないという考えがあった。妻の泣き声に驚愕し、そして、妻の美しい脚線の総てを愛撫した後には必ず狂熱的に襲ってくる満ち潮を自覚して、自己の性にうろたえた。

どうしても、妻が自分を拒否し満たして呉れぬと知った時、省三は妻に、いや、女にさえ失望し、自分を異端者であると思うことにより妻の忌避を認めた。以来、彼女に逢うまで、常に女性を恋い慕い乍ら「妻」という女性を諦めていた。省三にとって女性の躰は、その爪先まで敬愛の対象であり、それ以外の「女」は考えられなかった。

妻の可能性——そういうものを感じさせたのが彼女、北口新子であった。二十四才。稍面長の美人型の容貌も気に入ったし、細く濃く、長い眉毛とキラッと光る様な瞳が印象的で好ましかった。その上薄気味の冷たさを感じさせる唇が、何よりも自分に適した女性の様に思えた。背も低くない。ハイヒールを穿いて並ぶと肩の高さは余り変らなかったし、肢態、特に下肢はストラックスを穿いている故か逞ましく長い様に省三には見えた。加えて

自分と同じような趣味を持っているらしいのを知った。

省三が始めて新子に逢ったのは、去年の十一月の下旬である。その日、同僚との約束の時間に早かったので、雑誌を求める為に、例月の目的の書店へ急いだ。二、三年前から、青少年健全育成ということから騒がれていたのだが、半年程前から急に世評が大きくなり省三の求める雑誌は△悪書▽に指定されていた。

彼は、妻と離婚し、自分の異質的な性格を異端であると自認してから、まるで、自分の仲間が寄り集まっているようなその雑誌を愛読し、一般書店の店先から姿を消してからは、その書店と、特殊契約の形で毎月確実に購入していた。その日、受取って立話をしている最中に、同じ目的で訪れた若い女性は瞳目し手に取ると直ぐその場で、パラパラと頁を繰る女性の、物怖じしない動作に圧倒された。

その女性が、北口新子という名で、北の、可成り大きい洋品専門店△GV△の住込店員だと、省三が知ったのは、更に一カ月後の暮れも間近いイヴの夜である。後輩を連れて街に浮かれでて、別れて一人になってからふと書店に行く気になった。そして先月と同じにそ

の女性に逢った。ほんの、偶然の出来事である。二人共、昼間は行く折が少く夜が多い。

そして行く日も殆ど同じである。発売を待ち兼ねて読みたいのも、きっと同じ心理なのだろう。だが省三は、その女性との二度の出会いを、神意と解した。靈感とも思った。躊躇なく、自分も……という風に、社名入りの大型封筒から雑誌を覗かせて、女性を誘った。

省三はひたすら期待した。青年の様な若々しい情熱と誠意をもって応待し、自分の名前の「いわれ」をもしばしば忘れた。その忘れた時々に、新子の身边は充実して行った。

当時、省三は遠縁の家に寄宿していた。主人の田原は彼の母の縁続きで、妻の信子と娘の尚江が家族であった。彼が住むようになったのは離婚後二年近く経てからで、その頃はまだ小娘だった尚江も、春には短大を卒える華やかな年頃になっている。省三を住まわせるに当って、田原夫婦には、省三を娘の婿にという目的があった。尚江は可愛い少女であった。一人娘で甘ったれたようなところがあつた。若し省三に、アブな性格がなかったなら、年令の開きを尚江が苦にしないのなら、大切に愛したかも知れない。そのような素朴さと純情を全姿に漲らせていて、決して美女では

なかったが省三も惹かれる部分が多かった。併し、省三にとって、自己の性の幾らかでも満たして呉れそうな部分、尚江の性格の中にその可能性が皆無であると知り、当然だと思ひ、女性としての自分の視野から除外して来たのである。それでも、田原夫婦の意向を察したある時期、何気なく、尚江に対していざないを見せ、欲している気持を口にした。尚江は顔色を変えた――。

そういうことがあってから、省三は多少居づらくなって、出る機会を探していた。省三は、自分の替りに新子を置いて欲しいと申出た。厚顔な依頼に対して、老いた人の好い田原も当然乍ら、極端に不機嫌になった。だが夫人信子には別の考えがあつたのか、省三に新子を妻にする気なのか、と確かめてから、『ねえ、お父さん。私達は今、省三さんの親代りみたいなのでしょう。だから、省三さんの選んだお嫁さんを、じっくりと見極めるのも、与えられた、義務の様なものじゃありません？』

そういう考えは田原にもある。一度は自分が娘の相手にと申した男が、勝手に選んだ女を住まわせ、毎日顔を逢わせるのは業腹だが省三に対しては、妻の意志に従わなければ不

可なと思った。娘の尚江が、全く無関心であることも、田原の気持を柔らげた様で、結局、たとえ将来一緒になっても、正式に挙式するまでは、この家の中で、不明朗な行為を慎むこと、を条件にして、省三の乞いを受入れた。

3

新子が省三と入れ替って田原家に住む様になった。部屋は母屋と棟続きだが、途中は廊下で独立していた。勝手口から庭の隅を通り抜けて自由に出入も出来る。恋人同志には至極都合良かったが、省三は何時も信子夫人に断ってから行く事にした。唯、尚江と顔を合わすのは何となく面映ゆい。観察していると新子を見る尚江の眸に、好奇心らしいものが窺えるのだ。尚江は、省三がそれとなく、そういう人達のあることを告げた時に顔色を変えた。そして——あなたも?……という様に非難の籠る目を向けた。

——俺達を変な動物とでも思っているのか……。小娘に判るものか……見ている今に——
——そういう風に監視されているのかと意識すると、かえって心に響くものがある。一日も早く新子との「形態」の完成をと、省三は思う。

身近かに接して見ると、新子は、外貌ばかりでなく性格的にも資質がある様に思えた。

省三は真剣になった。併し新子は利口で、省三の気持を知り乍ら軽く受流す。そして、喋るときは省三の風変りな嗜好をフェミニストだと讃えたりする。総てを否定しないで逆に肯定する気配で、時には彼のマゾヒスティクな態度を迎合する素振りを見せるが、ムードが高まって来ると、まるで理解のない冷酷さで拒絶する。その度に、自分の心を弄られているのかと、胸の中で憤慨し乍ら、新しく誠意を示すことになる。

ベッドが購入された。装飾、衣類装身具が増える。別に独自の趣味もなく、交際は社用が多い省三なので、新子一人を人並程度に満足させるのは楽である

唯、選ぶのに必ず自分の好みを入れた。新子は若い女性らしくない無頓着さで、個性のないマネキンの様に、省三の趣味範囲のものを巧みに着こなし、やがて下着類まで省三が選んだ。三、四カ月後には、新子の肌は、省三の趣味嗜好で飾り立てられ、これは、彼の心を大きく悦ばせたものだが、物質面や外見と違って、内的な精神では、何一つ望みは満たされず、前進も後退もない定着状態が続いた。

た。

省三の焦慮が目立ち始めた。そして或る日『私にはそんな趣味はぜんぜんないのよ、誤解しないでね』

新子は、そんなことを平然と言う様になった。それでいて、雑誌の記事や読物にそれらしいものを見ると、

『この男の人、真剣! まるで省三さん見たい。——私には女の側の気持が良く判る!』
と言う。そして、

『——でも、唯判るだけ: 興味はないのよ』

新子の変化は省三にとって衝撃である。彼は呆然として、新子の意外に明るい表情の中で光る目と、微かに歪められた魅惑的な唇を見守る。新子の喋っている言葉は省三にとって甚だ悲観的だが、その表情の総ては、ゾクッとする戦慄があり、蠱惑に満ちていて、彼は、更に新しい勇氣と、奥深い期待に胸を疼かせるのであった。

『何しろ、君と僕との出会いは、この雑誌だからな。二人の交流は、この中の活字で繋がっている。そうだろう——』

省三はよくそう言う。確かに、それは日頃二人の間の共通の話題になり易い。喋ることの要素の様な役割を果していて、省三の抱い

ている可能性は、其処から出発していたといえる。

『そう……ね。その通りよ。その本のお蔭で私は省三さんを知り、今は楽しい生活をさせて貰っている。でもね……正直に言って、私マゾヒストって嫌いなもの！』

『——君は！』

省三は其処で絶句する。

——俺が、マゾヒスチックな女体フェチ、

脚フェチ、と知り乍ら、この女は……。

——からかっているのか！ サジステンを真似てこの俺を……。

——新子は、俺を、俺の性を利用している

——。

省三は新子に向って何か叫び度くなる。だが若い女性に操られているという自覚もまた省三の心のいくらかの慰めになる。併し、省三は、そろそろそういう生半可な口先の言葉だけでは満たされなくなってきた。実際に、より現実的に新子の脚に縋りつきたいのである。唇が神秘を求めて震えるのである——。異質な欲望が燃え始めると、強圧的に自己の嗜好を満たしたくなる。が、強迫したり仕組まれた技巧的感情の動作の跡は、必ず白々しい空虚の部分が存在するのを省三は身を

以て体験しそういう場面を極度に恐れる。かつて、自己の性に疑惑を持ち、反省のうちに見極めようとし、日頃から目をつけていたホステスを誘ったことがある。恥しさに耐えて口に出した。若し、ホステスが彼の想像した様なサド味のある女性なら結婚しても良いと思う程の“女”であった。結果はみじめであり、省三は彼女の嘲笑の籠る言動に自己を嫌悪し、又、新しく“女”に失望した。自身を情けないと思ひ突伏した省三の頭や背に、彼女は極わめて、事務的な動作で足を載せて二、三度圧した。その姿は、客観的に見れば冷酷な権力者と、萎縮する隷属者の様に思えるだろう。だが心は遠く隔り、当事者は行為に対して戸惑っているのである。

——省三は絶句しつつ新子を見まもる。

『——確かに私はこの本が好き。でも、読むことが好きなだけ。だから性格的な趣味ではないの。省三さんには悪いけど、読んで面白い、だから読むのよ』

『省三さんは好きよ。普通の男と女としての好意以上に——。省三さんが貰って呉れるなら結婚したいわ。でも、どんなに頼まれても省三さんの“性”について行けない。活字にしたのを見て判っても、現実には不可能な

理解できない部分なの。愛情の問題と仰言りたいでしょう。併し私は夫を足で踏みつける様な愛情は嫌！ 省三さんの前の奥さんの気が持が判り過ぎる程よく判る』

『好きで読む。面白いから読む。主観の問題でしょう。性格的なものとは別だということ。は確かよ。私の読書は住み込み時代に友達に見せて貰った情性みたいなもの。だから読まなくなっちゃって平気よ。ねえ……判ってよ』

——好きで読んでい乍ら新子は……。

——肌で感じ取れるといったのは嘘か……

——心に響く部分があったのではないのか……。

『読むのは好きよ。面白いから読む。けど、

気持は動かないの。そういう悪趣味を私の神経が受け入れないのね。気の毒だけど』

繰返して新子はいう。省三は新子が故意に自分を焦らしているのじゃないかと思う。それ程、新子の読書は熱心であり表情にも真剣味が漂う。それなのに——省三は頭の中がグラグラして来る。失望より以上に求めたい心が慌しくなってきたのである。

気持の上では、既に許し合った二人であった。四囲の空気の暖い夜など息苦しさを覚えることもしばしばで、重なり合って唇を貪ほ

る夜も多かった。だが省三はそれ以上の行為は避けた。田原との約束の手前もあるが、省三にとっては新子が真実に自分に対して理解して呉れることの方が先決であった。時には気配に誘われて新子の方が積極的に総てを与えようと動作で示すこともあった。だが、そうなる和省三の気持は尚更に後退した。彼にとって新子の女体はフェチ対象以外の何物でもなくなっている。新子はじれったがって脚をバタバタさせたりする。すると、それはかえって省三の異質な部分を燃え立たせることになる。しかし破局は迫りつつあった。

もう夏も酣で、新子は省三が選んだ煽情的な寝衣を着てベッドに腰掛け、省三は彼女を見上げる位置の床に坐り、渴仰する気持で額にまで汗を浮べている。目の前に形のよい脚が二本垂れていた。省三は時々目を細くしてそれを眺める。ふと話が途切れると思わず知らず瞳を其処に集中させて仕舞う。

新子は脚を重ねていた。膝の上で組合されて、上になった左脚の爪先が突出された様に直線的に省三の顔に向って尖っている。手を伸せば届くし、顔を突出しても触れる程の距離である。省三は一瞬戦慄を覚える。新子の脛の部分は艶やかな健康色で、腓に到る柔ら

かそうなあたりは漂白されたのか白っぽい毛が産毛の様にやわやとして、しっとり潤っている。膝頭から足首に伸びてくる曲線の美しさ。意外に肉のある様な足の甲。厚さと弾力を感じさせる蹠から踵。省三にとってそれ等は皆、ゾクツとする程の魅惑的な部分であり、拇指から小指の形、不規則に並んでいる爪までが美化されて、視覚から奥深い処まで何かを囁きかけてくるのである。熱い燃える様な瞳で『あー』と呻く様に声を出す。

——抱かして呉れないか……新子！ 省三の魂はそう言っている。手が微かに震えた。『私達はもう駄目ね。省三さんには悪いけど悪趣味にはついて行けそうもない。だってそうでしょう。今もそうして、省三さんは待っている……でしょう。口づけ……口の中へ入れて呉れないかな……って——』

新子は笑う。

『滑稽だわ。指をしゃぶって、おいしいのかしら。私の体に口づけして、どうして、それで満たされるの。虐められて、痛められて、苦しみ乍らそれで本当に健康なのかしら？ 理解せよというけど一体私は何を理解すればいいの？ 愛情は人に負けないつもりだけど異常行為を実行しないと愛情にならないなん

て……人間として一種の悲劇じゃない？ そう思わない——？』

『愛している人を虐げて、どうして満足できるの？ 私の方が苦しくなるわ。汚れた足の指を舐める省三さんを、きっと不潔だと思う様なるッ。私は嫌いよッ。そんな女になり度くない』

新子は、正直に言っているのだと省三は思う。しかし、それを押切らねばならない。

『君は……経験がないから、本能的に嫌悪するのだ。悪いことをしている訳じゃない。愛し合った二人なら、何をしてもいいじゃないか。女性の性感帯は全身に行き渡っているものだ。——足の裏だって……爪先だってッ』

『そんなこと訊かして貰い度くないッ、女の本能的なことなど省三さんに訊かなくても……そういうことじゃないのよッ。私は……アブノーマルな繋がりがから結ばれるということが我慢できないの。省三さん、今私はね、そういう話をするまでに、何故先に結ばれなかったのかと後悔している位なのよ』

『あとからだだったら、君は許して呉れるとでもいうのか——？』

『判んない！ でも或は——』

本当に新子には判らないのである。きっと

逃げ出すだろうと思う。美しいから、好きだから、と省三はいう。しかし、憧憬するからといっても、口づけをしていい場所と、あまり好ましくない部位とがある。省三の好みは後者が多過ぎるのだと思う。自分の容姿を好意を持っている異性から賞讃されることは、若い女にとり、最上の悦びで、時には、省三の言う通り、女王になったと空想する。それは楽しく愉快なことだった。だが、そういう嬉しさはあっても、残忍冷酷にはなれない。

——本当に、私は彼を愛しているのか……と新子は思う。物質的な充足で、甘えて利用しているのも確かだ。女の狡さかなと思う。すると、省三の存在が気味悪くなり、直ぐにも逃げ出したくなってくるのだ。

4

暑い日が続く。汗ばむ肌の不快感がそのまま省三の焦慮に繋がる。新子との間はどうとう交叉不可能な平行線になったと思えた。勝手に走り出している。省三はそれでも毎日の様に、新子に逢わずにいられない。

新子は、嫌だと言い切る。近い内に引越したいという。その予感に脅えていた。それを新子が口にしたら、その時が結末だと思っていた。覚悟はしていても、直面して切出され

て見ると、スーッと頭から血が下って行く程のショックで頬が引吊るのを覚えた。今の自分の顔は醜いだろうと省三は思う。併し、幾ら努力しても笑顔にはなれない。暫くは無意味な議論が続いたが、離れた気持では、お互に言葉も気尽で、最後は、省三の、慈悲を乞う様な哀願になる。併し、新子にはその姿が滑稽以上の愚かしさに見える。彼女は、逆の立場で、省三から男の力で制圧され、自由に玩弄されることを想う方が好ましいのだ。

——そうであっても私は悲しまない。その方が、男を虐待するより好ましい……と思う。

——力で征服されたら、反撓して逆に、押えつけ圧迫したくなるかも知らない。

——女の気持の判らぬ哀れな男と思う。

省三にはそれが出来ない。娶った妻が、自分の希求を知り、恐怖に脅え泣き叫んだのが忘れられず、蒼白で瞳目した尚江も重なる。その夜も新子はベッドにいた。絶望を知り省三は自分を忘れ、新子の足を捕えていた。

『嫌ッ!!』

新子はヒステリックに叫んだ。掴まれた足を抜き取るうとしてもう片方の足で省三の肩の辺りを無意識の内に蹴った。

省三は足首を離れた。躰が不様に後転し仰

向けになった。それは、省三にとって念願の一頁ともいう姿であった。転がり乍ら、尚も這うようにして哀願する。拝跪して、希求する。それが予定された省三の心の中にある順序であった。が、その瞬間の現実、白々しい沈黙が厚い障壁となり、甘美的な夢の部分は一つなかった。——お終いよッ、という新子の言葉が文字通り宣言となり、彼は呆然として新子を見詰めた。そして、新子が出した黒と緑のカプセルを見て漸く瞳に生気を蘇がえらせていた。——昨夜のことである。

茶の間を覗くと夫人の信子が、唯一人ポツネンとしていた。

「この頃おかしいのじゃない?あまりしっくりしてないのでしょうか。一体どうしたの?

私の観た感じではあの娘さん割合にしっかりしていらっしゃる。省三さんのお嫁さんに丁度いい方々だけ……。しっくりしないのはあなたの我儘のせいでしょう。何しろ省三さんは結婚については前科があるから」

信子はふっと笑う。そしてつけ加える。

「大学を卒えたばかりのあの可愛いらしいお嬢さん、あなたから逃げだしたというじゃない? 可哀そうに——」

四十位だと省三は聞いている。到底美しい女の部類に入らない信子なのに、主婦として十数年を経るとこの様に落付きが出て、その家に相應しい重量感を発散させることが出来るのかと驚く程、省三は威圧的な圧迫を感じる。田原の後妻だと噂で聞いていた。尚江が信子の娘なのかどうか、省三は知らない。

信子は美しくなかったが、世帯簾れも見えず肌も艶があり、色白ではないのに、皮膚は熟れ切った女の脂を含んで潤っていた。田原は既に数年前に定年を終え今は傍系会社の嘱託である。二人を並べて見ると信子の若々しさが妙に気になる時もある。風呂上りに薄化粧した姿は、子供っぽい尚江よりもはるかに「女」であることを、省三は何度も眼近に感じている。

今も、喋る信子の目尻が細い。窺う様な表情はドキッとする程の情感があり、省三はその色艶に戸惑いを覚える。そして全姿に滲む自然な艶に感歎するのであった。

「困っているんです。一昨夜も、絶交や、といわれました。今度、この家を出るというのです」

省三は照れて頭をかく。

「早く一緒にならないから……。女はねえ、

にえ切らぬ男には愛想をつかすものよ」

「さあ、どうですか。併し僕はもっと二人が理解し合った方がいいと……」

「理解！ ホッホッホ。男と女の中に、そんなものがあるかしら——。それ省三さんの慎重主義でしょう。しっかりなさいな！」

「……」

「そんなことを言っているから、お互にアラばかりが目立って嫌になって来るのよ。男女の間は猪突主義……。尤もあなたはそれで失敗したそうだから……。でも、何かしら訳がありそうね？ 私に、話してみない——？」

「ありませんよ、何も——」

「完全な人間がないのと同じで、完全な夫婦なんてなさそうよ。ある限度で妥協しているだけよお互に——。そして別の場所でのめいめい勝手に享楽を求める、そんなものかも知れませんよ、夫婦って——」

フーッと笑う。その微笑は何を意味しているのかと省三は思う。年上の女性の心は不可解であった。

「——小母さんの享楽——？」

「いいえ私はもうお婆さん。だから駄目。今の時代の若い方々ならね。そういう意味よ」

「僕には——」

省三にはあとの言葉を続けられない。主義思想、思考は知られたくない。

——俺の妻は、俺を満足させて呉れる女性でない……M的な満足が欲しいと思う。

——小母さん俺は……一種のエゴイストだと省三は思う。

——新子から、尚江から、或は他の女性から、俺のことを聞いたならこの人は何と思うだろうか。変態！ そう、きっとそう言う——省三にとって、目差す相手以外には知られたくない自己の恥部であった。

「——もう一度見て来ます」

「また口説くの？ 上手におやりなさい」

又、笑う。そして「無茶はいけません。女の心が傷つくだけだから……」と付加える。「ついさっき、今夜は顔を見るのも嫌だっていわれたのですよ。僕もそろそろ決心しなければならぬようです」

そうではなかった。先程、そっと握り変えた薬の効果がもう出ている頃合なのだ。省三は今夜も苛立ってカプセルを呑んだ新子を見てから、その時間を稼ぎに信子のところへ遊びに来ている。

省三は立上った。手にした風呂敷包の中にカメラまで隠せている。果して自分の心が

何処まで進行するか予想も出来なかったし薬の効果も不明である。が、新子が予定通りに熟睡していたら少なくとも新子の総てを見、そして凡ゆる部分をフィルムに納める心算であった。新子に対しての今日までの誠意の代償として、それ位は許される可きだと、真剣に自分の心に納得させていた。

5

新子は足を少し斜に投出し深く眠っている様に見えた。室内の灯りは枕元の三段スイッチのスタンドの暗色の鈍い光だけ。残暑の厳しい日中と違って、僅かに開いた窓から意外に涼やかな風がカーテンを波打たせて入り、室内の空気は爽やかであった。静かにドアを閉ざしベッドに近付いた。新子は腹の辺りを薄い掛布で被っただけで、無造作に手足を投げ出している。自分の肢態が娘らしいものでない程拵っているのに気付くこともなく、彼女は熟睡していた。

最初は用心深く、併し、新子の正体もない程の深い眠りに、省三は可成り大胆な動作で行動を開始した。光りを明光にし、手頃な位置に移して掛布を取った。省三の与えた、彼にとって夢のある寝衣は、新子の牀の凡ゆる部分の曲線を、その中に浮き上らせている。

投げ出されている腕は肘の辺りまで剥き出しであり、それよりも、先ず省三が目を瞞ったのは、殆どベッドの端近くまで及んでいる片脚であった。膝よりも上、太腿の半ば位が露出している。それは、今日までの日々、省三が心に描き、自分の目で確かめ愛撫したい部分の一つであった。省三は大きく肩で息をし盛り上ってくる気持の抑制に努力した。心は急ぐ。もどかしく包を開き、新子の肢態をフアインダーから覗き見た。シャッターの音が意外に大きく室内に響き、その音に、ヒヤッとして様子を窺ったが、眠った生人形は何も知らず平和な呼吸を、その胸の動きで示している。何枚か角度を変えて撮っている中、次第に省三は落着いて来た。が、その落着きとは別に一塊の感情が奥深い辺りから突き上げて来るのであった。

——それが目的であった。取替えた薬はその効力を充分に発揮し、今の新子は何一つ抵抗しない。嫌だと、蔑すむ様に言った冷淡な唇は微かに開かれたまま動かない。嘲笑を綯い混ぜた瞳も堅く閉ざされ睫毛が人形の様に並んでいる。暴れた足も隠されていた牀も、ご自由に、というばかりに動こうとしない。省三は戦く指先で新子を開いて行った。漸く

彼の目的は果たされようとしている。省三は額の汗を拭った。カーッと顔中が火照り拭っても拭っても汗は滲み出て来る。△鍵△の中の夫だと思った。顔を近づけて熟視し、俺には眼鏡はないぞ、と思う。その時は、省三も割合に落着いた気持でカメラを手にすることが出来た。新子をフィルムに納めるという目的は予想以上に成功したのである。

省三は……閉じようとした。無事に目的を果たしたという安堵感は意外に根深い、真新しい欲望を彼の全身に湧き立たせ、省三の瞳は釘付けにされていた。正面からしげしげと見た。顔を近づけてスウスウと鼻先で忙しく呼吸していた。香りの刺戟は忽ち省三の心を追いつめて行く。無防禦部分は省三にとって神秘であり始めて見る新子であった。ほんの少し前、彼は神秘のヴェールを剥こうと、こわごわ触れて開き、接写を試みた筈である。併し実際に自分の目で見て、開かれているのを認め乍ら、依然として、省三にとっては神秘であった。急に胸が苦しい程、脈打っているのを感じ、同時に充血で目に痛みを覚えた。省三は呼吸を整えようと努力しつつ睨みつけていた。平凡な呼吸は到底不可能であり、自分の意志をこれ以上抑えつつけることも又、

不可能であつた。ゆっくりと、併し慌ただしく心に急かれ乍ら、顔を尖らせる様にして埋めて行つた。

——何度か、新子は動いた。その度にピクッと省三は脅えた。だが、結局新子は意識のない人形であり、やがて省三は言い尽せぬ物足りなさを感じ始めていた。

省三の胸の奥に秘めている神秘像は、その時に、ある種の反応を示さねばならない。それを五官で受け、知り尽すことが一つの夢の部分である。応答がなければ結局は夢想。虚像に過ぎない。現実の新子は、血の通った温かい肌であり乍ら虚像である。省三は苛立ち指の行使で視覚に頼ろうとした。一段と大胆になり、新子が目覚め事態が急転悪化してもよいと思つた。それよりも、この一瞬に自己の嗜好の総てを満たしたかつた。だが、新子は深く眠り依然として人形である。省三の九カ月近い努力の結晶は誠に儚ないものであつた。省三は、希求する自己の姿をレンズに納め、物足りぬ結末を、客観的に意味づけようと思ひ立つた。三脚を立て位置を確認し、エヤレリーズを装填して同じ姿になり、省三は意外に昂奮している自分を知つた。正しく異常であつた。自己の、最も羞恥に満ちた姿を

正確にレンズを通じ、自分の目で見ているのだと思つた。すると、その意識は、他人に窺視されていると想像するよりも尚、激しく深部に作用し、血を騒がせる状況であるのを知つた。もう夢中で、新しい角度から覗き、フィルムを捲き、面倒な仕事なのに、フィルムがなくなるまで熱中して軀を移動させた。

6

新子はその朝、熟睡の為か晴れやかな表情で、△GVへ出勤したという。

一日中、仕事も手につかぬ程心配だつた省三は、信子からそれを聞いて胸を撫でたが、同時に奇異を感じた。それ程の熟睡が不思議で仕方がない。併し何事もなかったという結果は、更に、より以上に、繰返して見たいという欲望となる。心の弾むのを信子に覺られまいと努力し、省三は自己の嗜好の可能性を考えて見る。取替えたカプセルは五つ。瓶の中には七つ残っていた。毎夜連用すると一週間の内に五回新子は熟睡することになる。

新子は何時よりも遅く帰り省三に逢つた。

省三は再びその機会に恵まれた。

その夜は、新子が微かに女体の蠢きを示した様に省三には思えた。新子のほんの僅かな動きも省三の官能をくすぐる。途中で省三は

何度も新子の気配を探ぐつた。目覚めてい乍ら、わざと睡つたふりをしているのではないかとふと思ふ。すると激しく心を揺すぶつて来る部分がある。

△鍵Vの中の同じ様な場面を省三は脳裏に蘇がえらせる。△——妻の全裸体に始めて接した夫は度を失い乍らも、詳細に表も裏も、しまいには臀の孔まで覗いて見たがシミ一つ見出すことも出来ず、かえって臀肉の双丘に盛り上っている、中間の凹みの白さに驚歎する。そして唯歎息しているばかりであつたがふと、妻が寝ているふりをしていてのではないかと思ひ、若し空寝入りなら何処までそれを押し通せるか試して見たくなり、日頃妻の厭がっている諸行為、執拗な、恥かしい、いやらしい、アブノーマル、と言つた痴戯を繰返し、そして長い間の念願であつた、美しい足を舌で愛撫し尽すことを実行する▽

——自分の今の気持と良く似ている……と省三は思う。新子の軀をひっくり返して残るくまなく虫眼鏡で調べる様なことは出来ないが、今見える部分だけで充分であつた。何よりも、目覚めているのではないかと思うことで、全身を貫く戦慄を感じ、それが言い知れぬ快美を引出して行くのだ。

夜が更けてから、省三は勝手口から滑り出た。昨夜程ではなかったが、矢張り激しい疲労を覚えた。全身が兎に角氣懶る。昨夜は胸苦しく眠れなかった。今夜も又——俺の心は燃え上っている……と省三は思った。この俥では何日も過すことは、牀に悪いと自覚し反省する気持もあるが、逆に溺れ込み度いと誘う心の方が強かった。それでも、省三は以後の二日間、田原家へ行かなかった。彼にはフィルムのDPEという仕事が残されていたのである。彼は記念に相應しい程の豪華なアルバムを買入れて並べて見た。

彼の心の高ぶりを証明している様にブレているものが可成りある。三脚を立てて覗き見た彼自身の姿も、其処に現存す可き像がなかった為か、彼の描いていたイメージと相違するものも多かったが、その反面、予想外の思わぬ効果を産み出しているものもあり、各部分のアップは充分に彼を満足させる程のものであった。

見ていると新たな昂奮が湧き上って来る。見尽しても見飽きぬ程——。が、整理を終えると、彼はその中に足らぬものの多いことに気付き、そう思うと、更に激しい欲望が突き上げて来て、その上、自分自身の表情にさえ

物足りなさを感じるのであった。又、アップの一枚ずつを並べて見ると其処に新子を完成させることが出来、彼は一層精密にレンズで捉え、等身像を作り出すことを思った。彼にとって、この思索はかつてない程の喜びを与え幻想的愉悦は果てしなく拡がって行った。夢幻の根源は印画紙に焼付いた映像に過ぎず、文字通り幻か夢であったが、現実には可能であった新子との秘事は明示されている。それだけで省三には満たされるものがある。

映像からは連想が湧き出た。それは限りなく広く深く、彼は空想も又、映像を得た今単なる夢想でないと思ひ、根柢のある空想を追って独りの悦びにふけることも出来た。

四日目に、新子はアパートを探したと省三に告げた。新子は二夜の出来事を知らぬらしいと省三は安堵した。が、

——その牀を知っている……という思いは本人を目前にした時、一段と熾烈な刺戟となり、眩しくなってくるのだ。

「どうにもならなかったな。済まない——」
そっと金包みを手渡す省三に、新子はフツと顔をあげ、今日まで、彼が知らなかった熱っぽい瞳で見つめ、忽ち潤ませて行く。

——ノーマルな新子に……俺が間違ってい

たらしい。最初の繋りが特殊な雑誌なので、二人の間では△S▽や△M▽やという話題が多かった。が、それで、一方的に自分の対象だと決めた事の誤りを知り、反省して悔む気持もある。併しそれも皆、新子の裸像を手に入れたという事実からの、儚ない乍らの妄想により、幾らかの嗜好充足が可能になった為とも思える。そして今、或は最後かも知れぬ、機会を利用し、幻想的愉悦への思索を完遂しようと思ひついていた。

別れの宴だと省三は言った。感傷がつかまとうのか彼女は物静かで、省三も又、口数少く唯、グラスを満たすことだけに専念する。

次第に新子は酔い、省三は目的が果たせそうで心が浮く。カプセルよりも多量なのに、意外に過した酒量で新子は舌が軽く麻痺していたのか、疑うことなく呑み乾していた。そして、省三の見ている前で眠り始めた。

素早く彼は用意をする。新子を奪う意図があるのなら、今なら簡単であった。が、省三はその欲望は放棄した。何の痕跡も残さずに自由にしたいと思った。部屋の四囲、窓やドア、外部との接触部を調べた後に、新子を解いた。母屋は今夜信子一人で、彼女はひっそりとテレビの前に坐っている筈で、家人の目

は安心だった。

予定通り、丹念に熱心に、同じ状況の写体になるよう計算しつつ、至極冷静に二度ずつシャッターを切って行く。ブレを恐れてどの角度も三脚を据えた。机やテーブルも利用した。カメラマンに成りきっていた。小一時間を費して最初の目的は終わった。その間、先夜の様に臆病でなく、新子の魅を何度もひっくり返した。芸術家の冷酷な程の非情さで新子に触れ、冷静な自分を何度も疑ったが、それは仕事を終えて汗を拭うまでであり、終えたと判った瞬間から、緊張の為に抑圧されていた酔いと共に、彼は激しく欲情した。もどかしく新子と同じ姿となり足を握り締めた。

異質な愛が燃え狂った。自分を狂気かと思いつく、快よい酔気嫌で舐めまわす。すると嗜好が真新しく尽きることのない程、多角的に湧き上って来るのを制することは出来なかった。大きく息をし、水を美味いと思って飲み、彼は粘っこい目で自分を見下した。元氣よく、常よりも勇み立っている自分に満足してからゆっくりと床に仰臥した。暫くは静かであった。が、次第に彼は慌しくなっている。ベッドから垂れ下る脚の下で、動き乍らエアリリーズを握っていた。起上って、元の

場所に戻るときは、少しずつその位置を変えた。

それは、省三の胸の中にある凡ゆる場合の再現ともいえた。途中で、思三は二度までも自分を処理しなければならなかったし、疲労が激しく何度も大きな呼吸をしたが、それでも根気よく、とうとう36枚のフィルム三本を撮り終えたのである。計画していた仕事が総て終り、彼はやっと征服し尽したともいえる物体を見下していた。感慨に似た想いが胸をかすめる。もうこれで未練は残るまい、と思った。思三の意図したものはフエティッシュなマゾヒスチックなものなのに、今、その対象物を眺めると、立場は微妙で、横たわっているのは被征服者なのだ。彼は、能動的加虐者であった。新子は弱い女に変化している。

——俺は、女を征服した……。奇妙に思えた。彼自身、現実には夢から覚めた様に、“物体”を見るまでは、考え及ばなかった部分である。実際に、先程から彼は、自由に足を吸い、魅を舐めてはいた。が、その行為を強要されているものと仮想し、自信を以てレンズに向った。足を頭に、或は魅に載せて這い、掌に捧げて、その法悦を貪った。

——俺は……とふと不審を覚える。強行し

たM行為とは別に試みた形態もある。魅を密着させる寸前の有様を意図した。半開きの乾いた唇を割り、歯をこじ開き、其処へ嵌め込んでシャッターを圧した。自分に訝り乍ら結局省三は改めて顔を埋め、矢張りこれだ、と思ひ至る。そして、どうでもいいや、と思考よりも受覚に夢中になって行った。

「母さん、母さんは何処、母さん！」

始めは遠くから、そして次第に尚江の声が近づいて来たのはこの時である。省三はギョッとして電撃された様に頭を上げた。そして廊下に何か気配らしいものを感じて、凝然とその姿勢を保った。昂奮は寸時に萎え、省三を勇気付けていた異質の血は、抜き取られた様に熟した上部から去り、代りに冷汗が脇の下や額にまで滲んで来る。暫くは動けなかった。

——見られていたのだ……はつきりと彼は覚った。確実な証拠はなかったが、信子がドアの外にいたのは間違いないと思えた。何時から……一体何を……と考えて、改めて省三は慄然とする。立上って震える足を踏み締めてドアの鍵穴を覗いた。小さい穴だけれど、明光に照射された目的地は可成りはつきりと目撃出来た。激しい恐怖であった。絶体に他

見を憚る自己の最大の恥部である。省三は脅えた。脅えつつ慌てて殆ど夢中で元の姿にかえして勝手口から忍び出た。

信子の口を封じることが急務であった。事実の否定よりも、状況の隠蔽よりも、信子が目撃した事象を、口外せぬ様にする必要がある。その為には、成可く信子の身近にいななければならない。同時にそれは、毎日顔を合わせる事になり、目と目の交叉した瞬間は、脅えよりも深い一種の精神的拷問ともいえる。

新子がアパートに移った翌日、省三は稍強引に、再び田原家に入り込んで来た。

7

機会は思ったより早く来た。田原は前日から社用の為に不在。尚江も又、日頃素行に口うるさい父の不在を利用し、大学を卒てから勤めている会社の同僚と小旅行を計画した。

夜遅く省三は酒に呑まれた様子で戻った。

信子は、入浴もせず待っていた。

「小母さんは色っぽくて目障りだ。大年増とかな。熟れているよ。熟して落ちた甘い甘い果実。小父さんはくたびれているし、僕にとって小母さんは鬼門だ。独り者には目の毒だ——」

今なら、どんな事も、自由に言えると思っ

た。荒れている様に装い、省三は信子に絡んだ。併し、反応はなかった。奇妙な程、落着いて見える。笑っているだけである。

——この古狸奴!!

省三はその肩に縋って押倒そうとする。簡単に払われて彼はよろけた。坐っている信子には、どっしりとした重量感があり、省三は威圧を覚えて心が震えた。

「僕……僕は直ぐねますよ。これ……この通りこのカプセルを一つキュッと呑む。ア、小母さん、お水頂戴! 朝まで一眠り、気持よく眠れます。小母さんもうぞ……。その方が安心……でしょう、小母さん——」

省三はカプセルを嚥下して茶の間を出た。

カプセルの入った小瓶は置き忘れた形で食卓に残して来た。省三は眠らなかつた。彼の呑んだのは別製の健胃剤である。パジャマ姿で仰臥して省三は静かに待った。目には見えぬが一種の魂と魂の争いであつた。省三は唯待つことに総てを賭けた。当然、信子が忍んで来ることが予期出来る。眠っているのに強引に、或は睡眠を妨げ揺り起して……たえどという事態になつても悔はないと省三は思つた。逆に、そういうことを待ち望んでいる様な気持も省三にはある。又、何事も起らな

いかも知れまいとも思う。全く無関心に信子は過すことも考えられる。彼女は省三がカプセルを呑むのを見ているので、あとは信子の意志次第であつた。——省三は待った。不思議に神経は牙えて想いだけが次々と脳裏を行き過ぎる。肉塊で圧されて水を注がれることまで空想し、その強烈な思索に思わず四肢を凍める事さえあつた。時計が二時を過ぎてから漸く省三は起上つた。しのび足で灯りの残っている茶の間を覗き見た。そして暫く茫然と立ち尽していた。意外にも、全く思いがけなく、信子は食卓に突伏す様にして寝ていたのである。肘の側に、薬の小瓶が転がっていた。手に取って改めると、確かに一つ減っている。信子も眠る為の一つを呑み、それから入浴し、上ってから泳えようもない睡気に誘われて、そのまま打伏して仕舞つた様に思えた。浴室で着替えたのか寝衣代りの浴衣の前が乱れてしどけなく、吃驚する程、豊満な太腿の一部が覗いていて、その全姿は、ネグリジェ姿の新子とは異質な、かなり強烈な香りに満ち満ちて、思わず知らず噴出して来る情感を制することが出来ず、省三は狼狽えた瞳を信子の其処此処に走らせてから、その肩に手を置いた。揺すると信子の軀は畳の上に崩

れそうになる。想像以上に熟睡している。

急に省三は目を光らせた。つい先程まで、或は信子に強要され羞恥の姿を剥き出しにして、遂には猥らごとに奉仕する自分を、そして、信子の重量の下で呻吟する哀れな姿態を心に描き、想起することのみでも味合い得る快よさを胸の中に抱き続けて来たのだが、意識もない程の信子の姿態を前にした時、新子に對したのと同じ欲求が強い意志となって抬げて来たのだ。

信子の口から、目撃した事実を喋らさない方法が一つあった。それは、信子の羞恥を確認し、それを示すことによる半ば強迫的な交換条件である。印画紙に焼付けることが出来ればその意図も実を結ぶ。唯、カメラのファインダーから覗き見る事が不可能な為、省三は身を以て、信子の嗜虐的淫行に耐え、アブ的な行為に誘い込んで、口を封じようとしたのである。信子が果してS的な動作を行使するかどうかも判らないが、彼は、そういう場合だけを心の中に描き続けて来たのである。突然に事態は急転した。省三は大きく取って返すと素早く準備を始めた。面倒なく、事は運んで行った。暴漢に襲われた様に見せかける方が効果的であった。省三は意識して

乱暴に扱い浴衣を引裂いた。奇妙な感じであった。新子に對したのとは全然違った異妖さがあり、夢にも考えていなかった行動に無性に心が燃え、やがて省三は我を忘れた様に熱中して行った。そしてその形態への誘導が意外に心に響くのを自覚すると同時に、急に完成して見なくなった。省三は豹変して、嗜虐的に己れの嗜好を満たして行った。それは又たとえようもなかった。荒々しく行使する程蠢く様な反応があった。更に……凄まじく暴漢的に、と省三は欲した。途中で目覚めた場合の抵抗を恐れ信子の自由を奪おうとした。その為の多彩な色の紐は手近にある。暫く信子の様子を窺う。薬の効果は充分に実験済みで信子にも有効的に、作用している様に見える。ウンウンといきみながら漸く抱き上げて食卓に乗せた。そして、手と足と……必要部分に紐を絡めて食卓の脚に繋ぎ止めて緊縛した。経験のないことであったが、雑誌の見よう見真似でどうにか固定することが出来た。何よりも夢中だった。

食卓からはみ出てガクンと折れ反っている顔の口にも、手拭を重ねて紐を何重にも掛けた。

もう目覚めている筈であった。併し気配だ

けは依然として熟睡である。省三は奇妙なものを見るような目で、哀れな、まるで雑誌の挿絵の様な姿態を見下す。必要な部分は総てボロ切れとなり露わであった。

省三は忘れずにシャッターを切った。そして思い切りよく蹲み込んだ。噛むことまで加えて、彼は自己の欲する対象部位の総てを知った。五官の内の耳を除いた感覚は、忽ちそれぞれに充足して行き、やがて省三は物体の痙攣を確実に口唇に感受していた。

人形……物体ではなかった。生味であり、省三が夢中になればなる程強い応答がゴダマの様に返って来る。強烈であった。夢想した愉悦はこれかと思った。

——信子は目覚めていたのである。その思考を省三が察したなら、きっと△鍵▽の中の妻を連想した事だろう。あの夜、信子は現実に省三の総てを見とどけた。常になくひっそりとして気配さえないのがかえって気味悪くなり、併し、許し合った男女の秘めやかな一と刻なのだと、意識して足音を殺して近寄った。そっと、耳を近づけて見たが物音はなく彼女は或る種の不安を覚え、光の線が洩れている一点、その鍵穴に瞳を寄せた。暫くはよく判らなかった。が、やがて信子は、膝がガ

タガタして中腰の姿勢を保っていることが出来ず、廊下の板の上に跪き、真剣に窃視し始めていた。婦人雑誌はもとより、若い女性向きの週刊誌にさえ堂々と性科学とか称して、常に目新しく、それでいて変り映えのないSEXが文字になって、綴られている昨今である。通常のSEXばかりか、ノーマルでない行為も、まるで奨励するかの様に書かれている事が多い。実態は信子にとって未知の部分なのだが、文字の知識としては受け入れていた。だが、田原との単調な繰返しより外、奥深い綾を知らぬ信子にとって、ほんの小さい小穴から覗き見た現実、一瞬に魂まで凍らす程の激烈な衝動を与える素質を持っていた。信子は驚きで暫くは呼吸も忘れた。淫靡であった。猥褻だと思った。決して淫蕩でなく、色好みでもないが、老いた夫に充足を期待出来ぬ近頃の信子には、省三の姿は余りにも刺戟的であり、彼女は我知らず喘ぎ乍ら、目を離すことが出来なくなった。

それに加えて、省三に関して、時には噂らしいものを聞くこともあり、或時は、娘の為にその噂の根源を探り求めた事もある。

それを、確実に信子は見た。確かに異常な行為と思えた。自分の見知らぬ別世界での出

来事だと思った。しかし否定し乍らその否定以上に異妖さが心の何処かをくすぐるのである。足指を咥え、足の裏を舐めまわし……省三のその姿を見ていると、まるで自分の足が弄ばれている様な、粘質的な無気味さを感じる。が、感じることで心が震えた。省三が顔を埋め、その姿を確認して信子は激しい胸の痛みを覚えた。省三が新子と替って住む様になった時、信子は自分の感情に脅えた。家庭の主婦という、家の中では絶対的な安住感が中年女の狡さとなり平静心を保つことは出来たが、今まで知らなかった自己の性を探り当てる様で不安だった。この夜も、信子は脅えた。省三がカプセルを眠る薬だと言って呑むのを見てから、自分も又、睡眠によって凶暴的に発火しそうな自己の情炎を抑えようとしたのだった。

——睡気で、まだ頭の芯が痛んでいた。にもかかわらず、引火物の様に即発し、頭痛も気鬱さも忘れ果て、省三の自由に総てを委ねた。日頃の不燃による浅間しいばかりの狂乱を恥じ、その羞恥を隠し通すには眠りを装うより他、何の方途もなかった。というより、目覚めた瞬間から省三を意識し、同時に総ての抵抗を放棄していたのだ。信子の脳裏には

新子の肉体を妖しく愛していた省三の激しく動き続けた顔が浮き上り、その未知な行為に対する憧れだけで、全身が熱くなってくる。口を縛って声を封じられたのは、かえって都合がよかった。そして、やがてどうにもならなくなつて動ける部分の総てを駆使して悶えた。祭壇の生贄にも似た惨い姿で、肌も露わに四肢を紐で締め上げられ……そういう自分の姿態は想像するだけで空恐しい異常なものなのに、信子は大きく胸を喘がせ咽喉で呻き目尻に涙を溜めて乱れに乱れ、生れて始めて感受する大波に、「女の性」を剥き出しにして、遂には感極まって漏洩した。

——水を浴びて、反射的に省三は距離を保ったが、真っ盛りの花は妖美に匂いつつ彼を誘う。完璧な霊花、神秘のヴェールを脱ぎ捨てた真実はこれか、と省三は見た。

——水……神の——？ この意識は省三にとって誠に強烈であった。忘我の内に、省三の味覚は狂奔し、直後に、意識の薄れる様な陶酔を覚えた。

秋は漸く深まろうとしている。夏中の疲労を取戻すかの様に省三は旺盛な食欲を示す。

彼の周囲はにわかに華やかになり、心の充

足は、総ての挙措に精気となって現われ、一頃、自身で妄想の激しさに感じた憂いもなく生きることに喜びであった。

ふと、自己の性を奇妙に思うことがある。

——変ったのかな俺は……

——いや同じだ。ただ、その課程が違う。

それだけのこと……最終的に行きつく場所に変化はなかった。彼は同じものを求め、同じものを好む。踏みつけられて希求する。

田原家での地位は、家人の目をかすめてではあるが最高のものだった。家庭を支配する主婦の信子を、更に彼が支配する。省三の部屋は密室的存在となりつつあり、折あらば信子が彼を挑発する。省三の肝所を信子は忽ち熟知した。甚だ簡単なのだ。腕を挙げて清掃した付根を見せればよかった。部屋着のエプロンに隠れる辺りを切り裂いておき、温かそうな腿の一部を見せるだけで充分だった。

あとは爪先まで充二分に手入れを怠らなければそれでよい。だが、そういう些細なことでも、女として肌に磨きがかかって行くのを信子自身も気付かない。田原は毎日に艶っぽくなって行く妻に驚き乍ら、嫉妬するよりも先に自分を満足させている様であった。尚江には知ってか知らずか無関心を装う。実際に

省三の周囲を探ろうとするものではなく、省三は信子の誘惑に負けた様に溺れ込む。しかし信子の役割は「発火物」マッチの様なものであった。火を点けた後は、忘れた様にポイと捨てられる。発火と同時に、行為は被虐であり乍ら、忽ち省三は「征服者」となり「命令者」となる。気まぐれの様な風変りな嗜好に甘んじて、充足のない空しさに悶々とすることも多い。それでも信子は喜々として省三に委ねて甘受しつつ足を伸す。ある休日、信子は兼ねてから省三に読む様にと言われていた△鍵▽を手渡し乍ら、

「仕方が……ありませんわ——」といった。

心持ち青ざめて淋しそうな表情であった。

省三は△鍵▽の最終文章に傍線と訂正を加え、自分の意図を言外に匂わせたのである。

——尚江は純情な麗花である。何年か前、その可憐さに魅せられ乍ら、遂には、望なく対象外として、自分の視覚外に置き捨てて来た省三だが、今は、その素朴さと、無垢な純真さを必要とした。標本箱に飾られる綺麗な蝶々の様に、四肢を固定された姿態は充二分に視覚を堪能させて呉れる筈であった。その上に省三の嗜好が重なる。華麗な蝶は、羞恥と屈辱の中で悶え、より強い恐怖の中で絶望

の瞳を瞠目して、省三の行為を見守らねばならない。そして、やがて喘ぎ乍ら毒血を注入されて異質の性に目覚めて行く。

その苦悶に似た蠢きを、省三は今、想うだけで感じ取ることが出来る。省三に、この感覚を教えたのは信子である。省三に焦りはない。唯、待てばよいのである。機会は何々訪れるだろうし、お膳立てを信子がする。結果的には当主である田原の望んだ形態になつて行きそうだし、それよりも、今直ぐ欲しいものがあつた。

省三は机に向っている。用箋を拡げて簡単に数行の文字を綴る。宛名を△北口新子様▽とした。多くの文章は不必要なのだ。

現在、二冊に増えている秘蔵のアルバムから取出したたった一枚の写真を封入するだけで、充分に用は足りた。それだけで、北口新子は五日後に必ず省三を訪問する筈である。

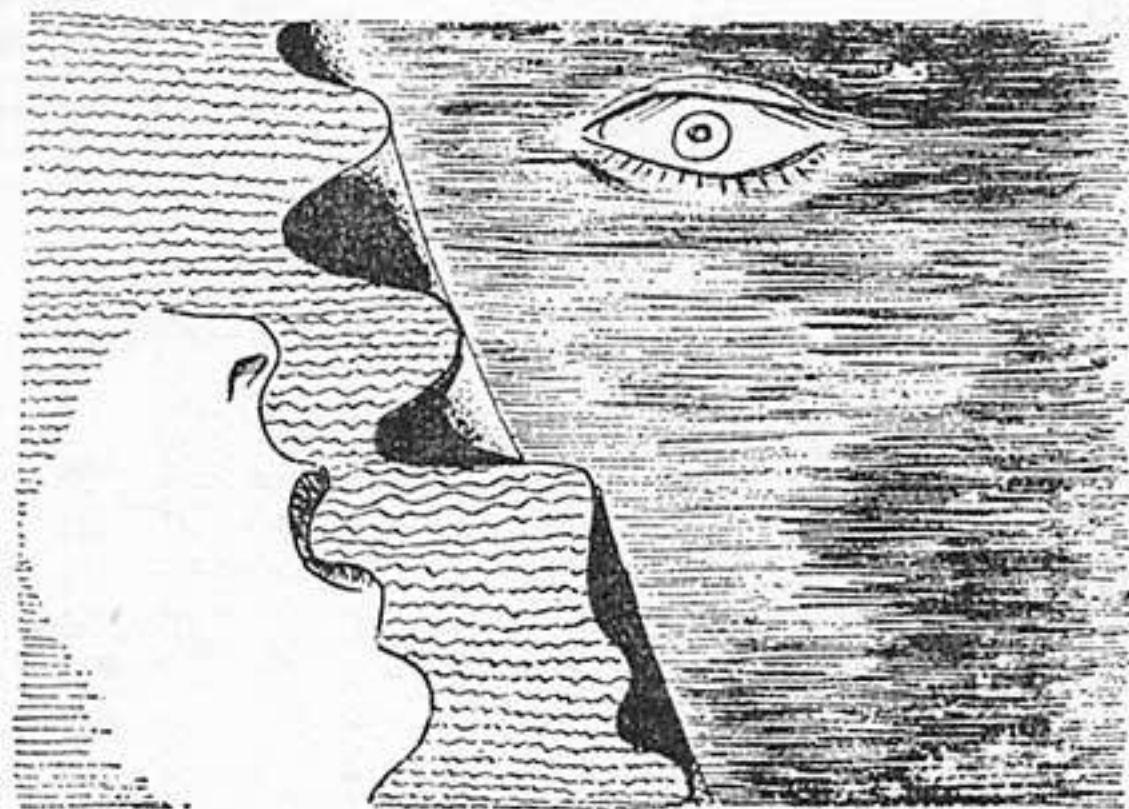
アルバムを見乍ら又省三は、

——俺は少し、おかしいのかな、と思う。

そして、——人間の性格なんて、全く奇妙なものなんだな……と思う。

それが、偽りのない心境であつた——（終）

（後記）文中引用したカプセル及び薬は市販品と関係のない創造品です。



△可愛い小悪魔▽

小原真澄嬢に

魅せられて

大島 幸

小生、十年來の『奇譚クラブ』の愛読者で

すが、昨年グラビヤ、口絵が廃止され、挿絵も申し訳程度しか掲載されなくなってからというもの、まるで十年間愛し続けてきた恋人を突然失ったような気持で、淋しさをかみしめております。まったく、グラビヤ、口絵挿絵のない『奇譚クラブ』なんて魅力半減です。しかし、だからといって見限ってしまふこともできない小生の心——こんな小生の心を大方の読者は、きっとわかってくれること

と思います。

四月号編集後記によりますと、写真や口絵や挿画の「要望も性急ではなく、きわめて緩漫に実現に近づけてゆきたい」とのことですが、「きわめて緩漫に」しか実現に近づけない事情、理由は色々ありましようし、それはまたそれで致し方のないことでもありましよう。が、私共読者としては、やはり、一挙にグラビヤ、口絵、挿絵を復活してもらいたいのです。だが、それはどうしても無理だと言

うのでしたら、グラビヤ、口絵、挿絵が復活するまでの間、例えば、本文中のフォト、挿絵の量を増やすなどの方法によって、読者の要望に少しでも応えてほしいものです。

というようなわけで、小生、グラビヤ、口絵廃止後は、本文中に掲載される限られた数のフォトによって、わずかに渴きをいやしておる次第です。四月号では、「奇クサロン」の新田英雄様提供のフォト（モデル・新田ゆう子様）、『SMカメラ・ハント』の辻村隆様撮影のフォト（モデル・小原真澄嬢）をうれしく拝見しました。

新田様のフォト——見事な腕前に感心しました。緊縛の縄のかけ具合、写真技術からみて、新田様はプレイ、フォトともに相当年期を積んだベテランとお見受けします。モデルのゆう子様は乳房が小さくなって心配しておられるとのことですが、とてもそのようには見えません。緊縛フォトの値打ちはモデルによって大きく左右されると思いますが、このフォトの魅力の大半は、やはりゆう子様のボリュームのある見事なからだにあると言えるでしょう。新田様のプレイ・写真技術、ゆう子様のモデルともに十分に鑑賞に耐え得るものだと思います。今後もしどし「奇クサロ

ン」に登場して下さるよう願わずにはいられません。

(新田夫妻のフォトは、三月号の「奇クサロ」にも一葉掲載されており、これも素晴らしい出来栄です。小生はどちらかと言われれば、三月号の方をとります)

『SMカメラ・ハント』の△可愛い小悪魔▽小原真澄嬢、大変小生の気に入りました。マスマ嬢をカメラに収めることに成功した辻村様には感謝したい気持ちでいっぱいです。マスマ嬢は『SMカメラ・ハント』最大の収穫だと小生には思われます。そう言ってよければまさに、近來にない『掘出物』です。掲載されたフォトは僅か四葉ですが、どれも素晴らしいものです。

最初のフォト(九十九ページ)は、下着、パンティをつけたまま畳の上に引き倒され、後手に縛りあげられているところですが、たよりなげに投げ出された、すんなりした裸の両肢が実に魅力的です。特別に足に關心がある小生ではありませんが、正直マスマ嬢の小鹿のような肢にはひきつけられました。またこのフォトにおけるマスマ嬢の表情がなかなかいいものです。左の頬を畳に押しつけて軽く両眼を閉じた表情は、もう観念しました、

どうなりとお好きなようになさって、と言っているような、また緊縛にうっとりしているような、そのどちらともとれる表情です。白い歯がちらりと覗いているのは、笑ってでもいるのでしょうか。この表情をみていると小生には、マスマ嬢は自分の中に自覚しないままMの素質をもっているに違いないと思われてくるのです。

次のフォト(一〇一ページ)は、前のフォトに引き続いて、後手に縛りあげられたマスマ嬢のパンティに辻村様の手がかかって、いままさに脱がされようとしているところです。マスマ嬢は、やはり両眼を閉じて、観念しきった様子で辻村様のなすがままにまかせています。

その次のフォト(一〇三ページ)は、本文を読んでみますと、プレイの順序としては、一〇六ページのフォトの後にくるものです。一〇六ページのフォトというのは、いまやすべての着衣をはぎとられたうえ、乳房の上下×に縄をかけられ、床柱に立ち縛りにされたマスマ嬢が、背後から辻村様の責めにあって苦悶の表情をみせているというものです。床の柱のうしろに立った辻村様の右手はマスマ嬢の首に巻きつき、左手はマスマ嬢の左の乳

房を強く握りしめています。このフォトのポイントには、マスマ嬢の苦悶の表情と、その見事な乳房にあると言えるでしょう。苦悶の表情にはリアルな感じが漲っており、そこにはMの素質の片鱗がうかがわれると言ったら大袈裟でしょうか。乳房の見事さについては辻村様も述べておられますが、カットスタイルの髪、表情及びからだ全体に漂うあどけなさといった感じにくらべて、乳房の見事さはどうでしょう。辻村様の表現を借りれば、それは「強く直角に屹立して尖って」います。こんな乳房をみたら、Sの男性ならば、辻村様ならずとも強く握りしめ、思うまま責めてみたい誘惑にかられることでしょう。

そしてこのあとで、マスマ嬢は一〇三ページのフォトのポーズを強制されるのです。マスマ嬢はさっきと同様乳房の上下×に縄をかけられ、後手に縛りあげられてソファに座らせられ、カメラに正面をむけて、両肢を左右に大きくいっばいに開いています。いや、足首に縛りつけられた縄によって開かせられています。辻村様の眼前には、『今やみずみずしい彼女の全貌が、あますところなく曝されて』おり、辻村様のカメラは、マスマ嬢の『全貌』を『あますところなく』おさめた筈

ですが、掲載されているフォトは、腹部から下が無残にもカットされています。恐らく、辻村様あるいは編集者は読者の想像の自由を尊重して下さったのに違いありません。

それはともかく、Sの男性にとって、これは思わずよだれがたれてくるようなポーズでありましょう。常に夢想してひとり楽しんでるポーズ、現実にはプレイする時には必ず実行しようと日夜思い描いているポーズであるに違いありません。相手はみずみずしさのいっぱいこのうら若き乙女です。その乙女が文字通り一糸まとわぬ姿に剥かれた上、こっちに正面をむけて、両肢をもうこれ以上開くことができないというところまで開いて、あまるところなく曝してみせている。しかも彼女は

両手両足の自由を完全に奪われていて、もはやどうすることもできない。どんなに恥かしくても、手で隠すことさえできない。うら若き乙女にとって、これ以上の恥かしさはないでしょう。マスミ嬢はそんな乙女の羞恥とあきらめの混じった表情を、うまくみせています。こんなポーズで真正面にカメラをすえられては、恥かしさにとっても正面をむいていることができず、顔を左にそむけて両眼を閉じたマスミ嬢の横顔は実に可憐です。その横顔には、この上ない羞恥にせいっぱい耐えている表情が浮んでいます。そこには同時にもうどうすることもできない、さあどんな風にでも責めて……といった、全てをあきらめて、男のなすがままにまかせようとする観念

の表情も読みとれます。小生の鑑賞の仕方には、Sの男性にありがちな手前勝手な深読みがありますが、マスミ嬢にはいまだ自覚されないMの素質があるのではないかという感じは、小生の中で確信にまで強まっています。マスミ嬢は辻村様の飼育をうければ、必ずやMに目覚め、『奇譚クラブ』のグラビヤを飾るにふさわしいモデルに成長するに違いないと小生は思います。辻村様の飼育をうけ、立派に成長したマスミ嬢に再び『奇譚クラブ』誌上で逢えることを望んでやみません。

辻村様はじめ編集の皆様の一層の御努力、御奮闘を期待します。

☆本誌既刊号在庫一覧表

既刊号在庫案内

○本誌の既刊雑誌は左記の一覧表の通り在庫しております。昭和38年10月号以前の号は、全部売切れとなり在庫しておりません。
○在庫が次第に減少して左記のようにならなくなっています。いまは、残部僅少のものもありま

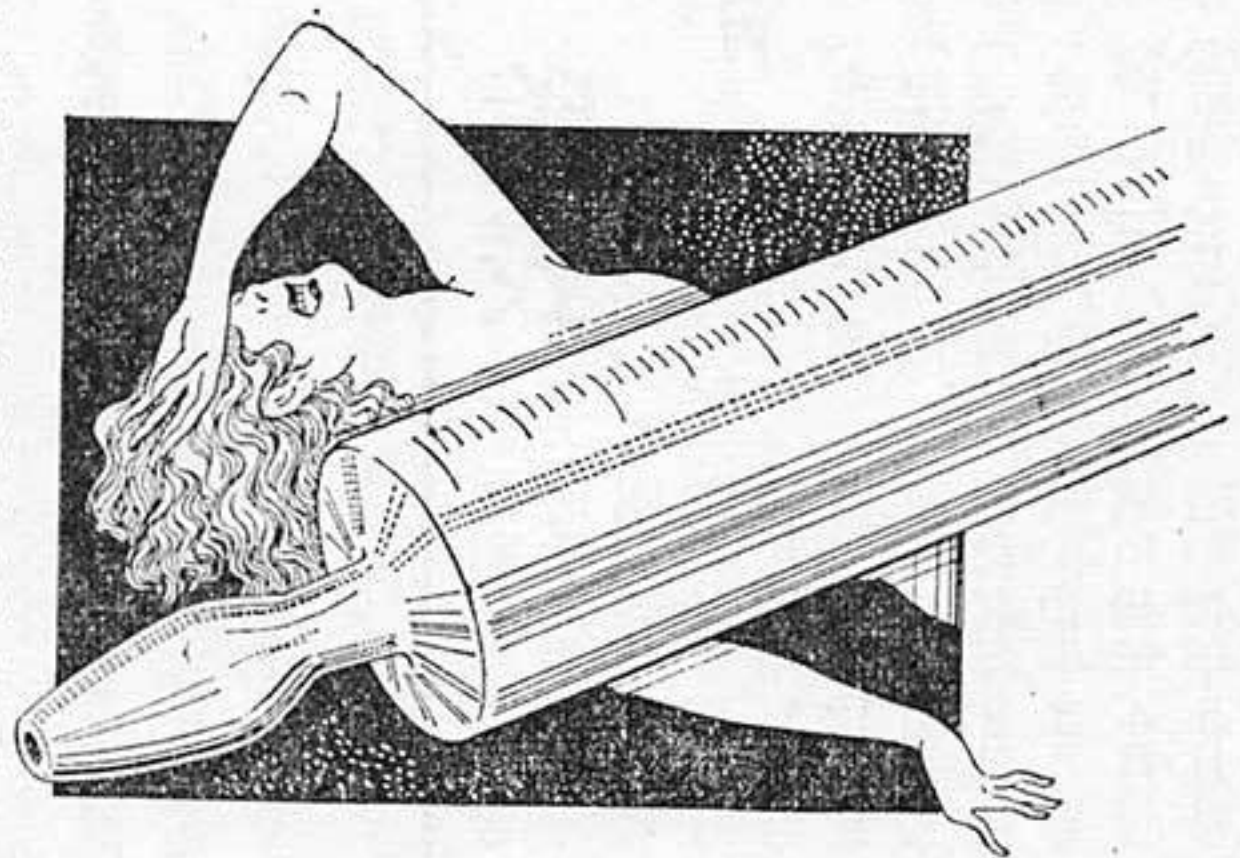
すから、御入用の分は、お早い目にお申込み願います。

昭和38年11月号 (定価二五〇円)	昭和39年7月号 (定価三〇〇円)	昭和40年6月号 (定価三〇〇円)
昭和39年2月号 (定価二五〇円)	昭和39年8月号 (定価三〇〇円)	昭和40年7月号 (定価三〇〇円)
昭和39年3月号 (定価二五〇円)	昭和39年9月号 (定価三〇〇円)	昭和40年8月号 (定価三〇〇円)
昭和39年4月号 (定価二五〇円)	昭和39年10月号 (定価三〇〇円)	昭和40年9月号 (定価三〇〇円)
昭和39年5月号 (定価二五〇円)	昭和39年11月号 (定価三〇〇円)	昭和40年10月号 (定価三〇〇円)
昭和39年6月号 (定価二五〇円)	昭和39年12月号 (定価三〇〇円)	昭和40年11月号 (定価三〇〇円)
	昭和40年1月号 (定価三〇〇円)	昭和40年12月号 (定価三〇〇円)
	昭和40年2月号 (定価三〇〇円)	昭和41年1月号 (定価三〇〇円)
	昭和40年3月号 (定価三〇〇円)	昭和41年2月号 (定価三〇〇円)
	昭和40年4月号 (定価三〇〇円)	昭和41年3月号 (定価三〇〇円)
	昭和40年5月号 (定価三〇〇円)	昭和41年5月号 (定価三〇〇円)

浣腸体験報告

セロポン使用の記

栗瀬 長



T氏の談話を略記しよう。過日の会合の折の貴重なる体験談の一駒である。

「会社のトイレに入ったんだ。プラスチックの仕切りで男女別になっているが、隣りが女子用で、声は丸聞えなんだ。まあ、こういった具合だ。」

『下痢しちゃって困ってるのよ。どうしたらいいかしら。これから彼と映画に行くの。困ったわ』

『ほんと。あ、いい方法があるわ、あんたセ

ロポンしってる?』

『え? セロポン? あんた、あれ使ってるの、生理用品でしょ』

『ちがうわよ、生理じゃないのよ。あんた見たことある?』

『ないわ、名前だけ。だって挿入するなんてこわいもの』

『そうじゃないの、下痢の時使うのよ』

『へえ? どうやって』

『私も友達に教えてもらったのよ。お尻の穴

に入れとくのよ、中でふくれて栓になっちゃうから、下痢してても大丈夫。やってもらいなさいよ、具合いいから』

てな調子さ。いや実は俺も試してみたんだが仲々乙なものさ。一ダース買ってきたから皆さんに分けるよ、栗瀬さん、一つ実験記をものにしてもらいたいんだが」

といった訳で、皆の要望により、ここにセロポン使用の記を書くはめとなった次第である。

○

前置きはこの位にして、その折T氏から分けられた二個のセロポンの実験結果を発表しよう。

セロポン、東京はエーザイの発売する挿入式生理用品であることは皆様御承知の通り。直径一・三センチ、長さ三・二センチの丁度菌形をした、脱脂綿を固化化したものと思えばよい。これを腔部に挿入すると、メンスの際、腔内で適当に出血を吸収するというわけだ。

こうしたタンポン式生理用品は第一四回アメリカ医学会の総会でも取りあげられ、従来のアンネ方式よりまさっている。特にスポーツ、舞台上で活躍する場合に、ということ

アメリカではタンポン式が広まり、既にタンパックスなる輸入品も発売されている。

さて、手にしたセロポンを一個、テストとして、ビーカーに水を入れ、その中に落してみた。セロポンには、丁度鼠のしっぽよろしく、一方に紐がついていて長さ五センチ位。紐のない方から挿入し、取り替えの際は、この紐を引っ張って容易に取り出せる仕組だ。水に落したセロポンは、瞬時に水を吸い、みるみる太さ三センチ、長さ六センチ位の脱脂綿となると同時に、おながが二つに割れてしまった。つまり、水を吸えば、長さ十二センチ、幅三センチの脱脂綿を、真中で二つ折りにし、水気を完全にとって固形化したものと思えばいいのだ。その両端に紐がついて輪になっていると考えるともらいたい。

さて、愈々本格的実験に入ろう。毎度手馴れたグリセリン浣腸器で、五〇%グリセリン五〇CCを浣腸し、すぐセロポンを肛門に挿入した。かさかさのセロポン挿入には一寸抵抗を感じたので、周囲にワセリンをぬったところ、実にわけなくすりと挿入出来た。

二分、三分、そろそろ便意を感じてくる。我慢しつつ、肛門からぶら下った紐にそって指を挿入してみれば、セロポンは水分をすっ

てふくれ上り、内側から肛門を塞いでいることがよく分る。

五分六分、便意は愈々つのるが、セロポンの栓は容易に排便を許さない。美事、排便抑制の目的を達しているのだ。七分、八分、ああ我慢の限界が近づいて、懸命にひきしめる肛門から僅かに浣腸液がしたたり落ちるのが感ぜられるが、固形物は完全に押えられている。十分、やや面倒になって、肛門からぶら下っている紐をひくと、ぬるりとセロポンは抜けて、グリセリンで程よく軟化した便が一時に滴り落ちたのであった。その時のセロポンの直径は一・五センチ、長さは四・五センチであった。

ビーカーの水中では完全にふくれ上ったセロポンも肛門内、即ち直腸基部では、直腸壁に圧迫されて、親指大に止ったのであろう。T氏の言によれば、かの女性は下痢が止められると称していたようだが、肛門活約筋は相当伸縮する。セロポンは棒状にしかならないとすれば、果してしみ出してくる水分を完全にくい止めることが出来るかどうか、意志の問題であるとしても、やや疑問である。

しかしながら、固形物の粗相を防ぐことは充分に可能と思われた。

こうした実験の結果として浣腸の際二つの用途を考えることができると思う。

第一が医療目的としてだ。看護婦さんはよく口にする。

「さ、お薬がよくきくように、五分位我慢しましょうね」

といって脱脂綿を肛門に当てる。これが不要になる。注入がすんだらすぐ、セロポンを挿入してしまうのだ。五分位経過したら、紐をひいて抜けば、よい結果が、得られるだろう。患者も、懸命になって肛門を引きしめる苦勞から救われるというものだ。

第二に浣腸プレイ、殊に責道具として有効だ。手足を縛って浣腸をかけた女の肛門に、二つ三つのセロポンをつづけさまに挿入しよう。

「いいか、十五分我慢するんだぞ」

なんて言わなくても、彼女は充分に我慢に耐えられるだろう。いや我慢に耐えられるどころか、二つ三つと挿入されたら、排便したくとも出来ないのではなからうか。そんな空想をしてみるのも楽しい。

材料を御提供下さったT氏に厚く感謝の意を表すると共に、同好の諸氏への御報告としたい。

書籍紹介

『カシモド』の恋

間宮清満彦



でも、それは杞憂でございました。お嬢さまは、その日、女の証しを得たのでございましたから――。

私はジャンパーを脱いで拵げ、

「ここに横におなり下さい」と云いました。

そのあと私は、腰の手拭を小川に浸して、血だらけになった白い太腿を、綺麗にして差上げたのでございますが、三樹子お嬢さまは身じろぎもせず、平然としていらっしゃいました。

ただ、それだけのことでございますが、その夜私は、稚い恥毛が疎らに生えた、お嬢さまの局部が、頭にちらついて眠れず、なぜ手拭いで拭く位なら、私の舌で舐めて差上げなかつたのだらうと、後悔したわけでございます。その夜から――ハッキリ、その夜から、私は三樹子お嬢さまに恋したのでございました（206頁）

やがて彼女は、終戦直後、彼女の生母と同棲していた志村プロデューサーの勧めで映画界にはいる。彼女は一作、二作とスターへ近付いて行くが、あるうことか志村と肉体関係を結ぶ。

志村と琵琶湖畔のホテルで三泊して帰宅し

一月五日、S書店に依頼していた梶山季之

の新刊が来ていた。（私ハ彼ノ描クS・M・

フェチ等ニ魅セラレ、書店ニ彼ノ本ハ全部届

ケル様ニ依頼シテ居ルノデアル）

『女の踏絵』と題する短編集（講談社）であ

った。四編あったが、フェチシストの私を満

足させたのは、最後の『白い炎の女』（203頁

と251頁）だった。

主人公は東洋映画の看板女優・草壁三樹子

に仕える忠実な、どもりで近眼の下僕の『カ

シモド』である。彼の名は『ノートルダムの

僵僂男』に由来している。

草壁三樹子は、日本でも指折りの大富豪を

父に新劇の名女優を母にして生れた彼女であ

り、『カシモド』は彼女が九才の時初めて会

ったが「△このお嬢さんは、男をお迷わせに

なる▽」と思うほど腐たけていた。

昭和二十四年夏、軽井沢の別荘での事であ

る。三樹子は林の中で初潮を見るのだが、そ

の時の描写。

△正真な話、私はお嬢さまが、林の中で男

から乱暴されたのではないかと思いました。

た時の描写。

△襖をあけた瞬間、私の目についたのは、押し入れの下段に、一塊りになっている下着の山でございました。流石に下着とストッキングだけは、母屋の女中さんに、洗濯を頼めなかったと見えます。

お恥しい話ですが、私は一番上に載っているナイロン・パンティに、思わず手が延びておりました。すると、それは生暖いではありませんか！

旅行から帰ったお嬢さまは、風呂へ行く前に、汚れたそれを脱いで、整理ダンスの中から、代りを持って母屋に行かれたものと見えます。

私は震える指で、その下着のある部分を裏返し、電燈の光に曝しておりました。

志村プロデューサーとの情事の痕跡を、私は探していたのでしょうか。

水色のナイロンの下着は、柔かく電燈の光を弾いて、ある部分だけが、^{くろず}黝んだように変色した姿を、くっきり現わしています。

私は、その黝んだ部分を見た瞬間、

△ああ、三樹子！▽

と心に叫んで、それに顔を埋めたのです。

私はそのパンティを憎みつつも、自分の欲

情を抑えることはできなかったのてございませう。そうして、その夜から、三樹子さまの肌についた下着が、私にとっては、三樹子さまの代用品になったわけでございます▽（222頁）

次々に、三樹子は男と関係するが、それに伴って『カシモド』の彼女の下着に対する執着も深くなった…。

三樹子が二十七才になった時、結婚を思い若手実業家と婚約するが、一年もすると彼女は婚約を解消してしまう。

解消を発表した日、『カシモド』は、長い間の望みであった三樹子の愛を得る。そしてその行為は、刷毛による前戯によって開始され、そして…。

△お嬢さまの躰の動きは、次第にはげしく微妙なものとなり、それはいつしか、全身の筋肉の痙攣状態にまで変化して行ったのです。

「ああ！ たまらない。足の指を、足の裏を舐めておくれ！」

私は、汚いともおもわず、お嬢さまの足の裏に唇をつきました。

足の裏に、あれほどの性感帯が隠されていたようとは、私も不覚にも知らなかったのですが、お嬢さまは野獣が咆哮するような声をあ

げられ、途端に失神されたのです……。

そのあと、私も一匹の獣となって、失神されている三樹子さまの躰を、たつぷりと堪能したのでございます▽（249頁）

その日から二週間、『カシモド』は三樹子の△まめめらしい奴隷として、あるときには夫として▽くらしした。

しかし、彼は四十九才という齡には勝てず不能に陥る。三樹子は彼を罵る。

そして、最後の、ついに『カシモド』が彼女と別れる時の描写。

△その炎は、男を灼きつくす炎の色でございました。男を迷わすと思っていたのは、浅墓な私の第一印象で、三樹子さまは男を灼き殺すような女性だったわけでございます。

私は、翌朝、四谷の隠れ家を出ました。その時の私の表情は、きつと病み上りの幽鬼のような顔つきだったろうと、今でも苦笑と共に思い出されるのでございます▽（251頁）

以上の様に、処々抜萃してごらんにいれた通りS派にとっては真に味けないものであるが、M派、そして特にフェチシストには、一見しても損は無いと思い、ここに紹介した次第である。

（完）

〔最新版〕 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙(9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G 1	顔面から全身嚴重縛	(東浦)
G 2	アグラで縛られる	(玉田)
G 3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G 4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G 5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G 6	縄に羞らう裸しぼり	(長野)
G 7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G 8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G 9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G 10	恐怖のいたぶり	(新井)
G 11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G 12	全裸しぼりと浣腸器	(玉田)

G 13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G 14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G 15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G 16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G 17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G 18	諦観の後手しぼり	(玉田)
G 19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G 20	足首と後手首と縛り	(玉田)
G 21	二つの乳房アップ	(長野)
G 22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G 23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G 24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G 25	肌につき刺さる荒縄	(大塚)
G 26	机の脚に縛られる女	(新井)
G 27	革の猿轡で責める	(新井)
G 28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G 29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G 30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G 31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G 32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G 33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G 34	典型的な股間しぼり	(大塚)
G 35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G 36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G 37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G 38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)

G 39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G 40	女囚哀歎	(宇治)
G 41	女囚の縛られ姿	(宇治)
G 42	オシメカバー縛り	(大塚)
G 43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G 44	トイレを前にして	(大塚)
G 45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G 46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G 47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G 48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G 49	嚴重荷造縛りの全裸	(玉田)
G 50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G 51	全裸胴絞め首縄猿轡	(木村)
G 52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G 53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G 54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G 55	椅子に跨がされた女	(新井)
G 56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G 57	色魔に脱がされる	(新井)
G 58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G 59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G 60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G 61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G 62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G 63	強奪されたパンティ	(大塚)
G 64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G 65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G 66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G 67	目かくしのハリッケ	(大塚)
G 68	首枷のさらしもの	(大塚)
G 69	木馬責め斜め後姿	(大塚)

G 70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G 71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G 72	火あぶりにあう女	(大塚)
G 73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G 74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G 75	白肌で縄にうそぶく	(長野)
G 76	縄にもだえる美女	(絹川)
G 77	美貌をいためつける	(絹川)
G 78	首吊りの責め	(新井)
G 79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G 80	全裸後手足首連繫縛	(玉田)
G 81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G 82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G 83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G 84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G 85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G 86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G 87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G 88	美麗の全裸に嚴重縄	(玉田)
G 89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G 90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G 91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G 92	六尺揮巨大臀部虐め	(大塚)
G 93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G 94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G 95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G 96	臍乳房強調喰込む縄	(大塚)
G 97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G 98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G 99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G 100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歓 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	脐そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外的後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外的逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上的若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ (東浦)

M資料分譲品一覧

○新人S女性出現○

- 遅ましき股に挟まる
大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり
大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円
- 縛った男をムチで料理
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 蟻涙の雨を全身に浴びる
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香
大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円
- 顔面に女の尻が乗る

- 大手札七枚一組 略号(あう) 一五〇〇円
- 人間犬の芸仕込み
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女
大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

- 人間椅子の御褒美
大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円
- 飼犬に餌を与える
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
- 人間馬の調教プレイ
大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制
大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇円
- 股責めにあう男の顔
大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇円
- 女に縛られて弄られる
大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇円
- 踏みにじられる顔面
大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇円
- 肩車に奉仕する青年
大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇円

- 男を縛って玩具にする
大手札三枚一組 略号(まで) 五〇〇円
- 首を太股で絞めあげる
大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇円
- 灰皿にされた男
大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ
大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態
大手札三枚一組 略号(そろ) 五〇〇円
- 美女の手で縛られる過程
大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇円
- 女御主人に使役される男
大手札四枚一組 略号(そち) 六〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く
大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味
大手札三枚一組 略号(そは) 五〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者
大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇円
- 素足を舐める構図
大手札四枚一組 略号(そへ) 六〇〇円

☆異色文献資料分譲品☆

鼻 いじめ三態

大手札三枚一組 略号(はね) 四〇〇円

山原清子

寝棺の中の裸婦

大手札二枚一組 略号(ねか) 三〇〇円

山原清子

刺青姐御禪一本艶姿脇差

大手札八枚一組 略号(てね) 一五〇〇円

山原清子

刺青姐御禪一本艶姿短刀

大手札十二枚一組 略号(てし) 二〇〇〇円

山原清子

刺青姐御腰巻一丁艶姿短刀

大手札八枚一組 略号(てな) 一五〇〇円

山原清子

刺青姐御腰巻一丁艶姿脇差

大手札十二枚一組 略号(てふ) 二〇〇〇円

山原清子

黒禪奔放姿態

大手札十枚一組 略号(ろち) 一〇〇〇円

刑部典子

碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 略号(のん) 三〇〇円

刑部典子

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 略号(いね) 一〇〇〇円

山原清子

白禪奔放姿態

大手札十枚一組 略号(ろて) 一〇〇〇円

刑部典子

入墨を踏みにじる

大手札八枚一組 略号(いつ) 八〇〇円

山原清子

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 略号(はた) 一〇〇〇円

山原・鈴木

裸女レスリング

大手札四十枚一組 略号(れす) 三五〇〇円

大塚・山原

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号(かる) 五〇〇円

山原清子

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号(かへ) 一〇〇〇円

山原清子

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号(かに) 一〇〇〇円

山原清子

乳房責め五態

大手札五枚一組 略号(てら) 六〇〇円

山原清子

禪美に羞じらう

大手札六枚一組 略号(こん) 八〇〇円

玉田美佐子

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 略号(うの) 一〇〇〇円

山原・大塚

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 略号(うな) 一〇〇〇円

山原・大塚

山原を責める大塚

大手札八枚一組 略号(うね) 一〇〇〇円

大塚・山原

逆さ吊り正面背面

大手札二枚一組 略号(つる) 五〇〇円

増田みゆき

夫婦連縛鼻責

大手札十枚一組 略号(らか) 一二〇〇円

増田夫妻

夫を責める新妻

大手札十枚一組 略号(はや) 一二〇〇円

増田夫妻

牛男をのりこなす新妻

大手札十枚一組 略号(はま) 一二〇〇円

増田夫妻

完全逆さ吊りフォト

大判三枚一組 略号(さつり) 一〇〇〇円

木村洋子

両足首括り逆さ吊り

大判五枚一組 略号(さか) 一〇〇〇円

梨花悠紀子

逆さ吊りの女体折檻

大判五枚一組 略号(させ) 一〇〇〇円

梨花悠紀子

手足逆滑車宙吊り

大判五枚一組 略号(さと) 一〇〇〇円

梨花悠紀子

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にん) 四〇〇円

安原さゆり

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にの) 四〇〇円

安原さゆり

妊娠九カ月の腹部

大手札三枚一組 略号(にみ) 四〇〇円

安原さゆり

八カ月の妊婦腹

大手札三枚一組 略号(にへ) 四〇〇円

安原さゆり

六カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にそ) 三〇〇円

安原さゆり

血紅切腹連続写真

大手札十二枚一組 略号(のせ) 二〇〇〇円

大塚啓子

血紅使用美しき女の屍体

大手札十二枚一組 略号(のり) 二〇〇〇円

大塚啓子

血紅使用立腹に悶える女体

大手札十枚一組 略号(のさ) 一八〇〇円

大塚啓子

血紅使用切腹した女の死体

大手十二枚一組 略号(のい) 二〇〇〇円

大塚啓子

血紅使用屠腹される女体

大手札十二枚一組 略号(のる) 二〇〇〇円

大塚啓子

血紅使用絞首された女体

大手札六枚一組 略号(のひ) 一二〇〇円

大塚啓子

血紅使用切腹に苦悶する女

大手札十枚一組 略号(のむ) 一八〇〇円

大塚啓子

檻に入れられた女

大手札二枚一組 略号(もの) 三〇〇円

山原清子

浴室の全裸刺青

大手札五枚一組 略号(よな) 六〇〇円

山原清子

アルバム「美しき縛しめ」第六集 愈々完成

緊縛美女艶姿百態

頒価一〇〇〇円(送共)

略号 「美6」

特アート紙グラビヤ印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

新人モデル、ベテラン・モデル緊縛写真オンパレード

〔出演モデル〕 ○山原清子○東浦ひかる○木村洋子○鈴木晃子○増田みゆき○大塚啓子○玉田美佐子○梨花悠紀子○絹川文代○長野良子○桜井葉子○新井マリ子○刑部典子の十三名

十三名の若々しいピチピチとした若鮎のような新鮮なモデル達の柔肌に厳しく掛った縄目、これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びだしました。いずれも未だどんな形式にしる一度も発表したことのないものばかりです。最近の傑作、力作をすべて網羅しました。十三名の美女の緊縛艶姿百態が、この一冊で皆さまの物となるのです。何卒一冊を座右にお備え下さい。

アルバム「美しき縛しめ」第一集、第二集、第三集「美3」は残念ながら売切れですが、「美4」「美5」「美6」は只今在庫しております。引続いて「美7」「美8」の企画をしておりますので、どうか一括してお揃え下さい。

◆美しき縛しめ百態、新人ベテランモデル競艶決定版内容◆

亀甲縛り乳房責め (大塚)
猿ぐつわに悶える (山原)
緊縛に微笑む典子 (刑部)
瘦躯をくびる縄目 (木村)
逆さ吊りに泣く新妻 (増田)
痛めつけられる牝豹 (鈴木)
益々肥った肌に縄 (東浦)
鮮明な刺青緊縛 (山原)
長髪は肌になとう (長野)
ゆれる吊られた女体 (梨花)

太股の刺青をはだけ (山原)
荒縄と荒蕙で苛なむ (大塚)
顔をいじめられる (新井)
柱の立しぼり (山原)
赤いオシメカバー (絹川)
荒縄拷問哀愁 (梨花)
全裸の後手吊り (玉田)
案山子縛り (新井)
正面ウエスト縛り (絹川)
可愛い尻えくぼ (長野)
樹間のハダシの囚女 (桜井)

肉体自慢の開股縛り (長野)
火あぶりにあう囚女 (大塚)
汚れた麻縄縛り (絹川)
豊胸を二つに割る (長野)
水着を剥がれて縄 (梨花)
ゴムカバーの艶 (大塚)
真白き肌に樹洩れ日 (絹川)
着衣は無惨に剥がれ (山原)
裸身を晒して悶える (梨花)
縄は胸に息苦しい (大塚)
背中刺青をさらす (山原)

全裸後手縛り引回し (大塚)	両手吊りに耐えぬく (玉田)	後手吊り麻柱晒し (山原)	ネットをかぶらせる (梨花)	山の木に曝す (絹川)	庭前に見せる艶姿 (山原)	高小手足首縛り (大塚)	手ぐさり足枷 (絹川)	裸身に光と影の綾 (大塚)	後手は高々と吊り (梨花)	木馬に跨がる乙女 (大塚)	逆さ吊りにあえぐ女 (梨花)	デニムの拘束衣 (大塚)	海老縛りに耐える (東浦)	女囚第六十三号 (梨花)	吐きだした布片 (絹川)	白肌にフンドシ縛り (大塚)	後手の背面さらし (山原)	柔肌に喰い入る麻縄 (大塚)	後手吊りに浮かぶ女 (梨花)	鎖に吊られた両手 (大塚)	黒革製の猿ぐつわ (新井)	スタレの中の晒し (玉田)	巻煙草責め (大塚)	日本髪腰巻しぼり (山原)	後手高小手しぼり (絹川)	立木縛りムチ打ち (桜井)	エビしぼり苦悶姿態 (梨花)	高島田着物あて姿 (山原)	臀部誇張股間縛り (大塚)	強烈な後手と乳房 (梨花)	脱げかけたズロース (絹川)	柱に後手しぼり (玉田)	強烈な鼻ひねり (大塚)	足挙げ椅子しぼり (東浦)
手摺りに開股責め (梨花)	裸身の開股縛り (大塚)	お茶目ぶり発揮 (長野)	猿ぐつわと荒縄縛り (大塚)	高島田の全裸の縛り (山原)	裸身にハイヒール (大塚)	ブロックの石抱き (木村)	生ゴムの猿ぐつわ (大塚)	緊縛の悦虐表情 (梨花)	後手に縄はきびしく (刑部)	豊満に挑戦する縄 (東浦)	黒紐は白肌に映える (絹川)	裸身を踏まれる (大塚)	破られたシュミーズ (梨花)	六尺禪は白く映える (大塚)	いたぶられる足 (梨花)	蕙の中の緊縛肢体 (大塚)	鼻責めにあう晃子 (鈴木)	責めに酔う恍惚境 (東浦)	逆エビにもだえる (山原)	椅子責め媚態 (大塚)	見事な臍窩を晒す (大塚)	豊満を割る縦縛り (東浦)	足下にもがき苦しむ (新井)	黒革のフンドシ縛り (大塚)	浣腸器の恐怖 (大塚)	美肌は縄に酔う (長野)	吊られ吊られて (木村)	白禪の後手しぼり (大塚)	責めに愉悦する女 (山原)	マゾの境地露呈 (木村)	プレイに疲れたる (絹川)	乳房は光り輝やく (大塚)	全裸美プラス縄目 (長野)	

★総天然色(カラー・プリント)作品写真分譲★

従前より天然色の色彩豊かなカラー写真の分譲を希望されておりました。比較的高価になる写真の果して注文される方が纏めてあるだろうかという危険が、今回、妙齢の女性として稀有の豪華な刺青を誇る山原清子嬢をモデルとして、角の事な刺青を黒白写真だけで折角の事は物足りないという向きに、対しては、この絢爛たる天然色写真は、早物を見る以上、注文の方には、早速プリントの上、急送申し上げます。尚、先月号にて予告しました通り、琵琶湖を背景に展開した大塚啓子、東浦ひかる対抗の八女相撲の天然色写真も併せて分譲いたします。

天然色刺青写真

☆モデル 山原清子
☆手札型カラー・プリント

【第一組】 略号(ゆき)

手札型三枚一組 一〇〇〇円
全裸の清子嬢の背中、刺青が極彩色で極めて美しく出ています。

【第二組】 略号(ゆこ)

手札型三枚一組 一〇〇〇円
色彩豊かな室内の背景の前に浮かびあがった刺青の色模様。

【第三組】 略号(ゆさ)

手札型三枚一組 一〇〇〇円
羞らいたながらも背中全面にライ

トを浴びて刺青の全貌を見せる。

【第四組】 略号(ゆし)

手札型三枚一組 一〇〇〇円
腹這いに横坐りに全裸の姿態を刺青中心にあからさまに見せる。

【第五組】 略号(ゆせ)

手札型三枚一組 一〇〇〇円
豊かな乳房、お臍を中心に刺青女性の前面の魅力もどうぞ。

三面鏡の刺青裸身

☆モデル 山原清子
☆手札型カラー・プリント

【第一組】 略号(ゆそ)

手札型三枚一組 一〇〇〇円
三面鏡の前で背中の刺青を十分に

【第二組】 略号(ゆた)

手札型三枚一組 一〇〇〇円
奔放な姿態を立ったまま三面の鏡に映し出して裸身のすべてを。

【第三組】 略号(ゆち)

手札型三枚一組 一〇〇〇円
豊かな刺青の臀部をあらわに見せて鏡の前でさらす媚態の様々。

【第四組】 略号(ゆて)

手札型三枚一組 一〇〇〇円
スツールに腰掛けて全裸の刺青姿態を鏡の前に投げだした清子。

【第五組】 略号(ゆと)

手札型三枚一組 一〇〇〇円
刺青の背中を大鏡に映して、こちらを向いて微笑んだ媚の姿。

天然色緊縛写真

☆モデル 山原清子
☆手札型カラー・プリント

○柱宙縛りにあえぐ

手札型三枚一組 一〇〇〇円
床柱にきりきり縛られて両足先が宙に浮いたままもがく姿態。

○高手小手に悶える全裸

手札型三枚一組 一〇〇〇円
たった一枚の腰布も剥ぎとられて高手小手で悶える華麗な肌。

○緊縛に映える入墨

手札型三枚一組 一〇〇〇円
赤い紐に白い肌、そして、のたう刺青が美しく光に映える。

○脱がされた着物の中で

手札型三枚一組 一〇〇〇円
着物、長襦袢、腰巻、帯、それらの色彩の中に埋れた緊縛裸女。

○縄にのたう裸身

手札型三枚一組 一〇〇〇円
定評のある清子の悶え方、それが豊富な色彩の中でのたう。

○腰巻一つで縛られる

手札型三枚一組 一〇〇〇円
腰巻一つで縛られて、腰が回り、豊かな肢体の華麗な色模様。

天然色野外女相撲

☆モデル 大塚啓子、東浦ひかる

☆手札型カラー・プリント
をカラー写真に、女体の躍動美々にご覧に入れ、大塚啓子、東浦ひかるの二嬢の取組を、入して、特に大塚啓子は自分で購した。琵琶湖の美しい自然を、タクとした女相撲の各種姿態をお楽しみ下さい。

琵琶湖畔天然色女相撲

【第一組】 略号(うに)

手札型六枚一組 二〇〇〇円
波静かな湖畔の砂の上に、二人の裸女に組んだ相撲、一本の二人の裸女、の強い姿が自然の中に映える。

【第二組】 略号(うひ)

手札型六枚一組 二〇〇〇円
のびのびとした大自然の中、何の妨げもない自由さで大きく投げを打つ見事なきまり業の瞬間。

【第三組】 略号(うほ)

手札型六枚一組 二〇〇〇円
実戦さながらに力をこめて相戦、わす女相撲の刹那、刹那を早いシャッターでキャッチした迫力場面。

【第四組】 略号(うと)

手札型六枚一組 二〇〇〇円
激しい吊り合いから投げの打ち合い、そして最後は強引な首投げ、がきまって砂の上に横転する。

【第五組】 略号(うち)

手札型六枚一組 二〇〇〇円
十数度の熱戦で汗と砂にまみれた両者が一呼吸いれて、更に最後の見せ場である大業の応酬。

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号(かみ) 三〇〇円
東浦ひかる

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号(かく) 三〇〇円
東浦ひかる

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号(かな) 三〇〇円
東浦ひかる

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号(かむ) 三〇〇円
東浦ひかる

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号(れち) 一〇〇〇円
梨花悠紀子

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号(きか) 三〇〇円
絹川 文代

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号(いるり) 一〇〇〇円
梨花悠紀子

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号(かふ) 三〇〇円
東浦ひかる

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 三〇〇円
遠藤百合子

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号(ほの) 三〇〇円
絹川 文代

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号(るい) 四〇〇円
大塚 啓子

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号(るは) 五〇〇円
大塚 啓子

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号(ほは) 三〇〇円
大塚 啓子

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号(ほい) 三〇〇円
大塚 啓子

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号(へき) 五〇〇円
大塚 啓子

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号(へか) 五〇〇円
大塚 啓子

女相撲と女斗美

モデル 木村洋子、大塚啓子

女相撲組打ち

大手札八枚一組 略号(すか) 八〇〇円
相撲マワシ着用

女相撲投げ業

大手札八枚一組 略号(すね) 八〇〇円
相撲マワシ着用

相撲マワシ着用

大手札五枚一組 略号(めん) 五〇〇円
白晒六尺着用

白晒六尺着用

大手札五枚一組 略号(めき) 五〇〇円
白晒六尺着用

白晒六尺着用

大手札八枚一組 略号(えく) 八〇〇円
白晒六尺着用

女相撲四十八手

大手札六枚一組 略号(すは) 八〇〇円
略号(すは)

女相撲四十八手

大手札六枚一組 略号(すむ) 八〇〇円
略号(すむ)

女斗立業の応酬

大手札六枚一組 略号(すち) 八〇〇円
略号(すち)

立業の攻撃場面

大手札六枚一組 略号(すた) 八〇〇円
略号(すた)

寝業の女レス

大手札六枚一組 略号(すほ) 八〇〇円
略号(すほ)

女斗連続場面

大手札九枚一組 略号(すく) 一〇〇〇円
略号(すく)

☆女体切腹資料の部☆

血紅女体切腹腸露出

大手札十二枚一組 略号(せい12) 一〇〇〇円
大塚 啓子

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 略号(せん) 四〇〇円
梨花悠紀子

血紅切腹祭壇の女体

大手札三枚一組 略号(せぬ) 三〇〇円
大塚 啓子

血紅使用苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 略号(おお) 五〇〇円
大塚 啓子

肉体美全裸女体切腹

大手札五枚一組 略号(くえ) 五〇〇円
大塚 啓子

長野 良子

大手札五枚一組 略号(なせ) 五〇〇円
略号(なせ)

瘦身女体切腹姿態

大手札二枚一組 略号(ねは) 三〇〇円
細川アヤ子

瘦身女体自刃姿態

大手札三枚一組 略号(ねに) 三〇〇円
細川アヤ子

血紅切腹血塗れ下腹

大手札五枚一組 略号(わい) 五〇〇円
大塚 啓子

殿中の女性切腹

大手札三枚一組 略号(わこ) 三〇〇円
大塚 啓子

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 略号(わは) 五〇〇円
大塚 啓子

豊満の下腹を切る

大手札五枚一組 略号(えん) 四〇〇円
東浦ひかる

女体介添切腹

大手札四枚一組 略号(あか) 四〇〇円
甘木 春子

下腹を切り裂く

大手札三枚一組 略号(やい) 三〇〇円
大塚 啓子

下腹に刺す氷の刃

大手札三枚一組 略号(やお) 三〇〇円
大塚 啓子

柔肌を切り裂く女

大手札三枚一組 略号(やえ) 三〇〇円
大塚 啓子

海老縛りの表情

大手札三枚一組 略号(えふ) 四〇〇円
大塚 啓子

○臨月腹妊婦資料の部

臨月腹妊婦緊縛	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号(にち)
診察を受ける妊婦	大手札四枚一組 五〇〇円 田中美佐子 略号(にし)
臨月腹開陳	大手札四枚一組 五〇〇円 田中美佐子 略号(にり)
臨月腹開陳	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号(にす)
柱縛りの妊婦	大手札二枚一組 三〇〇円 田中美佐子 略号(にや)
臨月のヌード	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号(にわ)
妊婦の裸身像	大手札二枚一組 三〇〇円 田中美佐子 略号(にた)
縛られた妊婦	大手札二枚一組 三〇〇円 田中美佐子 略号(にる)
臨月の裸身像	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号(にお)
臨月の裸身像	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号(にぬ)
突き出た臨月腹	大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号(にい)

○刺青女体資料の部

入墨の高手小手	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いち)
縄に悶える入墨	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いへ)
足吊り三態	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いと)
剥れた腰巻	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いお)
女一匹御意見無用	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いほ)
玉取姫が凄む	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いこ)
全裸緊縛立像	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いぬ)
入墨ヌード	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いよ)
後手吊りの構図	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いほ)
黒細帯の裸身	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いわ)
黒褌を誇る	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いか)

入墨 自慢	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いり)
黒ふんどし入墨姿	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(くの)
黒ふん媚態の魅力	大手札五枚一組 五〇〇円 山原 清子 略号(くな)
黒褌背面模様	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(くこ)
黒ふん手吊り責め	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(くれ)
全裸入墨姿態	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いれ)
晒六尺ふんどし	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(ろと)
白六尺褌一本の姿	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(ろに)
白褌後手高手小手	大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号(いら)
日本髪全裸強烈縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号(いこ)
洋髪全裸強烈縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号(いこ)
日本髪全裸股間縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号(いこ)

山原 清子 略号(いさ)	可憐島田髻全裸縛り
山原 清子 略号(いみ)	黒フン高手小手縛り
山原 清子 略号(ひろ)	入墨女体全裸像
山原 清子 略号(ひへ)	黒褌刺青女体美
山原 清子 略号(ひね)	六尺褌をするまで
山原 清子 略号(ひは)	連続二十ポーズ組写真
山原 清子 略号(ひに)	白ふんどし脇差切腹
山原 清子 略号(ひぬ)	白ふんどし短刀切腹
山原 清子 略号(ひほ)	刺青姐御腹巻脇差
山原 清子 略号(ひり)	刺青姐御腹巻短刀
山原 清子 略号(ほか)	文身女体股間縛り
山原 清子 略号(ほき)	

〔代理部新版分譲品一覽〕

腸露出無念腹切腹

大手札十枚一組 略号 八〇〇円

大塚啓子 略号 (せ10)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号 四〇〇円

大塚啓子 略号 (ひた)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号 四〇〇円

大塚啓子 略号 (ひと)

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

甘木春子 略号 (まに)

女子斗争場面写真

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

大塚、玉田 略号 (のわ)

二女格闘場面写真

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

大塚、玉田 略号 (のか)

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

大塚啓子 略号 (のみ)

切腹に悶える裸身

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

大塚啓子 略号 (のそ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

遠藤百合子 略号 (のけ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

玉田美佐子 略号 (ねむ)

後手首の高縛り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

玉田美佐子 略号 (ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

玉田美佐子 略号 (ねと)

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円

大塚啓子 略号 (れは)

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円

大塚啓子 略号 (れみ)

黒いフンドンを誇る

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

遠藤百合子 略号 (くわ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

大塚啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

大塚啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

大塚啓子 略号 (むろ)

全裸脚挙姿態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

長野良子 略号 (てい)

全裸アケラ縛り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

長野良子 略号 (てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

長野良子 略号 (てほ)

六尺禪の変形姿態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

長野良子 略号 (てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 略号 二〇〇円

長野良子 略号 (てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 略号 二〇〇円

長野良子 略号 (てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

松本アサ子 略号 (まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

松本アサ子 略号 (まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

大塚啓子 略号 (へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

大塚啓子 略号 (へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 略号 四〇〇円

遠藤百合子 略号 (ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

遠藤百合子 略号 (ゆは)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

遠藤百合子 略号 (ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

遠藤百合子 略号 (ゆお)

絞首刑

大手札二枚一組 略号 三〇〇円

新宮夫人 略号 (るく)

引回しと晒

大手札二枚一組 略号 三〇〇円

新宮夫人 略号 (るに)

磔 (はりつけ)

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

新宮夫人 略号 (はみ)

晒 (さらし)

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

新宮夫人 略号 (さら)

絞首刑

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

新宮夫人 略号 (こけ)

晒台の生首

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

新宮夫人 略号 (のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

新宮夫人 略号 (のき)

斬首処刑場面

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

新宮夫人 略号 (くし)

吊り打ち

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

関谷富佐子 略号 (やり)

股間縛法悦境

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

絹川文代 略号 (ぬこ)

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

絹川文代 略号 (りこ)

責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

大塚啓子 略号 (せめ)

猪吊り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

梨花悠紀子 略号 (いの)

足挙開股責

大手札三枚一組 略号 三〇〇円

梨花悠紀子 略号 (あけ)

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号 四〇〇円

大塚啓子 略号 (むら)

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

遠藤百合子 略号 (ゆす)

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 三〇〇円

長野良子 略号 (ほふ)

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 三〇〇円

愛川悦子、田中芳代 略号 (らく)

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 三〇〇円

愛川悦子、田中芳代 略号 (らみ)

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 七〇〇円

絹川文代 略号 (らふ)

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号 (ろみ)

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号 (へに)

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円

東浦ひかる 略号 (へみ)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号 (ちら)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号 (たく)

淫らな長髪の乱れ

大手札三枚一組 三〇〇円

長野良子 略号 (ろも)

ふり乱す長髪の悶え

大手札三枚一組 三〇〇円

大手札三枚一組 三〇〇円

長野良子 略号 (ろめ)
縄目に悶える夫人
大手札三枚一組 三〇〇円関谷富佐子 略号 (ほく)
髪を引き回される夫人
大手札三枚一組 三〇〇円関谷富佐子 略号 (ほむ)
自ら施す浣腸
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (ちぬ)
浣腸器を弄ぶ女
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (ちり)
写真の中に悶える
大手札四枚一組 四〇〇円大塚啓子 略号 (けよ)
写真に埋れた裸女
大手札四枚一組 四〇〇円大塚啓子 略号 (けお)
フンドシ姿の魅力
大手札三枚一組 三〇〇円細川アヤ子 略号 (ふの)
フンドシ姿の羞らい
大手札三枚一組 三〇〇円栗本ミチ 略号 (ふへ)
フンドシの前後左右
大手札四枚一組 四〇〇円栗本ミチ 略号 (ふな)
フンドシの変わった姿
大手札三枚一組 三〇〇円栗本ミチ 略号 (ふに)
前開き、ゴムオシメカバー
大手札十二枚一組 一〇〇〇円大塚啓子 略号 (しま)
前開き布製防水オシメカバー
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (はす)
膨満正面縛り鼻責めと緊縛
大手札五枚一組 五〇〇円大塚啓子 略号 (うい)
木馬責三態
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (もく)
椅子責めの果て
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (いす)
哀婉血紅切腹
大手札五枚一組 五〇〇円大塚啓子 略号 (るな)
双胸の強調縛り
大手札三枚一組 三〇〇円大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号 (しな)
全裸の切腹悦楽(1)
大手札四枚一組 四〇〇円大塚啓子 略号 (ひた)
全裸切腹悦楽(2)
大手札四枚一組 四〇〇円大塚啓子 略号 (ひと)
乳房しばり
大手札三枚一組 三〇〇円長野良子 略号 (うは)
鼻責めと緊縛
大手札五枚一組 五〇〇円大塚啓子 略号 (うい)
木馬責三態
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (もく)
椅子責めの果て
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (いす)
哀婉血紅切腹
大手札五枚一組 五〇〇円大塚啓子 略号 (るな)
双胸の強調縛り
大手札三枚一組 三〇〇円長野良子 略号 (そう)
動感海老責地獄
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (とう)
色禪の開股縛り
大手札三枚一組 三〇〇円長野良子 略号 (いふ)
鼻責めのアップ
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (はす)
膨満正面縛り

大塚啓子 略号 (はす)

大塚啓子 略号 (はす)

大塚啓子 略号 (はす)

大塚啓子 略号 (はす)

大塚啓子 略号 (はす)

大塚啓子 略号 (はす)

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (へな)
血紅切腹絶命態
大手札三枚一組 三〇〇円絹川文代 略号 (ちの)
血紅美女の切腹
大手札三枚一組 三〇〇円絹川文代 略号 (ちた)
オムツ着用フオート
大手札七枚一組 七〇〇円大塚啓子 略号 (むね)
バンド着用開股ポーズ
大手札三枚一組 三〇〇円東浦ひかる 略号 (つん)
マニヤ全裸緊縛フオート
大手札三枚一組 三〇〇円栗本ミチ 略号 (いな)
強烈エビ縛り
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (もい)
乳房責の苦悶
大手札二枚一組 二〇〇円大塚啓子 略号 (もろ)
全裸ムチ打ち
大手札四枚一組 四〇〇円大塚啓子 略号 (もた)
強打に泣く裸身
大手札四枚一組 四〇〇円大塚啓子 略号 (むち)
裸身の晒し
大手札三枚一組 三〇〇円大塚啓子 略号 (わあ)
全裸股間縛り
大手札四枚一組 四〇〇円

大塚啓子 略号 (せら)

大塚啓子 略号 (せら)

大塚啓子 略号 (せら)

大塚啓子 略号 (せら)

大塚啓子 略号 (せら)

大塚啓子 略号 (せら)

大塚啓子 略号 (せら)

最新資料<文献写真>特別分譲品

落ちた下着後手吊

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(ろよ)

激しい緊縛プレイの連続の末、
たった一枚残ったパンティが足元
に引き上げられ、厳しい高小手
の縄尻が高々と天井へ引き上げら
れる。爪先立った脚線の緊張。

浴槽荒縄強烈折檻

大手札三枚一組 三〇〇円

山原清子 略号(ろる)

トゲトゲとした荒縄が柔肌を痛
めつける上に、更に浴槽に浸され
て緊縮する荒縄。情容赦のない折
檻の手と足は、悶える裸身を水中
に埋没させようとする。

梁から両手吊り

大手札二枚一組 三〇〇円

木村洋子 略号(ろふ)

交叉して括られた両手首は梁に
しっかりと縛りつけられた。両足
先は床から離れて全身が完全に宙
に浮いてしまった。軽量でマゾ性
のモデルだからこそ出来る離業。

床柱宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円

木村洋子 略号(ろへ)

瘦身を床柱にぐるぐると胸から

胴、膝頭、足首と括りつけられて
完全に宙に浮かんだまま正面向け
て晒される女体。全身を締めつけ
る緊縛感に苦悶の表情が漲る。

開股々間縛正面

大手札二枚一組 三〇〇円

山原清子 略号(ろほ)

麻縄による全身を縦に真二つに
割る強烈な股間縛りの上に更に両
膝を八の字に開かせ両足首を括っ
た縄を左右に引っばって後手の縄
に連結した凄惨な縄目のむごさ。

二女連縛責模様

大手札十枚一組 一〇〇〇円

大塚・山原 略号(ろそ)

後手高小手に嚴重に縛り上げ
た二女の縄尻を連結して、いたぶ
り続けると、両足だけは自由にさ
れているので、いたぶりに対して
奇妙な姿態が交錯転々とする。

二女連縛煩悶場面

大手札十枚一組 一〇〇〇円

山原・大塚 略号(ろひ)

縛られた二女の上半身は高小手
手に厳しく只自由な四本の足だけ
が空を蹴って悶えぬき、後手を連
結した縄がぎしぎしと悲しいきし
めきの声を放つ二女連縛の姿態。

股間縛刺青競艶

大手札三枚一組 三〇〇円

山原清子 略号(ろさ)

背中中の刺青をいっぱいに見せて
麻の太縄が双丘に陥没する見事な
股間縛りと刺青の競艶は、むごた
らしいサジスチックな連想を画面
いっぱいにふりまいていく。

股間縛正面表情

大手札三枚一組 三〇〇円

山原清子 略号(ろす)

豊胸をくびれる程縛った麻縄が
身体をタテに割り裂く微細の縄目
の行方を正面と背面から大写しに
よって鮮鋭なレンズの眼を通して
いきいきと描写しました。

喰込む股間縄目

大手札三枚一組 三〇〇円

山原清子 略号(ろせ)

肉づきのよい肌をまるで俵をく
びるように区切った横縄にプラス
して縦縄が身体を割った有様を側
面からのカメラアングルで前面背
面の様子を同時に捉えました。

女レスリング寝業

大手札八枚一組 一〇〇〇円

東浦・大塚 略号(ろわ)

晒の六尺褌一本の両嬢が、プロ
レスのルールに従って大胆に、奔
放にマット狭しと荒れ狂うレスリ
ングの寝業の攻防戦。双方共真剣
に興味を以って相争う数場面。

女斗美争闘シーン

大手札八枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦 略号(ろか)

裸女二人がなりふり構わず、こ
こを先途と掴み合い押さえ込み
合う女体の躍動美となまめかしい
エロチシズム。押さえる者も下
なる者もナマの裸身を晒けだす。

女相撲取組場面

大手札六枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦 略号(ろぬ)

相撲をきっちり身につけた
両者が十二分に練習を続けた上
で合せにより、一方が仕手とな
りがっぷり四つに組んで激しい攻
戦が繰りひろげられます。

女相撲実戦場面

大手札六枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦 略号(ろお)

機が熟したところで、お互いに
相手になったチャンスを逃さず、
命になったチャンスを見逃さず、
早いシャッターで次々と撮影し
いく実戦的な興味のある場面。

女相撲投業場面

大手札六枚一組 一〇〇〇円

大塚・東浦 略号(ろり)

力の籠った裸身、躍動する二
人の女体が四つに組んで投業を放
つ瞬間に、予想もしなかった美し
さで輝くように感じられる女相撲
の魅力溢れるエロチシズム。

〔秘蔵版SM資料分譲品〕

光沢印画紙極鮮明焼付

浣腸後介添え排便

大手札六枚一組 略号(かね) 一〇〇〇円

百CCの浣腸溶液注入

大手札六枚一組 略号(かと) 一〇〇〇円

グリセリン溶液注射

大手札六枚一組 略号(かて) 一〇〇〇円

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号(かた) 一〇〇〇円

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号(かち) 一〇〇〇円

アイヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号(かの) 七〇〇円

オシメを着用させる

大手札六枚一組 略号(むし) 一〇〇〇円

ゴム製オシメカバー着用

大手札六枚一組 略号(むに) 一〇〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 三〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 略号(なむ) 三〇〇円

真紅の腰巻をする

大手札三枚一組 略号(なれ) 三〇〇円

東浦ひかる

膨大な臀部責め

大手札三枚一組 略号(なに) 三〇〇円

オシメと女学生

大手札七枚一組 略号(うえ) 一〇〇〇円

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(うも) 五〇〇円

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(うわ) 五〇〇円

女奴隷を弄ぶ二女

大手札八枚一組 略号(きあ) 一〇〇〇円

股裂きと逆さ吊り

大手札三枚一組 略号(きう) 四〇〇円

口の中の詰物で汚辱する

大手札三枚一組 略号(きお) 四〇〇円

猿ぐつわのいたぶり

大手札三枚一組 略号(きさ) 四〇〇円

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 略号(きし) 四〇〇円

二女をいじめる啓子

大手札十枚一組 略号(きい) 一〇〇〇円

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号(きす) 五〇〇円

大塚、東浦 略号(きせ)

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ) 六〇〇円

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 略号(きて) 六〇〇円

凌辱されるマゾ女

大手札五枚一組 略号(きと) 六〇〇円

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円

刺青姐御の切腹

大手札四枚一組 略号(うた) 五〇〇円

柔肌を切り裂く女

大手札五枚一組 略号(きち) 八〇〇円

血紅使用介添切腹

大手札五枚一組 略号(きつ) 八〇〇円

第一回湖畔女相撲第一組

大手札二十枚一組 略号(すや) 二五〇〇円

第一回湖畔女相撲第二組

大手札二十枚一組 略号(すゆ) 二五〇〇円

第一回湖畔女相撲第三組

大手札二十枚一組 略号(すよ) 二五〇〇円

裸女砂浜での格闘

大手札十二枚一組 略号(すえ) 一〇〇〇円

叢で止めをさす

大手札十二枚一組 略号(すう)

大塚、東浦 略号(すう)

松林の中の裸女死斗

大手札十二枚一組 略号(すき) 一〇〇〇円

マワシを締めあう

大手札五枚一組 略号(うみ) 八〇〇円

女相撲好取組三番勝負

大手札十枚一組 略号(うむ) 一五〇〇円

迫力実戦女相撲

大手札十枚一組 略号(うめ) 一五〇〇円

相撲マワシ姿の三人娘

大手札五枚一組 略号(うや) 八〇〇円

女相撲を取組む三人娘

大手札七枚一組 略号(うゆ) 一〇〇〇円

大塚、東浦、木村 略号(うゆ)

室内女相撲熱戦第一組

大手札六枚一組 略号(すも) 一〇〇〇円

室内女相撲熱戦第二組

大手札六枚一組 略号(すみ) 一〇〇〇円

室内女相撲熱戦第三組

大手札六枚一組 略号(すわ) 一〇〇〇円

二女のなぶりもの

大手札三枚一組 略号(うろ) 六〇〇円

二女の馬にされる男

大手札八枚一組 略号(うま) 一〇〇〇円



紅かほる様。四月号での御通信拝見致しました。今からもう十年位も以前の事ですが、当時丁度現在の貴女位の御年配の方で境遇も似ていらっしゃる御婦人と親しくなり色々と浣腸や、おしめの事について教わった事がありますので今回の貴女の通信を見て、大変なつかしく思いました。その方とは一年ちよつとの御付合でしたが私と同じ様に胃腸の弱い方だったので、治療法など話している内どちらにも浣腸の御世話になっている事

を知り親しく交際する様になりました。大変しとやかな方で浣腸もそれを反映してか刺激性の少ないものが好きでした。中でも微温湯をイルリガートルで寝たまま便器を入れて浣腸するのが好きだったので度々して上げました。貴女のように人工便を使用する場合には、その前に浣腸して直腸をきれいにし、手製のマヨネーズにグリセリンを少し加えたものを注入して赤ちゃんの様におしめを付けて行いました。しばらくして取換えてあげるのですが予め浣腸してあるので、不快さがなくエレガントなムードの中で行えます。私は大正中期の生れ、あなたは末と思います。が、あの時代の方に、こうして愛好者を見出して嬉しく思いました。御返事を差上げます。今後文通でも致し度いと思しますので是非御返事を下さい。又貴女宛の便りを別に編集部にお預けして置きましたから御受取下さい。(東京都・山村敏夫)

花田沙登子様、ほくは四月号で貴女の投書と写真を拝見させていただきました。そのとき「奇ク」を読むようになってから三年余りになりますが、そのうちでこれほ

ど、心を曳かれたことはありません。陶酔する外には何もありませんでした。このようなサジスチックなムードと美貌を漂わす女性が真に実在するかを疑がわずにはおられませんでした。それは幻であると思えたり、否、やはり御本人がいるからであると思えたりして一つの体の中で、この二つが相争っているような衝動にかられて耐えられず、ほくはきつと女王様の御恵みを受けられるよう天にお願いして手紙を書く決心しました。ほくは二十二才の男子です。どうか貴女の奴隷にしてください。あなたに飼育されている奴隷をうらやましく思えてたまりません。ほくは以前から体力のある、美しく高慢な女性に責められたという願望を抱いておりましたが、いまだかつて一度も満されたことがありません。文書と写真から察して貴女こそ、ほくの憧れている方です。プレイをする時において、あなたにたんのうしてもらえつものであります。あなたは世の男性を思うままに征服し、忠実であることを強いる高貴の女性であると信じております。ほくは美しいあなたに女王様とドレイの関係におかれ、主従の関係におかれるため

に生きております。あなたの命令に背くことを許されない立場におかれ、服従させられることを体験したくおもいます。ほくはプレイの風景やアイディア、主導権をにぎる貴女のお喜びになることを、御自分の美しい姿を写真におさめたり、文章にして表現することがとても、素晴らしいと考えております。そうすることによって出来るだけ多くの人にわかってもらえると思います。より高いものへと進むことが出来ると思います。あなたはプレイの途中で音を上げるなどということを嫌いとのことですが、そういうところがとても好きです。あなたのドレイを組み敷いて責めると、どうするものでしょうか。ほくならブリッジをして逃がれるが、お叱りをうけねばなるまいか。どんなプレイを特にお好みであるか、どんなアイディアをお持ちであるかを書いてないこと残念におもいます。下男を教育する過程と写真の一端を是非拝見させていただきますようお願いします。最後に貴女に所有される犬、奴隷になりたく、ここに志願するものです。どうか一度お試しになつてくださるようお願い致します。(東京都・小木勇人)

○

奇ク愛読者の皆様。小生今年二十才の会社員ですが、少年時代より人知れず変った趣味に日夜悩まされて参りました。奇クはここ三、四年程折に触れ買い求めて参りましたが、小生も今改めて皆様方のお仲間入りさせて戴きたくペンをとりました。小生子供の頃より、映画のシーンに美人の女優さんが、縛られた姿で現われますと胸が高なってくるのを覚えたものでした。青年になっても、女性の方に縄をかけてみたい……：：：：：：う気持ちが消えやらず、自分を「変態」と自己嫌悪しておりましたが奇クファンの皆様は、自らを「マゾヒスト」「サディスト」と誇らしく宣言されておられますのに考えを変えました。こうなったら行きつく所まで行ってみよう……：：：：：：実際に女性の方を縛った事もあります。しかし彼女の方は小生の気持ちを理解してくれず、後には気まずい思いが残ったものでした。SMに理解ある女性との文通望みます。又女装愛好者の方とも文通を望みます。実際のプレイはあまり気が乗りません。こういうものは実際に言うよりも語りあう方が楽しいのではないのでしょうか？小生

結婚はやはりSMに少しでも興味理解のある女性と、と考えております。四十才位までの女性の方お便り下さい。(東京・深田貴久)

○

ゴムファンの皆様、お元気ですか。大西良子様最近貴女の御通信なくさびしく感じて居ります。東京のニューポート社では各種下着ゴム下着製造発売しており、ゴム・下着マニヤ一見、悪くない様です。僕も入手したい品ばかりですが割高にて、至急にとは参りません。もし買った人あれば使用感お知らせ下さい。僕は毎日ゴムパンティ使用して居ります。各所に一円玉程の穴を開け使用して居り、使用感は大変良いと満足して居ります。近々丸首シャツを作り着て見るつもりです。各所に穴を開ければ、汗も適当に逃げぬれない様です。あのぬめぬめニチャニチャしたゴムの感じは最高です。特に夏迄の間が最高です。又女の人に薄ゴム下着を付け痔バンドをはめ縛り上げる事が、僕が一番の好みです。女の人は恥かしがりやがりそれでいて毎週一、二回は僕の相手をしてくれ内心は僕の様にゴム好きになったのではないかと思つて居ります。肌にびったりとはり

ついた薄ゴム下着の上から、ゆっくり時間をかけて縄をかければ、ほのぼのとゴムの香が立ちこめ最高です。ゴムの下の肌は汗でぬるぬるになり、薄ゴムが肌にべとつき、苦しそうですが、目はうっとりとして居ります。ゴムマニアの諸兄弟姉から通信を載せて下さるよう待っています。(神戸市・生田生)

○

拝啓ようやく春らしくなりました。今后も鼻責めの写真をどんどん撮って頂きたいものです。今迄に「宇宙の何処かで」とか既刊のグラビヤに載せたものや「鼻いじめ体験記」に発表されたもの等をモデル(鼻梁に、穴を貫通させた方)に実演させて撮ると良いと思います。是非又増田さん夫妻にも御協力を願いたいものです。種々と考えれば鼻責めもよりきびしい責め方、奇抜なものがあります。大いに工夫されてもっと大たんにもう少し実際にモデルを苦しめて撮らなくては、面白味がありません。どうせ鼻環をつけられた鼻牛奴隷になったのですからモデルはあきらめて存分にいじめられても仕方がありません。恥かしいという等は奴隷には無用です。かつて

発表された鼻責め体験記は貴重な資料になると思います。良い写真がどしどし発表されることを待ち望んで居ます。若しも適当なモデルが居ないのでしたら私でも存分に使つて下さっても結構です。私で良ければどんなきびしい残酷な烈しい鼻責めにも耐え抜いて立派な奴隷として良い写真の材料になって見せられます。増田さんとは鼻梁テストを競争して見たいものと思つて居ます。(1)貫通させた穴の大きさ、鼻棒を通してどちらが太いものが通せるかを見る。(2)通した鼻棒にて鼻ひねりをして水平迄もひねっても耐えられるかを見る。(3)鼻環に紐をつけて互いに引き合つてどちらが耐え抜いて綱引きに勝てるか。(4)鼻環を吊り上げて(最高に吊る)どちらが長く耐えられるか。(5)どれ位の(鼻柱に)重量物を下げられるか(奴隷として一番大切なこと)十五疋から三十疋迄位下げられないと奴隷としては資格はない等々、是非互いに新記録を出し合つてみたいと思います。鼻柱ちょうちん責めを増田さんに紹介します。現在貫通してある穴より更に奥にもう一つ穴を貫通させます(中々面倒ですが)その穴に大きい事務用の環を

通る様になる迄に致します。そしてその環を通して初めて初めに貫通した穴に太い鼻環を通してそれに重い物を下げると事務用の環が上に小鼻を押し上げて丸くふくらませて「ちようちん」のようになります。中々苦痛の烈しいものです。これに耐えられなければ一人前の奴隷ではありません。(千葉・鼻責生)

○
ようやく春の気配がするようになりましたが、最近白髪が点在し始めて寂しくなります。發育盛りの頃戦争でまともな食べ物がなかったから、頭髪のもちが悪いのではないでしょう。古畑医博の研究によりますと、人間の能力は十三才から三十五才までの間にそのピークがあるそうですが、専門的なことは分らなくても、現実になづける説でして、わたし自身いま頭髪に衰えを見せているように、あと僅かで貧しい智力もそのピークが去るのかと思います。焦燥を覚えます。名利を望むのではありません。自分自身の心の静謐のために行けるところまで行きたいのです。一作ごとに自分にとって曖昧だった部分を明瞭に行きたいのです。その説明がわた

しを奇ク的世界から引き離すようなことがありまして、それは止むを得ないと存じております。私の負担を忘れるために書き始めたわたしの綴り方もようやく遊びごとでは、なくなってしまうました。少年の日わたしの身辺にあった平穏と自然とを懐しく思い出します。もうやがて枯草の下に新しい芽が萌え出る時期ですが、一日郊外へ出、少年の頃遊んだ早春の野原に似たところをさがして、佇んでみたい気がします。サジステインの呵責や凌辱とは比較にならぬほど奥深く人の心を嘔む人生の負担から目をそらさず、じっとそれをもちこたえて立つとき、人は清冽なマゾヒズムと実り多い悲しみとを覚えることができます。わたしはこういうマゾヒストになりたいと思います。「この世甲斐なし、憂ひに耐えて立ちて見凝むる時のあらずば——ウォルター・ドラ・メル」。末筆ながら千草さんの評論に、満腔の敬意を表します。不可解、無意味、曖昧、稚拙などどこにもなく、明るい部屋に導かれる思いです。欧米の優れた数学の論文を読むのと同じ喜びと爽やかさを覚えます。どうか永く連載してくださいませよう。(福田久文)

○
このところ夜の散策の途次、家々の垣根越しに、温い感じの空気に混って、香ぐわしい梅の匂いが人生のあわただしさと生活の目まぐるしさを忘れさせて、人の心奥にある、或る懐しさを伴った感情を起させたりするのは、趣きがあってよろしいものでございます。奇ク四月号を本日入手して、いきなり読み通して、しみじみとして右の梅の香のような読後感に酔っているような次第です。そうであるが故に、一層奇クの健在を祈り発展を切実に願うものです。私は奇クの長年(といえますかどうか判断としませんが)の読者と自負して居ります。さて、今日、編集部の方々のお目をわずらわそうとしますのは、四月号誌上の「マニアの手帖」における花田沙登子様の「私の飼犬になりませんか」に、応じたいと願ったからなのです。希望が報いられるかどうかは、とにかくやってみるより外、応募の通信をしないことには、はじまらないこととございます。したがって、先ずは、花田沙登子様のお目に、私の意思が、文章を通してでも届くことを、そして、お心に留

めていただけることを祈る次第です。花田沙登子様。私は四月号の「どなたか、私の飼犬になりますか?」に「私がなります!」と叫ぶようにして、志願するものです。私は二十三才で、この春から社会に巣立とうとするものです。私は自分が「M男性」であること、を断ずるには経験的事実を持ちませんが、長年、秘かに奇クを通じて判断しますと、M的男性であることは確実なことだといえそうです。私は美貌とスタミナを誇る女王様の餌食になり、飼犬になりたくて、応募致します。私は、今のところ全くの経験がございませんので「初歩から仕込んでみたい」と仰る女王様にとって決して不満足ではないと思います。私は身長一七五センチ、体重七十キロで大柄な方ですので、この点で女王様のお目にかなうかどうか危惧するのですが、誌上での文章より拝見しますと、花田様は、よほどの自信をお持ちのようですので、案外樂觀して居てよろしいのではないかと考えております。私は女王様がいくらお責めになっても、決してネをあげて、お宥しを請うことはございません。むしろ、女王様は、私のガマン強さに、逆に

手を焼いて、ネを上げてしまわれるのではないかと女王様のスタミナを案ずる位です。私は「本当のサジスチン」がどんなものかをよく味いたいために、女王様のお写真を拝見しつつ、その美貌に嘆息し、花田様の手によってムチ打たれ、グラマーの女王様のお尻で押しつぶされる自分を想いつつ、現実には女王様のお恵みを受けることができませんことを心に祈りつつ書いて居ります。志願を決意した私は、決して女王様の意に満たないなんてことはないと思信しております。女王様のお恵みをほどこして頂きますよう、仕込んでいただけますよう、祈りつつお手紙致します。(東京・畑山登)

伊吹真佐子様。実に何年振りでしょう。貴女のフォトが奇クに載ったのは、すぎ去った遠い昔。私が始めて古本屋で、奇クを読んだ時。最初に観たのが貴女の写真でした。若いピチピチした肉付きのよい全裸の肢体に、厳しく縄が喰い込み、二十才そこそこの若い私の心をゆすったものです。あれ以来十数年、すっかり奇クのとりになってしまうました。当時活躍されたモデルさんの中で私は貴女

と巨大な乳房の持主、坂口利子さん。可愛いフェイスの中富綾子さんの三人が特に印象に残っております。まだ親のすねかじりの私にとって、分譲写真を買う余裕もなく、又モデルさんに手紙を書くなどということは考えてもみず、親に隠れて奇クを読むのが精一杯でした。しかし月日はたち、私も結婚して二人の父親となり、やや余裕のある生活になりました。昨年来、読者通信欄をお借りして二、三のM女性の呼びかけに応じて投稿してみましたが無駄でした。一度プレイを試みたい、しかし相手がいない、悶々の日時を過しているうちに、貴女の写真を三月号カメラ・ハントで見たわけです。写真でみるに貴女は相変わらずグラマ—な肢体ですね。尻の丸み、乳房のふくらみ、むっちりした太股と、いい私の胸の内を激しくゆさぶります。この私の願いをかなえて頂けませんか。私は余り残酷な事は好みません。元来ムード派で縛る縄類もしごきとか腰紐等を使うのが好きです。股間縛、エビ責、逆エビ責、開股縛、浣腸責等を好みます。申し遅れましたが、私は三十二才、妻と二児との四人暮らし、大阪市内に住んでいます。若し伊

吹様が私のこの便りを読まれ、私に逢ってもよいと思われたら次号にて御返事下さい。私は日曜が休日です。成る可くなら日曜が良いのですが、伊吹様の良い御返事をお待ちしております。(大阪市・田口一夫)

私は、数年来の貴誌の熱烈なファンである。三十才独身、私はS八五%位である。それに気が付いたのは中学一年の頃、サーカスの空中ブランコとか、アクロバットとかを観て異常な興奮を覚えたこと、そして江戸川乱歩の一寸法師等のS場面を何度となく読み返して幻想にふけたものだが、それがSだとかMだとか、そんなことは分らなかつたが、子供ながらどうしてこんなものが好きなんだろう位にしか考えなかつた。小学校三年の頃だったか、逆にMの傾向が強かった様だ。今から思えば、こんなこともあった。ある探険小説で主人公の少年が悪玉(それも美人であった)に捕えられ拷問される様な場面に興味を感じ、繰り返して繰り返し愛読していたことを思い出す。子供の頃はM、それ以後はSなのだ。現在はM一五%、S八五%に完全に固定?した。

花と蛇」何んといってもKK誌の一つの名物的な存在になった感じだ。「花と蛇」のための、KK誌だ。私の地方では書店ではKK誌の姿を見ることは出来ない。送本による以外入手する方法とてないが、既刊号で「花と蛇」が休載したことがあった。何回となく頁をくったが、やはり掲載されていない。そのときの感じ、一カ月の次号に於いて展開されるであろうところの場面を想像しながら楽しみにしてゐるに、何んたることかと一人怒って見たところで、これも始まらない。その時の編集後記に曰く、「原コウが間に合いませんので」と「それ以後は、送本していた」と条件として、送本の際には「花と蛇」の掲載されている号に限ると条件を付けざるをえなくなつた次第、これ程「花と蛇」に愛着を持ち続けているのだ。鬼六先生益々の健筆を期待すると同時に永久に少なくともKK誌の続く限り続々……篇としてでも続けて欲しいのだ。映画「花と蛇」最近地方にも上映された二日続けて、四回半観せて頂く。前に期待はずれだったという様な批判がKK誌にも載っていたが、しかしこの種の映画としては上出来ではないのか。

Sは三場面、やはり最終回の責めの場面は何度見てもよい。ベッドシーンがあまり長すぎた。この種の映画であればベッドシーンを最少限に節約し、Sシーンにもっとフィルムを費すべきではなかったか。ベッドシーンはエロダクシオン映画を見れば必ずウンザリする程観られるからだ。しかし色々の制約もあるが第二、第三のこの種の映画を、観せて欲しいものだ。熱望して止まない次第。山中冬子さん、読者通信に載ったと思つて興味を感じていたら小説になり、更に三月号には冬子のクリスマス・イブとなつて掲載されていた。実に楽しく一字一句味わせて頂く。「花と蛇」同様に楽しみが増えた。次号にもこれらのものを書いて欲しい。期待している。女性刑罰拷問特集・緊縛美女艶姿百態第六集入手した、宣伝にたがわず素晴らしい出来であり、特に乃々子嬢の表情は演技とは言え上出来だ。しかし第六集の百態には三月号P一一五にその決定掲載内容としてあるが入手した写真の順序と全然あっていない。既に発刊されたものだし、これは実に不親切なことだ編集諸兄には一言物申したい。写真に載った順序に

モデルの名前と解説くらい順序よくのせてもらいたいものだ。更に願わくば解説をくわしくのせて欲しいということだ。例えば拷問特集の解説程度に表情その他のことをだ。これは必ず実行して欲しい。こんなことは一寸した親切心があれば出来ることではないか。これによって又興味を倍加するファンがあることは必定だと思ふからだ。まあ余り永くなったのでこの辺で。一応感想・批判とりまぜて感ずるままに綴つてみた。貴誌の益々の御繁栄を祈る。今後何か貴誌にふさわしい創作でも出来たらご検討賜わりたく思つております。(新潟県・伊賀竜夫)

過去に友人の妻をその夫と二人で、かなり多量の浣腸液で責めた事がある。その時の私達の目の下でもだえ、異様な臭気の中でまみれた白い肌が忘れられなく時々思ひおこすことがある。私は現在、二十八才で建築の設計の仕事をしております。一九六五年の夏、不思議な未亡人と伊東の海で知り合ひ、すでに三十二才になる彼女の耽美的な欲求不満も手伝つてかかなりアブノーマルな生活にはいつている。私のS的行動は先天的な

様に思い起す事が出来る。私は彼女をリコと呼び私の奴隷としてかしづかせている。三〇を越えたりコの成熟した白い肉体は厚い首輪の鈴をならしながら、いつも羞恥に官能している。私の目によるとリコと完全なMであると思うが、日本人としてはめずらしい女性ではないと思う。東京の深見圭子さん、何か私はあなたに会つて見たくなつた。お話をし、見ませんか。もし出来たら本誌の発売日から初めての木か金に銀座四丁目の三愛ビルの前で合ひましょう。あなたは週刊誌を左手に持つていて下さい。私はあなたに「お待ちどうさま」と声をかけます。その他山中冬子のご主人様とも話したいと思つています。同封した絵はちよつと時間があつたので書きました。これからも書きたいと思つています。(東京都台東区・夜村広美)

○ 奇ク愛読者の皆様。しばらく私のおぼつかない話に耳をかして下さい。私は約半年程前に偶然のきっかけから奇クを知り、すっかりとりこになつてしまつた極く新米のファンなのです。読者通信等にかがわれる愛読者諸兄姉の反応

で一番驚きました事はMの男性の呼びかけが随分多いということですね。奇クの編集の重点のおき方のせいばかりとは言えない様です。一般に男性にはSが多く女性にはMが多いとよく聞かされておりました為、ずいぶん驚きもし、又共感をおぼえました。私も恐らく皆様のおつしやつてゐるMだろうと思われるからです。Sの男性は空想にふけらなくとも具体的な行動で処理できる力をお持ちのせいでしょうか。又女性にはSといつてもやはりアブノーマルといわれている世界にふみ込む前にちゅうちょするのでしょうか。あるいは数少ないSの女性は、今さら呼びかけなくともほしいだけのファンをすでお持ちのせいでしょうか。Mの男性が意外に多いのは非常に心強く、心楽しいことですが、Sの女性ももっともっと名乗り出て下さるようにならねば致しします。又Mの女性も勇気を奮つてどしどし名乗り出て下さい。女性読者の増加が奇ク発展の大きなバロメーターになると思います。奇クの、そして又SMの大きな特徴であるロマンティカということが女性の力なくしては、のびていかないと思うからです。もう一つ、読者通

信をながめていて、気がついた事ですが随分内容が激しいですね。鞭とか、大便を食べさせてほしいとか。こういうのは本当に実行できるのでしょうか。又実行してS Mの喜びを本当に味わうことができないのでしょうか。新米のくせに大変なまいきな事を言う様ですが、どうも唯空想をもてあそんで一人で楽しんでいるのではないかと私には思われるのです。やはりS Mは2人で楽しむべきではないでしょうか。S・Mと言っても単に残酷なだけでは喜びはなく、その底に、好意、情感が流れていなければ、本当の喜びは得られないのではないのでしょうか。又そういう情感が流れていれば、たとえ具体的にプレイをしなくても、会話だけでもS Mムードの喜びを得られるのではないのでしょうか。そんな意味からもS Mは決して、単なるアブノーマルではなく、むしろ、ロマンティックの極致だと思うのです。世界的なS M文学である谷崎潤一郎の作品をみてもよくわかると思うのです。S Mを理解できる諸兄姉よ。胸を張って、声高らかに、我々のロマンを、豊かな心を叫びましょう。新米のくせに大変なまいきな事を書きましたが、M

の男性諸兄の御批判をいただきました。特にSの女性の御叱りや罰をいただければ何よりも幸せです。それからS M研究会或いは同好会等作りませんか。プレイをしたり話会ったりしたいと思います。女王様方の為に、私の好きなプレイを申し上げておきますと御脚への御奉仕、身体検査、犬等ですが、その他女王様のお望みのことはどんな事でもいたします。無理難題である程楽しいのだと思います。御便り御待ち致しております。それでは愛読者の諸兄姉の健康を祈って初めての便りをおわります。
(京都・泉社也)

突然大塚女王殿下に御便り差上げます。奇クを知ってから大塚女王(以下女王)に対し誌上でうれしく、拝見拝読させて頂いています。下って小生(誌上で)女王様に、切腹させられ又介錯して下さい。又組敷いて私の首掻き斬って頂くべく思っております。女王様の御手で……。最後にK Mは女王様を決して恨みません。(東京目黒・K M生)

○ 奇クの皆様お元気ですか。初めて便りを出します。26才の青年で

す。昨年の十二月号で大阪の井手雅子様の便りを見ました。もし私でよかったならば井手さんと文通したいと思っています。井手様を後手で縛り自動車で浜辺に行き縛ったまま歩きます。井手様さえ良ければ足首に約三十センチ位の鎖をつけて音をたてながらヨチヨチと歩くのも良いと思います。もちろん井手さんの手は縛られている為、食事もお出来ないで私が食べさせてやります。井手さんと文通するに当って住所がわからないので手紙が出せません何か良い方法ありませんか。井手さんの良い頭で考えおいて下さい、必要なら私の住所を井手様だけにおおしえします。井手様さえ良ければ名古屋近辺であう約束しておいてあうのもよろしいかと思ひます。どちらにしる井手様にまかせます。では奇クがより発展する事を希望しペンを置きます。(豊橋市・伊藤一夫)

○ 倉吉市の南恵子様。貴女のお便りを三月号にて、拝見いたしました。あなた達の御意見に共鳴する三十代の夫婦です。隣県とは云え特急で三時間位の所に同好の方が居られると思えばどうしてもお便

りせずにはいられませんでした。御主人が写真の仕上げまでされるそうですが、さぞお楽しみのことでしょう。是非一度、プレイのお写真を拝見させて頂きたいものです。私達もカメラを安物ですが持っています。でも現像、焼付を自分でやれないのでプレイの写真を撮った事は有りません。今迄奇クの仕上げて頂いたらと思つたことも有りますがどうも気が退けて……。お付合い願えれば、そのこともお願いしたりお互い気心がわかればWプレイも、実現できると思ひます。御返事お待ちいたします。大阪の井手雅子様。兵庫県の滝野茂子様も御交際願えたらと思ひます(島根県浜田市・志間みちこ)

○ 東京の藤村美香様。貴女の告白を二月号にて拝見。さっくらの連絡いたします。貴女も大学出のインテリなら私も大学出のエリートのもり、きつと話題はつきないと思います。現在趣味もあってカメラを職業としておりますが、最近女性の緊縛美に興味を持ち、貴女のような人を、さがしております。た。かならず御連絡下さい。楽しみに持っております。私は年令二

十七才、身長一七三センチ、体重六八kgの美丈夫のつもりです。入社して五年カメラの腕は誰にもまけないと自負しております。おちかづきになれましたら、社に来てスタジオでのドラマ構成等を見て、二人で実演する等という事も仲々楽しいものだと思います。貴女の勇気を信じ一日も早く有意義な人生をエンジョイされん事を切に願っております。(東京・藤村正夫)

○ 福田久文様。四十一年三月号の創作講義を読んで、感嘆致しました。四月号の西条氏に対する御啓示は羨望の限りで、私にも次期作品に就いて御指導賜りたしと存じます。題目と構想は出来ていますが、作品化にはいつもの事ながら悩んでいます。大阪市内で御面談出来るよう御計画願えないでしょうか。編集部へ。京阪神で集合可能な寄稿家に、情報、資料交換の仲介をして戴ければ有難いのですが御検討下さい。西条操様。二月号の「想う事」二箇月かかって読みました。(敢て理解したとは申しません)そして「遍歴」を改めて読み返しました。標題を信用していた為、随分冷いS小説だ

と思っていました。が「想う事」を読んで漸く此の大作が思想小説である事に気付き始めました。「遍歴」の価値はボリュームや筋で決定されるべきではなく、全篇完結を待って「想う事」の思想を小説化するに成功したか否かで判断しなければなりません。「銀の匙」も一層の期待を以て迎えたいと思いますが、月刊誌に分載される事を御考慮の上、書き方を充分御検討下さるようお奨め致します。私の「アリアドネ」は此の意味で完全な失敗であり、毎月六十枚程度の六回位で完結する作品に圧縮すべきでした。編集後記に「長枚数に過ぎ」た事を批判される以前に気附いていたが、既に発送した後でした。福田久文様と御会見なさっては如何でしょうか。西条様の思想と精力と気概。これに福田様の文章と学識と感情が加ったら奇くの為にどれ程素晴らしい事か。(大阪・黒淵要一)

○ 田中生様。前月号で拝見しました水木です。僕も永年お灸記事を読むためにKK誌ファンでした。貴男の仰言られる様に全く近來のKKはそれに関したものは皆無と云ってよいでしょう。小説記事の

中にお灸と云う活字を見出す時マニア?にとつてどの位心躍らせる事か。書店でそんな気持ちで拾い読みする位で最近購入した事は無くなりました。甚だ残念でありません。毎号失望の限りです。手紙も随分参りましたが……殊に女性の愛読者からお便りを頂いた事は嬉しさに耐えませんでした。出来得る事なら亦、何もお灸に限った事はありませんSMに関心をお持ちの方々と文通なりとお話し合いが出来ますれば幸甚の至りと存じて居ります。古い方々の懐しいお便りも頂けますれば之に優る喜びはありません。このささやかな通信が、その方々同好者のお目に止って下さる事を希って筆を擱きます。(横浜市・水木清一)

○ 待ちに待った朗報。カラープリント分譲ノ大賛成カラーによって初めて生々しく実感のあふれる真紅の腰巻、緋緋襦の長襦袢の乱れ姿。縛られる女の白い肌にまつわる緋のしごき、豆しぼりの猿轡——と彩色のもつ迫力は、すばらしいと期待や切々たるものがあります。私は二十五年頃からの古いKK会員の一人ですが、縛られ、責められる女の姿は絶対に誰が何と

云つても日本調、と云つても何も明治調の日本髪にこだわられません洋髪でもいいが絶対に和服であつてほしいマニアの一人です。振袖姿。黄八丈の着物の乱れた裾に真赤な腰巻。真紅の長襦袢姿。或は腰巻一つの姿。或はすっかりはぎ取られた下着の赤い色彩の上にのたうつ裸身。縛りの本體はこれです。エロチズムと美とあやしい喜び……。そしてこの全てが猿ぐつわのないことには、全くやり切れない。猿ぐつわこそ責めの、縛られる女の、必ずなくてはならぬ条件であり、何よりも大切。その点モデル嬢に少しも嫌がる表情が出ていないことが残念。絵空事が多いと思います。以前伊藤藤晴雨画伯に直接お願いして「さらわれ犯かされる女」の姿態を長襦袢姿や腰巻姿で猿ぐつわの注文で画いて戴いたものです。猿ぐつわで長襦袢や、腰巻の縛られた女の写真のコレクションも、過去に貴社の分譲で大変な数を蔵しています。(昔恋しい川端嬢以来)又私自身8ミリにこり、カラープリントで愛人をモデルにいろいろ撮したため居りますが、小生自身撮影者でありライトマンであり、犯かす男の側が表現出来ずに残念ですが、犯

かされる女の姿態を、いろいろ長襦袢、腰巻、和服の乱れやいろいろと表現して見て（心配した現像へ送って、うまく送りかえしてくれましたので）時々夜に引っぱり出して、スローテンプで映して見えています。どうか今後大いにカラープリントで分譲品を発表して下さい。犯かされる寸前までの女の着物をぬがされ長襦袢をはがれ、真紅の腰巻も無理矢理はがれてと云った一連のもの。又は寢室を襲われ、長襦袢に猿ぐつわの娘が、開股棒しかりで犯かされる前後の表現を、モデルさんの生きた演技力で生々しく再現してほしいと思います。例えばこれなど。最近の大映々画で大傑作？「刺青」その大傑作の理由は。ストーリー演技は別として、全篇にわたって実に大胆に原色をとり入れ、長襦袢や腰巻の真紅な生々しい表現が圧巻でありました。あの真赤な強烈な刺激がいやと云う程出て来て、若尾の体当りの熱演と相俟って、最近これ程妖しくすばらしい感動の映画を見たことがない。願わくば不振の日本映画にあって、東映あ

次号（六月号）は四月二十五日に発売いたします

りお得意の時代劇でカラーで、ふんだんに縛られ、犯かされる女の真赤な腰巻や長襦袢の乱れを見せたいものですね。だまされて縛られ猿ぐつわをはめられ、手どりで足どり籠にはこびこまれるまでは圧巻。本当にバタバタはねる足の腰巻をはねのけ足首をしばるあのリアル。あの場面、勝気なタンカを切らずに、悪い親方によって嫌がるのを猿ぐつわで縛ったまま、或は縛られて逃げまわる女から着物をはぎ、長襦袢姿にして、鬨りいよいよ、せまる親方のアップから。いやがってもだえる猿ぐつわの女のアップ。そしてジタバタする足にまつわる真紅の腰巻。空間にもち上げられ空しく躍る素足の足袋の白さのアップで表現したいところ。刺青されるまでのものがきもよかったです。息づまる様な興奮は最近にないすばらしい正に珠玉の一篇でした。そこで貴誌の分譲では是非これを、表現してほしいのです。下町風の娘をあゝの船宿の一室で縛り猿ぐつわをはめ、足をしばるまでの過程の二、三カット。裾を乱して手足をしばられ猿ぐつわ

の女をころがして。口説かれ囃られる女の場面を一セット。長襦袢姿。鏡をつかっても面白い。いよいよぬがされた長襦袢のバックに腰巻一つでころがされ開股足首棒しかり。犯かされる寸刻のものがく姿。犯かされた後の感じの姿。台上に大の字にしばらく刺青されてゆく女。（この場面バックは、はがされた腰巻の真紅のひろがり。もちろん猿ぐつわの苦しい顔が横ざまにカメラに向って、はっきりと撮すこと。しかもその表情は必死に、嫌がっていることが大切です。）そんなところを二三セットにして分譲しませんか、どんな高価でもぜひほしいものです。スリッパや全裸やパンティもよいでしょうが、私は絶対に、又私と同好の士も多いと思いますが、縛られる女は、打つたたくの残忍さはいやです。その代り責めを楽しんでくれば、これも困るのです。どうしても嫌がる女を娘を縛りたいのです。それも絶対に着物姿。それも下には必ず長襦袢や腰巻は真紅でなければ、どうしても満足しないのです。然も必ず猿ぐつわが必要で。時代風であろうと現代風であろうと猿ぐつわで縛り上げて……。（広島市・芝利吉）

○名古屋の小川一夫様。お便り本当に有りがとう御座いました。私達のフォトが奇クサロンにのせていただいてからの初めての同好の方からのお便りなので、うれしさがいっぱいです。そして私達と同じ様に夫婦SMプレイの愛好者でいらっしゃる貴方達にまだお会いしていないのに、とても親しさが感じられてなりません。フォトや資料の交換も喜んでさせていただきます。名古屋には私も一年程千種区の方に居りましたので、とてもなつかしい都会です。現在も年に二、三回は所用で参ります。五月になりましたならば又名古屋に参りますので、その時はぜひともお会いしたいと思いますが、いかがでしょう。その前に愛読者通信にお便りいたしますから、必ずお逃しなき様お願い致します。私達のつたないプレイに、わざわざお便りをいただき心からお礼を申し上げます。これからアイデアを変えてプレイの様子やフォトを発表させていただきます。貴方もどしどし発表して下さい。たのしみにお待ちしております。では、お会い出来る日を、心待ちに。（東京都・新田英雄）

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

これだけは、どうしても人に話したい、書いておきたいといったことが、どなたにも一つや二つ必ずある筈です。物言わざるは、腹ふくるものたえ、どうか皆様の真実の叫びや思い出などをどしどしお寄せ下さい。採用篇には本誌一年分以内贈呈します。

△創作、小説、物語▽

最初は余り長いものは無理ですが、本誌の内容に適した題材で皆様の夢を文章に托して下さい。採用篇には本誌半年分以内贈呈します。

年分以上贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを皆様の筆でまとめて下さい。採用篇には本誌五カ月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌) 通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊紙、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく報導下されれば幸いです。採用篇には本誌三月分贈呈します。

は本誌三月分贈呈します。

△マニヤ、ファン通信▽

編集者、執筆者、投稿者、モデル嬢などへの呼びかけやファンとしての希望、或は前号の感想批評、本誌に対する希望や御意見、など愛読者としての通信をお寄せ下さい。本誌とファン、マニヤ同志の忌憚のない通信ですから、何なりと御遠慮なく。採用篇には本誌三月分贈呈します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分護品の中から御指定下されれば、贈呈いたします。

☆編集後記☆

○今月号では少し長枚数のものを二、三載せてみた。悦子恋縄譚(麒麟児久)続・蚯蚓のたわごと(田代俊夫)変身(保藤久人)がそれであるが、悦子恋縄譚は一度には長過ぎたので前後篇に分けて後半は次号に回した。○例月の連載物の心傷たむ遍歴(西条操)アリアドネ(黒淵嬰一)花と蛇(団鬼六)の三篇を加えると、これで計六篇ということになる。エッセイなどの投稿もあったのだが、今月号では、ちよっと遠慮してもらった。読者のたえのある物ということになると、やはり一篇百枚ぐらひは必要なので、今後は誌面とにらみ合せて適当に収録してゆきたい。○読者の希望と世評とを塩梅してゆくのは、

なかなか気骨の折れる労作であるが、刊行を続けてゆく上に於ては、極めて重要なので現在の段階では最も力を注いでいる。そのため他のことは、どうしても力の配分上、第二義的第三義的となってしまうので、挿絵が少いか写真がないとか、いろいろ不満を洩らされる方々も多いのだが、事情御推察の上今暫く辛抱して頂くようお願いしたい。○既に刊行した二百冊余りの本誌を揃えても思えば、異色風俗文献の一大集成ができると思うのだが、今後も月一冊のスピードで更に煉瓦積みが続けてゆきたい。各項目毎の索引を作ってもらっていたのだが、肝腎の既刊号の方が殆ど古いものが入手困難な状態になったので、その方は誌上掲載は無意味となってしまうが――。

☆本誌御購読の栞☆

一月分(1冊)三〇〇円△送共▽
三月分(3冊)九〇〇円△送共▽
半年分(6冊)一八〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三〇〇円

五月号 〔第二十巻第五号〕
〔通刊第二二四号〕

昭和四十一年四月二十日 印刷
昭和四十一年五月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別取扱承認雑誌第一二二二号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうような充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下りません。特にくれぐれも、お願い申し上げます。